宮古市埋蔵文化財調査報告書69

菅ノ沢遺跡発掘調査

すげ　の　さわ

－市内遺跡発掘調査報告書６－

2006.3

岩手県宮古市教育委員会

宮古市埋蔵文化財調査報告書69

菅ノ沢遺跡発掘調査

すげ　の　さわ

－市内遺跡発掘調査報告書６－

2006.3

岩手県宮古市教育委員会

序

三陸の海と北上山地の自然の恩恵を受けた宮古市には、数多くの遺跡が残されています。平成17年６月には旧田老町・新里村・宮古市が合併し、新しい宮古市が誕生しましたが、その遺跡の数は現在わかっているだけで580ヶ所にのぼります。

これらの遺跡は、私たちの先人が長い時間をかけて築いてきた文化の証であり、縄文時代から今日にいたる宮古の歴史を私たちに伝えてくれる、貴重な財産です。

私たちはこの財産を守り、またみなで親しみ分かち合い、正しく後世に伝えていく責務があると考えます。

本書は、個人住宅の建築に伴う菅ノ沢遺跡発掘調査の成果をまとめた発掘調査報告書です。菅ノ沢遺跡では、縄文時代後期初頭の配石遺構が発見されました。当市ではこれまでに調査例のないものです。

この調査の結果が活用され、郷土の先人の歴史に光があたることを望むとともに、埋蔵文化財への理解が一層深まることを願ってやみません。

最後に、発掘調査および本書の刊行にご協力を賜りました、地権者をはじめ関係者の皆様に心から感謝を申し上げ、本書の序文といたします。

平成18年３月

宮古市教育委員会
教育長　中屋定基

例　言

1．　本書は宮古市近内地区に所在する菅ノ沢遺跡についての発掘調査報告書である。

2．　本書は「Ⅰ概説編」と「Ⅱ本編」から成る。概説編は主として調査報告の要旨である。本編は通常の報告書の体裁をとっている。

3．　この調査は個人住宅の建築工事に伴う事前調査であり、平成16年度の市内遺跡発掘調査事業として実施されたものである。

3．　調査主体は、宮古市教育委員会であり、発掘調査及び報告書の執筆・編集は文化課主任文化財調査員加納が担当した。また、その他文化課担当職員がこれを補佐した。

4．　調査の平面記録は調査区北西端を原点とした任意座標であり、東に向かってE1、2、3…、南に向かってS1、2、3…と表記した。調査区のN-S軸は実際の真北に比べ15°東偏している。レベル数値は標高値を示している。

5．　本遺跡の遺跡コードはLG23－2024であり、遺跡略号はCSGとした。

6．　記録は写真撮影と平・断面図により行い、平・断面図はS=1:20とし、必要に応じてS=1:10を併用した。

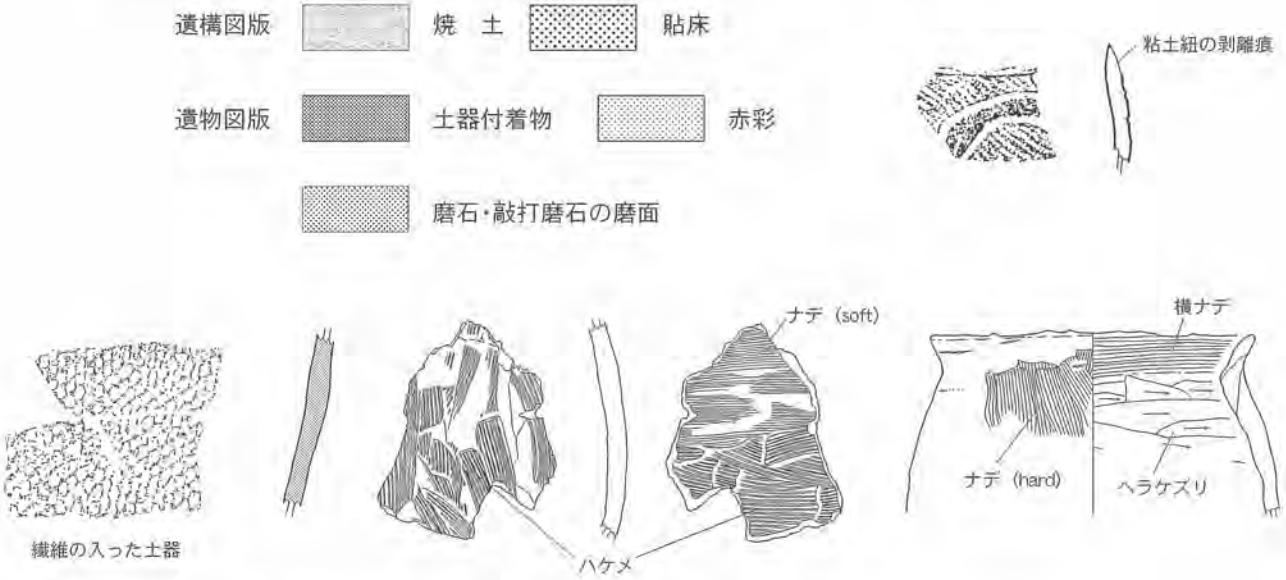
7．　土層観察及び文中の色調表記にあたっては、『新版標準土色帖』（小山正忠、竹原秀雄編著1990年度版）を使用した。

8．　遺物の観察はすべて肉眼観察により行っている。

9．　本書に収録した遺跡の調査記録及び出土資料は、宮古市教育委員会で保管している。

凡　例

1．図版中のスクリーントーン表示は図版内で定めのない限りは以下の通りである。



2．図版中の記号、略号の表記は以下の通りである。

P…竪穴住居内ピット　S…石　▲・f…剥片　●・p…土器　⟷…石器の微細剥離範囲

目　次

序
例言
目次

Ⅰ　概説編……1
Ⅱ　本　編……3
　1　調査経過……3
　　(1)調査に至る経過……3
　　(2)調査経過と概要……3
　　(3)調査体制……4
　2　遺跡の立地と環境……6
　　(1)遺跡の位置と立地……6
　　(2)周辺の遺跡……9
　3　調査内容……12
　　(1)調査区周辺の概況……12
　　(2)基本層序……13
　　(3)検出された遺構と遺物……17
　　1　竪穴住居跡……17
　　2　土坑跡……24
　　3　焼土……31
　　4　埋設土器遺構……32
　　5　硬化面……34
　　6　配石遺構……38
　　7　遺構外出土遺物……55
　4　まとめ……75
　　参考資料……79
　　参考文献……80
　　報告書抄録……109

挿図・写真・表目次

概　説　編

写真1　発掘調査の様子
写真2　今回の調査で見つかった遺物
写真3　配石遺構
写真4　第1号竪穴住居跡

本　　編

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図…… 6
第２図　地形分類図…… 7
第３図　調査区と周辺地形図…… 8
第４図　遺跡分布図……10
第５図　調査区全体図……12
第６図　調査区土層断面図①……14
第７図　調査区土層断面図②……15
第８図　調査区土層断面図③……16
第９図　第１号竪穴住居跡　平・断面図 ……18
第10図　第１号竪穴住居跡　出土遺物……20
第11図　第２号竪穴住居跡　平・断面図 ……23
第12図　第２号竪穴住居跡　出土遺物……24
第13図　第2号・3号土坑跡、第3号・4号焼土 平・断面図 25
第14図　第１号焼土　平・断面図 ……25
第15図　第５号土坑跡　平・断面図 ……27
第16図　第５号土坑跡　出土遺物……28
第17図　第６号・7号土坑跡　平・断面図 ……30
第18図　第６号土坑跡　出土遺物……31
第19図　第２号焼土　平・断面図 ……31
第20図　第１号埋設土器遺構　平・断面図 ……33
第21図　第１号埋設土器遺構　出土遺物……34
第22図　Ｂ１区硬化面　平面図……35
第23図　Ｂ１区硬化面　出土遺物……36
第24図　Ｃ１区硬化面　平面図……37
第25図　Ｃ１区硬化面　出土遺物……37
第26図　配石遺構　平面図……41
第27図　配石遺構掘りかた　平面図……43
第28図　配石遺構　断面図①……45
第29図　配石遺構　断面図②……46
第30図　配石遺構出土土器①……47
第31図　配石遺構出土土器②……49
第32図　配石遺構出土土器③……52
第33図　配石遺構出土石器①……53
第34図　配石遺構出土石器・土製品②……55
第35図　配石遺構内　集中出土剥片①……57
第36図　配石遺構内　集中出土剥片②……58
第37図　遺構外出土土器①……62
第38図　遺構外出土土器②……63
第39図　遺構外出土土器③……64
第40図　遺構外出土土器④……65
第41図　遺構外出土土器⑤……67
第42図　遺構外出土石器①……72
第43図　遺構外出土石器②……73
第44図　遺構外出土石器③……74
第45図　遺構外出土石器④・土製品……75
第46図　菅ノ沢遺跡出土土偶……79

表　目　次

第１表　調査区基本層序　土層注記表……17
第２表　第１号竪穴住居跡　土層注記表……19
第３表　第１号竪穴住居跡　出土遺物一覧表…21
第４表　第２号竪穴住居跡　土層注記表……23
第５表　第２号竪穴住居跡　出土遺物一覧表…24
第６表　第１号～４号土坑跡　土層注記表……25
第７表　第１号～４号焼土　土層注記表……25
第８表　第５号土坑跡　土層注記表……27
第９表　第５号土坑跡　出土遺物一覧表……28
第10表　第６号・7号土坑跡　土層注記表……30
第11表　第６号土坑跡　出土遺物一覧表……31
第12表　第１号埋設土器遺構　土層注記表……33
第13表　第１号埋設土器遺構出土遺物一覧表…34
第14表　Ｂ１区硬化面　出土遺物一覧表……36
第15表　Ｃ１区硬化面　出土遺物一覧表……37
第16表　配石遺構掘りかた　土層注記表……46
第17表　配石遺構出土土器一覧表……50
第18表　配石遺構出土石器・土製品一覧表……56
第19表　配石遺構内集中出土剥片一覧表……59
第20表　遺構外出土土器一覧表①……68
第21表　遺構外出土土器一覧表②……69
第22表　遺構外出土土器一覧表③……70

第23表　遺構外出土石器一覧表……76
第24表　遺構外出土ミニチュア土器一覧表……76

写　真　図　版

写真図版１……83
1　調査区遠景　2　調査区近景
写真図版２……84
1　調査区土層堆積状況(調査区南東隅)
2　第1号竪穴住居跡　土層堆積状況(南東から)
写真図版３……85
1　第1号竪穴住居跡　床面検出状況(南から)
2　第1号竪穴住居跡　完掘状況(南から)
写真図版４……86
1　第2号竪穴住居跡　完掘状況(東から)
2　第2号竪穴住居跡　炉　検出状況(南から)
写真図版５……87
1　第5号土坑跡上面配石　検出状況(南から)
2　第5号土坑跡　完掘状況(北東から)
写真図版６……88
1　第6号土坑跡　土層堆積状況(南から)
2　第6号土坑跡　完掘状況(南から)
写真図版７……89
1　C1区硬化面　遺物出土状況(南から)
2　第1号埋設土器出土状況(西から)
写真図版８……90
1　配石遺構内　集中出土剥片出土状況（JJベルト立石付近）
2　配石遺構検出状況(南西から、手前西部)
写真図版９……91
1　配石遺構掘削状況(中央部、東から)
2　同上（西から）
写真図版10……92
1　配石遺構及び掘りかた(中央部・東部、西から)
2　配石遺構掘りかた完掘状況(南西から)
写真図版11……93
第1号竪穴住居跡　出土土器(第10図)
写真図版12……94
1　第2号竪穴住居跡　出土遺物(第12図)
2　第5号土坑跡　出土遺物(第16図)
写真図版13……95
1　第6号土坑跡出土遺物(第18図)
2　C1区硬化面出土遺物(第25図)
写真図版14……96
第1号埋設土器遺構出土遺物(第21図)
写真図版15……97
1　B1区硬化面出土遺物(第23図)
2　配石遺構出土土器(第30図)
写真図版16……98
配石遺構出土土器(第30・31図)
写真図版17……99
配石遺構出土土器(第31・32図)
写真図版18……100
配石遺構出土石器・土製品(第33・34図)
写真図版19……101
1　配石内集中出土剥片(第35・36図)
2　遺構外出土土器(第37図)
写真図版20……102
遺構外出土土器(第37・38図)
写真図版21……103
遺構外出土土器(第38・39図)
写真図版22……104
遺構外出土土器(第39・40図)
写真図版23……105
遺構外出土土器(第41図)
写真図版24……106
遺構外出土土器(第39・40・41・45図)
写真図版25……107
遺構外出土石器(第42・43図)
写真図版26……108
遺構外出土石器(第44・45図)

Ⅰ　概説編

はじめに

この遺跡の発掘調査は、宮古市大字近内菅ノ沢地区の個人住宅建築工事のために行われました。この工事によって住宅が建つ部分の遺跡がなくなってしまうことから、そこにどのような遺跡が残されていたかを調べ、発掘された遺跡の内容を記録することが行われました。

この報告書は、発掘調査の結果をまとめたものです。概説編では調査で分かったことの要点を説明し、本編ではさらに詳しい内容と、調査で記録された資料を報告しています。

写真１　発掘調査の様子

調査のあらまし

発掘が行われた場所は近内菅ノ沢地区の標高30～50mほどの南向きの緩やかな斜面です。調査した場所は、この遺跡の中でも西の端で北側には山の尾根が迫っています。調査は住宅の建つ範囲の表土を取り除きます。そして少しづつ土の色や硬さなどを観察しながら掘り下げていきます。

このようにして調査を行った結果、今から約3500年前（縄文時代後期前葉）に大小の石を並べたり積み上げたりして造られた石の列（配石遺構といいます）や竪穴住居跡などが確認されました。

また、その当時の縄目の付けられた土器（縄文土器）や、矢じりなどの石で作られた道具類（石器）などが出土しました。

なお、今回の調査ではありませんが、この遺跡から約2500年前の縄文時代晩期の土偶も見つかっています。（81ページ参考資料）。

写真２　今回の調査で見つかった遺物

調査でわかったこと

写真３　配石遺構

配石遺構

４ｍ×３ｍの楕円形に並べた石とそこから南東方向に向かって伸びる石の列がみつかりました。この石の列は今回調査した範囲を越えてさらに東側に続くことが確実です。調査した範囲では12mほどの長さがあります。このような配石遺構は市内の調査では事例がなく、一体何のために造られたのかは今後の検討課題になります。

竪穴住居跡

竪穴住居は、地面を数十センチ掘り下げ平らにしたところに屋根をかけたものです。

今回の調査では、２棟の竪穴住居跡が確認されました。そのうちの第１号竪穴住居跡では、床に敷かれた黄褐色の土（貼床といいます）や柱を立てた穴（柱穴といいます）などが確認されました。一緒に見つかった土器や土の堆積状況の観察から配石遺構が作られる前のものとわかりました。

写真４　第1号竪穴住居跡

おわりに

今回の調査では配石遺構や竪穴住居が作られた時期以外の遺物も見つかっています。例えば、約6000年前の縄文時代前期、約2500年前の縄文時代晩期、約2000年前の弥生時代後半の土器などです。このことから菅ノ沢遺跡が長い年月にわたり人々の活動の場であったことが伺われます。今回の調査は遺跡のほんの一部分で、周辺にはまだまだ様々な時期の痕跡が残されていると考えられます。

Ⅱ　本編

1　調査経過

（1）　調査に至る経過

この調査は個人住宅の建築工事に伴い、宮古市大字近内第７地割字菅ノ沢地内において実施された緊急発掘調査である。平成15年11月10日付けで工事主体者から農地法第５条の規定による許可申請書が宮古市農業委員会に提出された。これに関し農業委員会が関係課から意見聴取を行い、教育委員会でもその施工範囲を知ることとなった。工事予定地は埋蔵文化財包蔵地「菅ノ沢遺跡」の範囲内に位置しており、事前調査が必要であると判断された。

宮古市教育委員会では工事予定地が埋蔵文化財包蔵地内であることを工事主体者に伝え、その取り扱いについて事前協議を行った。その結果、工事主体者から平成16年2月26日付で文化財保護法第57条の2第1項の規定による埋蔵文化財発掘届出書が提出された。これに対し岩手県教育委員会から平成16年3月12日付で事前調査が必要であるとの通知があったため、宮古市教育委員会は平成16年3月19日～23日の期間に試掘調査を実施した。

この試掘調査において、表土下から縄文土器片・土師器片・鉄滓等、遺物が多数出土し、焼土の存在も確認されたため、工事着手に先立って埋蔵文化財の記録保存が必要であると判断された。工事主体者との協議を経て、平成16年度の市内遺跡発掘調査事業として本発掘調査を実施することとなった。

（2）　調査経過と概要

発掘調査は住宅施工範囲内198㎡を対象とし、平成16年4月9日から開始した。まず調査区の設定、現況写真撮影、標高の設定等を行い、調査区の表土（基本層序Ⅰ層）の除去を開始した。調査区の中央部に試掘調査区があったため、Ⅰ層の除去が必要な面積は113㎡ほどであった。

調査区内は杉の植林が行われており、根株の除去や表土下での遺構検出等に手間を要した。

4月30日より表土下での遺構検出を開始した。斜面の上方（調査区北側）では表土直下から、試掘調査と同様、焼土や炭化材の広がりが検出された。また、土層が硬化した面に伴い、遺物が集中して出土する傾向が見られた。斜面下方（調査区南側）では黒褐色土（基本層序Ⅲ層）が広がり、繊維を含む縄文土器片やフレークが多く出土した。調査区南東隅ではⅠ層を除去していくと、Ⅲ層の上に砂層（基本層序Ⅱ層）が堆積していた。Ⅲ層は南東に向かって厚みを増しつつ傾斜していた。一方、調査区西側ではⅢ層が薄く、薄い褐色土層（基本層序Ⅵ層）をはさんで砂礫層が検出された。後述するとおり調査区は西側でアサナイ沢とよばれる沢に面しており、この沢に由来する層と思われた。これら表土下の遺物や遺構の精査・記録に取り掛かったのは５月７日である（第２～４号土坑および第１号～3号焼土、B1区硬化面、C1区硬化面）。

並行して調査区南東側のⅡ層を掘り下げた。人為的なものと思われる礫の集積が見られ、精査の結果配石を伴う土坑であった（第５号土坑）。

また、５月13日、調査区中央部から南側にかけてのⅢ層を掘削中、長径4m、短径3mの楕円形に並んでいる礫と、それに接するように東に続く列状の礫群を検出した。これらは配石遺構と判断された。そこで配石遺構の全体の状況を把握するため、一部の調査区ベルトを配石の検出面付近まで記

録し、杉の根株とともに除去した。

配石の検出状況を平面図に記録し、単位をなすと思われる配石群にかかるように、あるいは各単位間にかかるようにベルトを設定した。また、配石周辺以外でも土層を掘り下げ、調査区ベルトを記録・除去した。この際、調査区北東のベルト脇で大型の弥生土器の埋設土器遺構を検出し、精査した。また、調査区北東寄りで黒褐色土が擂鉢状に落ち込んでおり、周辺に角礫が存在したことから、これらも配石遺構に関係のあるものと考え精査した。結果、これらの礫は配石ではないことが判明したが、この段階で調査終了予定の5月末を目前にしていた。

工事主体者と協議の結果、調査を6月15日まで延長し、調査体制を増強して調査を続けた。配石を精査した結果、これらの配石は予想以上に多くの礫を積み上げて作られており、さらに調査区東端まで延長することが判明した。また、その形状は小規模な配石単位の集合ではなく、列状に続く配石であることが確認された。配石の精査過程で環状の配石下に竪穴住居跡が確認された（第1号住居跡）。また、配石の掘りかたと南端の遺存状況を確認する過程で、調査区南東壁にかかる形で竪穴住居跡を確認した（第２号住居跡）。これらの遺構を精査・記録し、6月15日に調査を終了した。

今回の調査区は周知の菅ノ沢遺跡の範囲の西端に近く、遺跡の全容を知るには程遠いが、この地点においてはこれまで知られていた菅ノ沢遺跡の出土遺物とは異なる時期に属する縄文時代後期初頭の配石遺構の存在が明らかになった点は意義深い。また、調査区内からは縄文時代前期前葉を中心とする土器片が多く出土しており、周辺にこの時期の遺構の存在することが予想される。

（3） 調査体制

発掘調査（平成16年度）

調査主体	宮古市教育委員会	教育長	中屋定基
調査総括	佐々木　剛	宮古市教育委員会	生涯学習課長
事務担当	佐藤慎一郎	〃	生涯学習課長補佐兼文化係長
調 査 員	竹下　將男	〃	生涯学習課文化係主査
	高橋憲太郎	〃	生涯学習課文化係主任文化財調査員
	鎌田　祐二	〃	生涯学習課文化係主任文化財調査員
	加納　由美	〃	生涯学習課文化係主任文化財調査員（調査、報告書担当）
	安原　　誠	〃	生涯学習課文化係文化財調査員
	長谷川　真	〃	生涯学習課文化係文化財調査員
	阿部　　豊	〃	生涯学習課文化係埋蔵文化財発掘調査員
	江口　邦泰	〃	生涯学習課文化係埋蔵文化財発掘調査員

発掘調査作業員

北村忠治　木村惣司　工藤イネ　崎尾由美子　佐々木脩　佐々木繁實　佐々木常之
佐々木ヨシ子　高岩渉　舘崎禮子　中居勝二　中居謙　中村明子　堀内良子　堀子勝男
三浦純子

室内整理作業員　亀ヶ沢小百合　北村忠治　工藤イネ　佐々木繁實　舘洞美穂子　堀子勝男

（以上五十音順）

室内整理作業（平成１７年度）

調査主体	宮古市教育委員会　教育長　中屋定基		
調査総括	関沢　　敏	宮古市教育委員会	文化課長
事務担当	佐藤慎一郎	〃	文化課長補佐兼文化係長
調 査 員	竹下　將男	〃	文化課文化財係長
	高橋憲太郎	〃	文化課文化財係主査
	鎌田　祐二	〃	文化課文化財係主任文化財調査員
	加納　由美	〃	文化課文化財係主任文化財調査員（調査、報告書担当）
	安原　　誠	〃	文化課文化財係主任文化財調査員
	長谷川　真	〃	文化課文化財係文化財調査員
	阿部　　豊	〃	文化課文化財係埋蔵文化財発掘調査員
	江口　邦泰	〃	文化課文化財係埋蔵文化財発掘調査員

室内整理作業員　　亀ヶ沢小百合

本書の執筆にあたり、次の方々からご助言・ご指導をいただいた。この場を借りてお礼を申し上げたい。

安達尊伸（田野畑村教育委員会）　田鎖康之（岩泉町教育委員会）
山口逸弘（(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団）　吉田裕生（岩手県立博物館）
吉田政行（かながわ考古学財団）　（五十音順・敬称略）

なお、発掘調査にあたり建築施主の川口章様には多大なご協力を賜りました。心より謝意を表します。

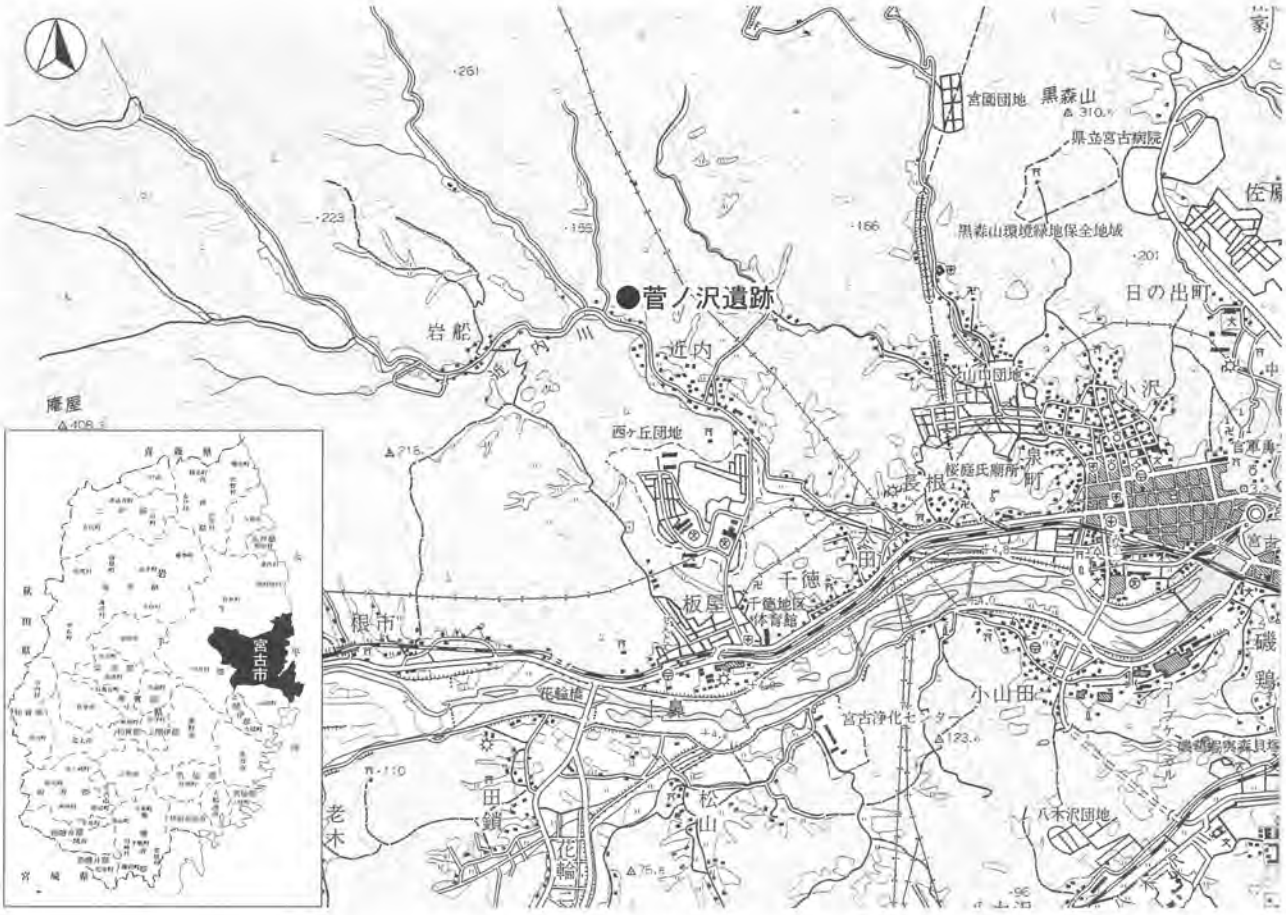
2　遺跡の立地と環境

(1)遺跡の位置と立地（第1図・第2図）

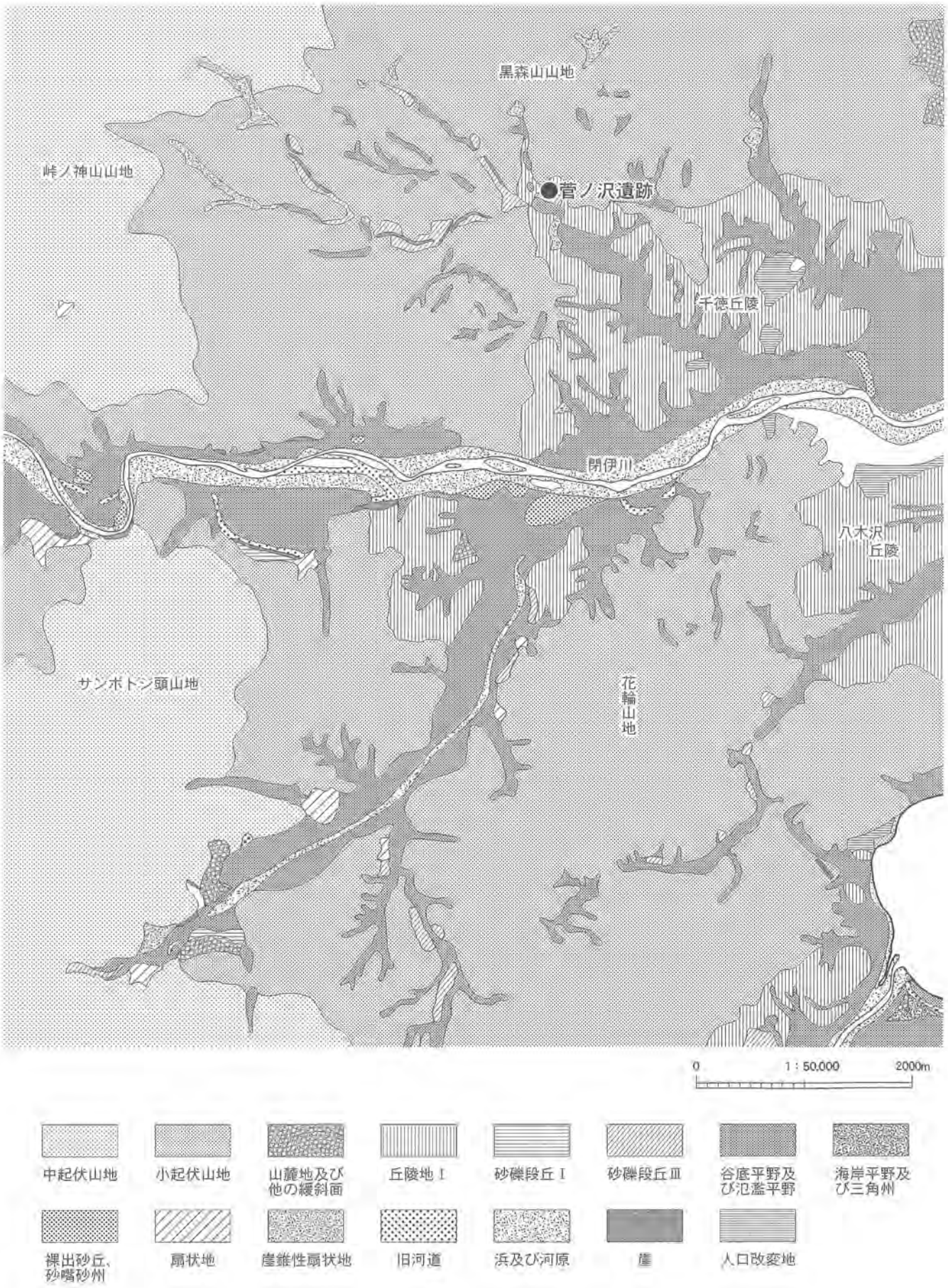
宮古市は、岩手県の東端、三陸海岸の中心部に位置する。平成17年6月に旧新里村・田老町・宮古市の合併により新宮古市が誕生した。合併時の人口は約6万3千人、総面積は696.8㎢である。市の東端は本州最東端である鮭ヶ崎で北緯39°32′東経142°04′、南端は北緯39°29′東経142°00′で山田町と接している。合併後の新たな北・西端は、平成17年度現在未計測であるが、北は岩泉町、西は川井村と接している。宮古市付近の海岸線は、宮古市以北では隆起海岸で海岸段丘が形成され、断崖絶壁となっているのに対し、以南では沈降海岸で複雑な入組んだ海岸線が形成され、天然の良港となっている。

宮古沖の三陸沿岸は寒流である親潮の分枝、対馬暖流の分枝である津軽暖流及び三陸沖を北上する黒潮暖流の影響を受ける位置にある。そのため潮に乗って回遊する魚種は寒暖両系の種類が捕獲され、豊かな水産資源に恵まれている。

宮古市の気候もまた、海洋の影響を受けている。岩手県内としては気温の年変化が少ないのが特徴で、内陸に比べ冬暖かく夏涼しい。また冬期には北西季節風が奥羽山脈を越えて吹き降ろし、乾燥することから、降水量・降雪量が少ない。一方で4～6月、9、11月は県内でも多雨となる。



第１図　遺跡位置図（Ｓ＝1：50,000）


黒森山山地
峠ノ神山山地
菅ノ沢遺跡
千徳丘陵
閉伊川
八木沢丘陵
サンボトシ頭山地
花輪山地
0
1：50,000
2000m
中起伏山地
小起伏山地
山麓地及び他の緩斜面
丘陵地Ⅰ
砂礫段丘Ⅰ
砂礫段丘Ⅲ
谷底平野及び氾濫平野
海岸平野及び三角州
裸出砂丘、砂嘴砂州
扇状地
崖錐性扇状地
旧河道
浜及び河原
崖
人口改変地

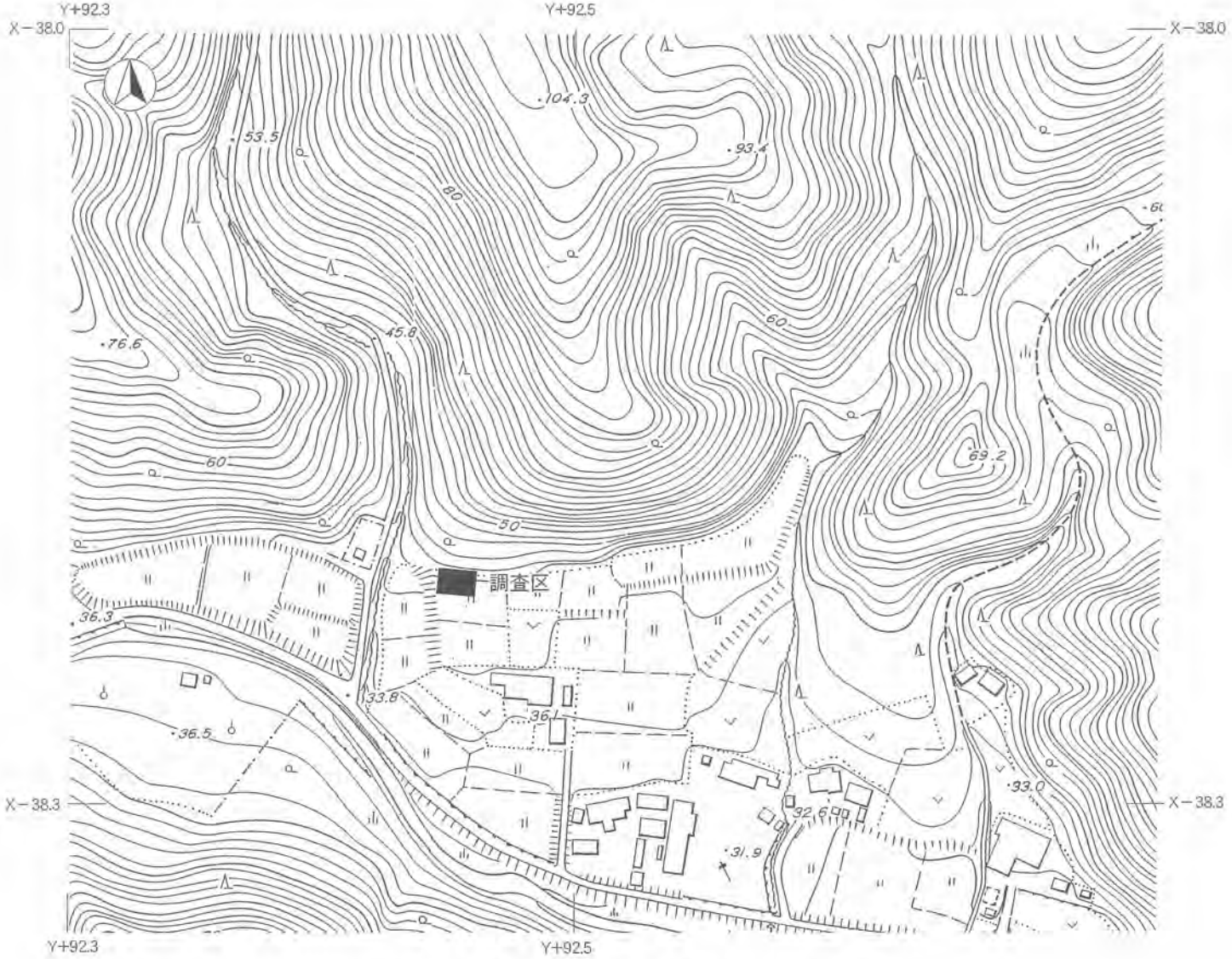
第２図　地形分類図

市域は宮古湾とこれに流入する津軽石川を結ぶほぼ南北の線を境に、重茂半島とその西側に区分される。重茂半島は太平洋に面し、半島中央に南から十二神山(標高731m)・鮭山(465m)・月山(456m)が連なる。半島の西側は津軽石断層崖で区切られ、直線的な海岸だが、東側はやや複雑で特に北東部では海食崖の上に緩傾斜面が形成されている。

津軽石川～宮古湾より西側は、北上山地から続く山地帯が海岸線に向かって延びている。

市の北・北西には北上高地から亀ヶ森(1,112m)・峠の神山(1,230m)・堺の神岳(1,319m)、上松森(1,249m)、害鷹森(1,304m)、南西に禰々子森(1,010m)など、標高1,000m以上の大起伏山地が続く。しかし太平洋に近づくとともに小・中起伏山地・丘陵地となる。これらの山地・丘陵地は太平洋に直接注ぐ摂待川・長内川・田老川、宮古湾に注ぐ閉伊川、津軽石川及びこれらの河川の支流により開析され、各河川の下流域に狭小な低地が広がる。

海岸段丘は小本丘陵と呼ばれる段丘が宮古湾から市の北部まで続き、小河川や沢の開析により所々で緩斜面が形成されている。また、閉伊川の支流である山口川・近内川流域に千徳丘陵、宮古湾へ北流する津軽石川流域に豊間根丘陵、八木沢川流域に八木沢丘陵が形成されている。



第３図　調査区と周辺地形図（Ｓ＝1：2,000）

菅ノ沢遺跡（LG23－2024）は、近内川流域に立地する遺跡である。JR宮古駅からおよそ北北西に3.8km、近内地区字菅ノ沢の山間地に所在する。

遺跡周辺では近内川右岸にはほとんど平坦面がなく、川沿いのごく狭い範囲を除けば急な斜面となっている。一方、遺跡の本体部分が所在する左岸は菅ノ沢の小扇状地で南向き緩斜面となっており，日当たりがよく、近年は畑地・田として利用されてきた。

遺跡中央に菅ノ沢、やや西側にアサナイ沢が南流し、近内川にそそぐ。近内川は山あいを大きく蛇行して流れており、降雨により増水しやすい。遺跡東端付近の平成11年度の試掘調査では、元の土壌がえぐりとられ巨礫が堆積していたが、これは昭和23年のアイオン台風の際の近内川の氾濫の影響と考えられる。しかし、遺跡の標高およそ30～50mの緩斜面は比較的現況が保たれているものと思われる。

『宮古市遺跡分布調査報告書　2』（宮古市教育委員会　1984）によれば、過去には縄文時代早期～前期の遺物やフイゴの羽口が採集され、畑の一部には鉄滓の散布が見られたという。近内川に並行する市道長根岩船線の改良工事に伴う試掘調査等でも多量の鉄滓が出土している。

また、遺跡内では縄文時代晩期大洞C２式期の略完形の土偶が、戦後の開田中に発見されている。これについては既に資料紹介が行われているが（高橋　2005）、巻末に概略を示したのでご参照いただきたい。

(３)周辺の遺跡

近内地区は閉伊川に注ぐ近内川の流域地区で、近内川によって開析された幅200～300mの沖積地と山麓緩斜面および山地に地形分類される。この地域の遺跡は城館遺跡が標高70～80mの山地上に所在する他は、ほぼ山麓緩斜面に立地し、その多くは縄文時代に属する。

近年調査された遺跡としては菅ノ沢遺跡の南西500mほどの地点を中心に存在する近内中村遺跡があげられる。土地区画整理事業に伴い平成６～15年度にかけて計13,140㎡が調査され，縄文時代中期後葉から晩期にかけての大規模集落を主体に、縄文時代早期から近世までの遺構が確認された。縄文時代後期の巻貝形土器がほぼ完形で出土したことで注目されたが、中期から晩期までにいたる集落・墓域の構造や変遷の一端が明らかになったことや，一括性の高い、あるいは層位的に出土した豊富な土器群など当該期のきわめて重要な調査成果がもたらされている。また地点を異にして縄文時代後期初頭の遺構も検出されているが、同じ近内川の上流にあたる大又沢Ⅱ遺跡の調査事例とともに、この地域において調査例が極めて少ない時期の遺構であり注目される。近内中村遺跡については、現在報告書刊行に向けて資料整理中である。

また、同じ土地区画整理事業に伴い、隣接する近内館跡も調査されている。城館そのものは中世のものと考えられるが、調査範囲内では平安時代の集落跡が検出されている。こちらも近内中村遺跡とともに報告書が刊行される予定である。近内館跡の東側には隣接して近内大館(中世)が存在する。

さらに近内中村遺跡と近内館跡の間を南流する蜂ヶ沢の上流約500m、菅ノ沢遺跡からは北東約800mの地点には蜂ヶ沢Ⅰ遺跡が所在する。平成17年度の市道蜂ヶ沢線の道路改良に伴う調査の結果、竪穴住居跡１棟、陥し穴４基、炉跡及び縄文時代遺物包含層等が検出された。現在報告書刊行に向けて資料整理中である。

近内川を上流にさかのぼると岩船地区に達する。この集落を抜けると近内川は大又沢と新田沢に分かれる。この地域ではこれまで調査例がなかったが、平成14年、大又沢の右岸に位置する大又沢Ⅱ

No.	遺跡コード	遺跡名	遺構・遺物	No.	遺跡コード	遺跡名	遺構・遺物
1	LG23－2024	菅ノ沢	縄文土器(早・中期)・土師器・須恵器・鉄滓・羽口	26	LG33－0138	近内寺本Ⅰ	縄文土器(早・中期)・土師器・須恵器
2	LG23－1042	アサナイ沢	縄文土器(早・中期)・土師器・須恵器・羽口	27	LG33－0149	近内寺本Ⅱ	土師器
3	LG23－2021	柳舘Ⅰ	縄文土器(早・中期)・竪穴住居跡	28	LG33－0221	青猿Ⅰ	Tピット・製鉄炉・竪穴住居跡
4	LG22－1388	柳舘Ⅱ	縄文土器	29	LG33－0222	青猿Ⅱ	弥生土器・土師器・竪穴住居跡
5	LG22－1365	柳舘Ⅲ	縄文土器(前・中期)・弥生土器・土師器・須恵器	30	LG33－0202	青猿Ⅲ	縄文土器(中期)・土師器
6	LG22－1321	セネガ沢Ⅰ	縄文土器(前・中・後期)・磨製石器	31	LG33－2282	延所	縄文土器
7	LG22－1217	セネガ沢Ⅱ	縄文土器(中期)・弥生土器	32	LG33－0253	長根Ⅰ	城館・古墳・土師器
8	LG22－2347	与茂子Ⅰ	縄文土器	33	LG33－0234	長根Ⅲ	土師器
9	LG22－2385	与茂子Ⅱ	散布地	34	LG33－0225	長根Ⅳ	散布地
10	LG22－2387	桜木	縄文土器(中・後期)・土師器	35	LG33－0197	千徳城遺跡群	城館・土師器
11	LG22－2350	岩船	縄文土器(前・中期)・鉄滓・羽口	36	LG23－2244	山口駒込Ⅰ	縄文土器(早～後期)・土師器・須恵器
12	LG22－2226	大又沢Ⅰ	縄文土器(中期)・土師器	37	LG23－2231	山口駒込Ⅱ	鉄滓
13	LG22－1291	大又沢Ⅱ	縄文土器(中・後期)・土師器・竪穴状遺構	38	LG23－1253	高根	縄文土器(中期)
14	LG22－2244	新田沢Ⅰ	散布地	39	LG23－1255	小平Ⅰ	縄文土器(中期)・竪穴住居跡
15	LG23－2055	横川	縄文土器(中期)・土師器	40	LG23－1234	小平Ⅱ	縄文土器
16	LG23－2059	近内中村	縄文土器(早～晩期)・竪穴住居跡地	41	LG23－1233	牛沢	縄文土器(中・後期)・竪穴住居跡
17	LG23－2133	近内踊場	散布地	42	LG33－0099	神田沢	縄文土器(中期)・土師器
18	LG23－2162	近内館	城館・主郭・帯郭・物見台	43	LG33－1019	板屋Ⅰ	散布地
19	LG23－2104	蜂ヶ沢Ⅰ	縄文土器(前・後期)・鉄滓・土師器	44	LG33－1121	板屋Ⅱ	散布地
20	LG23－1068	蜂ヶ沢Ⅱ	散布地	45	LG33－0087	室井沢Ⅰ	縄文土器(中・後期)・土師器
21	LG23－1151	蜂ヶ沢Ⅲ	散布地	46	LG33－1008	室井沢Ⅱ	散布地
22	LG23－1121	蜂ヶ沢Ⅳ	散布地	47	LG32－1335	下根市	縄文土器(中期)・鉄滓
23	LG23－2194	近内白石Ⅰ	鉄滓・羽口	48	LG32－1331	板の沢	縄文土器(中期)
24	LG23－2196	近内大館	城館	49	LG32－1258	根市館	城館
25	LG23－2197	近内白石Ⅱ	縄文土器(後期)・土師器・須恵器	50	LG32－1235	根市寺沢Ⅱ	縄文土器(中期)

第４図　遺跡分布図（Ｓ＝1：25,000）

遺跡が発掘調査された。竪穴状遺構3基および土坑35基、遺物包含層が検出されている。土坑に伴い縄文後期初頭の土器が出土しており、貴重である。このように、近内地区は近年土地区画整理事業や道路改良を機に発掘調査の件数が増えつつあり、資料の増加が著しい。

近隣には、菅ノ沢遺跡の西側を流れるアサナイ沢上流約600mほどの地点にアサナイ沢遺跡（縄文時代前・中期土器、土師器・須恵器・フイゴの羽口散布）が存在するほか、横川遺跡（縄文時代中期土器・土師器散布）・柵舘Ⅰ遺跡（縄文時代早期・中期土器散布）・柵舘Ⅱ遺跡（縄文土器散布）・柵舘Ⅲ遺跡（縄文前・中期土器・弥生土器・土師器・須恵器散布）などが所在している。また、近内川と閉伊川の合流点付近に古代の城館跡を中心とする千徳城遺跡群があり、一部が発掘調査されている。

参考文献

岩手県　2004　『平成16年度版　岩手県統計年鑑』

高橋憲太郎　2005　「岩手県宮古市近内地区出土の鳴る土偶について」　『古代文化』第57巻7号

宮古市　1974　『宮古のあゆみ』

宮古市　1979　『宮古市の自然』

宮古市　2005　『平成16年度版　宮古市の統計』

宮古市教育委員会　1984　『宮古市遺跡分布調査報告書　2』　宮古市埋蔵文化財調査報告書４

宮古市教育委員会　1986　『宮古市遺跡分布地図－昭和60年度版－』　宮古市埋蔵文化財調査報告書９

宮古市教育委員会　2003　『大又沢Ⅱ遺跡』宮古市埋蔵文化財調査報告書59

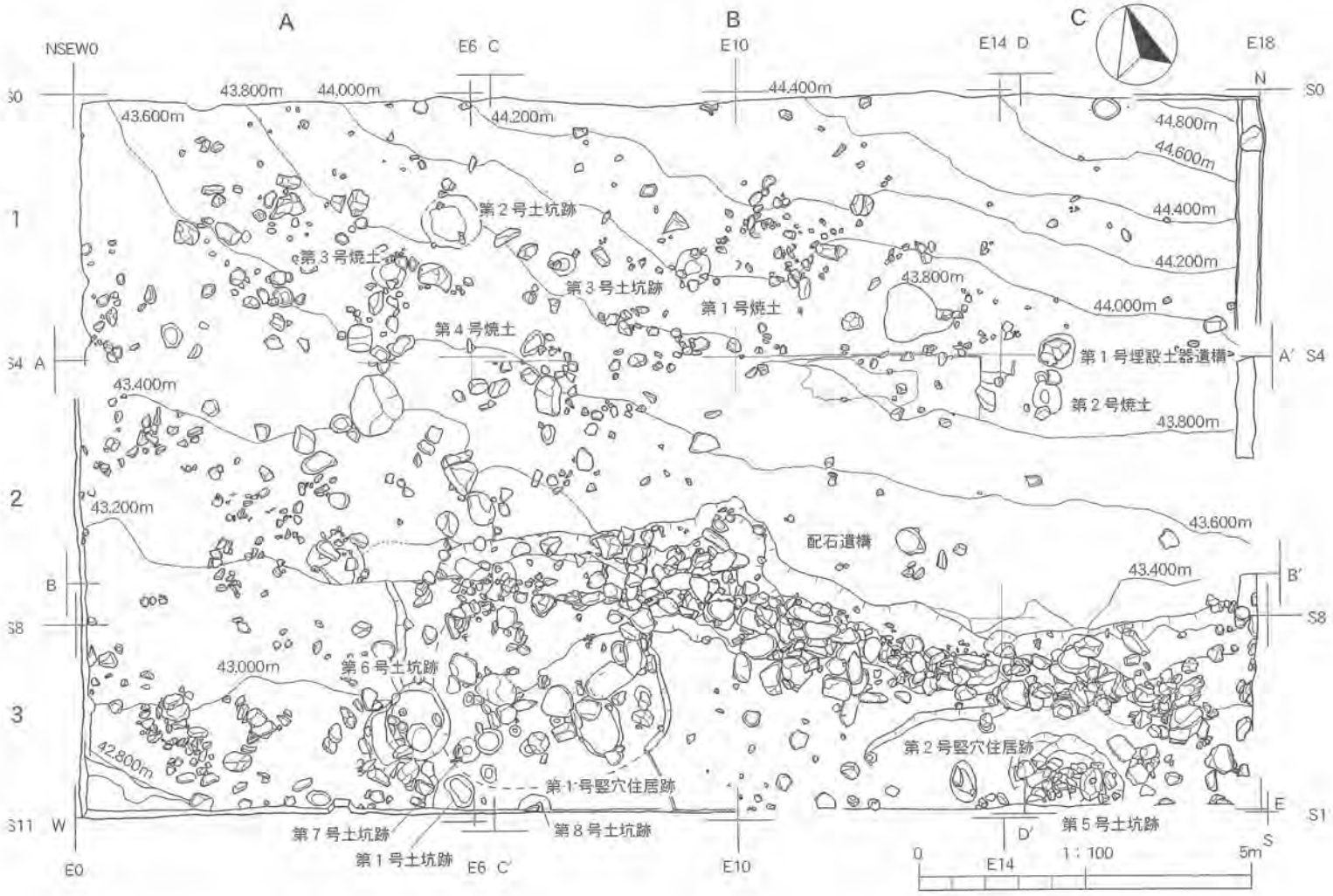
宮古市教育委員会　2001　『近内中村遺跡－第1次～第7次発掘調査の概報－』

3　調査内容

(1)調査区周辺の概況

近内川と市道長根岩船線は並行して近内地区の集落を抜け、いったん大きく北にカーブする。このカーブを抜けた近内川左岸が菅ノ沢遺跡であるが、今回の調査区は遺跡の西端付近に位置し、遺跡西側を流れるアサナイ沢沿いの林道を40mほど入った左岸である。

調査区北側には尾根が張り出しており、この尾根と緩斜面の間の傾斜変換点が調査区の北端となっている。現況では緩斜面は菅ノ沢を中心として近内川に向かって傾斜しており、扇状地形の両端で低くなっている。そのため、調査区周辺では緩斜面は南西に向かって低くなっている。さらに調査区西側はアサナイ沢により下刻されて急斜面となっている。調査区は南北11m、東西18mの長方形とし、試掘調査のトレンチ壁に沿って土層確認のためのベルトを設定し、不整ではあるが第５図のように東西にA～C、南北に１～３のグリッドに分割した。



第５図　調査区全体図

調査区北側は先に述べたとおり傾斜が大きくなり、山の尾根が迫っている。斜面の所々で基盤起源の花崗岩の角礫が露出している。また、南側では市道長根岩船線との間に開田に伴う平坦面５面とそれに伴う段差が存在している。本調査区のある面は、以前の地権者が石が多く耕作に適さないため杉を植林したとのことである。

（２）基本層序(第5・6・7図)

堆積土の土層観察は主に調査区内に井桁状に組んだ土層観察用ベルトAA′、BB′、CC′、DD′と調査区東壁・南壁において行った。AA′・BB′は調査区東西に、CC′、DD′は南北に設定した。当初は遺跡南側の近内川および遺跡西側のアサナイ沢側に向かって単純に傾斜しているものと考えていたが、実際には局所的な土層が存在していた。また、表土以下の土層は、全体には現況から想像されるのとは逆に東側に傾斜していた。

以下、基本土層について記述する。

Ⅰ層　黒褐色シルト質埴壌土。粘性弱くやわらかい。表土。

Ⅱ層　基本土は暗褐色シルト質壌土であるが、黄褐色砂土(真砂)を多量に含む。表土下の調査区南東隅に堆積し、A1･2･3区、B1･2区･C1区には堆積しない。

Ⅲ層　基本土は黒褐色シルト質壌土である。一見してほかの土層より黒い。第５号土坑をこの層の上面で検出した。また、第１号竪穴住居跡南端・第２号竪穴住居跡・配石遺構がこの層に覆われている。調査区南東側で厚くなる。遺物を多く含む。

Ⅳ層　黒褐色シルト質壌土を基本とするが、色調はⅣ－６層を除いて全体にⅢ層より明るい。調査区東壁沿いのサブトレンチ北側で確認した。最上層は調査区北端で表土直下に位置する。自然堆積と思われ、後背斜面からの流れ込みと思われる。

Ⅴ層　黒色シルト質埴壌土～壌土を基本とする。調査区西側を中心に堆積し、配石遺構西端はこの層を掘り込んでいる。B1・C1区のⅦ層のくぼみ内にも堆積している。遺物を含む。

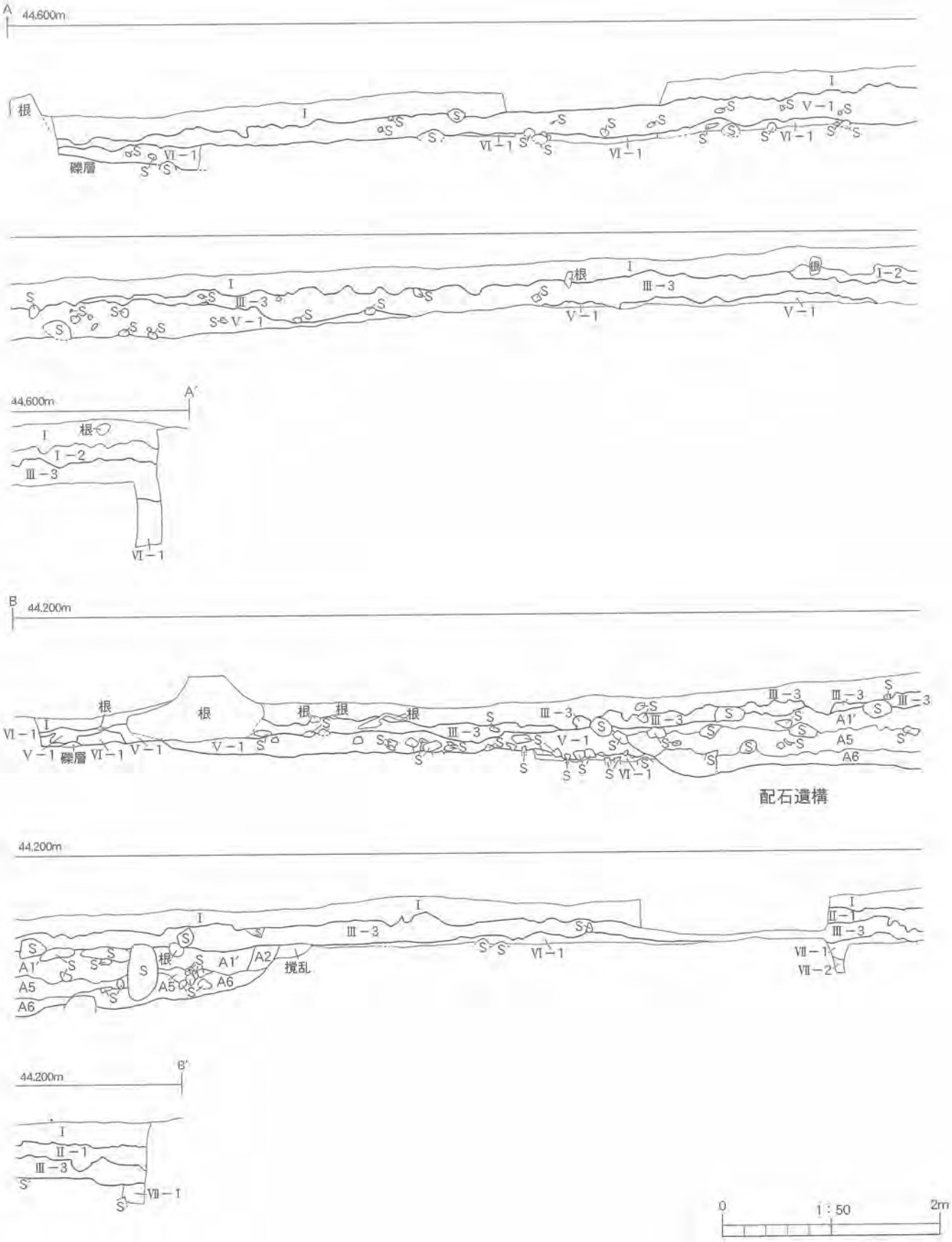
Ⅵ層　調査区西側で観察された礫層上の土層。調査区南西側では、表土の直下に薄いⅥ－１層（暗褐色シルト質壌土、鈍い黄橙色砂土をふくむ）を介して礫層が存在している。礫層とともにアサナイ沢による堆積物と思われる。

Ⅶ層　黒褐色シルト質壌土。調査区南側ではⅢ層下に堆積し、色調はⅢ層より明るい。また、配石遺構の後背にあたるB1・C1区間で洞状にくぼんでいる。調査区東側に向かって傾斜している。

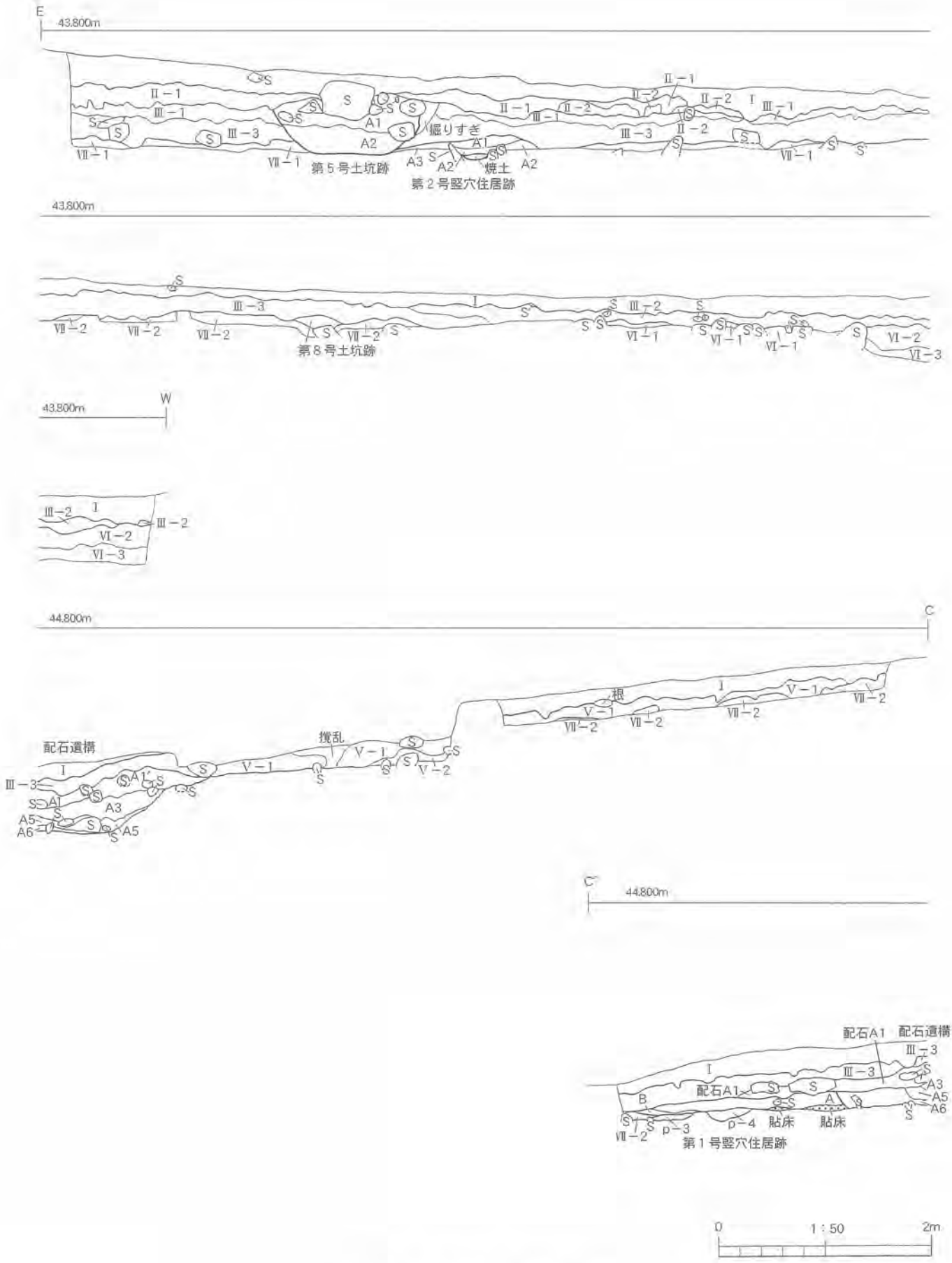
土層の堆積と遺構の関係を整理すると、

①Ⅶ層が堆積後、②アサナイ沢起源の礫層・漸移層（Ⅵ層）が調査区西側に堆積する（おそらくは出水によるもの、調査区南西隅の落ち込みはその際の流路の一部か）→③Ⅴ層が堆積する。→④第１号竪穴住居・配石遺構・第１・６・７・８号土坑・第2号竪穴住居が構築される→⑤Ⅲ層が堆積する→⑥Ⅲ層上に第5号土坑が作られる。→Ⅱ層が調査区南東側に堆積する→⑦表土が堆積する。

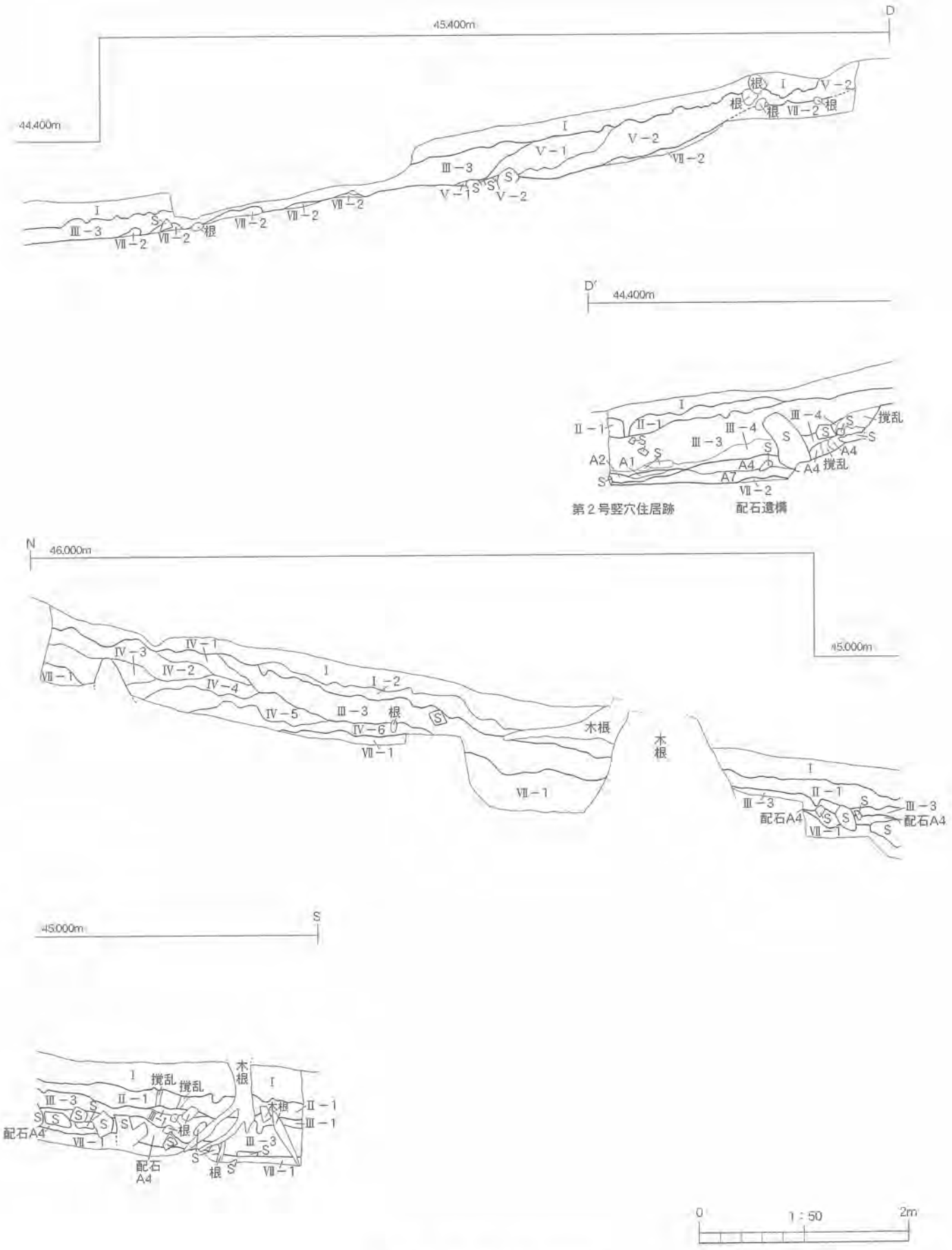
という順序になる。なお、堆積の薄い調査区北側でも、後述するように遺物が集中して出土した硬化面を検出している。



第６図　調査区土層断面図①



第7図　調査区土層断面図②



第８図　調査区土層断面図③

層名		基本土	混入土	硬度	密度	粘性	混入物
Ⅰ層	1	10YR2/2黒褐色シルト質埴壌土	10YR3/3暗褐色シルト質壌土粒状20% 10YR6/6明黄褐色シルト質埴壌土粒状１%	軟	疎	弱	炭化物・遺物含む。草木根多し。
	2	10YR1.7/1黒色シルト質埴土	10YR3/2黒褐色シルト質壌土粒状20%	軟	疎	なし	
Ⅱ層	1	10YR3/4暗褐色シルト質壌土	10YR6/5黄褐色砂土(真砂)粒状30% 10YR3/2黒褐色シルト質壌土ブロック状3%	軟	中	なし	炭化物多い。遺物微量。
	2	10YR3/4暗褐色シルト質壌土	10YR6/5黄褐色砂土(真砂)粒状15%	軟	中	なし	Ⅱ層の真砂少ない部分。
Ⅲ層	1	10YR2/2黒褐色シルト質壌土	10YR6/5黄褐色砂土(真砂)粒状5%	軟	中～疎	弱	
	2	10YR2/2黒褐色シルト質埴壌土	10YR3/2黒褐色シルト質埴壌土ブロック状15%	軟	中	ややあり	炭化物・遺物含む
	3	10YR2/2黒褐色シルト質壌土	10YR2/3黒褐色シルト質壌土粒状20%	軟	中～疎	弱	遺物多い。花崗岩粒がやや多い。
	4	10YR2/2黒褐色シルト質壌土	10YR2/3黒褐色シルト質壌土粒状5%	―	―	―	花崗岩粒子含む
Ⅳ層	1	10YR2/2黒褐色シルト質壌土	10YR3/2黒褐色シルト質壌土粒状15%	中	中～疎	なし	
	2	10YR3/2黒褐色シルト質壌土	10YR2/2黒褐色シルト質壌土粒状7%	中	中	なし	
	3	10YR3/2黒褐色シルト質壌土	10YR2/2黒褐色シルト質壌土ブロック状5%	中～軟	中～疎	なし	
	4	10YR3/2黒褐色シルト質壌土	10YR1.7/1黒色シルト質壌土ブロック状30%	中～硬	中	中	
	5	10YR3/2黒褐色シルト質壌土	10YR2/2黒褐色シルト質壌土ブロック状7%	中～硬	中	なし	花崗岩粒子多い
	6	10YR1.7/1黒色シルト質壌土	10YR3/2黒褐色シルト質壌土粒状3%	中	中	弱	炭化物含む。
Ⅴ層	1	10YR1.7/1黒色シルト質埴壌土	10YR2/2黒褐色シルト質壌土粒状15%	軟～中	中	ややあり	炭化物粒子含む。遺物を含む 花崗岩粒子少ない。
	2	10YR2/1黒色シルト質壌土	――――	中～硬	中	なし	炭化物粒子含む。花崗岩粒多い。
Ⅵ層	1	10YR3/3暗褐色シルト質壌土	10YR6/3純い黄橙色砂土(真砂)粒状10%	軟	中～疎	なし	
	2	10YR2/2黒褐色シルト質壌土	10YR2/1黒色シルト質埴壌土	軟～中	中	ややあり	炭化物含む.花崗岩粒少ない。
	3	10YR2/1黒色シルト質壌土	10YR5/6黄褐色砂土粒状10%	軟～中	中	弱	花崗岩粒多くざらざらした感触
Ⅶ層	1	10YR2/3黒褐色シルト質壌土	――――	中	中～疎	ややあり	遺物は少ない。
	2	10YR2/3黒褐色シルト質壌土	――――	中	中～疎	ややあり	Ⅶ-1層より花崗岩粒子が少ない。

第１表　調査区基本層序　土層注記表

（３）　検出された遺構と遺物

１．竪穴住居跡

第１号竪穴住居跡(第９図・第10図)

住居跡の位置は、調査区中央南半、主にＢ３区西半にあたる。後述する配石遺構の精査中に、斜面下方で黄橙色砂質埴土で貼床された床面を検出した。配石遺構・第6号土坑に切られている。

上部の配石遺構を記録・除去するのと並行してセクションベルトを残し、精査した。

埋土は斜面下方で薄く、壁の立ち上がりを検出するのは困難であった。しかし調査区BB′ベルトで貼床土がゆるく立ち上がっているのが確認できた。竪穴の東側では立ち上がりを確認できた。残存する壁の高さは10cmほどである。推定される竪穴住居の規模は長径で約3.5m、楕円形を呈すると思われる。北側は大きく配石遺構の掘りかたに壊されている。

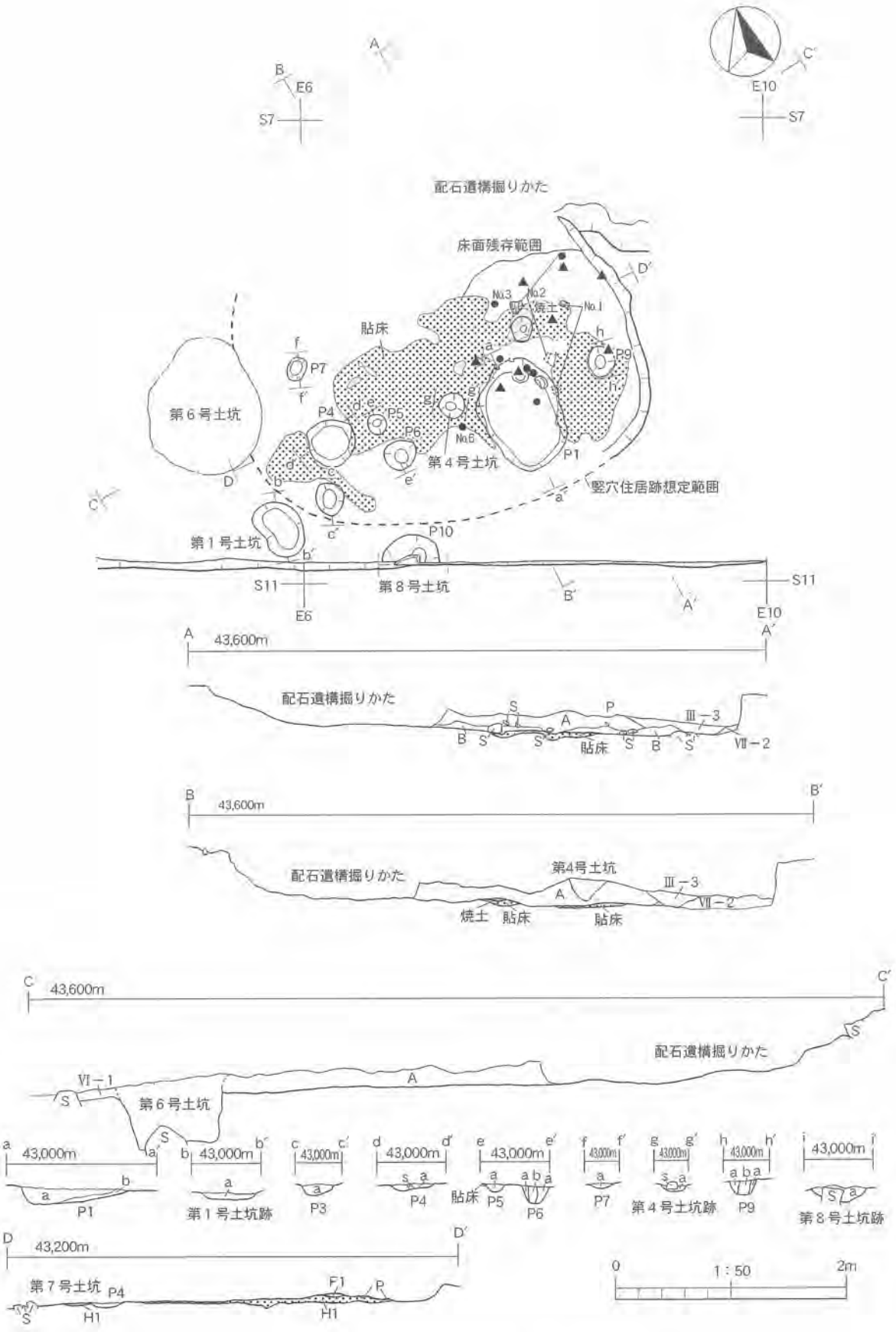
埋土は残存する範囲内ではおおよそ15cm、最大25cmの厚さで2層に分層される。A層は黒褐色シルト質埴壌土で中程度の硬さであり、わずかに粘性がある。暗褐色シルト質壌土を混入し、炭化物や焼土粒子を含む。床に直接堆積している。後述する配石遺構の埋土がA層の上に堆積しており、A層の上面は非常に硬く締まっていた。この硬化面には配石遺構の平たい石の下面が接しており、配石遺構の構築に関係して硬化したものと思われる。さらに、住居北側でA層を掘り込んで配石遺構の立石が立てられている。

B層は暗褐色シルト質壌土、緻密で硬い層で、竪穴住居跡南側の一部で検出された。黄橙色砂質壌土をブロック状に含んでいる。壁際の堆積土と思われる。

床面の残存範囲では所々に焼土が見られた。比較的大きい焼土1は、20cm×30cmほどの広がりを持ち、竪穴住居跡中央やや東よりに検出した。周辺には炭化材の小片なども見られたが、精査したところ貼床のくぼみの上に乗っている程度のもので、床面は焼けていなかった。この他の小規模な焼土も同様で、炉と考えられるものは検出できなかった。

１号竪穴住居跡内で見つかった落込みは7基である（なお、この遺構の精査と前後して掘削した第1号土坑・第8号土坑・第9号土坑の平断面図もここに収めたが、詳細については土坑の項で説明する)。

そのうち、住居に伴う土坑と思われるのがＰ１で、他の６基は柱穴と考えられる。浅い土坑であり性格ははっきりしないが、内部から石鏃が出土している。また、埋土a層にはチップが混入している。この範囲には貼床が張られていないことから、竪穴住居に伴う土坑と考えられる。



第9図　第1号竪穴住居跡　平・断面図

層名		基本土	混入土	しまり	密度	粘性	混入物
1号住埋土	A	10YR3/2黒褐色シルト質壌土	10YR3/3暗褐色土シルト質壌土	中	中	弱	炭化物・焼土粒子微量
1号住埋土	B	10YR3/3暗褐色シルト質壌土	10YR6/8明黄褐色シルト質壌土　ブロック状15%	硬	密	中	炭化物粒子。
焼土	F	5YR5/8明赤褐色(焼土)シルト質壌土	10YR2/1黒色シルト質壌土小塊～粒状3%・10YR7/8黄橙色砂質壌土(貼床土)小塊2%・10YR2/3黒褐色シルト質壌土塊3%	中	中	塊	
1号住貼床	H1	10YR7/8黄橙色砂質壌土	10YR4/6褐色シルト質壌土ブロック状15%	硬	密	あり	花崗岩粒子。
1号住P1	a	10YR2/2黒褐色シルト質壌土		中	中	塊	炭化物・チップ
	b	10YR2/3黒褐色シルト質壌土	10YR2/2黒褐色シルト質壌土小塊～粒状3%	中～軟	中～疎	塊	
1号住P3	a	10YR2/2黒褐色シルト質壌土	10YR2/3黒褐色シルト質壌土塊～粒状3%	中	中	塊	
1号住P4	a	10YR2/3黒褐色シルト質壌土	10YR2/1黒色シルト質壌土塊状3%	軟～中	疎～中	塊	風化花崗岩礫
1号住P5	a	10YR2/3黒褐色シルト質壌土		軟～中	中～疎	塊	
1号住P6	a	10YR2/1黒色シルト質壌土	10YR2/2黒褐色シルト質壌土塊状10%	軟	疎～中	塊	
	b	10YR2/3黒褐色シルト質壌土	10YR2/2黒褐色シルト質壌土	中～軟	中	塊	
1号住P7	a	10YR2/3黒褐色シルト質壌土		軟～中	疎～中	塊	
1号住P9	a	10YR2/1黒色シルト質壌土	10YR2/3黒褐色シルト質壌土粒状5%	軟	疎	塊	
	b	10YR2/2黒褐色シルト質壌土	10YR2/1黒色シルト質壌土粒状1%	中～軟	中～疎	塊	

第2表　第1号竪穴住居跡　土層注記表

柱穴の可能性があるピットは6基であるが、極めて浅い。比較的深さがあり柱痕が検出されたのはＰ6とＰ9である。床面からの深さは10～15cm程度である。主柱穴と思われる。

出土した遺物は第10図のとおりである。図示しなかったものを含め、床面からの出土遺物が9点(うち土器4点、剥片及び剥片石器が5点)出土している。

第10図1・2は貼床直下から出土した土器と、床面から出土した土器が接合したものである。このような接合状況から、この竪穴住居の構築に伴うものと考えられる。1・2は接合しないが同一個体である。1と2をあわせると、器形は胴部上半で最大径を持ち、頸部がすぼまり、口縁は外に開く深鉢である。口縁部は二個一対の突起をもつ小波状縁であり、以下の入組み状沈線文と対応している。2本の沈線で胴部と口頸部の文様帯を区画するが、区画は口頸部のくびれより下に来ており、器形と文様帯の区切りが一致せず、口頸部文様帯の幅が広い。胴部には区画沈線に沿ってLR単節縄文が横回転施文され、以下はLの無節縄文が斜め回転施文されている。区画沈線は縄文より後で施文されている。文様帯の区画になっている沈線は、２本の間に「ノ」の字もしくは括弧状の沈線が入って上下をつないでいるが、これは一筆描き状に上の沈線からつなげて下に向かって描いたり、その逆であったりして単独では引かれていない。口縁下には一本の沈線をめぐらし、波頂下に入組状の沈線文を施文する。

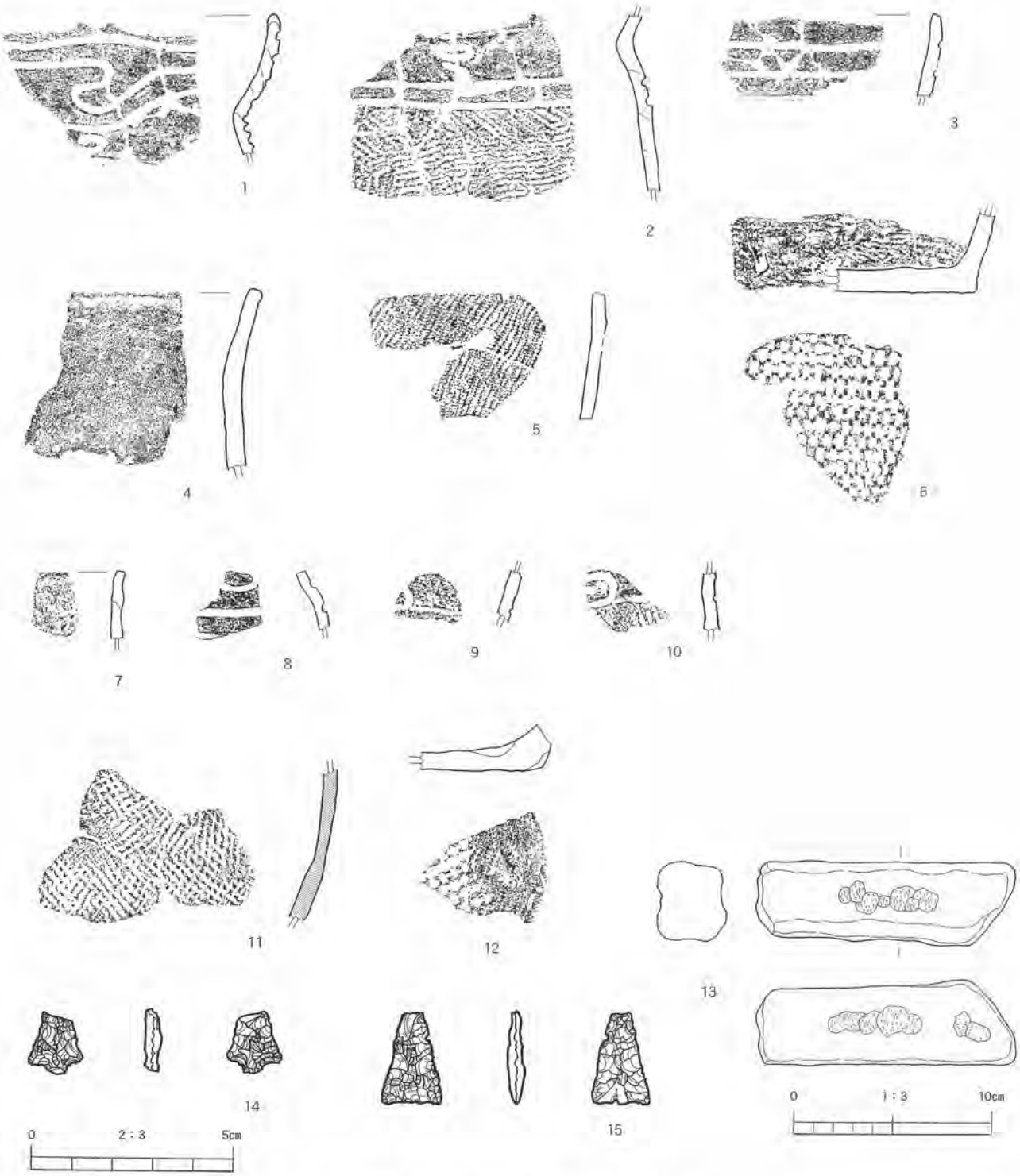
入組状沈線文下にはもう一本の沈線が頸部のくびれ部に沿ってのび、入組状沈線と平行になっている。入組状沈線の下には蛇行状の垂下沈線を意識したらしい、横倒しの「U」の字状の沈線と横位の短沈線が施文されている。工具を操りにくかったのであろう。色調は内外面ともに橙色から褐色、断面は外面側が鈍い黄橙色、内面側は橙色である。口頸部以上はやや白身を帯びた色調で外面には炭化物が付着している。縄文時代後期初頭に属する土器と思われる。

３は細かく砕けているが口縁部に沿って３本の沈線が施文されている。ゆるい波状口縁らしい。地文は残存部内では無文である。断面形はやや内湾しており、１・２と同様の器形かと思われる。色調は内外面・断面ともに褐色、外面には煤と炭化物が付着している。床面直上から出土している。縄文時代後期初頭に属する。

４は大型で無文の深鉢口縁部で、口縁直下でわずかにくびれ、外反する。口端を平らに整形している。くびれ部付近から上の外面に、横に近い斜め方向になでた痕が見られる。内面は比較的きれいに磨かれているが、粘土紐の積み上げに由来する凹凸までは消しきれていない。内外面ともに橙色、断面中央は灰色を呈する。

５は胴部破片で、RL単節縄文を縦回転施文している。外面は鈍い橙色～浅黄橙色、内面は浅黄橙色、断面中央には暗緑灰色の部分がある。内面はほぼ縦方向に磨かれている。

6は底部破片。胴部にはLの無節縄文が斜め回転施文されているが、残存部の上端にはLR単節縄文や、0段多縄と思われる最上段左撚り原体の斜め回転施文が見られる。底面には網代圧痕が見られる。一本越え一本潜り一本送りである。細い竹管様のものでついたような小孔（ごく浅い）が三箇所見られる。内面底部付近は横方向に丁寧に磨かれている。長さ5㎜程度の、かなり大粒の砂礫を胎土に含む。内面は浅黄橙色、外面は鈍い黄褐色、断面中央は灰白色から灰黄褐色を呈す。5・6共に時期不明。



第10図　第１号竪穴住居跡　出土遺物

図版番号	写真図版	出土層位	種　別	備　　考	図版番号	写真図版	出土層位	種　別	備　　考
第10図1	11-1	貼床直下+床面	縄文土器	2と同一個体	第10図9	11-9	埋土	縄文土器	
第10図2	11-2	貼床直下+床面	縄文土器	1と同一個体	第10図10	11-10	pit 1　b層	縄文土器	
第10図3	11-3	床面直上+床面	縄文土器		第10図11	11-11	埋土	縄文土器	配石遺構掘りかた遺物と接合
第10図4	11-4	貼床中	縄文土器		第10図12	11-12	pit 1　底面	縄文土器	底部、網代圧痕
第10図5	11-5	貼床中	縄文土器		第10図13	11-13	埋土	敲き石	
第10図6	11-6	床面	縄文土器	底部、網代圧痕	第10図14	11-14	pit 1	石鏃	
第10図7	11-7	埋土	縄文土器		第10図15	11-15	埋土	石鏃	
第10図8	11-8	埋土	縄文土器						

第3表　第1号竪穴住居跡　出土遺物一覧表

7は無文の口縁部破片。外面は調整が見られないが、内面は非常に丁寧に磨かれて光沢があり、口端も角頭状に整えられている。外面は褐色～橙色、内面は褐色～黒褐色、断面褐色。

8は壺の胴部最大径付近と思われる。内外面ともに丁寧に研磨されており、沈線文が描かれる。器面は内外ともに鈍い黄褐色～暗褐色、しかし断面を見ると表面を除いては灰色である。縄文後期初頭～前葉と思われる。

9は表面に炭化物が付着して原体は不明だが、地文に縄文が施文され、沈線文が描かれた胴部破片である。拓影図ではわかりにくいが上端にも横方向の沈線がある。内・外面ともに橙色から鈍い黄褐色、断面に色調の変化はない。縄文後期初頭に属する。

10も沈線文を有するが、こちらは沈線にかかった地文（Lの撚糸文）を磨り消している。断面形はごくわずかに外反しており、頸部付近と思われる。沈線は浅くて太く、胴部を区画する沈線の末端を渦巻状に巻き上げ、次の同様の文様と連結しているものと思われる。内外面ともに鈍い橙色、断面に色調の変化はない。

11は竪穴埋土内と配石遺構掘り方の土器が接合したもので、胎土に繊維を含む。0段多縄の単節縄文を縦横に施文している。一見羽状にも見えるが、繰り返し施文されており、不規則である。外面は橙色～鈍い黄褐色、内面は鈍い黄褐色、断面中央は黒色を呈する。接合しないが、同一個体の破片が床面からも出土している。

12は底部破片で内面および胴部外面は丁寧に磨かれ光沢をもつ。底面も、中央には網代圧痕を持つが、周縁部は磨かれて網代圧痕が消されている。圧痕の残る部分のほうが少し中高になっている。内面は橙色、外面は内面鈍い黄褐色、断面も両面と同じように色調が分かれる。網代は一本越え一本潜り一本送り。

7～12のうち10と12がピット1の遺物、残りが竪穴埋土の遺物である。

13は敲き石である。柱状の礫の対向する2面にくぼみ状の使用痕が見られる。灰色と白色の縞状構造が見られる変成をうけた堆積岩で、白色の光沢をもつ粒子が見られる。

14は床面直上から出土した石鏃で、先端部を欠く。石質は灰色不透明で光沢はなく、粒子やや粗く白色の小粒子が観察される。側縁に微細剥離がある。

15はピット1から出土した有茎鏃である。先端部と中茎を欠く。石質は暗褐色半透明で光沢がある。側縁には微細剥離は認められない。

その他細片で図示出来なかったが、鐸形土製品の破片と思われるものが埋土中から見つかっている。細い円形竹管文が縦列状に施文されていた。

しかし、貼床中及び貼床直下・床面から出土している第10図1、2や床面直上から出土している3、また住居の機能時に使用されていたと思われるピット1の遺物などから考えて、この遺構の時期は縄文時代後期初頭～前葉と考えられる。

第２号竪穴住居跡（第11図・第12図）

第２号竪穴住居跡は、C3区で検出した。残存状況が悪く、竪穴の埋土・立ち上がりともにごく一部しか確認できなかった。南半は調査区外にかかるが、検出できた範囲内よりもⅦ層面の傾斜が下がることを考えると、遺存状況は悪いと考えられる。

検出した場所は後述の第5号土坑跡の西側にあたる。基本層序Ⅲ層を掘り下げた際に焼土を検出し精査したが、黒褐色土に焼土が混じっている状態で、掘り込みや焼けた面が検出されなかったのでそのまま掘り下げた。この焼土混じり土の下で石囲炉を検出し、さらに石囲炉の周辺に床面を検出したため、この焼土混じり土が遺構埋土(A1層)であることが判明した。

石囲炉の周辺の焼土混じり土の下面が硬化しており、住居床面と考えられたため、周辺を掘り広げ、北西側の壁の立ち上がりを検出した。この部分での壁高は14cm程度、住居の平面プランは楕円形であると考えられる。本来調査区D－D′ベルトで立ち上がりが確認できるはずであるが、検出しえなかった。

埋土は3層からなる。Ａ１層は黒褐色シルト質埴壌土で、焼土を多く含む。前述の基本層序Ⅲ層中の焼土として検出したのがこの層の一部にあたる。炉の周辺に堆積している。A2層は黒色シルト質埴壌土で、わずかに残った竪穴の埋土の大半である。炭化材を多く含んでいる。A3層は黒褐色シルト質埴壌土で、やや硬い。

炉は円形の石囲炉で、直径は60cm程度である。炉内にはA2層が堆積していた。A2層を除去すると、炉床は焼土化していた。炉を囲繞する石は花崗岩礫で、風化しているが、赤化はしていない。石よりやや大きい掘りかたを掘り、石を埋めている。

住居範囲内には落ち込みが三箇所検出された。しかしＰ３としたものは浅く、底面が不整であるし、Ｐ2も浅い。比較的深さがあるのはＰ１のみで、これのみ柱痕が観察された。全体の柱配置は不明である。

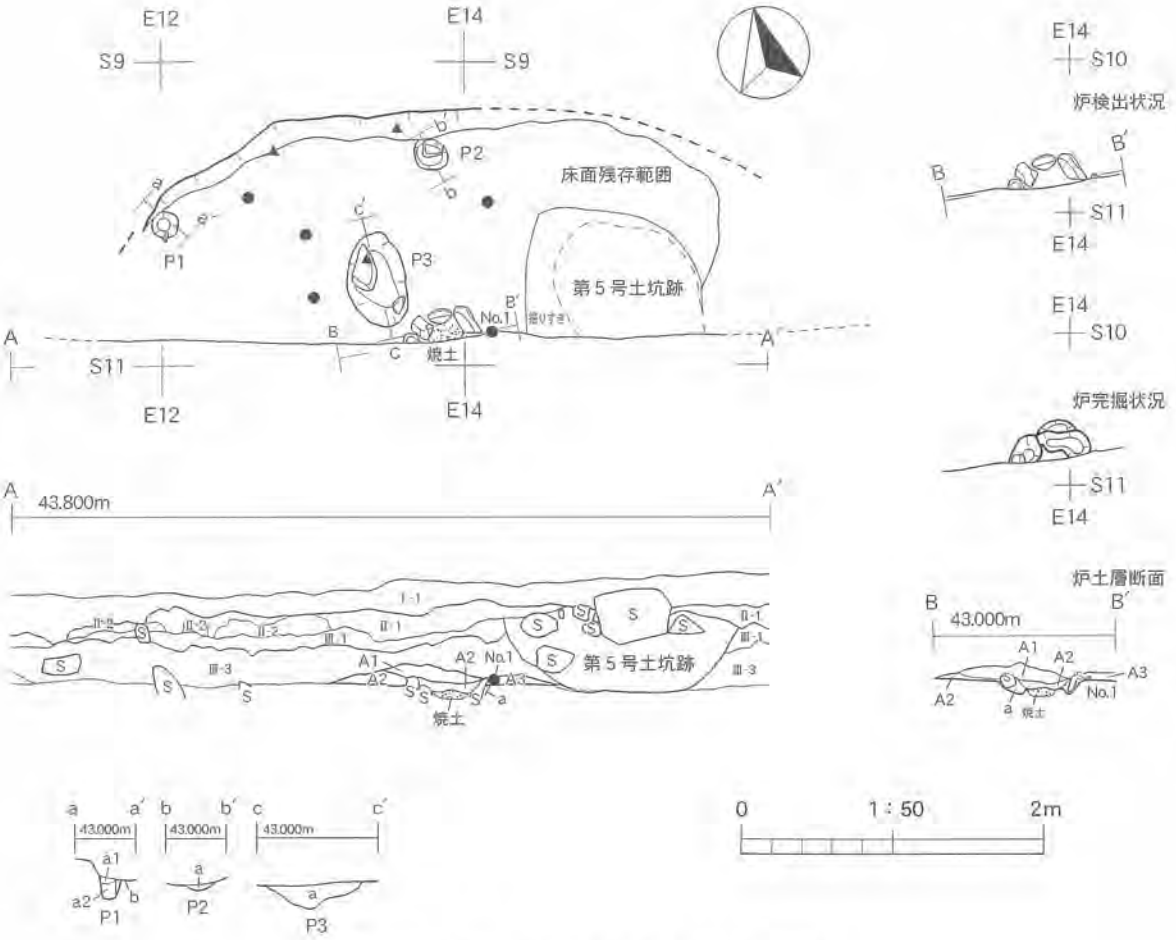
図示できた出土遺物はわずかである。第12図１は炉の横から出土した浅鉢口縁部破片である。口縁部下でいったん内湾し、口縁部は大きく外に開く。二個一組の突起がある。口端には一条の沈線が引かれているが、二つの突起頂点と頂点間にはない。口縁部下にはヘラ描き沈線で変形工字文が施文され、破片下端にも横方向の沈線が巡らされている。主体となる沈線文の接点に粘土瘤の貼付はないが、沈線末端で工具を器面から引き抜かず止めることで粘土が盛り上がり、粘土瘤のように作られている。また、内面の稜にあたる部分にも沈線がめぐらされている。内外面ともに削りの痕跡を残すが、丁寧に研磨され光沢がある。色調は内・外面ともに橙色から褐色、断面は中央が灰色を呈す。胎土の粒子は細かく、そろっている。縄文晩期大洞A式に属する浅鉢と思われる。

２は繊維を含んだ縄文土器の胴部破片である。複節LRLの縄文を縦回転施文している。繊維の混入は多く、器表にも束状の抜け痕が観察される。外面は鈍い黄橙色、内面は暗褐色、断面は中央から内面にかけて灰白色である。なお、断面の一部に炭化物が付着している。縄文前期前葉の所産である。

３はスクレイパーと思われる。石質は暗灰色緻密不透明で、白色小粒子がみられる。刃部の反対側側面に自然面を残す。主要剥離のバルブ部分のみ両面から刃部を調整している。刃部の一部に微

細剝離が見られる。これらの他に、床面及び床面直上から、土器片4点、フレーク、チップ3点が出土した。

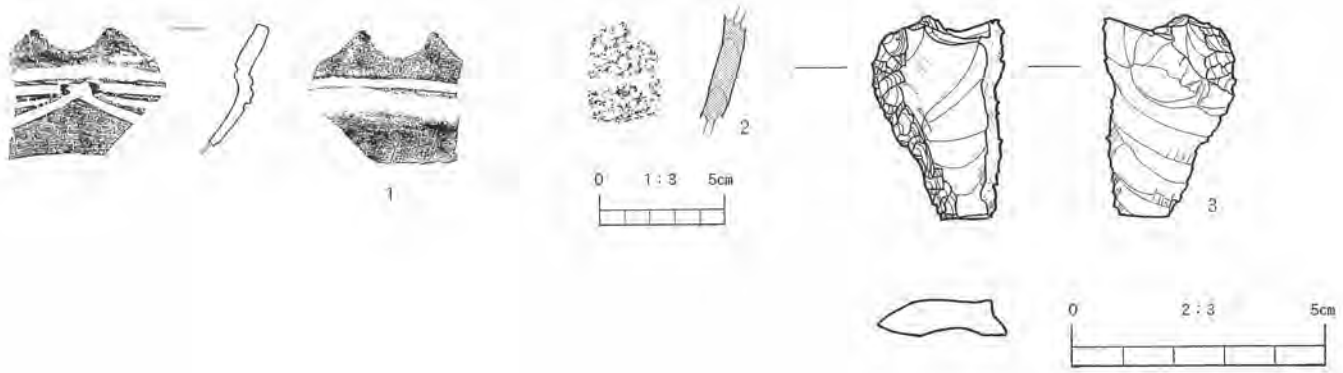
遺構の時期については、床面に接して出土した遺物第12図1の時期、縄文時代晩期後半以降と考えられる。



第11図　第2号竪穴住居跡　平・断面図

層名		基本土	混入土	硬度	密度	粘性	混入物
竪穴埋土	A1	10YR2/2黒褐色シルト質埴壌土	10YR5/8(焼土)黄褐色シルト質壌土粒状・ブロック状15%	軟	疎～中	なし	炭化物、10YR7/6明黄褐色(火山灰)ブロック
竪穴埋土	A2	10YR1.7/1黒色シルト質埴壌土	10YR3/2黒褐色シルト質壌土粒状15%	中～軟	中～密	中	炭化材多い。
竪穴埋土	A3	10YR2/2黒褐色土シルト質埴壌土		中～硬	密～中	中	
炉石掘りかた埋土	a	10YR2/2黒褐色土シルト質埴壌土	10YR3/2黒褐色シルト質埴壌土ブロック状10%	軟	中～密	ややあり	
P1	a1	10YR2/2黒褐色土シルト質埴土		軟～中	中	弱	
P1	a2	10YR2/2黒褐色土シルト質埴壌土	10YR2/3黒褐色シルト質壌土粒状15%	軟～中	中	なし	
P1	b	10YR2/3黒褐色シルト質埴壌土		中	中	弱	
P2	a	10YR2/3黒褐色シルト質埴壌土	10YR2/2黒褐色土シルト質埴壌土粒状7%	中～軟	中	弱	炭化物粒子微量
P3	a	10YR2/1黒色シルト質埴壌土	10YR5/6黄褐色シルト質壌土ブロック状1%・10YR3/2黒褐色シルト質壌土粒状10%	軟～中	中	ややあり	炭化物粒子多い。

第4表　第2号竪穴住居跡　土層注記表



第12図　第2号竪穴住居跡　出土遺物

図版番号	写真図版	出土層位	種　別	備　　考	図版番号	写真図版	出土層位	種　別	備　　考
第12図	12-1-1	床面（炉横）	縄文土器		第12図	12-1-3	pit3埋土	スクレイパー	
第12図	12-1-2	pit3埋土	縄文土器	繊維混入					

第5表　第2号竪穴住居跡　出土遺物一覧表

2．土坑跡

第１号土坑跡（第９図）

A3区南西隅で、第１号竪穴住居跡の精査中に検出された。検出面は基本層序Ⅳ層である。平面はいびつな楕円形で、長軸50cm、短軸35cmほどである。深さは6cmほど、底面は皿状である。埋土は一層で、黒褐色シルト質壌土である。図示出来る遺物はない。時期・性格は不明である。

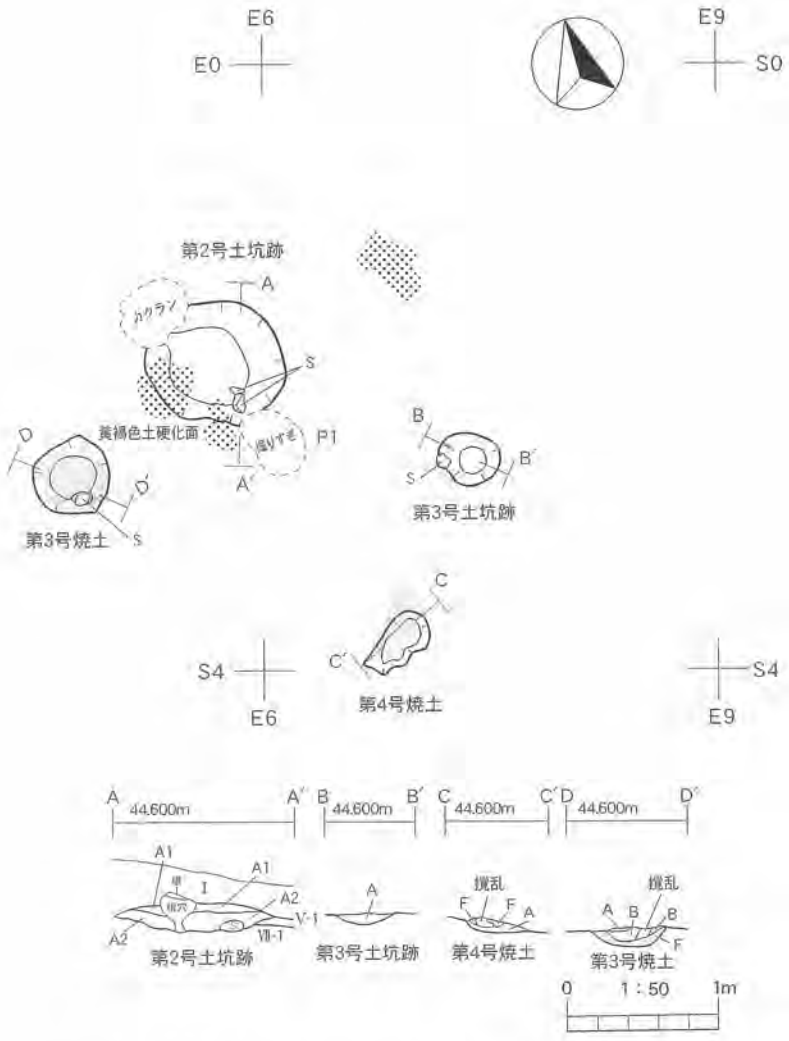
第２号土坑跡（第13図）

A1区とB1区にまたがって、表土直下で検出された。プランは不整円形で、直径は約90cmを計る。表土直下で周囲に焼土の散らばりが検出されており、上面でも多量の炭化材を含んでいるのが観察された。埋土は上記のように炭化材が多く含まれるA1層と、明黄褐色シルト質壌土ブロックを混入する暗褐色土のA2層に分層される。土坑の縁が特に硬く硬化していた。底面付近に縄文土器と思われるやや大きい地文のみの土器片が存在したが、非常に脆く取り上げ時に細かく崩れてしまった。
本遺構の時期、性格はともに不明である。

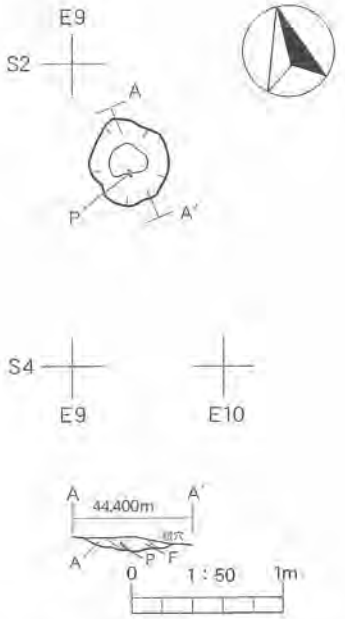
なお、平面図に図示した硬化面は第2号土坑を截ち割った際に確認したものであるが、第2号土坑跡との関連は不明である。

第3号土坑跡（第13図）

B1区南西隅の基本層序Ⅶ層上で検出した。長軸40cm、短軸35cmほどの卵形の平面形である。底面は皿状で浅い。埋土は一層で、黒色シルト質壌土に炭化物を含む。土坑内に角礫が入っていた。遺物はなく、本遺構の時期・性格は不明である。



第13図　第2号・3号土坑跡、第3号・4号焼土　平・断面図



第14図　第1号焼土　平・断面図

遺構名	位置	層名	基本土	混入土	硬度	密度	粘性	混入物
第1号土坑	A3区	A	10YR2/3黒褐色シルト質壌土	10YR2/2黒褐色シルト質壌土ブロック状5%	中	中		
第2号土坑	A1区	A1	10YR2/2黒褐色シルト質壌土		中～硬	中	なし	炭化材多量、花崗岩粒子多い。
		A2	10YR3/3暗褐色シルト質壌土	10YR6/8明黄褐色シルト質壌土ブロック状7%	硬	密	なし	炭化物
第3号土坑	B1区	A	10YR2/2黒褐色シルト質壌土	10YR1.7/1黒色シルト質壌土ブロック状30%	軟～中	中～疎	なし	炭化物粒子・角礫含む。
第4号土坑	B3区	A1	10YR1.7/1黒色シルト質壌土		軟	中	なし	花崗岩粒やや多い。
		A2	10YR2/2黒褐色シルト質壌土	10YR2/1黒色シルト質壌土塊状5%	中～硬	中～密		風化花崗岩礫1個（底面直上）

第6表　第1号～4号土坑跡　土層注記表

遺構名	位置	層名	基本土	混入土	硬度	密度	粘性	混入物
第1号焼土	B1区	F	7.5YR6/8橙色シルト質壌土（焼土）	10YR4/4褐色シルト質埴壌土ブロック状15%	中	中～密	なし	炭化物粒子・土器片
		A	10YR3/2黒褐色シルト質壌土	7.5YR6/8橙色シルト質壌土（焼土)ブロック状30%	中	中	なし	炭化物粒子
第2号焼土	C2区	A	10YR2/2黒褐色シルト質壌土	7.5YR5/8明褐色シルト質壌土(焼土)粒状15%	軟		なし	微細な炭化物
		F	7.5YR5/8明褐色シルト質壌土(焼土)	7.5YR2/2黒褐色シルト質壌土粒状20%	中～硬		なし	
		B	7.5YR2/1黒色シルト質壌土	7.5YR5/8明褐色シルト質壌土(焼土)ブロック状10%	軟		なし	微細な炭化物
第3号焼土	A1区	A	10YR3/2黒褐色シルト質埴壌土	10YR3/3暗褐色シルト質壌土粒状20%	中	中	なし	炭化物粒子
		B	10YR3/3暗褐色	7.5YR4/4褐色シルト質壌土(焼土)粒状20%	軟	中	なし	炭化物粒子
		F	7.5YR5/8明褐色シルト質壌土(焼土)	7.5YR4/4褐色シルト質壌土(焼土)ブロック状30%	中～硬		なし	
第4号焼土	A2区	F	7.5YR5/6明褐色シルト質壌土(焼土)	7.5YR4/4褐色シルト質壌土ブロック状15%	軟	中	なし	炭化物粒子
		A	10YR3/3暗褐色シルト質壌土	7.5YR5/6明褐色シルト質壌土(焼土)粒状3%	中	中	なし	

第7表　第1号～4号焼土　土層注記表

第4号土坑跡（第9図）

Ｂ３区内、第1号竪穴住居跡内床面でプランを検出した。しかし、第1号竪穴住居のセクションベルトにかかっており、その埋土を切っていることから、第1号竪穴住居跡より新しい。記録した第1号竪穴住居跡床面では、直径30cmの円形の平面形である。埋土は1層である。黒褐色シルト質壌土で、やや硬く締まっている。底面は皿状で、角礫が入っていた。

遺構の時期については、第1号竪穴住居跡を切っていることから縄文後期初頭以降である。性格は不明である。

第５号土坑跡（第15・16図）

基本層序Ⅱ層除去中にC3区南東隅で礫が平面的に集中しているのが検出された。調査の結果上面に配石を伴う土坑と判明したものである。掘り込みの検出面は基本層序Ⅲ－1層上面である。一部調査区外にかかっているものの土坑の平面プランは楕円形と思われ、長軸90cm、短軸70cm程度の規模が予想される。

土坑内の埋土は２層に分層でき、配石は上層の上部に配置されていた。個々の石ごとの掘りかたは検出されなかったので、A1層は人為的な堆積であり、石の配置とともに埋められたものと思われる。

石の配置は土坑のプランと比べると一回り小さく、中心が南側に片寄っている。調査区南壁断面で見ると、Ａ１層の上面がやや中高になっているのがわかるが、これは推定される土坑中心部で石が重なっているせいであろう。花崗岩亜角礫のやや大きいものが東西両端に置かれ、北側周縁部の石もやや大きく、縁石状に配置されている。内側にはやや小ぶりな石を詰めている。石を立てたり、意識的に方向をそろえている様子は見られない。上下に積み重ねているので、下端もそろっていない。土坑の深さは検出面から約55cmほどであり、底面は平坦である。

土坑の埋土A1層は黒褐色土で、先に述べたとおり人為堆積と思われる。Ａ2層は黒色土だが暗褐色土を多く混入し、炭化材を多く含む。

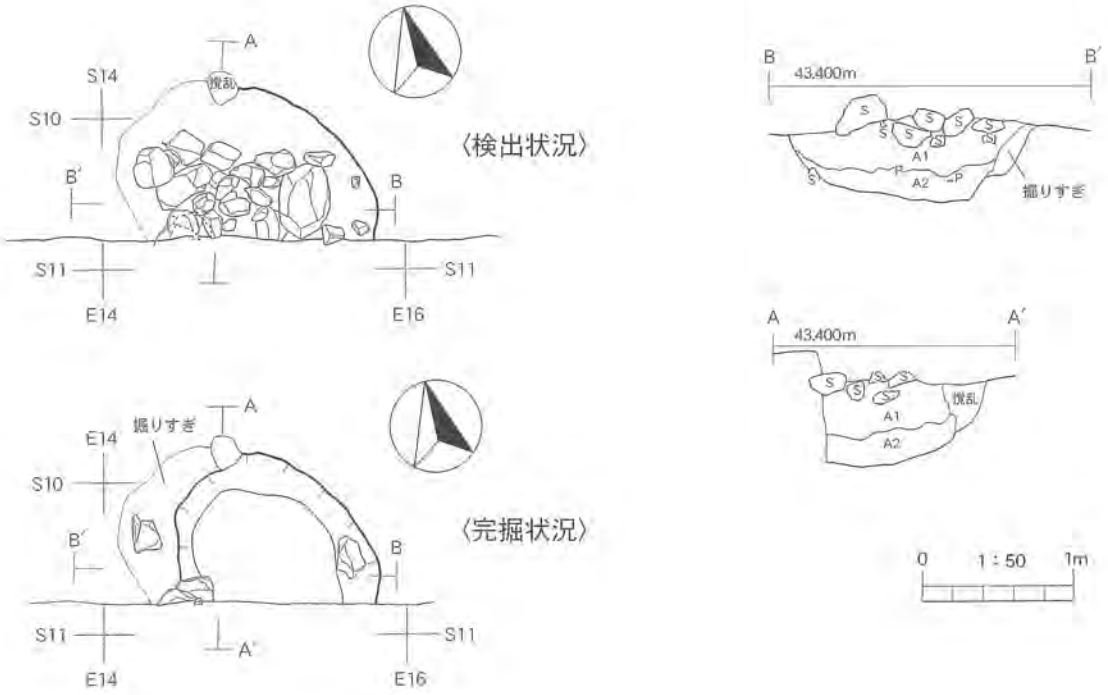
遺物は破片で完形品はない。第16図1はやや直立気味に開く口縁部破片であるが、器形は不明である。平縁で、口縁に並行に３条の沈線が施文されている。以下にも斜め方向の沈線が、２本までは平行に施文されているのがわかる。

内外面ともに削りの痕跡は残すが、丁寧に磨かれて光沢がある。胎土はやや大きい砂粒を含む。内外面ともに橙色、断面の色調に変化は見られない。縄文晩期末から弥生時代の土器と思われる。

２は深鉢くびれ部の破片と思われ、外反している。小片だが上端にRL単節縄文の閉じた末端を横回転施文して横帯状に施文していることから、弥生時代後期の土器片ではないかと思われる。以下では、Rの原体を右巻きに巻いた絡条体で撚糸文を斜め回転施文している。条の間隔は密である。節が細く、節の幅にばらつきが見られることから、0段多縄の可能性がある。外面褐色、内面浅黄橙色、断面に色調の変化は見られない。胎土にはやや粗い砂を含む。

３は埋土下層の遺物と、近接する遺構外基本層序Ⅲ層の土器が接合したものである。底面四角形の土器かとも考えたが、２つ残存する角の一つに、角を斜めに通る貫通孔が残存しており、底面付近にこのような孔を通すことはないのではないかと考えられ、また平坦面が底部であると考えるには外向きに反っていることから、蓋とした。

先述の貫通孔が隣接する２つの角の一方にしかないことから、対角線上の角に貫通孔があり、残りの2角にはなかったものと考えられる。上面の辺も直線ではなくふくらみがあるが、体部にいたっ



第15図　第５号土坑跡　平・断面図

遺構名	層名	基本土	混入土	硬度	密度	粘性	混入物
第5号土坑	A1	10YR2/1シルト質壌土	10YR3/2シルト質壌土粉状２％均一	やや軟	―	―	土器片含む・木炭
	A2	10YR2/1シルト質壌土	10YR3/2シルト質壌土粉状７％均一 10YR5/4砂土10％均一	やや軟	―	―	微量の木炭・土器

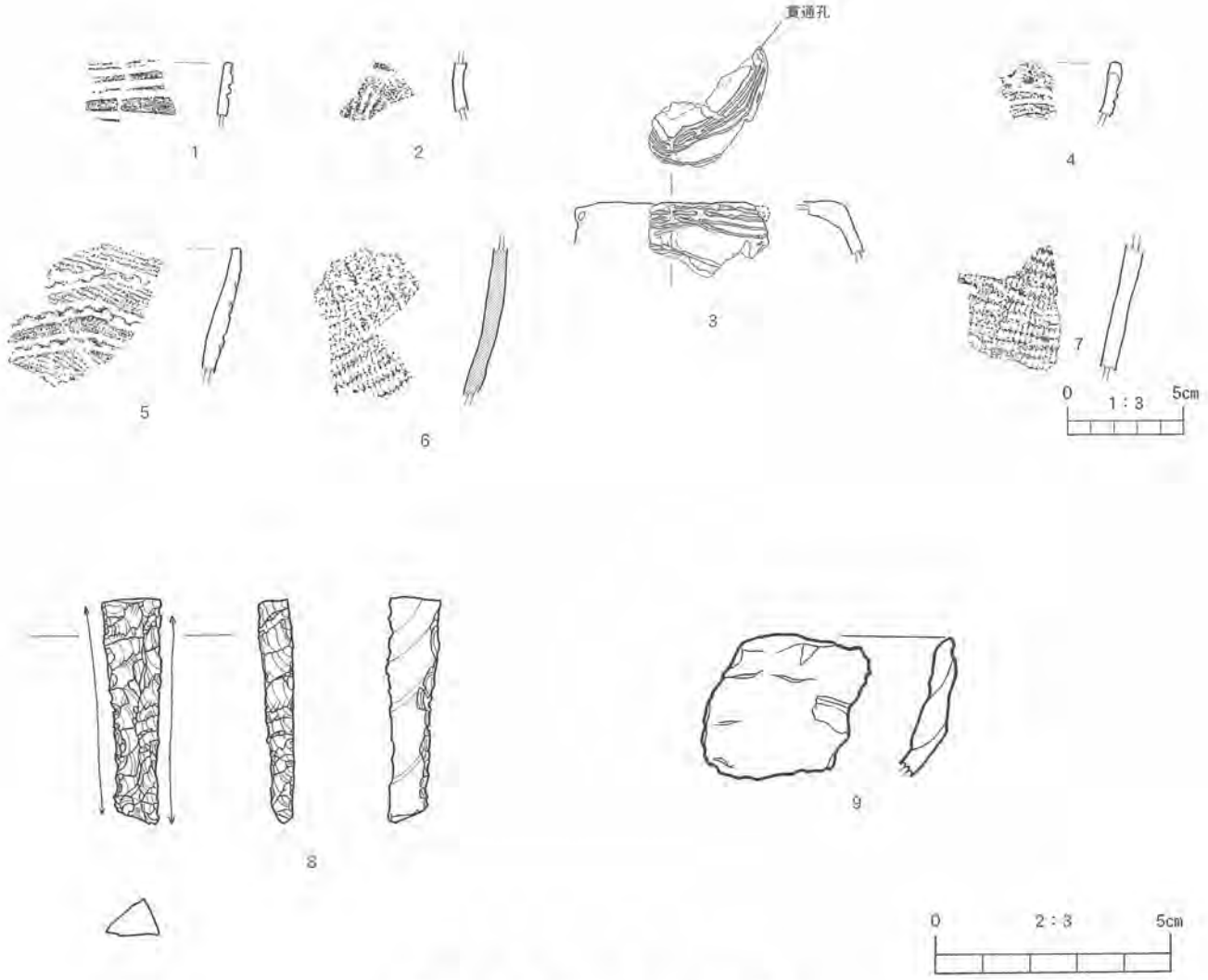
第8表　第５号土坑跡　土層注記表

てさらに膨らみ、平面形は円形に近づく。文様は体部上面に沿って３ないし４条の平行する弧状文が施文される。下端にも沈線の一端が見られるが、施文は浅く、また施文具の先端がささくれており、金釘流の施文になっている。沈線内部や器表のふくらみ部分に縦方向の細かなひび割れが見られるため、かなり乾いた状態で体部にふくらみを加えるように変形させ、施文したと思われる。外面橙色、内面鈍い黄橙色、上面の裏側にあたる部分に焼成時の黒斑が見られる。表面は研磨されているがやや雑である。

４は口縁部破片で、小波状縁である。波頂部は粘土粒を貼り付けて作った痕跡がある。波頂下に下向きの弧線状に3本の沈線が施文されている。口端は角頭状に成形される。粒の大きな砂礫を含む。内・外面ともに鈍い橙色、断面の色調は鈍い黄橙色を呈す。時期不明。

５は波状口縁の深鉢片である。地文として口縁に沿って3条の交互刺突文が見られる。地文はRL単節縄文の斜め回転施文だが、3条目の下では2同様縄文原体の閉じた末端を横回転施文している。また、下端にわずかに残る縄文もしくは撚糸文は、節がやや大きく別の原体のようである。3条の交互

刺突文と地文の関係を見ると、まず口縁部に沿った部分のみに縄文を施文し、以下は無文の状態で交互刺突文を施文している。このとき２条目が縄文の下端付近に施文される。３条目の下に沿って縄文原体の閉じた末端をもって施文する。したがって、２条目と３条目の間には地文がなく、磨消縄文のよ



第16図　第5号土坑跡　出土遺物

図版番号	写真図版	出土層位	種別	備考
第16図1	12-2-1	北半底面+埋土A1層	縄文晩期～弥生	
第16図2	12-2-2	北半底面	弥生土器	弥生時代後期
第16図3	12-2-3	埋土+遺構外B3区東半Ⅲ層上面	弥生土器	蓋
第16図4	12-2-4	埋土A1層		
第16図5	12-2-5	埋土	弥生土器	交互刺突文
第16図6	12-2-6	埋土	縄文土器	繊維混入
第16図7	12-2-7	埋土A1層	縄文土器	
第16図8	12-2-8	埋土A2層	紡型石錘	ノッチ欠損
第16図9	12-2-9	埋土A1層	ミニチュア土器？	

第９表　第５号土坑跡　出土遺物一覧表

うになっている。交互刺突文の上下の沈線は二本同時に引かれている。刺突は細い円形竹管様の工具による。口端部は角頭状に成形されており、内面は磨かれているが光沢はない。外面は一方が暗褐色でもう一方が鈍い黄橙色、内面はともに鈍い黄橙色である。断面は中央が灰白色を呈す。弥生時代後期の土器である。

6は繊維の入った縄文土器の胴部破片。結束のない羽状縄文で、上下で施文方向を変えて羽状としたものである。原体は0段多縄のLR単節縄文である。外面は橙色、内面は鈍い黄橙色～褐色、断面は中央部が白っぽく両端はそれぞれの器表と同じ色調である。

7は縄文土器の胴部破片で、LR縄文を斜め～横回転で施文している。胎土に絹糸状光沢を持つ岩石の粒子を多量に含み、内面では横方向の調整によってその粒子が動いている様子が顕著である。外面は橙色から暗褐色、内面は褐色～暗褐色で断面中央部は灰色である。断面の一部に炭化物が付着している。

8は縦型石匙の刃部と思われる。石質は黒褐色不透明で緻密である。正面は全面調整されている。左側のみ裏面からも浅く調整されている。右側の左右両側とも微細剥離がみられるが、左側のものが押圧剥離の稜をつぶすような形になっているのに対し、右側のほうはより小さい剥離でそこまでに至っていない。双方とも先端近くで著しい。

9はミニチュア土器、もしくは土製品と思われる。紐作りで作られているが粘土紐の接合は弱く、表面も指頭痕などが残っている。内外面ともに鈍い黄橙色で、焼成時の薄い黒斑が見られる。時期は不明である。

以上の遺物を見ると、弥生土器が多い。底面から弥生時代後期の土器片が出土していること、第2号竪穴住居跡との先後関係から、第5号土坑は弥生時代後期に属するものと考えられる。

第6号土坑跡（第17・18図）

第6号土坑跡はA3区で第1号竪穴住居跡の精査中に検出された。第1号住居跡を切っている。上面プランは卵形で長軸120cm、短軸100cm程度、底面はほぼ円形であるが礫層を掘り込んでおり、底面の礫が残っている。底面の径は60cmほど、深さは検出面から55cmほどである。壁は直立気味である。埋土は大きく3層に分かれる。A層は黒褐色シルト質埴壌土で、埋土上面に中央に堆積していた。風化花崗岩粒子を多く含むB層とは対照的であり、ブロック状に黄褐色土を含む。B層は黒褐色シルト質壌土で上層より粒子が粗く6層に分層される。C層は第6号土坑が掘り込まれている礫層起源の土層である。

遺物は3点を図示した。1は繊維を含む縄文土器の口縁部破片である。わずかに外に開く器形と思われる。単節RLの縄文原体を横回転しているが、原体の末端に細い条を巻きつけており、口端部付近には細い条が帯状に施文されている。口端は角頭状に仕上げられている。内外面ともに鈍い黄橙色、断面は灰色である。

2は深鉢の胴部破片である。かなり大形の土器と思われる。LR単節斜縄文が施文されている。外面は鈍い橙色～黄橙色、内面は橙色、断面は中央が灰色を呈す。粗い砂礫を含む。内面は磨いたようだが剥離しており光沢はない。

3はスクレイパーと思われる。側縁の一方に原礫面を残す。原礫面付近は灰白色、礫の内部にあたる側は灰黄褐色で不透明、粒子はやや粗く光沢はない。白色の小粒子が見られる。原礫面の反対側が刃部に加工されている。刃部の角度は急で、微細剥離がみられる。

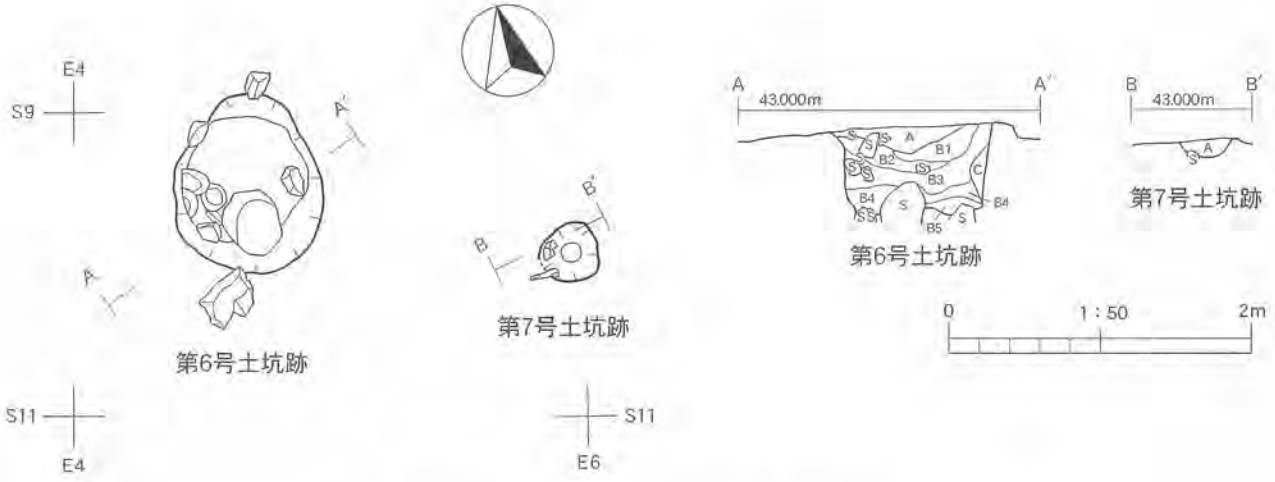
遺物からは時期が不明であるが、第1号住居跡を切っていることから、縄文時代後期初頭以降に属するものと考えられる。

第7号土坑跡（第17図）

第6号土坑の南東側で検出された。検出面は第1号竪穴住居跡の床面より下である。プランはいびつな円形で直径40cm内外、底面は丸底状で検出面からの深さは10cmほどである。埋土は１層で、黒褐色シルト質壌土である。明黄褐色土のブロックが入り、硬い。遺物はない。時期は第１号竪穴住居跡より古いと考えられることから、縄文時代後期初頭以前と思われる。性格は不明である。

第8号土坑跡（第9図）

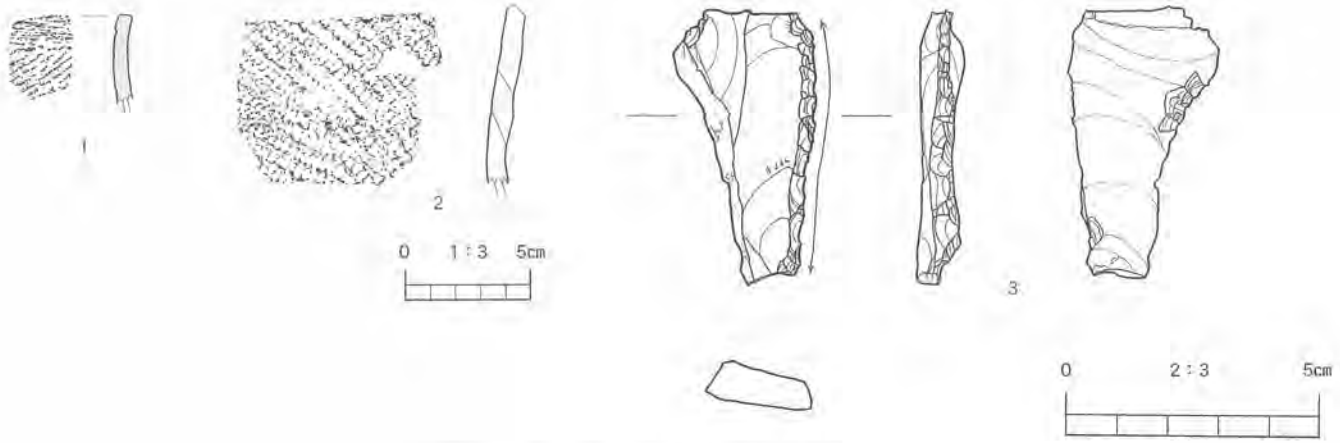
第1号住居跡の調査に伴ってB3区南西隅で検出された。調査区南壁にかかっている。検出面は基本層序Ⅶ層上面である。平面形は不整楕円形である。埋土は1層で、黒褐色土に暗褐色土を混入する。直径50cm、深さは検出面から12cmほどである。遺物は無く、時期・性格ともに不明である。



第17図　第6号・7号土坑跡　平・断面図

遺構名	層名	基本土	混入土	硬度	密度	粘性	混入物
第6号土坑	A	10YR2/2黒褐色シルト質壌土	10YR5/6黄褐色シルト質壌土ブロック状10%	軟～中	中～密	ややあり	炭化物。花崗岩粒子少ない
	B1	10YR2/2黒褐色シルト質壌土	10YR3/2黒褐色シルト質壌土粒状10%	軟	中～疎	弱	花崗岩粒やや多い。
	B2	10YR2/3黒褐色シルト質壌土	10YR2/2黒褐色シルト質壌土粒状7%	中	中	弱	炭化物、花崗岩粒上層より少ない。
	B3	10YR2/2黒褐色シルト質壌土	10YR3/2黒褐色シルト質壌土粒状20%	中	中	弱	炭化物多い。
	B4	10YR2/2黒褐色シルト質壌土	10YR7/4にぶい黄橙色砂土粒状20%	軟	中～疎	なし	基盤の土(礫層)を含む
	B5	10YR5/6黄褐色砂土	10YR3/2黒褐色シルト質壌土粒状7%	軟	中	なし	
	C	10YR7/4にぶい黄橙色砂土	10YR2/3黒褐色シルト質壌土粒状10%	軟	中	なし	
第7号土坑	A	10YR2/3黒褐色シルト質壌土	10YR6/6明黄褐色シルト質壌土ブロック状10%	中～硬	中～疎	なし	炭化物・貼床土ブロック

第10表　第6号・7号土坑跡　土層注記表



第18図　第6号土坑跡　出土遺物

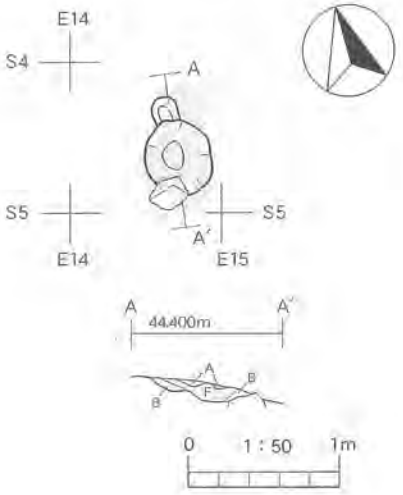
図版番号	写真図版	出土層位	器種	備考	図版番号	写真図版	出土層位	器種	備考
第18図1	13-1-1	埋土B4・B5層	縄文土器	繊維混入	第18図3	13-1-3	埋土B4・B5層	スクレイパー	
第18図2	13-1-2	埋土B4・B5層	縄文土器						

第11表　第6号土坑跡　出土遺物一覧表

3．焼土

第1号焼土（第14図）

B1区中央やや南よりで検出した。検出面は基本層序V層上面である。焼土の広がりを記録し落としたため、平面図中に記載できない。焼土の広がりは楕円形で、厚さは10cmほどであった。焼土中に炭化物粒子と土器片を含んでいた。A層は焼土を多く含む黒褐色土で、A層の中央に焼土F層がレンズ状に堆積している状況だった。F層・A層ともに硬化しておらず、焼土は浅いくぼみに投棄されたものと思われる。先述したとおり縄文土器片が出土しているが、小片で時期は不明である。



第19図　第2号焼土　平・断面図

第2号焼土（第19図）

C2区北西隅、基本層序Ⅲ層上面で検出した。焼土の上面は南北に長く不整なプランであった。検出後、上面を削りすぎたため平面図と断面図で焼土の範囲が異なっている。埋土は3層に分かれる。A層は黒褐色土に焼土が混入していた。F層が焼土で、上層よりやや硬いが黒褐色土を粒状に含んでいる。B層は黒色土で、焼土をブロック状に混入しており軟質であった。このような焼土の状況から、第2号焼土も第1号焼土同様、浅いくぼみに投棄されたものと思われる。時期、性格ともに不明である。

第3号焼土（第13図）

A1区の南東で検出された。試掘調査の時から検出されていた焼土で、検出面は基本層序Ⅴ層上面である。周辺の土壌は炭化材を多く混入していた。

焼土は検出面で不整円形のプランであった。南北におよそ40cm程度の規模である。埋土は3層に分かれる。A層は焼土上に乗っていた黒褐色土である。B層は焼土混じり暗褐色土である。F層が焼土で、上面ほど硬く焼土化の度合いが強く、現地性の焼土であると考えられる。これに伴う遺物はなく、遺構の時期・性格ともに不明である。

第4号焼土（第13図）

A2区南西、BB'ベルト除去中にベルト内から検出した焼土である。検出面は表土直下、基本層序Ⅴ層上面である。検出時は細長く不整なプランとして検出された。焼土層であるF層は軟らかく、層の底面も不整であった。F層の下のA層とした層は、微量の焼土を含む暗褐色土であった。周辺のⅤ層が黒色であるため色調の違いが目立つが、焼土の状態から考えて現地性はなく、投棄された焼土と考えられる。図示しなかったが、繊維の入った縄文土器片が出土している。0段多縄のLRおよびRLの縄文原体用いた羽状縄文を、縦位施文する口縁部破片である。口端は角頭状に成形されている。本遺構の時期、性格はともに不明である。

他に、B2区東北隅に焼土が検出された。南北最大65cm、東西170cmほどの規模の大きい焼土で、基本層序Ⅴ層上面で検出された。調査区AA'ベルトの南脇であったが、上面からの掘り込みは検出されなかったので、配石遺構と同一の面に形成されたものと思われる。範囲は配石遺構平面図（第26図）におさめた。

4．埋設土器遺構

第1号埋設土器遺構（第20図・第21図）

C1区南側で検出された。検出面はⅢ層上面である。土器は横位に埋設されていた。掘り方および土器ともに上半部は残存していない。掘り込みは長軸120cm、短軸100cm程度の楕円形で、土器より一回り大きく、底面も平坦ではなく丸底状である。残存する深さは検出面から最大で30cmである。埋土は土器の内部を２層、掘りかた埋土を１層に分層した。

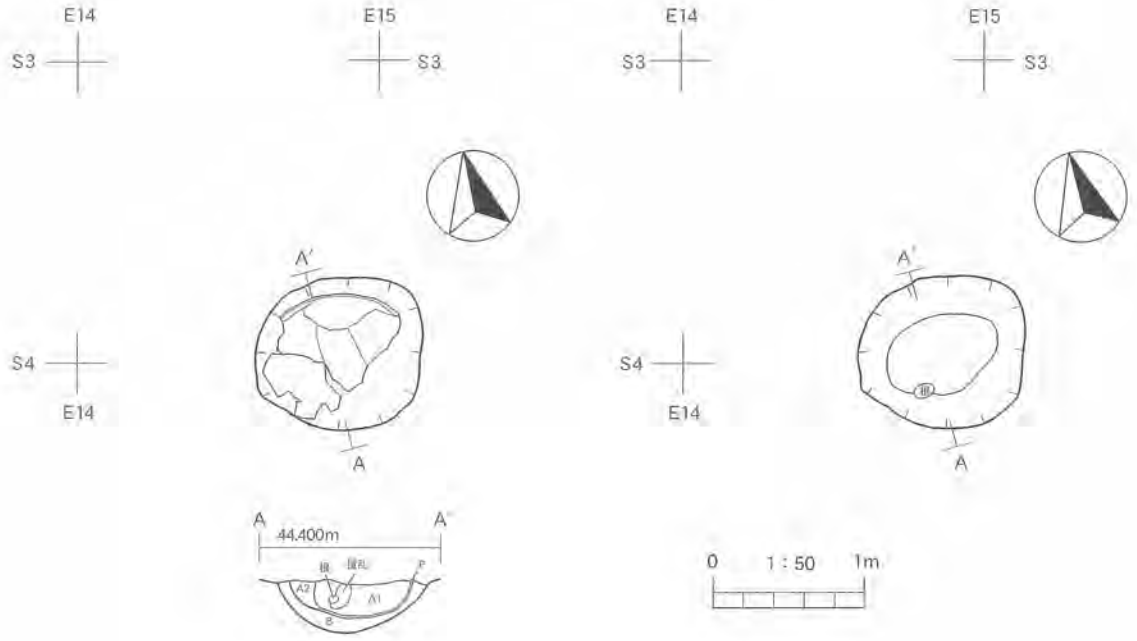
A1層・A2層は黒褐色土で、A2層は炭化物粒子を含む。掘りかた埋土のB層は黒色土である。周辺の基本層序に比べると花崗岩粒子が際立って少ない。

土器内から遺物は検出されていない。

第21図1が埋設土器である。胴部最大径は復元で41cmを測る。器高は残存部で46.5cmである。胴部中位に最大径を持つ大型の壺形土器である。上端は口縁部に近いと思われるが残っていない。

頸部でいったんゆるくすぼまり、直立気味に立ち上がる。

口縁部直下と肩部に、RL単節の縄文原体の閉じた端を横回転させて胴部を区画し、そのあとで胴部に撚糸文（Rの縄を右巻きに軸に巻きつけた絡条体、縦回転施文）を充填するように施文している。そのため所々で横回転施文の縄文を撚糸文が切っている。撚糸文は節が整っており、条の間隔も広くないので一見縄文のように見える。口縁部付近は磨かれて無文のようだが、一部撚糸文が施文されていたのが残っている。



第20図　第1号埋設土器遺構　平断面図

遺構名	層名	基本土	混入土	硬度	密度	粘性	混入物
埋設土器	A1	10YR2/2黒褐色シルト質壌土	10YR3/2黒褐色シルト質壌土粒状7%	軟	中	弱	
	A2	10YR3/2黒褐色シルト質壌土	10YR2/2黒褐色シルト質壌土粒状20%	軟	中	なし	炭化物粒子
	B	10YR1.7/1黒色シルト質壌土	10YR2/2黒褐色シルト質壌土粒状20%	軟	中	なし	炭化物粒子含む、花崗岩粒子少ない。

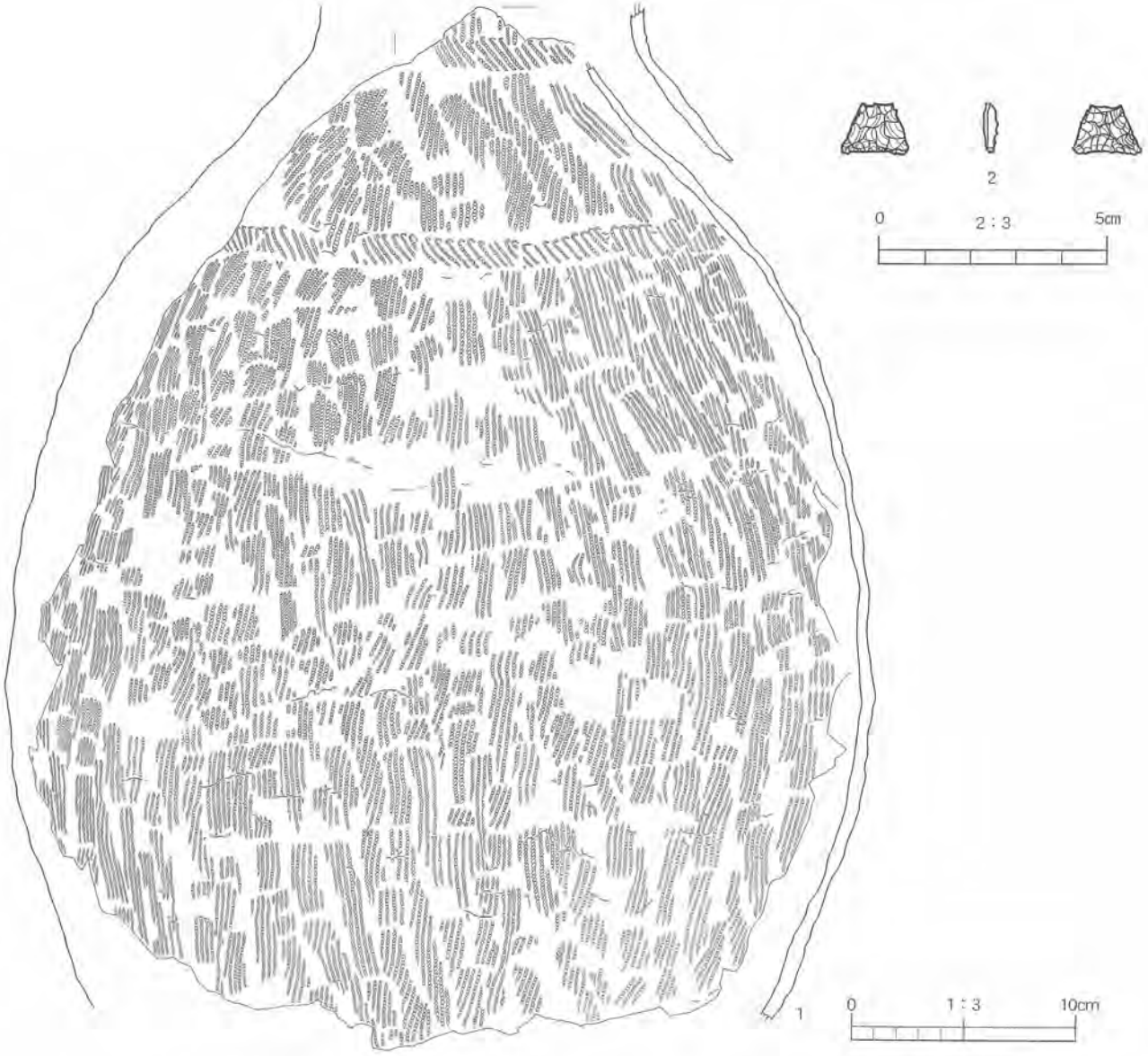
第12表　第1号埋設土器遺構土層注記表

器壁は大変薄い。最も薄い部分は0.3cmほどの厚みである。大型でありながら薄い土器であり、器表の凹凸が激しく、器体にゆがみがある。とりわけ肩部から上では、部分によりかなり厚さが違うため、器形の復元に用いたラインのほかに口縁部の最上端が残っている部分を並べて図示した。

胴部には粘土紐の接合痕のほかに、ここから派生するような小さなひび割れが散見される。また、土器が大きくくぼんでいる部分にもこのような細かなひび割れが見られる。これらは器表のみのひび割れで、乾燥が進んだ粘土を無理に変形したときに生じるものと考えられ、胎土がやや乾燥気味になってから、成形や、器形に影響を与えるような強い調整が行われたものと思われる。

土器は外面では肩部以上と下端部が橙色、肩部以下が褐色～暗褐色で、最大径付近を中心に2ヵ所明黄褐色の部分がある。この明黄褐色部分中には焼成時黒斑のような青灰色斑がある。肩部から胴部には煤が付着している。内面は上半部が鈍い黄橙色、下半が橙色であるが、外面の明黄褐色部分に対応するような形で暗褐色部分がある。断面は中央が灰白色になる部分も見られる。これらの特徴を見ると、この土器に付着している煤は二次過熱によるものというよりは焼成時の煤切れ不良によるのではないかと思われる。

内面下部は磨きの痕跡が残っているが、胴部最大径付近から上については磨いていない。外面は撚糸文の施文に先立って磨いたようで、光沢がある。



図版番号	写真図版	出土層位	器　種	備　　考	図版番号	写真図版	出土層位	器　種	備　　考
第21図1	14-1		弥生土器	赤穴式	第21図2	14-2	埋土	石鏃	

第21図　第1号埋設土器遺構　出土遺物

縄文の閉じた端部分を横方向の帯状に施文する特徴から、弥生時代後期の赤穴式期のものと考えられる。

第21図２は埋設土器の掘りかたから出土した石鏃である。平基無茎鏃で、先端部を大きく欠損する。石質は暗オリーブ灰色不透明で粒子はやや粗く光沢は少ない。白色の小粒子が見られる。

5．硬化面

今回の調査では、表土直下から焼土や遺物が出土し、土壌の硬化した面などが検出された。柱穴や炉などは確認できなかったが、遺構が削平されたものである可能性が考えられるので、記述する。

それらは、表土が薄かった調査区北側を中心に検出された。

B1区硬化面（第22図・23図）

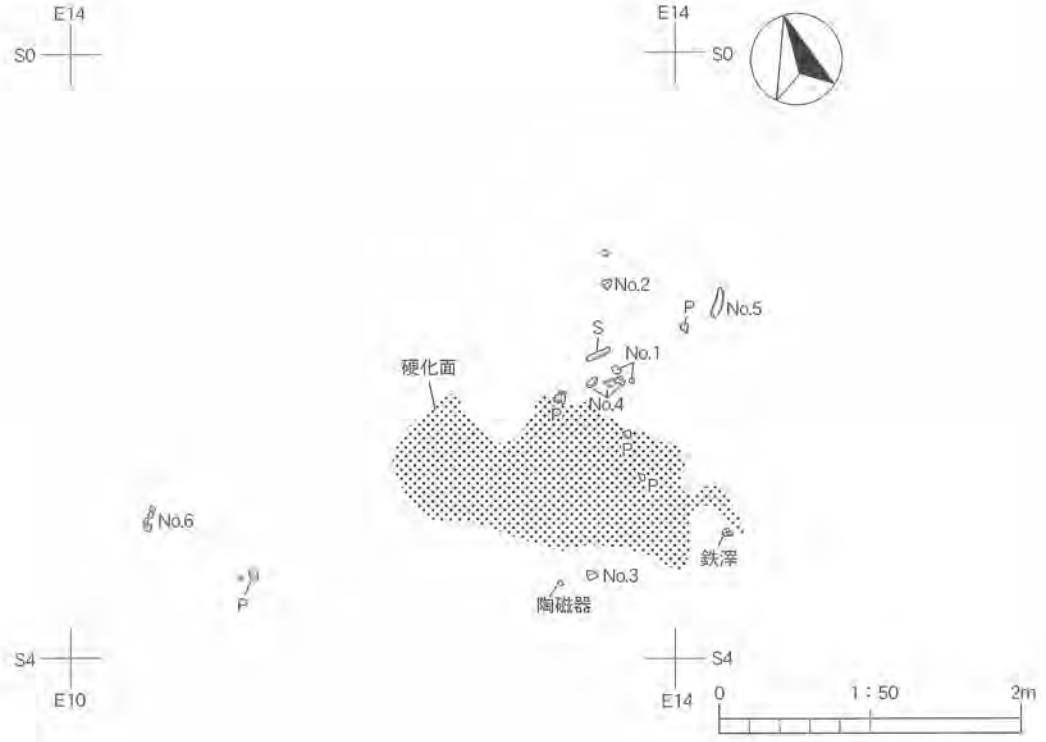
B1区中央付近で検出した。表土直下で、周辺が基本層序Ⅶ層であるのに対し、黒褐色で硬く、土師器片を多く出土したことから遺物の出土状況とともに記録した。黒褐色シルト質壌土で、花崗岩粒子は少なく炭化物粒子を含んでいた。第１号焼土の一部がこの面で見えていたが、硬化面のほうが上に存在する。周辺に立ち上がりや柱穴は確認できなかった。この硬化面の出土遺物は図23にまとめたが、これ以外の出土土器は土師器と繊維の入った縄文土器である。しかし、表土直下であったため埋土がなく、ここにとりあげた遺物が全てこの硬化面にともなうかどうかは不明である。

他に、鉄滓が一点出土している。鉄滓は試掘調査の際にも7点出土しており、本調査ではこれを含め3点が出土した。流動滓が多く、炉壁や鉄塊系遺物も含む。B1区硬化面付近で検出したものは流動滓であった。

第22図1は土師器甕の胴部である。外面は摩滅しているが、縦方向のハケメが見られる。

内面の調整は破片上半が横方向のナデ、下半が横～斜め方向のハケメである。ハケメの幅は2cm弱、その間に15本程度の筋が見える、目の細かいハケメである。外面は鈍い黄橙色、内面は灰黄褐色、胎土の粒子は細かいが、径5mm以上に及ぶような大きな砂礫を含む。

２は土師器の口縁部で、屈曲の度合いから考えて球胴甕と考えられる。内外面とも口縁部は横ナデである。外面には縦方向のヘラケズリが見られる。内面は頸部屈曲のやや下に、横方向の粗いハケメが見られる。頸部の屈曲のあたりはかなり器壁が厚く、以下では徐々に薄くなる。また、口縁部は頸部に比べるとかなり薄い。内外面ともに鈍い黄橙色、口縁部内面は焼成時の黒斑が見られる。1同様胎土は粒子が細かいが、砂礫がやや多い。

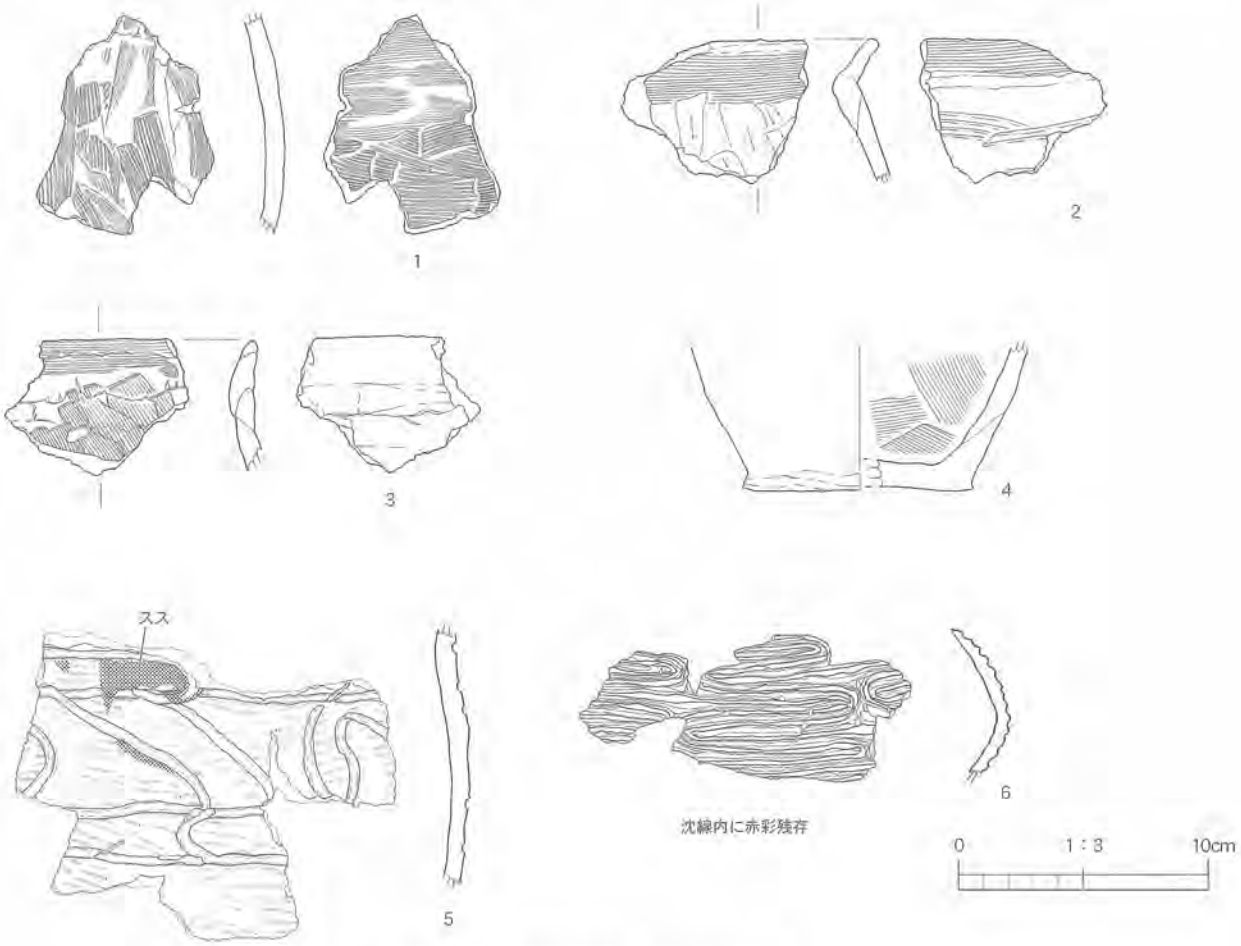


第22図　B1区硬化面　平面図

3も土師器の口縁部。口頸部の屈曲は弱い。口縁部上端は横ナデ、以下には斜め方向の強いナデが見られる。内面は摩滅していて調整がはっきりしない。粘土紐の積み上げ痕は十分消えておらず、粘土紐の垂直方向に表面的な細かいひび割れがあることから、乾燥の進んだ状態で成形したと思われる。口縁部は内側に幅3.2cmにも及ぶ平たい粘土紐を貼り付けて作っている。胎土の粒子はやや粗く、大きな砂礫（長さ0.7cmほどのものもある）が多い。色調は外面口端部が鈍い橙色、以下が褐灰色、内面は鈍い黄褐色で煤が付着している。

4は土師器の底部である。外面に顕著な調整は見られず、胴部内面にナデが見られる。底部は外縁に粘土が足されているらしく、わずかに中高になっており、糸切り痕や木葉痕はない。周縁部はやや外に張り出している。内外面共に鈍い黄褐色、胴部外面にわずかに煤が付着している。胎土の粒子はやや粗く、小さな間隙が多い。大きな砂礫をかなり多く含む。以上の土師器は、特徴から見て平安時代に属するものと考えられる。

5は縄文土器の深鉢胴部破片である。この個体はほぼ同地点の基本層序Ⅴ層、Ⅶ層上面から出土した破片と接合しており、動いている可能性がある。断面形態からみて胴部最大径を上半に持



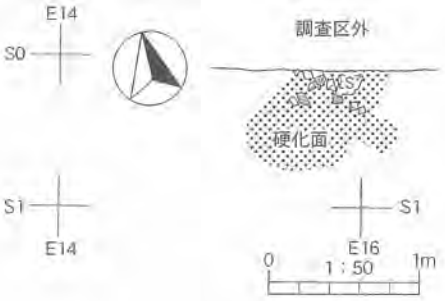
第23図　B1区硬化面　出土遺物

図版番号	写真図版	器　種	備　　考	図版番号	写真図版	器　種	備　　考
第23図1	15-1-1	土師器	表土の遺物と接合	第23図4	15-1-4	土師器	
第23図2	15-1-2	土師器		第23図5	15-1-5	縄文	同一地点のⅤ層・Ⅶ層上面の遺物と接合
第23図3	15-1-3	土師器		第23図6	15-1-6	縄文	赤彩あり。同一地点のⅤ層の遺物と接合

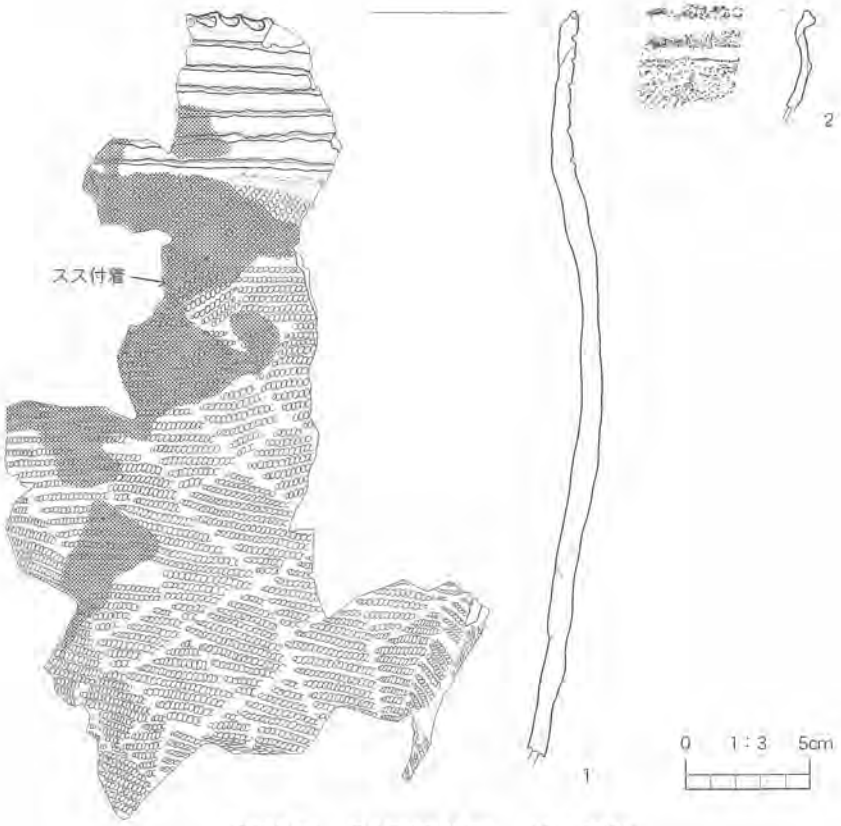
第14表　B1区硬化面　出土遺物一覧表

ち、頸部でわずかにくびれる器形と思われる。地文としてLの無節縄文が斜め回転施文されており、上下を2本の沈線で区画してその間に入組み状の沈線文が横位に展開する。この二本一組の区画沈線は単なる平行な沈線ではなく、細長い横倒しのU字状に施文したものが横に連結されているものであり、縄文後期初頭の土器によく見られる。この個体では、入組み状沈線文の末端が上下の区画沈線に接する部分にこの横倒しU字状部分がくるように施文されている。外面は褐色、内面は鈍い橙色で、外面には炭化物が付着する。胎土は砂礫が多い。内面は丁寧に磨かれ光沢がある。

6は硬化面からやや離れて出土している。縄文時代晩期大洞A式期の壺の肩部と思われる。箆描き流水文状の沈線を施文し、上下に重畳させることで工字文を描く。沈線は内部まで磨かれ、浮き彫り状になっている部分が文様として目立つ。特に文様の接点では沈線部分が三角形状に広く磨かれるため、工字文の印象を強めている。外面は丁寧に磨かれ、沈線部分には赤彩が残る。一方、内面は肩部の張り出し以下では平滑に仕上げられているものの、以上では粘土紐のつなぎ目をなでつけた痕跡を残す。かなり胎土が軟らかい状態で撫で付けたと思われる。外面は褐色、内面は鈍い褐色である。胎土は細かく、砂礫を含まない。



第24図　C1区硬化面　平面図



第25図　C1区硬化面　出土遺物

図版番号	写真図版	器　種	備　　考	図版番号	写真図版	器　種	備　　考
第25図1	13-2-1	縄文土器	同地点の表土、Ⅳ層の遺物と接合	第25図2	13-2-2	縄文土器	

第15表　C1区硬化面　出土遺物一覧表

C1区硬化面（第24図・25図）

C1区の北端で検出した。基本層序Ⅰ層を除去すると厚さ5cm前後の黒褐色壌土があり、ややしまっていた。調査区北壁で観察すると、この黒褐色土の下面が硬化面となっており、黒褐色土から硬化面にかけて縄文晩期土器が調査区北壁にかかる形で出土した。硬化面の下は基本層序Ⅳ-3層である。このため、この硬化面と上部の黒褐色土層は遺構ではないかと考えたが、C1区中央付近に杉の根株があったこともあり、調査区内では黒褐色土の広がりが面的に捉えられず、壁の立ち上がりや柱穴などは検出できなかった。

第25図１はこの硬化面上で出土した土器である。先述したとおり残りは調査区外に伸びていると思われる。縄文晩期の深鉢で、胴部上半に最大径を持ち、少しすぼまってから口縁に至り直立気味に立ち上がる器形である。口端部は内削ぎ状に成形し、斜めに刻み目をつける。刻み目が斜め方向であることで、口端部が内面側・外面側に出入りし、上面から見ると波状に見える。以下には6本の細い平行沈線が巡る。肩部以下は地文としてLR単節縄文が施文される。口縁部の文様帯沿いは横回転しているが、以下は斜め回転施文している。施文順序は胴部の斜め回転施文が口縁部文様帯沿いの横回転施文に先立つ。口縁部沿いでは、縄文原体の閉じた末端部分が回転施文されている。外面は鈍い浅黄橙色から鈍い黄褐色、口縁部は比較的白味が強く、肩部に炭化物が付着し、胴部最大径より下に横に巡る形で褐色を呈する部分がある。内面上半は鈍い浅黄橙色、下半は暗褐色であり、内面は磨いたというよりは丁寧になでられている。胎土は砂粒をやや多く含み、雲母がやや多いようである。同一個体の接合しない破片がいくつかあり、記録して取り上げたものの他に、C1区の表土・基本層序Ⅳ層から出土した破片とも接合している。

２は鉢か台付き鉢と思われる口縁部片である。頸部下に最大径を持ち、口縁部は外に開いている。破片やや左寄りの口端部には、小さな二個一対の突起がつけられている。頸部はよく磨かれており、上下に沈線が引かれているが、磨きのために沈線の稜が不明瞭になっている。胴部にはLRの縄文が横回転施文されている。縄文晩期後葉の土器と思われる。

６．配石遺構（第26～36図）

配石遺構は基本層序Ⅲ層を掘り下げる過程で、B3区でまず検出された。試掘調査区でも花崗岩礫が一部見えていたが、これを掘り下げると花崗岩礫が人為的に配列された様子が明らかになった。B3区の西側では礫が環状に並べられていた。また、この環状の配石に北側で接した石の列は南西に向かって緩いカーブを描きながら伸びていることが判明した。

第26図に配石の平面図を示した。土層観察用ベルトは、検出面で単位をなすと思われた石組みを縦断するライン、もしくはそれら相互の関係を探るべく石組み間を横断するラインで設定した。

掘り下げるにしたがい、列石状の部分は石を上下に積み重ねて作っているような状況であることが判明した。配石を作るにあたり、斜面上側を大きくカットし、斜面下側は配石遺構西側では立ち上がるように掘り、以東ではそのまま平坦面をつくるように削平する形で地形を改変している。西側の環状の部分以外では、こうして出来た段差に沿って石を積み上げている。ところによってはあまりにも石が多く入っていたので、土層を記録できないところもあった。重なった石は面的に分けて捉えられる状況になかったので、平面図にはすべての石の輪郭を重ねて示した。また、断面図で層の境界を拾えなかった部分は、想定できる範囲で破線で示すのみとした。

配石遺構の石を取りあげ埋土を掘り上げた後も、掘りかた底面をなす基本層序Ⅶ層に埋まっている花崗岩礫が残った(第27図)。これらの礫は配石遺構の堀りかた掘削当時に抜きとられず、そのまま配石に組みこまれたものと思われる。

配石はのちに一部上面が破壊されたようで、上面の石の中には基本層序Ⅲ-3層中に浮いているものがあった。そのような傾向は調査区東側ほど大きい。また、西側の環状の部分のつくりがやや他の部分と異なる。そこで、便宜上配石遺構を土層観察用ベルトI-I'より西側（配石遺構西部)、東側からB3区東端まで（配石遺構中央部)、C3区（配石遺構東部）に分けて記述する。また、遺物についてはまとめて後述する。

配石遺構西部

A3区にわずかにかかり、B3区西側を中心に環状に並んだ配石を中心とする。断面図では第28図J-J'からM-M'およびO-O'がこれにあたる。

上面から観察した様子では、環状の配石は東西にやや長い楕円形で、長軸約4m、短軸3mほどである。この部分を構成する石の大半は、北側を除き大きく扁平な花崗岩礫が多かった。北側の石はやや小さく、立っているものが多かった。

配石の上面は基本層序Ⅰ層を除去した段階で見えていたが、基本層序Ⅲ-3層に覆われていたのでこれを除去したところ、環状部分の内側及びその周辺でやや明るい色調の土(A1層)を検出した。この層を掘り下げると、非常に硬い面を検出した。この硬化面は大半が第1号住居跡の埋土A1層であったが、おおよそOO'ベルトの北側では黒褐色土で焼土粒子を含んでいなかった(A6層)。環状の配石の大半をなす礫は、平坦な面を下にしてこの硬化面の上に接している状態であった。

後述するように、この配石遺構全体は元の地形を大きくカットして作った段差上に作られている。この地形改変は南側では第1号住居跡の埋土を切っており、その立ち上がりは15～20cm程度であった。A6層はその埋土である。

配石の北側部分ではこのA6層中に配石の堀りかたが掘り込まれていた。この掘りかたは南側では20cm前後の立ち上がりがある。底面は平坦に近く、浅い溝状に西から東へ延びる。西端はほぼ配石の西端で丸みをもって終わっており、基本層序Ⅴ層を切っている。掘りかたは北側はほぼ当初の地形改変による立ち上がりで終わっている。

この部分の配石は単独の石に個別の掘りかたを掘って埋めるのではなく、この溝状の掘りかた内に配置しつつ埋め戻されている。このような石の中には、石の長軸方向を立てて埋められたものもある。最大で検出面から40cmほど埋められていたが、そのために構築時には石の上部のごく一部しか見えていなかったものと考えられる。

埋土について、分層は配石遺構全体を通して行ったため、全ての土層が直接の上下関係にあるものではない。そのような場合には埋土内での位置を勘案して層名を割り振った。ここでは配石西部内の埋土についてのみ記述する。

A1層は黒褐色土層だが上下の土層に比べ色調が明るい。環状の配石内及びその周辺で配石の埋土の最上部に位置する。A1'層は黒褐色土層で火山灰を含む。配石北側の最上位の土層であるが、配石の南側には堆積していない。調査区を掘削した範囲内では火山灰を検出しなかったので、火山灰がどこから混入したのかは不明である。A3層は黒褐色土、A5層は黒色土でともに北側配石の掘りかた埋土である。A6層は配石遺構構築に伴う段差内の堆積土であり、先述のように南側は非常に硬い。

真砂を多く含む。

このような状況から、配石の構築は、まず元の斜面を切り、一部を埋め戻して平坦な硬化面を作ったのち、段差の南側に沿って新たに溝状の掘りかたを掘り、石を埋めたということが想定される。配石の環状の部分の南側の配置については、これより後であると考えられる。

しかし環状の配石の置かれた硬化面(第1号竪穴住居埋土及びA6層)が形成されたのちに北側の配石の掘り込みが掘られており、この部分が配石遺構の構築に際し、当初から意識されていたことが考えられる。

配石遺構中央部

列状の配石遺構のうち、比較的残りのよい部分である。断面図ではB-B'からI-I'がこの部分にあたる。西側では立石が多く、斜面下側でも配石掘りかたの立ち上がりが残っている。

この部分の東側では、基本層序Ⅲ－3層が配石の南側を壊すような形で堆積している。基本層序Ⅲ－3層中に浮いている石も存在した。掘りかた南側は、配石最下段の石の際で立ち上がる。また、深い立石にともない、掘りかた底面が浅いピット状になる部分も見られる。東側ほど斜面下側の立ち上がりは斜面なりに抜ける形に近くなり、東端側のBB'ベルトでは、南側の掘りかたの立ち上がりはほとんど見られない。また配石の北端が北にやや突出している西端では、掘りかたの北端側プランも北に突出し、底面は不整となり段差がある。

配石は斜面を切ったことにより出来た段差に沿うような形で斜めに積まれている。

配石西部と異なり、中央部から東部の配石遺構の掘り方埋土は、南側に硬化面を伴わない。

立石を伴う部分(H-H'、E-E'ベルト部分)では、底面をまずA5層で埋め、さらに上にA3・A4層を入れて固定する。石を上下に積み重ねるような部分(C-C'、D-D'、F-F'ベルト部分)ではA4・A5層が石の裏側に詰められる。立石があっても深く埋められ、前面に他の石が積まれることで、立石は他の石と同程度の高さの部分しか見えなくなっている。配石の北側の埋土には花崗岩の小礫が多く入る。配石の裏込めとして入れた可能性がある。

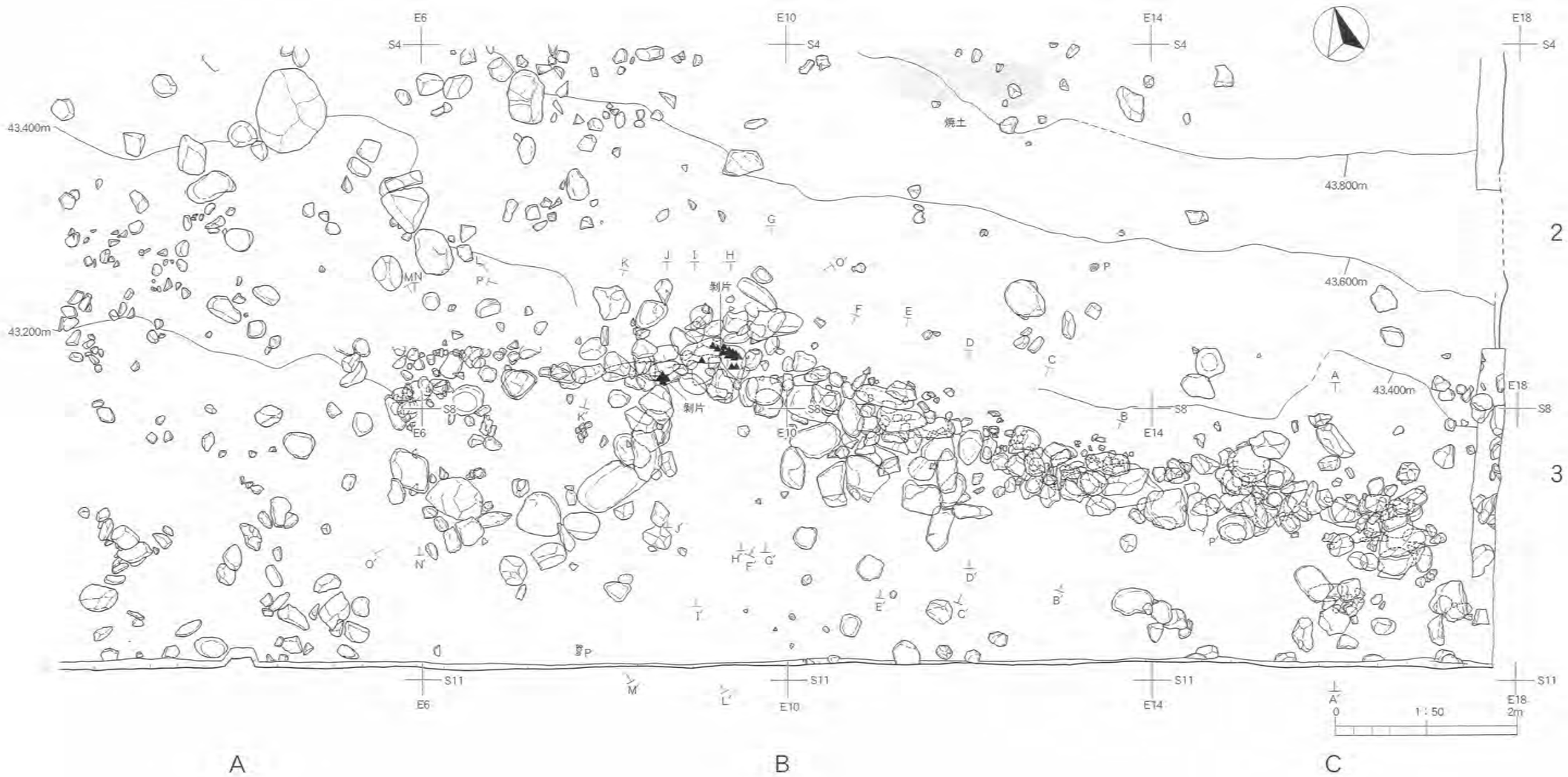
埋土の主体はA4層である。黒褐色シルト質壌土であるが、これを覆う基本層序Ⅲ－3層より色調が明るく、目立つ。また、火山灰を含むA1層はF-F'ベルト付近を境に見られなくなる。配石の断面図にはかかっていないが、この付近では配石埋土最上部に一部A2層が堆積している(調査区BB'ベルトにわずかにかかっている)。

配石遺構東部

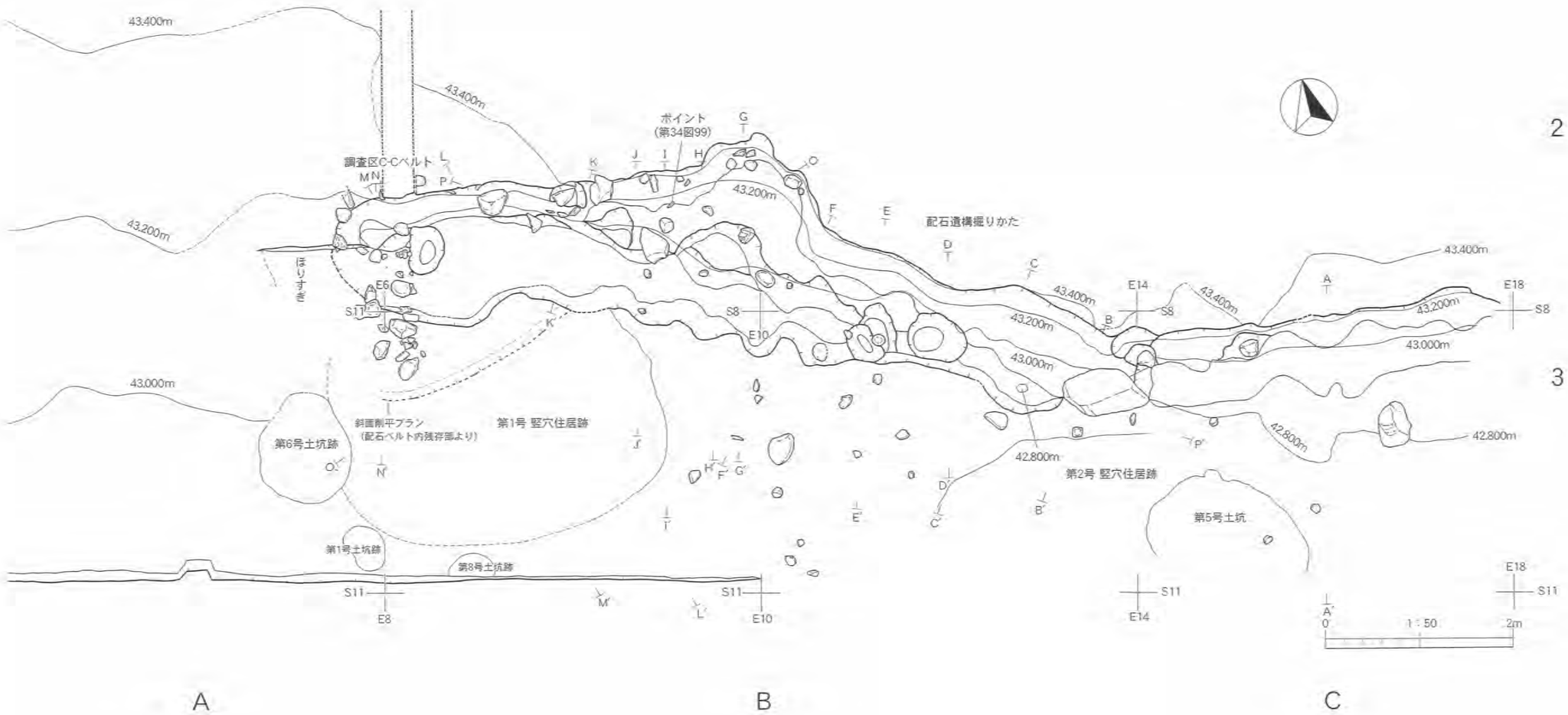
列状の配石遺構の東側の続きである。全体に表土以外の土層が東向きに下がっており、基本層序Ⅲ－3層の堆積が深く、配石の中では最後に検出された。土層の堆積状況は配石遺構A-A'ベルトのほか、調査区D-D'ベルト、東壁断面で見ることが出来る。この部分でも石が密に入っている。平面図を見ると、A-A'ベルト付近でやや石が少ないが、杉の根による撹乱が大きかったためであり、掘りかたは連続している。

その他の部分では中央部同様石の重なりは密であるが、土層が調査区南東に向かって下がっていくためか、削平して作り出された段差は低くなっており、傾斜も緩くなっている。石も中央部に比べ幅広に並べられるようになっている。

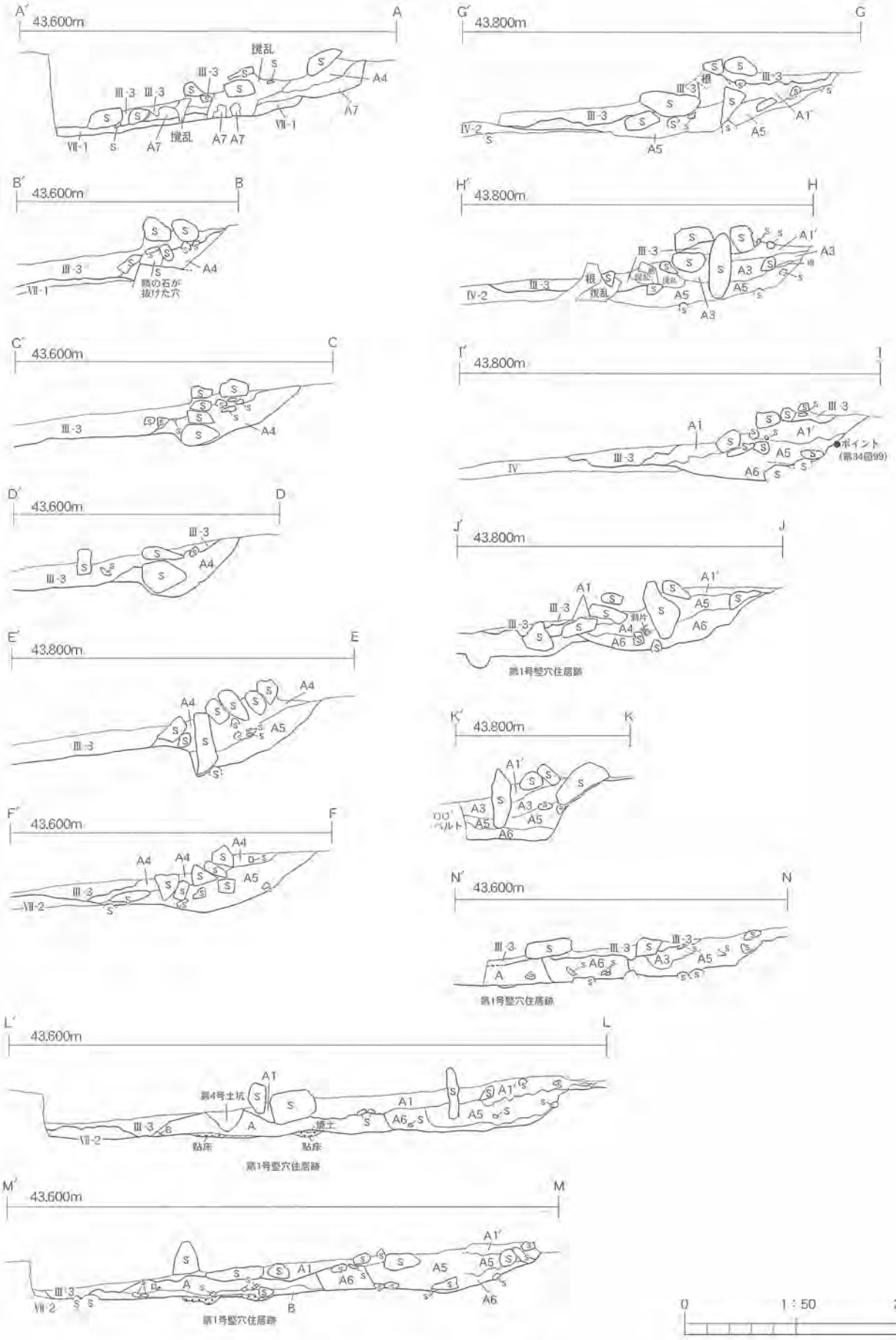
斜面下側では掘り方底面・埋土ともに斜面なりに流れているような状況である。配石の構築面その



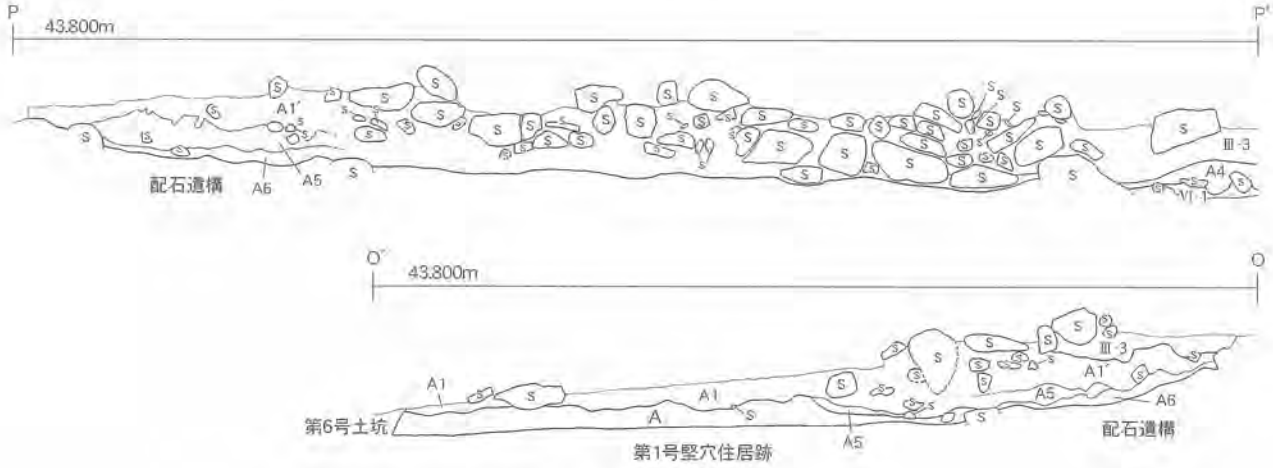
第26図　配石遺構　平面図



第27図　配石遺構掘りかた　平面図



第28図　配石遺構　断面図①



第29図　配石遺構　断面図②

遺構名	基本土	硬度	密度	粘性	混入土	混入物
A1	10YR3/2黒褐色シルト質壌土	中～軟	中	弱	10YR2/2黒褐色シルト質壌土粒状7%	炭化物
A1'	10YR2/2黒褐色シルト質壌土	中～軟	中～密	中	2.5Y7/8(火山灰)ブロック状3%	炭化物
A2	10YR3/2黒褐色シルト質壌土	軟	中～疎	強	10YR2/2黒褐色シルト質壌土粒状20%	焼土粒・炭化物粒子
A3	10YR2/2黒褐色シルト質壌土	中	中～密	なし		花崗岩粒やや多い。
A4	10YR2/2黒褐色シルト質壌土	軟～中	中	なし	10YR3/2黒褐色シルト質壌土粒状15%	花崗岩粒Ⅲ－3層よりより多い。
A5	10YR2/1黒色シルト質壌土	硬～中	密～中	ややあり	10YR2/2黒褐色シルト質壌土粒状15%	炭化物を含む。花崗岩粒少ない。
A6	10YR3/2黒褐色シルト質壌土	中～軟	中～疎	なし	10YR2/2黒褐色シルト質壌土、粒状	炭化物やや多い。真砂が多い。
A7	10YR3/2黒褐色シルト質壌土	中		弱	10YR2/1黒色シルト質壌土粒状10%	炭化物粒子・土器

第16表　配石遺構掘りかた　土層注記表

ものが、基本層序Ⅶ層とともに東側ほど深くなっている。調査区東壁にも配石が入っており、配石が調査区外に続くのは確実である。

埋土は中央部同様A4層が主体である。最下部に黒褐色シルト質壌土のA7層が入る部分もある。

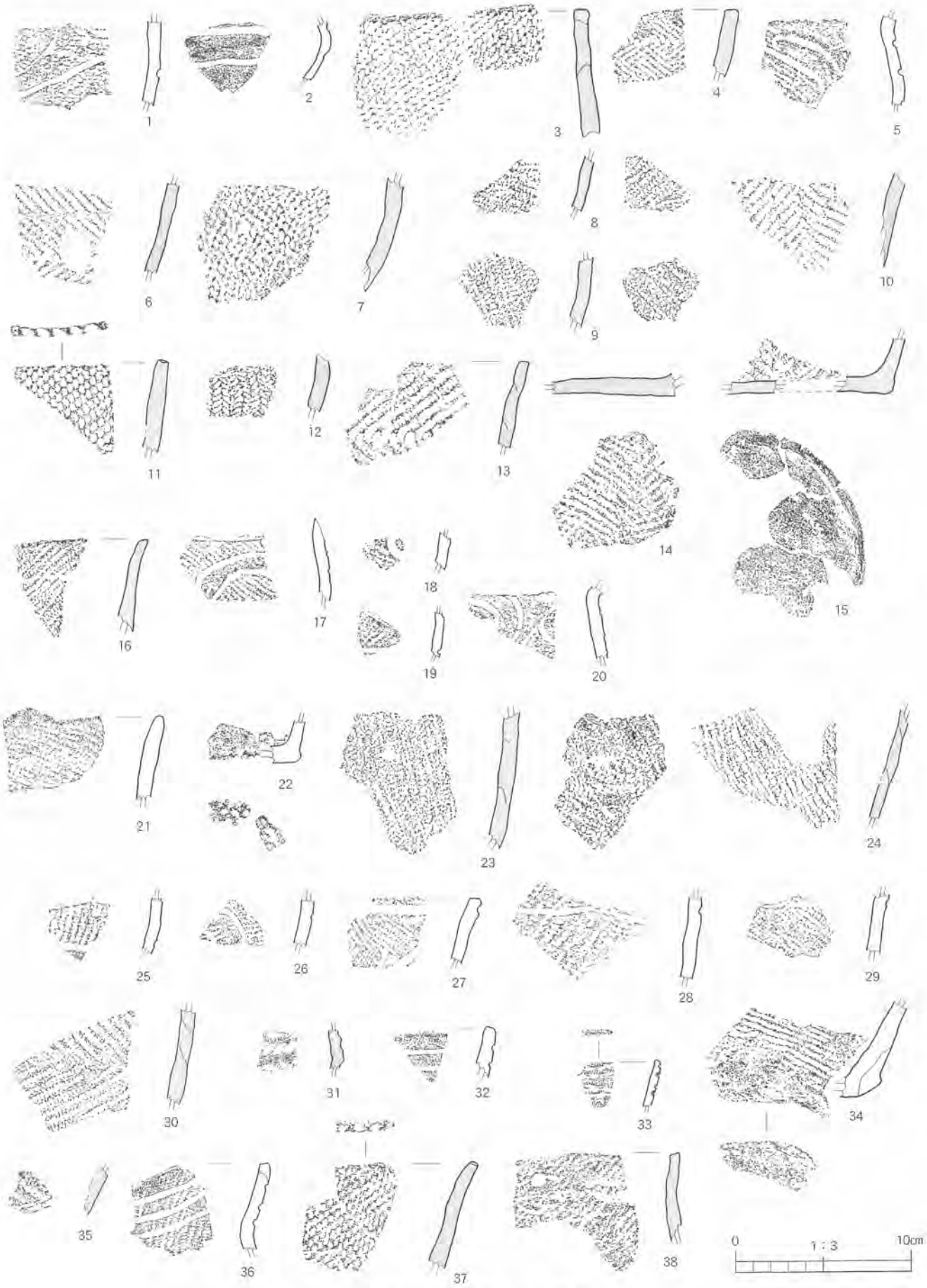
以上配石遺構のつくりについて3つに分けて述べたが、配石下においてはこれにともなう下部遺構等は検出されなかった。

出土遺物

まず土器であるが、第30図１～27が西部、第30図28～第31図64が中央部、第31図66～85が東部出土土器である。出土層位については調査時の分層の認識が不十分であったためと、石が多く分層できない部分があったため、埋土は基本的に一括して扱った。分層した土層では取り上げなかったが、調査中下層・上層などに分けて取り上げたことがわかるものは、その旨一覧表に示した。

配石西側出土土器のうち、1は掘りかた底面直上から出土した土器、2は底面から出土した土器である。１は深鉢の頸部付近。上端に施文された沈線は左端で屈曲している。2は壺の破片。胴部最大径部分に沈線が2条施文されている

3～6は掘りかた埋土下層の土器である。3は繊維を含む土器の口縁部片である。口端は角頭状である。複節の組縄縄文が施文されている。4も繊維を含む。幅の狭い結束のある羽状縄文を施文し、口縁部は角頭状に成形される。５は深鉢胴部破片。くびれ部分で、２本の沈線間を弧状の沈線でつなぐ。



第30図　配石遺構出土土器①

沈線文は破片下部で曲がっており、三角形状の区画になると思われる。施文の境界があいまいだが、磨消縄文である。6は結束のある羽状縄文の土器。原体の末端を細い撚糸で止めている。器壁がやや薄い。

7～22が埋土出土の土器である。7は組縄縄文、8・9は「縄文－縄文」の胴部破片。ごく微量の繊維を混入する。縄文を見る限り別個体である。10は繊維を混入しており、異なる撚りの縄文を用いた結束のない羽状縄文の土器である。15は同一個体の底部であるが、底面外縁が細い粘土紐を足したようにわずかに高い。配石掘りかたの底面で出土している。遺構外の遺物とも接合している。11は組縄縄文の口縁部破片で口端に指頭状の圧痕を加える。12は縄の束を横回転施文したもの。異なる撚りの縄を一本おきに4本束ねた原体である。13は結束第一種の羽状縄文の口縁部破片。14は土器底部破片で、底面に羽状縄文を施文している。撚りの異なる単節縄文を交互に施文している。16はRL縄文を横回転施文した繊維土器で、他のものに比べ薄く、口端は内削状である。17は磨消縄文の土器。深鉢のくびれ部分の破片である。幅狭の無文帯によるモチーフは曲線的である。18・19はともに磨消縄文の土器片。21は台形の波状口縁の破片で、LR縄文が縦回転施文される。時期不明。22は底面に網代圧痕を持つ底部破片である。

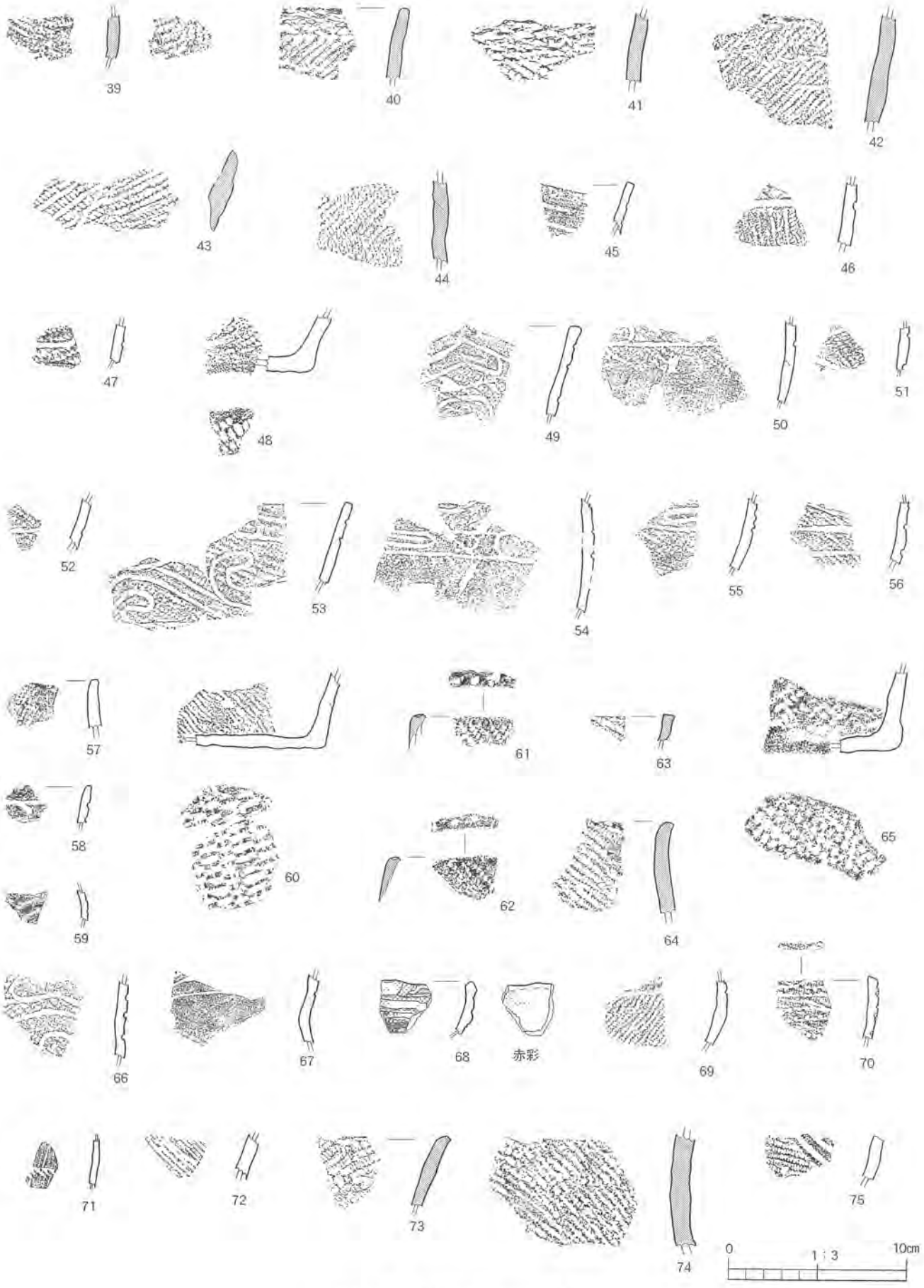
23～24は配石遺構掘りかたの載ち割りなどで遺構直下の基本層序Ⅶ層から出土した遺物である。23は「縄文－縄文」の胴部破片である。外面は主に斜め～横回転だが、内面は回転方向がそろっていない。24は繊維の入った胴部破片で、LR縄文を横回転施文している。内面に繊維の脱去痕が多い。繊維束状・単子葉植物の葉の圧痕様のものがある。

25～29は環状の配石の周辺に堆積するA1層、すなわち配石遺構の構築にともなう硬化面上の堆積土の土器である。25は磨消縄文の胴部破片。沈線・縄文ともに施文は明瞭である。26は縄文に曲線的な無文帯を有する土器。磨消縄文だが、一部磨り消し残しがある。27は口縁部で、沈線より上を無文とする。沈線は太い。口端部を角頭状に成形する。28は地文縄文に沈線文の土器。沈線はやや雑である。29は磨消縄文の土器である。上端に地文部と磨消部の境目をなす沈線が描かれている。単純な横方向の沈線ではなく横方向の沈線を上からの沈線が切って左方向に続いている。

以上の土器を見ると、8・9・23が「縄文－縄文」土器で縄文時代早期後半～末葉、6・10・15が前期初頭～前葉の結束のない羽状縄文土器である。3・7・11が縄文前期初頭に伴う組縄縄文、底部に縄文を施文する14も大木2a式までの時期に伴うものであろう。結束を伴う羽状縄文4・13、斜縄文の土器16・24、縄の束を回転する12は繊維を含んでおり縄文前期前葉までに属するものと思われる。1・2・5・25・17・18・19・27～29は縄文時代後期初頭～前葉の土器と思われる。

次に配石中央部の土器について述べる。第30図30～34は配石掘りかた底面直上の土器片である。30・31は繊維を混入しており、30は結束のない羽状縄文である。異なる撚りの縄文を交互に横回転施文している。31は上下に異なる撚りの原体圧痕が交互に押捺されている。32は口縁部片で２条の沈線を平行に施文している。33は弥生時代後期の土器の口縁部片で、いわゆる退化交互刺突文が地文上に施文される。口端部にも縄文が施文されている。34は時期不明の縄文土器底部。成形時、胎土が軟らかいうちに傾けるなどしたらしく、底部外縁がそり返っている。胴部には縄文が施文される。

35・36は掘りかた埋土下層の土器である。35は繊維が入った土器で、内面は剥離しているが胎土の様子などから「縄文－縄文」土器と思われる。太いLR縄文が施文されている。36は口縁部付近でいったんくびれ、外反する器形の深鉢の口縁部である。波状口縁で、口縁部に平行に3条の沈線が施文されている。



第31図　配石遺構出土土器②

図版番号	写真図版	出土地区	出土層位	種別	備考
第30図1	15-2-1	西部	堀りかた底面直上	縄文	
第30図2	15-2-2	西部	堀りかた底面付近	縄文	
第30図3	15-2-3	西部	堀りかた埋土下層	縄文	繊維混入　遺構外A2区Ⅲ層～Ⅴ層出土土器と接合
第30図4	15-2-4	西部	掘りかた埋土下層	縄文	繊維混入
第30図5	15-2-5	西部	掘りかた埋土下層	縄文	
第30図6	15-2-6	西部	掘りかた埋土+埋土下層	縄文	繊維混入
第30図7	15-2-7	西部	掘りかた埋土上層	縄文	繊維混入
第30図8	15-2-8	西部	掘りかた埋土	縄文	繊維混入
第30図9	15-2-9	西部	掘りかた埋土	縄文	繊維混入
第30図10	15-2-10	西部	掘りかた埋土	縄文	繊維混入
第30図11	15-2-11	西部	掘りかた埋土	縄文	繊維混入
第30図12	15-2-12	西部	掘りかた埋土	縄文	繊維混入
第30図13	15-2-13	西部	掘りかた埋土	縄文	繊維混入
第30図14	15-2-14	西部	堀りかた底面直上	縄文	繊維混入
第30図15	16-1-15	西部	堀りかた底面付近	縄文	9と同一個体　繊維混入　遺構外B2区Ⅲ層出土土器と接合
第30図16	16-1-16	西部	掘りかた埋土	縄文	繊維混入
第30図17	16-1-17	西部	掘りかた埋土	縄文	
第30図18	16-1-18	西部	掘りかた埋土	縄文	
第30図19	16-1-19	西部	掘りかた埋土	縄文	
第30図20	16-1-20	西部	掘りかた埋土	縄文	
第30図21	16-1-21	西部	掘りかた埋土	縄文	
第30図22	16-1-22	西部	掘りかた埋土	縄文	埋土上層破片と接合
第30図23	16-1-23	西部	基本土層Ⅳ層	縄文	繊維混入
第30図24	16-1-24	西部	基本Ⅲ層Ⅳ層	縄文	繊維混入
第30図25	16-1-25	西部	A1層	縄文	
第30図26	16-1-26	西部	A1層	縄文	
第30図27	16-1-27	西部	A1層	縄文	
第30図28	16-1-28	西部	A1層	縄文	
第30図29	16-1-29	西部	A1層	縄文	
第30図30	16-2-30	中央部	堀りかた底面直上	縄文	繊維混入
第30図31	16-2-31	中央部	堀りかた底面直上	縄文	繊維混入
第30図32	16-2-32	中央部	堀りかた底面直上	縄文	
第30図33	16-2-33	中央部	堀りかた底面直上	弥生	交互刺突文
第30図34	16-2-34	中央部	堀りかた底面直上	縄文	
第30図35	16-2-35	中央部	堀りかた埋土上層	縄文	HH'ベルト付近出土　繊維混入
第30図36	16-2-36	中央部	堀りかた埋土上層	縄文	
第30図37	16-2-37	中央部	堀りかた埋土上層+掘りかた埋土	縄文	HH'ベルト付近出土　繊維混入
第31図38	16-2-38	中央部	掘りかた埋土	縄文	HH'ベルト付近出土　繊維混入
第31図39	16-2-39	中央部	掘りかた埋土	縄文	BB'ベルト付近出土　繊維混入
第31図40	16-2-40	中央部	掘りかた埋土	縄文	繊維混入
第31図41	16-2-41	中央部	掘りかた埋土	縄文	繊維混入
第31図42	16-2-42	中央部	掘りかた埋土	縄文	繊維混入
第31図43	16-2-43	中央部	掘りかた埋土	縄文	繊維混入
第31図44	16-2-44	中央部	掘りかた埋土	縄文	繊維混入
第31図45	16-2-45	中央部	掘りかた埋土	縄文	49～55と同一個体
第31図46	16-2-46	中央部	掘りかた埋土	縄文	
第31図47	17-1-47	中央部	掘りかた埋土	縄文	
第31図48	17-1-48	中央部	掘りかた埋土	縄文	
第31図49	17-1-49	中央部	掘りかた底面直上	縄文	
第31図50	17-1-50	中央部	掘りかた埋土	縄文	
第31図51	17-1-51	中央部	掘りかた埋土	縄文	
第31図52	17-1-52	中央部	掘りかた埋土	縄文	同一個体　BB'ベルト付近出土
第31図53	17-1-53	中央部	堀りかた底面直上+サブトレンチ	縄文	
第31図54	17-1-54	中央部	掘りかた埋土+堀りかた底面直上	縄文	
第31図55	17-1-55	中央部	掘りかた底面直上	縄文	
第31図56	17-1-56	中央部	配石上面付近	縄文	
第31図57	17-1-57	中央部	サブトレンチ内配石掘りかた埋土	縄文	
第31図58	17-1-58	中央部	サブトレンチ内配石掘りかた埋土	縄文	45、49～55と同一個体
第31図59	17-1-59	中央部	サブトレンチ内配石掘りかた埋土	縄文	
第31図60	17-1-60	西部～中央部	堀りかた底面直上	縄文	
第31図61	17-1-61	西部～中央部	掘りかた埋土	縄文	BB'ベルト付近出土　繊維混入
第31図62	17-1-62	西部～中央部	掘りかた埋土	縄文	
第31図63	17-1-63	西部～中央部	掘りかた埋土	縄文	繊維混入
第31図64	17-1-64	西部～中央部	配石上面付近	縄文	繊維混入
第31図65	17-1-65	西部～中央部	層位不明	縄文	繊維混入
第31図66	17-2-66	東部	配石上面付近	縄文	45、49～55、58と同一個体
第31図67	17-2-67	東部	配石上面付近	縄文	
第31図68	17-2-68	東部	配石上面付近	縄文	赤彩
第31図69	17-2-69	東部	配石上面付近	縄文	
第31図70	17-2-70	東部	掘りかた埋土	弥生	交互刺突文
第31図71	17-2-71	東部	配石上面付近	弥生	赤穴式
第31図72	17-2-72	東部	配石上面付近	縄文	
第31図73	17-2-73	東部	掘りかた埋土	縄文	繊維混入
第31図74	17-2-74	東部	掘りかた埋土	縄文	繊維混入
第31図75	17-2-75	東部	掘りかた埋土	縄文	
第32図76	17-2-76	東部	掘りかた埋土	縄文	
第32図77	17-2-77	東部	掘りかた埋土	縄文	
第32図78	17-2-78	東部	掘りかた埋土	縄文	
第32図79	17-2-79	東部	掘りかた埋土	縄文	
第32図80	17-2-80	東部	掘りかた埋土	縄文	
第32図81	17-2-81	東部	掘りかた埋土	縄文	
第32図82	17-2-82	東部	掘りかた埋土	弥生	交互刺突文
第32図83	17-2-83	東部	掘りかた埋土	縄文	
第32図84	17-2-84	東部	掘りかた埋土	縄文	
第32図85	17-2-85	東部	掘りかた埋土	縄文	

第17表　配石遺構出土土器一覧表

37・38は掘りかた埋土上層の土器である。両者とも繊維を含む。37は複節の組縄縄文を施文し、口端部に刻み目を加える。38は緩やかな波状口縁で、縄文を施文している。拓本で絡条体圧痕のように見えるのは繊維の脱去痕である。補修孔がある。35～38はH－H'ベルト付近で出土している。

第31図39～48は埋土出土の土器である。39～44には繊維を混入する。39は「縄文－縄文」の土器片。LR縄文を施文する。複数の方向に回転施文している。40の口縁部は不整撚糸文である。幅は狭く1.5cm程度である。体部縄文は上端に閉じた端が来るよう横回転施文している。41も上部に不整撚糸文を施文する土器。下部にはRLR複節縄文が縦回転施文されている。42～44はLR縄文を横回転施文している。43は太さの異なる条を撚りあわせたRL縄文が縦回転施文されている。

45・49～55は同一個体である。49～55はB－B'ベルト付近で集中して出土したが、配石上面付近から掘りかた底面まで各層に含まれていた。これらを総合的にみると口縁部は波状口縁で波頂部に刻み目をもつ。口縁部に沿って2条の沈線が回るが、所々に弧状の沈線が入ってこの２条をつなぐ。以下は２条の沈線で三角形状の区画と、区画内の波頭状モチーフを描き、沈線間は磨り消される。最低上下二段の文様の下で、再び弧状の沈線でつながれた２条の沈線で胴部と区画される。以下はわずかに縄文が施文されるが、基本的には無文のようである。47は地文縄文に沈線文の土器である。48は底部破片で、胴部にRL縄文、底面には網代圧痕を有する。56は配石の上面出土。縄文にやはり２条一単位の沈線で三角形状の区画をなす土器と思われる。

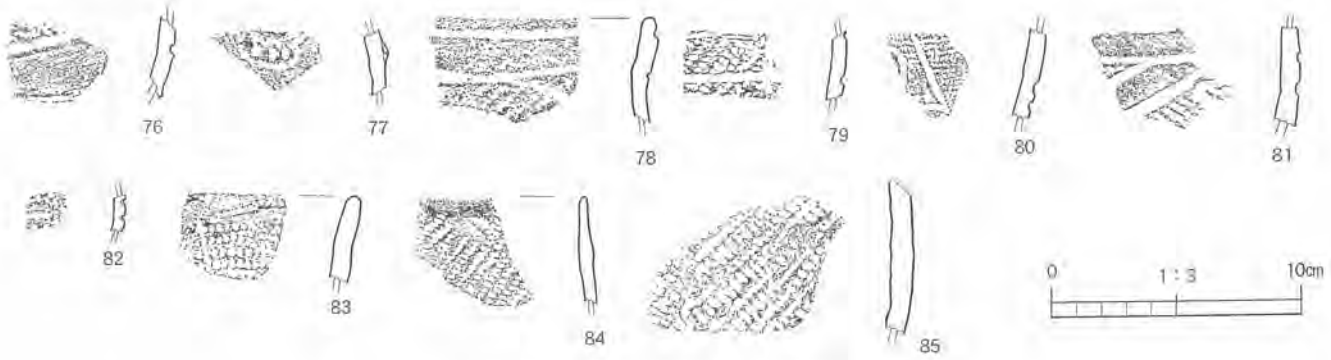
57～59は調査区D－D'ベルト脇にサブトレンチを入れた際、配石の下から出土し、埋土出土と考えられるもの。57は縄文の施文単位の間隔が広い。58は先述の45・49～55と同一個体。59はごく浅い沈線を施文する土器である。

以上の土器のうち35・39が早期後期～末葉の「縄文－縄文」土器、30が結束のない羽状縄文土器で前期初頭～前葉、40・41が不整撚糸文を持つ大木1～2a式、37が組縄縄文で前期初頭までの土器、その他31・38・42・43・44も繊維を含み前期前葉の土器と思われる。46は大木10式から後期前葉までに属する土器であろう。32・36・45・47・49～56、58は縄文時代後期初頭～前葉の遺物である。33は配石掘りかた底面からの出土で弥生時代後期の土器片であるが、木根による混入と思われる。

60～65は、配石内出土だが、西部出土か中央部出土か不明なもの。60は土器底部付近で、胴部には無節縄文が施文され、底部には網代圧痕がある。配石掘りかた底面出土。61～64は繊維土器。61・62は「縄文－縄文」土器だが外面が剥落しているもの。掘りかた埋土内の出土。63は口縁部のみの小片であるが、口端は平坦に削られている。64はRL縄文（0段多縄）を施文するが、閉じた末端が破片中位に現われている。65は底部破片で、底面には網代圧痕がある。胴部の縄文はかなり太いRL縄文の縦回転施文である。

第31図66～第32図84は配石東部の出土土器である。配石東部は配石掘り方が浅く、埋土も少なかった。そのため、配石上面付近と埋土中にしか分けられなかった。第31図66～72が配石検出面など上面付近、以降第32図84までが埋土の遺物である。

66は配石中央部の44・49～55、58と同一個体である。49との文様の同一性から、口縁波頂部下の破片と思われる。67はかなり大きく外側に開く土器で、細い3条の沈線文が施文される。68は横方向の隆帯を持つ土器の口縁部。口縁部に横方向の沈線が入り、口端から斜めに刻みが入っているようである。横方向の隆帯は両脇を沈線で縁取られており、縄文が施文される。内外に赤彩が残る。同一個体



第32図　配石遺構出土土器③

の細片が同じ地点から出土している。69は上端に沈線が2条あり、沈線間は無文、沈線下は縄文である。充填縄文である。70は弥生土器の口縁部で、交互刺突文を持ち、口端にも縄文を施文する。交互刺突は平行沈線間に円形の竹管文で施文される。平行沈線は半裁竹管を用いたものではなく、一条ずつ引いている。71は弥生土器。縦方向の撚糸文中に、閉じた原体の末端を横回転する特徴から、弥生時代後期の土器と思われる。72は時期不明の胴部片。櫛状工具で地文を施文している。

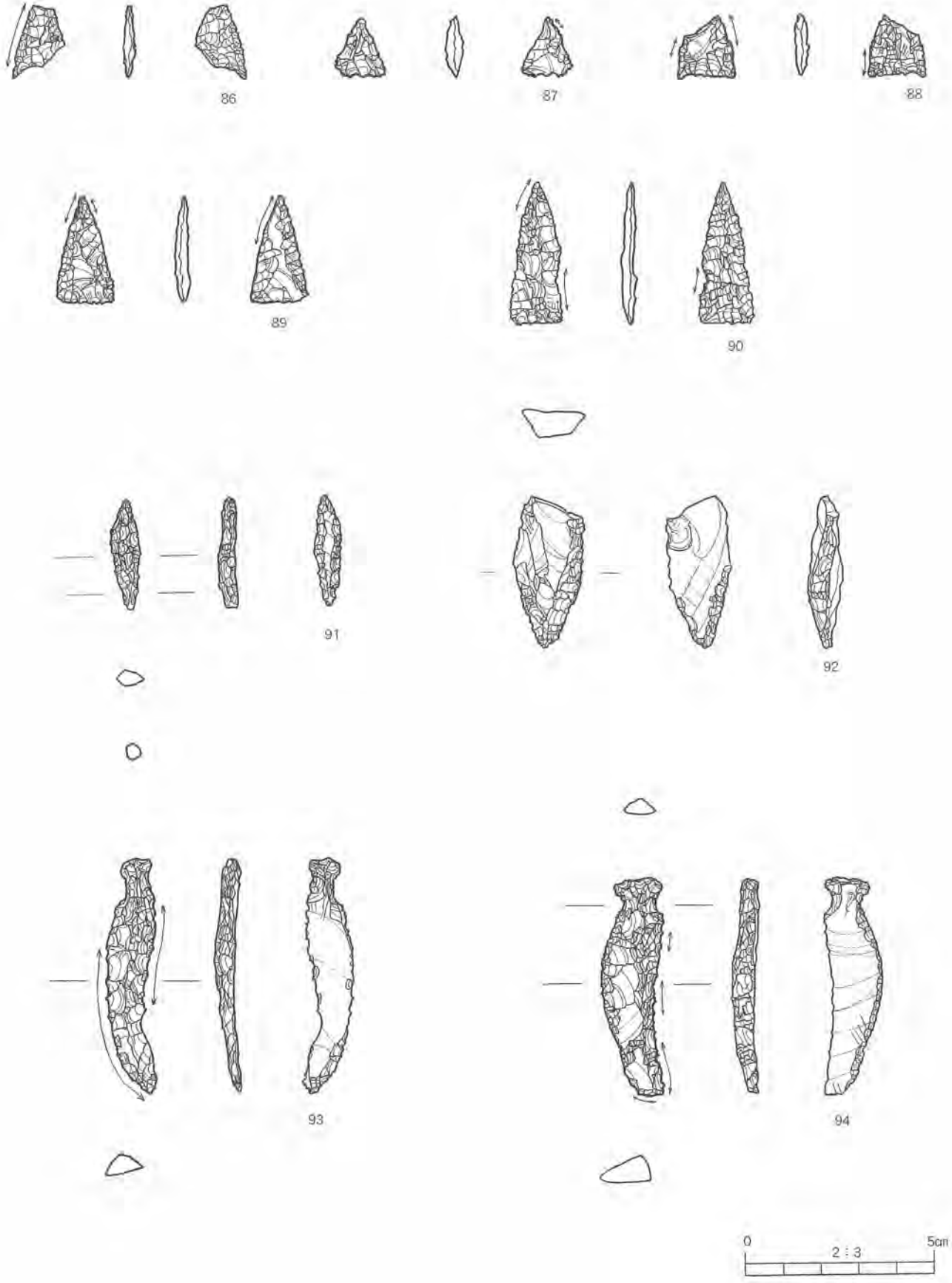
埋土出土の土器では、73・74が繊維の入った土器で、RL縄文を横回転施文している。73は0段多縄、74もその可能性がある。第32図75は縄文地に曲線的な平行沈線を引く。76は幅広の磨消縄文帯を施文する土器。77は沈線により区画された文様の末端に粘土を貼付し、上から刻み目を施す。78は磨消縄文の波状口縁で、口縁部に沿って平行する二条の沈線間を磨り消している。79は地文縄文に平行な2条の沈線文の土器。80は磨消縄文の土器で、左端の曲線の内側は磨り消されている。81も磨消縄文の土器。三角形状の区画の頂点から、蛇行沈線文が垂下する土器と思われる。82は70と同一個体の弥生土器。83～85は時期不明の縄文のみの土器片で、83は施文が浅いが0段多縄の複節縄文のようである。84はRLの縦回転施文、85は太さの異なる条を撚りあわせたRLの縄文を縦回転施文している。

配石東部出土土器では、西部・中央部に比べ繊維土器の割合が少ない。縄文のみの繊維土器73・74が縄文前期前葉と考えられ、76・77が中期末葉大木10式、66・68・69・78～81はおおよそ後期初頭～前葉、70・71・82が弥生時代後期と思われる。75は大木8b式と考えたが、沈線間が無文で隆帯ではなく、磨消縄文の可能性も考えられる。67は沈線が完全に平行とは言い難く、時期不明である。

次に石器を見ていく。石器については配石遺構全体で一括して記述する。出土石器一覧表に出土位置・層位を示した。

第33図86～90は石鏃である。すべて無茎で、87～90は平基、86は凹基である。86は基部右側と先端を欠損。87は厚みがあり長軸1.5cmと小さい。基部左側を欠損。88は先端部を欠損している。先端部に近い両側縁に微細剥離がある。89は基部左側折損、側縁部右側に微細剥離。90は先端部と左側縁部に微細剥離があり、その部分が欠けている。これらの石鏃はすべて両面から調整しているが、88・89は一部に主要剥離面を残している。

91は石錐と思われる。下端に回転痕のような横方向の筋のある磨滅が見られる。第34図98は掻器の欠損品と思われる。側縁の一部に微細剥離があり、上端にバルブの厚みがある。



第33図　配石遺構出土石器①

93・94は縦型石匙である。造りは大略似ていて、主要剥離面のバルブ部分にノッチを作り出す。両側縁を調整し、断面は三角形状となるが、側縁の片側が鋭角、もう一方が鈍角になることが多い。たいてい鋭角の側は裏面からも浅い剥離を加えており、両側共に刃こぼれと思われる微細剥離や、押圧剥離の稜の末端のつぶれが見られる。

92は縦型石匙の刃部の可能性もあるが、掻器と考えられる。

95は横型石匙の未製品と思われる。つまみ部分を作り出そうとしているが、刃部調整が見られない。96は削器である。刃部には微細剥離がある。97は横型石匙である。正面側からのみ刃部を作りだしており、微細剥離がみられる。99はポイントである。配石中央部のI−I'ベルトの脇で出土した。A5層中で、掘りかた北側の立ち上がりに接するような形で出土した。側縁部・基部の一部に微細剥離が見られ、先端部がわずかに欠損している。

土製品は一点出土している。第34図100に掲載したのはミニチュア土器、もしくは土製品と思われる。紐づくりである。器面は横方向になでているが凹凸が激しく、器壁に大変隙間が多い。胎土の粒子はやや細かく、砂粒を含む。外面はにぶい黄橙色、内面は褐色で、内面に黒斑が見られる。時期は不明である。第５号土坑出土遺物（第16図9）と同一個体の可能性がある。

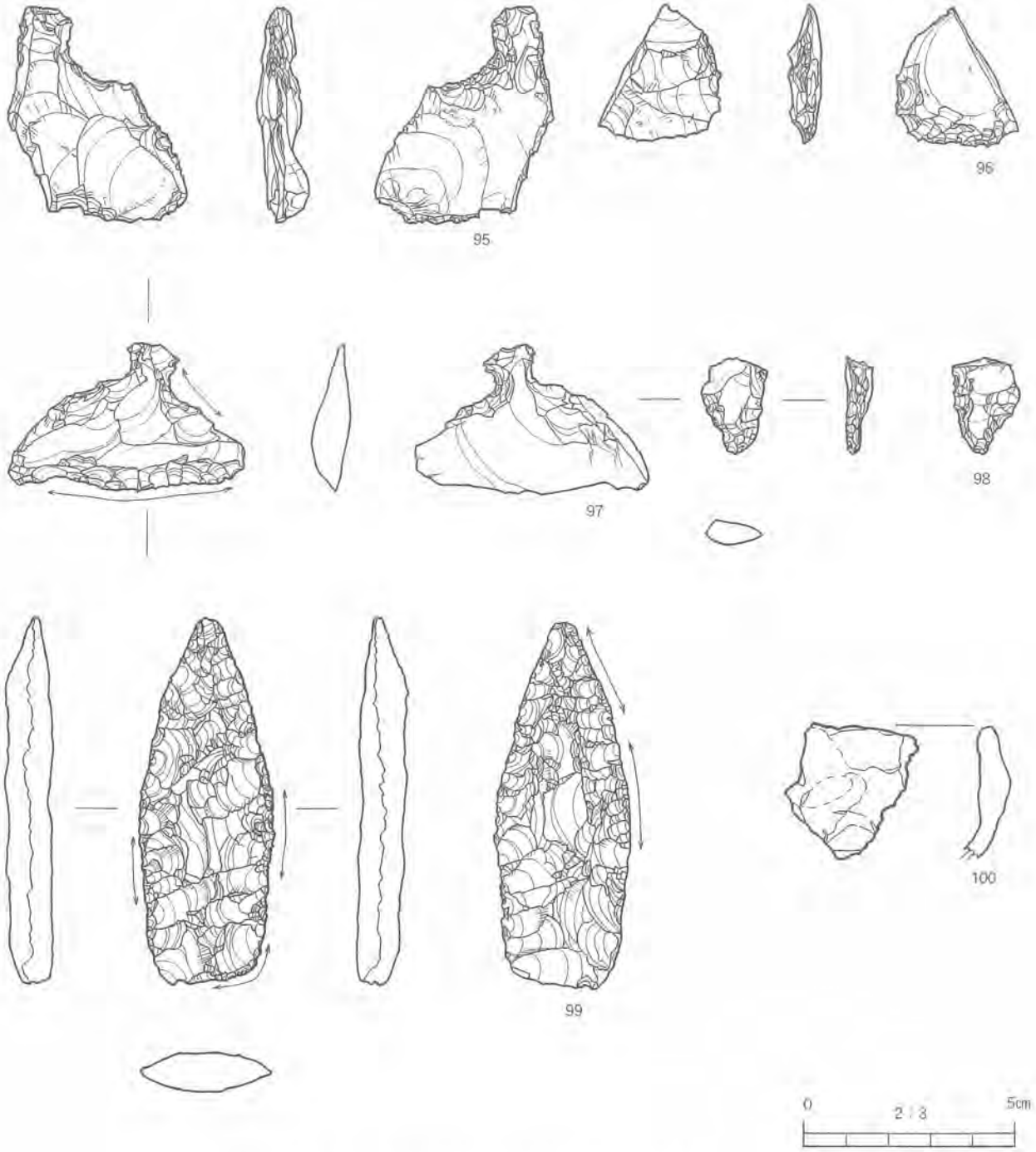
最後に配石遺構掘りかた内から二箇所で集中的に出土した剥片について記述する。配石の調査中、立石を掘り下げ、石の下部の形を実測してから周辺を掘削しているうち、同じ場所から次々と剥片が出土した地点が2ヵ所ある。H−H'ベルトにかかっている立石と、J−J'ベルトにかかっている立石の南側である。H−H'ベルトにかかっているものは、平面的にはやや立石の周りに広がるが、すべてA5層から出土している。J−J'ベルトにかかっているものは、より狭い範囲に集中し、A5層の下面付近から出土している。石とセクションベルトが混み合っていたが、配石の上面から剥片を埋めるための掘り込みは確認されなかった。また、そのような掘りこみの底面や壁も見られなかった。立石を立てるにあたってともに剥片を埋めたと考えられる。

これらの剥片を整理したところ、何点かの剥片が接合した。また、使用の痕跡のあるものもあったので、これらを図示する（第35図・36図）。

第35図はJ−J'ベルトの立石の周りから出土した剥片である。記録して取り上げた総点数はチップ状のものを含め13点である。他に同じベルト周辺から一括取り上げしたものが５点あり、合計18点出土している。これらの剥片の石材については岩手県立博物館の吉田裕生氏にご覧いただいたところ、「東北地方の新第三紀中新世の後期を代表する岩石で、奥羽山脈より西の地域に産出する」典型的な硬質頁岩とのことである。当地域では石器に一般的に使用されている石材だが、「中、古生代の地層や岩石が分布する宮古地域は全く産生しない」とのことで、いずれ移入されたものであろう。

最大の剥片は8cm×5.2cm、他はおおよそ４cm四方以下である。

１は２点が接合した剥片素材石核である。上面は節理面で平坦である。この面を打面として正面から剥離しようとしたようだが、石の内部の節理面にあたったため、赤褐色のざらついた面が剥離面と混在している。裏面からも剥離が行われている。その打撃の衝撃で２点に割れたと考えられる。また裏面の右端には赤褐色を帯びた割れ口が見られるが、これが自然の割れによるものなのか、いわゆる「二重パティナ」かは判別出来ない。２も同様に２点が接合したものである。こちらは上面を打点



第34図　配石遺構出土石器②及び土製品

図版番号	写真図版	位置	層位分類	器種	石質
第33図86	18-1-86	東部	掘りかた埋土	石鏃	褐色不透明、光沢あり。緻密。窪がある。
第33図87	18-1-87	東部	配石上面付近	石鏃	暗灰色不透明、やや光沢あり。緻密。白色小粒子
第33図88	18-1-88	中部	掘りかた埋土上層	石鏃	暗灰色不透明、光沢なし。
第33図89	18-1-89	中部	掘りかた埋土	石鏃	灰色不透明光沢なし。白色粒子
第33図90	18-1-90	西部	配石A1層	石鏃	灰色不透明光沢なし。白色粒子。左側縁部欠損
第33図91	18-1-91	東部	掘りかた埋土	石錐	暗褐灰色不透明、光沢なし。擦理面あり。
第33図92	18-1-92	中～西部	配石上面付近	穿孔具	暗灰色不透明、光沢なし。
第33図93	18-1-93	西部	配石掘りかた下層	縦型石匙	灰色不透明光沢なし。白色粒子。
第33図94	18-1-94	西部	配石遺構面～直下	縦型石匙	暗灰色不透明、やや光沢あり。
第34図95	18-2-95	東部	掘りかた埋土	横型石匙未製品	灰色不透明・白色粒子。
第34図96	18-2-96	東部	掘りかた埋土	削器	暗灰色不透明、光沢あり緻密。
第34図97	18-2-97	西～中部	配石上面付近	横型石匙	黄褐色～灰白色不透明、光沢なし。左側縁に原礫面
第34図98	18-2-98	西～中部	掘りかた埋土	掻器	鈍い赤褐色、緻密、光沢あり。
第34図99	18-2-99	中部	掘りかた埋土A5層	ポイント	

図版番号	写真図版	位置	出土層位	器種	備考
第34図100	18-2-100	東部	掘りかた他出面	ミニチュア土器?	第5号土坑出土遺物（第16図9）と同一個体

第18表　配石遺構出土石器・土製品一覧表

とした剥離の衝撃で二つに分離したと考えられる。この打面は裏面からの剥離によって作られている。正面・裏面にはやはり褐色の剥離面・節理面が存在する。正面のものは自然の割れと判断した。3は二次加工を有する剥片である。4の正面下端はやはり古い割れ口か節理面と思われるが、それを含め周縁に微細剥離がある。

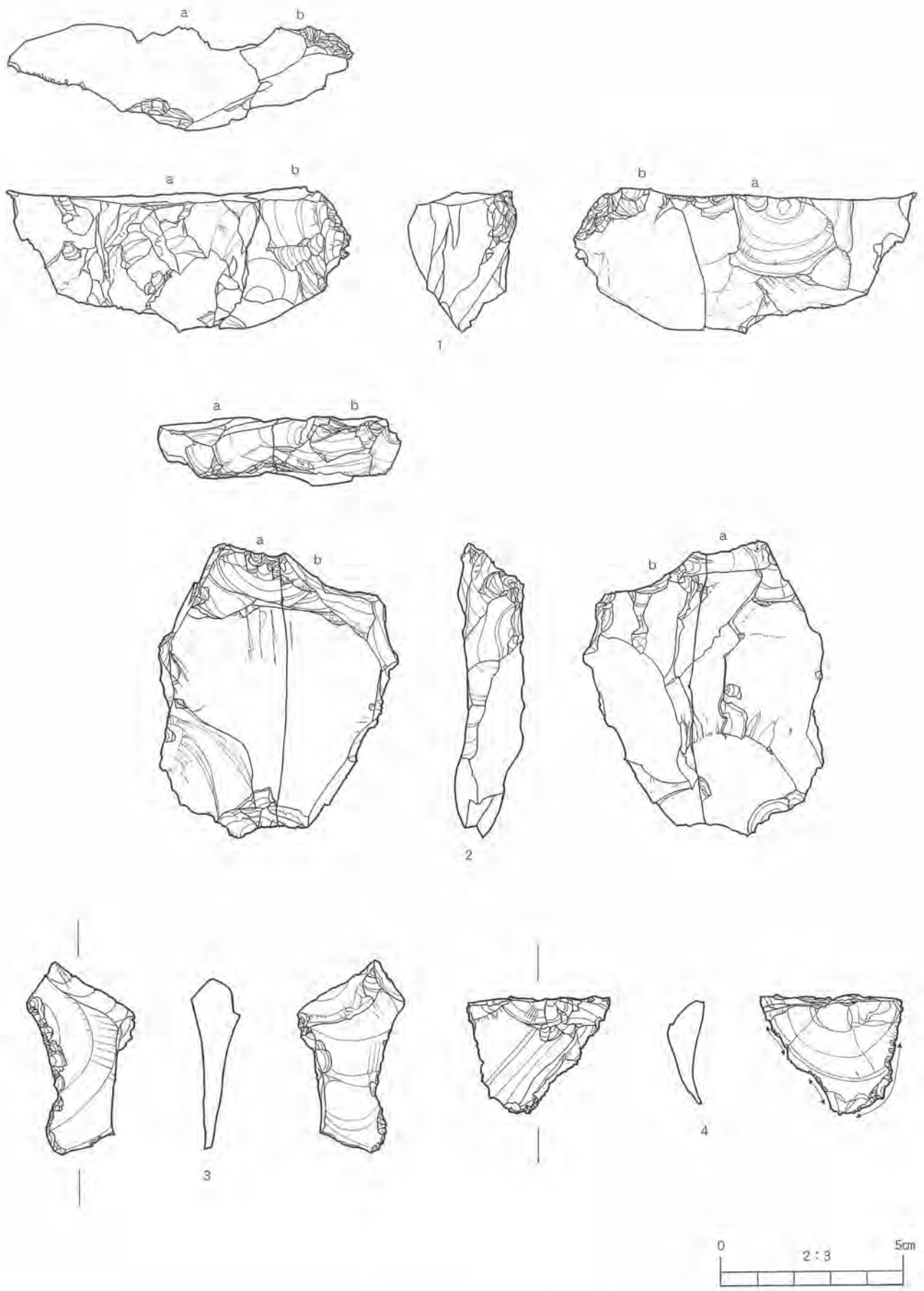
第36図はH－H'ベルトの立石周辺から出土した剥片の接合資料である。こちらの石材は「チャート(より正しくはそれが若干の熱変成作用を受けたチャートホルンフェルス)」で、「盛岡－早池峰山－釜石鉱山－五葉山を結ぶ線から北側の『北部北上山地』の中・古生代の地層に広く分布する岩石」で、「宮古周辺でもチャートは各所に存在しており、当然露頭も転礫もあると考えるのが自然」とのことである（岩手県立博物館の吉田裕生氏のご教示による)。記録して取り上げたものの総点数は20点、この他に同じベルト付近で一括で取り上げたものが11点、合計31点出土している。こちらは図示したもの以上の大きさのものはない。ここに掲載したものをはじめほとんどの出土資料は風化した自然面が表皮のようについており、割れ口にも縞がある。5は3点が接合している。使用された痕跡はない。図のaが先に剥離され、その後b、cが剥離されている。6も3点が接合している。cには剥離後の二次調整が見られる。7～9はそれぞれ2点が接合、7はaの上端に僅かに微細剥離が見られる。aからbを剥離した後、bからも剥離を行っている。8は正面のほとんどが自然面である。上端と下端から自然面が先に剥離されている。また、側面の厚い自然面も一部剥離を行っている。9の剥片には二次調整が見られる。剥離したというより折れてしまったようで、a・bにまたがる剥離が見られる。また、aには分離後に行われたと思われる二次調整がある。以上のことから、これらの剥片は使用可能な石材から不要な自然面を単純に剥離した残滓というよりは、石核から剥離した自然面側の剥片からさらに剥片剥離を行ったものであることがわかる。

以上配石を三つの部分に分けて見てきた。配石の時期についてであるが、出土土器を概観すると、早期後葉～前期前葉および後期初頭の2時期が主体である。後述する遺構外出土遺物の項で述べるように、縄文時代早期後葉～前期前葉の土器は、基本層序Ⅲ～Ⅴ層にも包含されている。したがって、これらは配石の掘りかたを掘削する際に土とともに掘りあげられたり、埋め戻しにともなって配石遺構の掘りかた埋土に入ったものと考えられる。

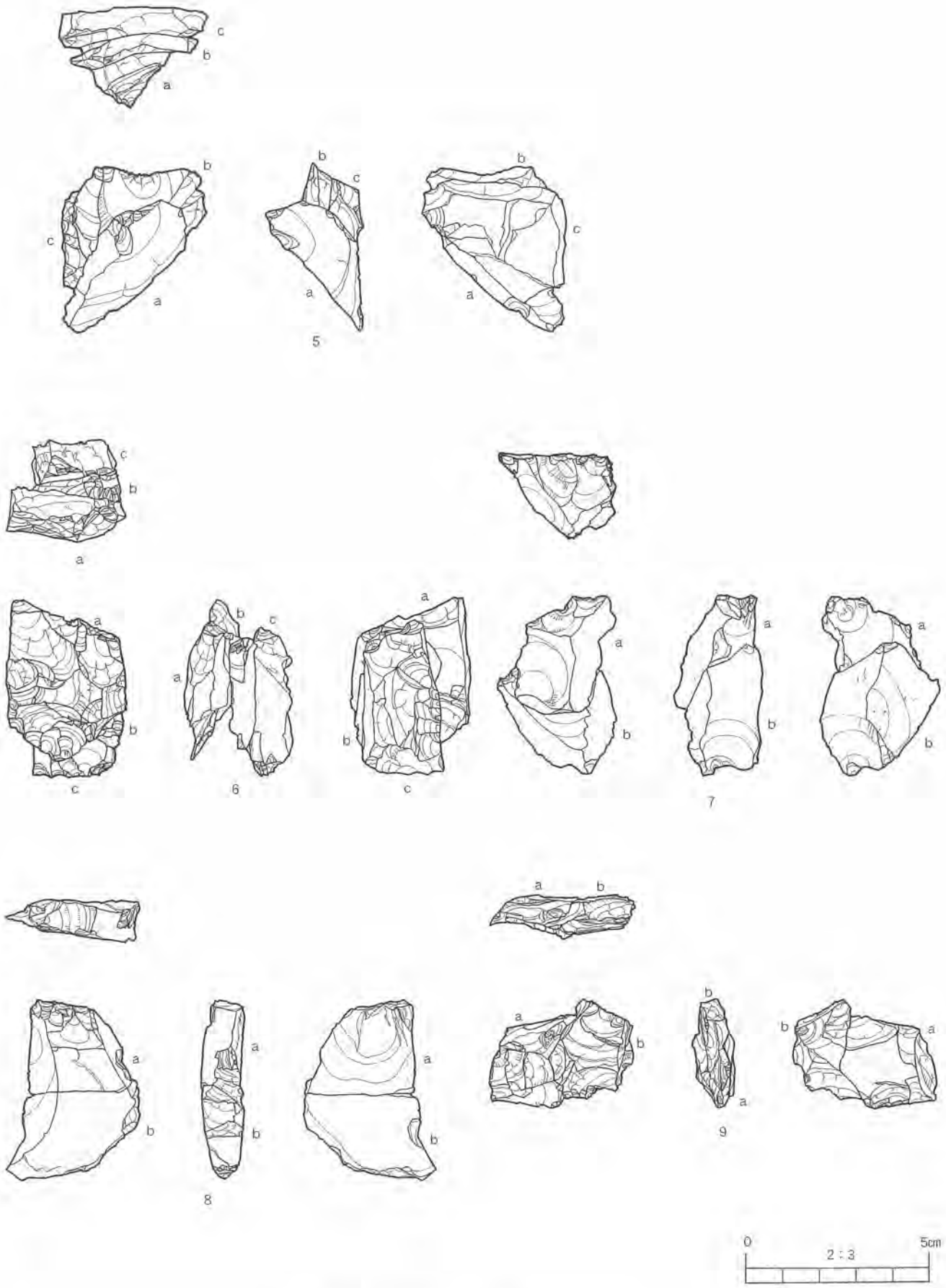
また、配石遺構西部に切られている第1号竪穴住居跡がやはり縄文時代後期初頭～前葉であることから配石遺構の構築時期は縄文時代後期初頭～前葉と考えられる。なおかつ、西部から東部までの出土土器の時期がほとんど変わらないことから、これらの配石遺構の間に大きな構築時期の差はほとんどないと考えられる。

7．遺構外出土遺物（第37図～45図）

表土以下基本層序Ⅶ層に至るまで、本調査区の土層は多くの遺物を含んでいた。調査区南東隅の砂層である基本層序Ⅱ層及びアサナイ沢起源と考えられる礫層に関わるⅥ層には、遺物は少ない。また、調査区東壁沿いのサブトレンチで確認したⅣ層は、遺物をほとんど包含していなかった。したがって、この項で触れる出土遺物の大半は、基本層序第Ⅲ層からⅤ層にかけて出土したものである。個々の遺物の出土層位については遺物一覧表に示した。



第35図　配石遺構内　集中出土剥片①



第36図　配石遺構内　集中出土剥片②

図版番号	写真図版	位　　置	出　土　層　位	石　　材
第35図1	19－1－1	配石JJ'ベルト内立石周辺	配石埋土A5層下面	硬質頁岩
第35図2	19－1－2	配石JJ'ベルト内立石周辺	配石埋土A5層下面	硬質頁岩
第35図3	19－1－3	配石JJ'ベルト内立石周辺	配石埋土A5層下面	硬質頁岩
第35図4	19－1－4	配石JJ'ベルト内立石周辺	配石埋土A5層下面	硬質頁岩
第36図5	19－1－5	配石HH'ベルト内立石周辺	掘りかた埋土+配石埋土A5層	チャートホルンフェルス
第36図6	19－1－6	配石HH'ベルト内立石周辺	配石埋土A5層下面	チャートホルンフェルス
第36図7	19－1－7	配石HH'ベルト内立石周辺	配石埋土A5層	チャートホルンフェルス
第36図8	19－1－8	配石HH'ベルト内立石周辺	配石埋土A5層	チャートホルンフェルス
第36図9	19－1－9	配石HH'ベルト内立石周辺	配石埋土A5層下面	チャートホルンフェルス

第19表　配石遺構内集中出土剥片　一覧表

土器（第37図1～第41図162）

縄文時代早期（第37図1～7）

第37図1・2は貝殻腹縁文を施文する土器である。1は繊維とは異なる、細かい丸い脱去痕が器壁に見られる。2には1とは異なり脱去痕はない。貝殻腹縁文のほかに細い沈線が施文されている。

3～7は「縄文－縄文」の土器。3・4は径が大きいのか、器壁が平坦に近い。外面より内面の施文のほうが整っている。5は外面の繊維脱去痕が非常に多い。口端部は丸く肥厚する形になっている。6・7は同一個体と思われる。3～5に比べて繊維の混入量が少なく、細い縄文を施文している。総じて繊維のほかに砂礫が多い胎土である。

1、2は早期中葉、3～7は早期後葉に伴うものである。

縄文時代前期（第37図8～35）

8～20は羽状縄文の土器である。8～12は一括取り上げされており同一個体と思われる。結束のある羽状縄文を横方向に施文し、一段目の結束は口縁下から2cmほどのところに施文されている。13・14は0段多条の可能性が高い。15は口端部にも縄文を施文する。16・17は幅の狭い結束のある羽状縄文が施文される。16は口端に丸棒状工具で刻み目を入れる。18・19は異なる撚りの原体を横回転して羽状縄文を施文しているが、原体の末端が別の条で縛りとめられているため、横走する条が現われている。20は横回転の縄文の上から縦回転の縄文を施文している。変則的だが羽状縄文としておく。

21・22・28は組縄縄文である。すべて左撚りの組縄で、21・28は単節の組縄、22は複節の組縄である。

23は縄の束を横回転施文している。24・25・26は縄文を施文する土器。24は口端にも縄文を施文している。25は複節縄文である。27の口縁部は不整撚糸文である。右下端に補修孔がある。

第37図29・30・31は撚糸文を施文する土器である。29は撚りの異なるL・R2種の条を用いた撚糸文を横回転施文している。30・31は同一個体である。31は口縁部には木目条撚糸文を、胴部には縄文を施文する。

第38図32・33は縄の側面圧痕を口縁部に施文する土器である。32は撚りの異なる2種の0段多条の縄を交互に押圧して肋骨状の文様を施文している。33も32同様撚りの異なる縄の側面圧痕を施文している。

34は縄の末端で刺突を施文する。35は底部破片で、網代圧痕が底面中央に残っている。

以上の土器のうち結束のない羽状縄文の18・19、組縄縄文の21、22、28、結束のある羽状縄文8～17、斜縄文の22・24・25、縄の束を回転施文する23は前期初頭から前葉に伴う。不整撚糸文を施文する27は大木1式。29、30～33も繊維を混入することから縄文前期前葉に属すると考えられる。

縄文時代前期後葉～中期（第38図36～41・44）

第38図36は波状口縁である。RLの縄の一方の条でもう一方の条を結びとめて結節を作った原体が横回転施文されている。37も縄文の末端の結節が横回転施文されているが、2条以上の条による不規則な結節で、詳細は不明である。縄文前期後半から中期に伴うものと考えられる。38～41・44は沈線間を磨り消してモチーフを描く土器で、大木10式の範疇で捉えられる。拓本ではわかりにくいが41の沈線の上端には粘土紐が貼られており、大木10式としては後出的なものであることわかる。40・41は同一個体と考えられる。

縄文時代後期（第38図42～61、第39図・第40図96～108）

第38図42・43は縄の側面圧痕で文様を施文する土器である。縄文時代後期初頭に属するものと考えられる。42は波状口縁である。

45～58は磨消縄文手法で主に横方向に展開する文様を施文する土器である。45～46などのように、磨消部の幅が狭くなるためか、沈線の存在にも関わらず磨消が雑になるものが多い。47・48・50は同一個体と思われる。49は、幅が一定の磨消帯で文様を横位に区画している。上端に斜めに延びる磨消帯があることから、三角形状の区画を構成するものと思われる。

59・60・61などは渦巻状の沈線が施文されているが、沈線は文様の末端で閉じておらず、磨消帯を区画しない。しかし全くその意識が無いわけではなく、一部が磨消されている。

第39図62・63は同一個体である。上端の磨消帯に接して二重円形の沈線文が施文され、以下に垂下するモチーフが磨消帯で描かれている。64～66は磨消帯による渦巻文・入組文が施文される土器である。

68～81は縄文時代後期初頭～前葉に属すると思われるが、文様構成の詳細については不明の破片である。68～78は磨消帯を持たず、地文上に沈線文を施文する。75、78は磨消縄文である。80・81は沈線文のみの施文である。

82～84・87～95は後期初頭に属すると思われる口縁部破片である。95を除けばすべて波状口縁である。82は緩い波状口縁で、波頂部に刻み目を持つ。口縁部に沿って二条の沈線が施文され、波頂下に沈線による渦巻文が配される。渦巻文の下にも文様が垂下していくようである。門前式の系譜上にある、やや後出の土器と思われる。87は口端は残っていないが、縦に断面三角形の隆帯が貼り付けられており、波頂部下と思われる。下端も横方向の隆帯で以下と区画されており、区画内に窓枠状の沈線文が施文されている。88は口縁に平行に3条の沈線が施文され、沈線より上は縄文が施文されていない。90・91では口縁に平行な２条の沈線が施文されるほか、波頂下に倒卵形や渦巻状の文様が施文されるようである。また91と93では波頂部に刻み目が施されている。95は平坦な口縁に突起がつくもの。突起には内・外面・側面に沈線が施され、平板化しているがひねりが加えられたような外見を持つ。口縁部下には無文帯があり、上部を沈線で、下部を隆帯で区画（剥落している）しており、頸部文様帯があるようである。

85・86は第1号竪穴住居跡の南東側で出土した土器である。ほぼ底部から胴部下半のみが残っている。接合しなかった同一個体の破片のひとつが85であり、上端に横方向の沈線があることからこの時期に含めた。86の底面には網代圧痕が見られる。

第40図96～98は同一個体である。波状口縁のようである。口縁部は折り返し状に肥厚し、縄文が

施文される。口端には円形竹管状工具により刺突が施文される。同様の刺突列が、肥厚した口端直下の無文部にも施文されている。99も折り返し状の口縁部である。やはり肥厚した部分には縄文が施文される。下端を沈線で区画し、以下は無文である。

100～105は縄文後期前葉十腰内Ⅰ式期以降に属すると思われるものである。100は平行沈線間に円形刺突列を施文する。102は磨いた器面に沈線を施文する壺の頸部である。103は上端部も沈線で、この下の沈線と平行沈線をなす。細い鋭角的な沈線である。下端の括弧状の沈線は草花状もしくはカニ爪状のモチーフにともなうものと考えられる。104は器面のカーブからしてミニチュア土器の可能性もあるが、直線的な平行沈線文である。105は口縁部が緩い波状になるのに対し、口縁下の平行沈線文は水平である。108は配石遺構東部の埋土から出土した第31図68と同一個体と思われる。赤彩が残り、口縁部下に横方向の隆帯が回り、隆帯の脇に沈線が施文されている。隆帯上と隆帯以下の体部には縄文が施文されている。また、内外面の口端には、赤彩の上にかかる形で黒い物質が付着している。106は縄文後期後葉に属すると思われる土器である。入組み状の磨消縄文が施文されている。

縄文晩期（第40図109～122・127）

第40図109～122および127は縄文晩期の土器である。109～115は鉢・浅鉢に類する器形のものである。109は口頸部が直立気味に立ち上がる浅鉢で、口端外側に刻み目を施す。内面上端に沈線と刺突が施文される。縄文晩期後葉の土器と思われる。110と113は同一個体である。鉢か台付鉢であろう。口端に刻み目をもち、頸部にはC字状の刺突列が施文される。内面には炭化物が多量に付着している。111は肩部が大きく張って、口端がくの字状に外反する。肩部までの間には2条の沈線が施文され、以下は縄文帯である。また、口端部内面にも沈線を持つ。内側は黒色の物質が付着している。口縁部は２個一組の突起状になっている。縄文晩期後葉の土器であろう。114は磨消縄文の文様の間を磨いて浮き彫り的な表現となっている。縄文晩期後葉の土器である。115は縄文晩期終末～弥生時代の土器である。

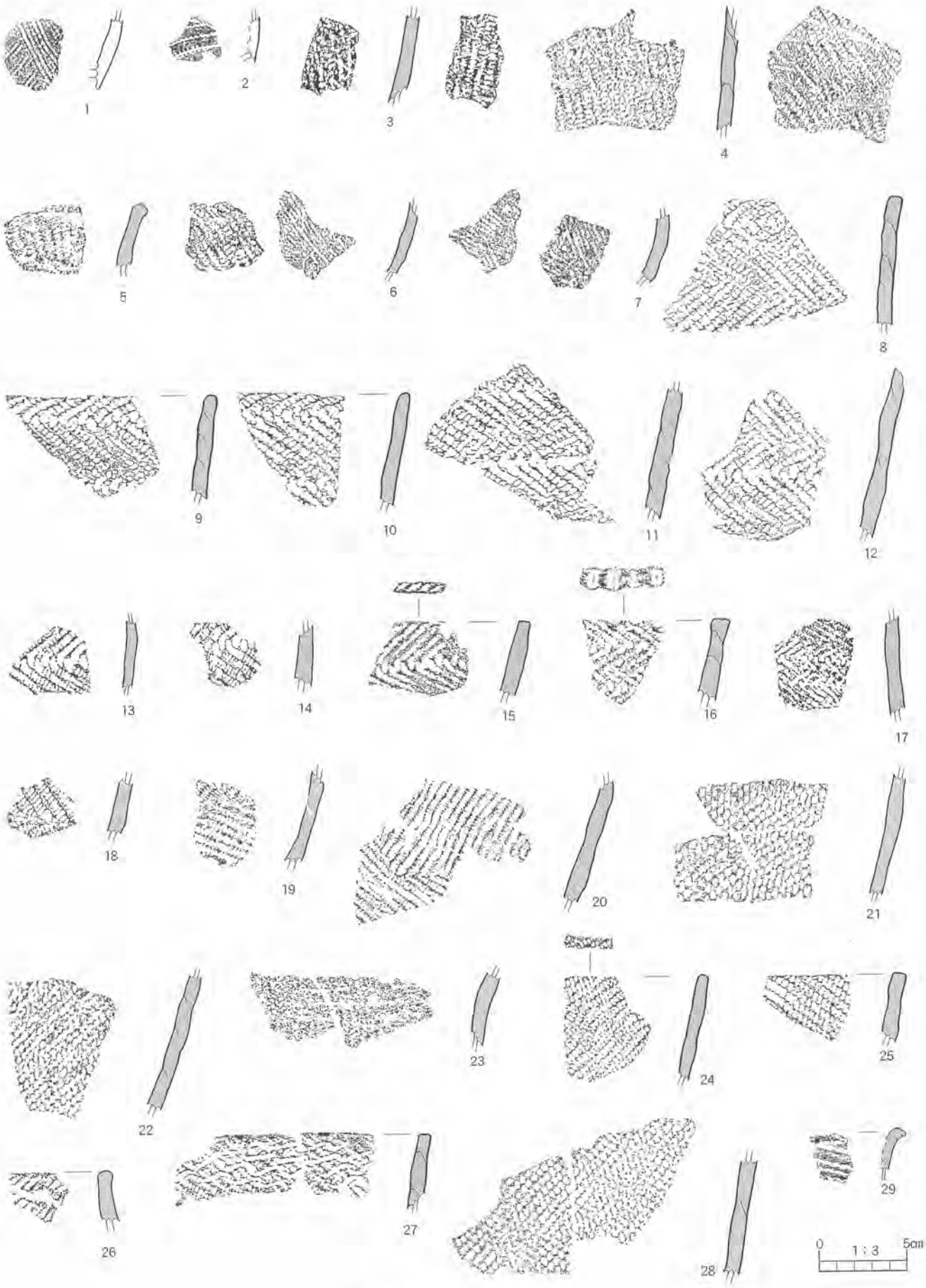
また、116～119は壺の口頸部破片である。116はよく研磨された無文の壺頸部で、口端部に段がある。117は嘴状の突起を持ち、内面は沈線が三叉文状になっている。縄文晩期後葉の土器と思われる。119は口縁上端の外面に２条の隆帯、内面に１条の沈線をめぐらす。120・121・127は壺の肩部。120の縄文帯内の沈線は、綾杉状と思われ、大洞A式と考えられる。127は、縄文の上からヘラ描きで工字文を施文する。大洞A式に属すると思われる。

122は縄文のみの深鉢であるが、器形や胎土から縄文晩期に属するものと考えられる。

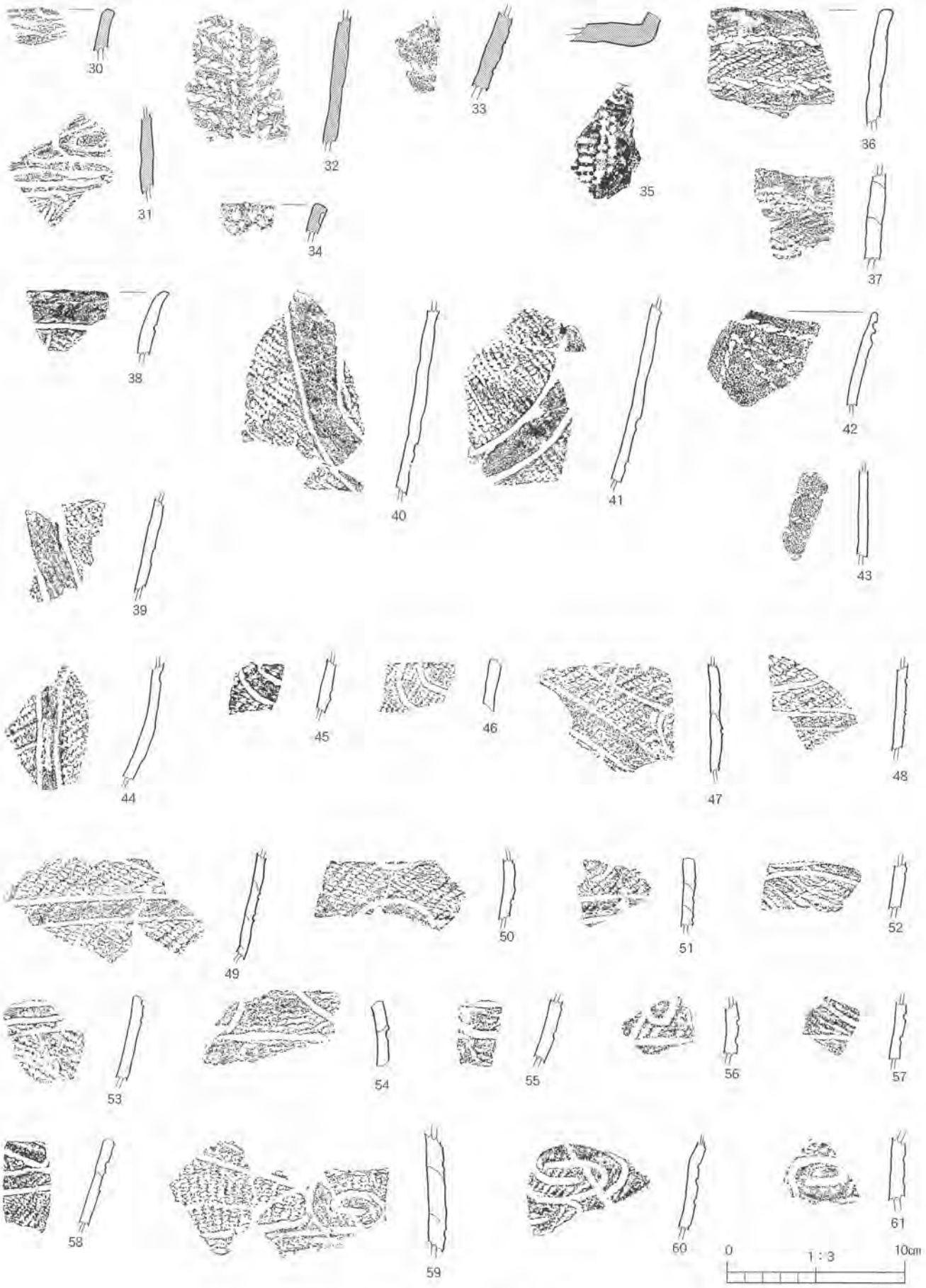
弥生時代後期(第40図124～126、128～130)

第40図123～125、128～130は弥生時代後期に属すると考えられる土器である。123～125は交互刺突文かそれに類する文様を持つ。124はその上から撚糸文を施文している。128～130は底部であるが、胴部が撚糸文の縦位施文であり、底部に沿って縄文・撚糸文を横位施文する特徴から、当該期のものと考えた。

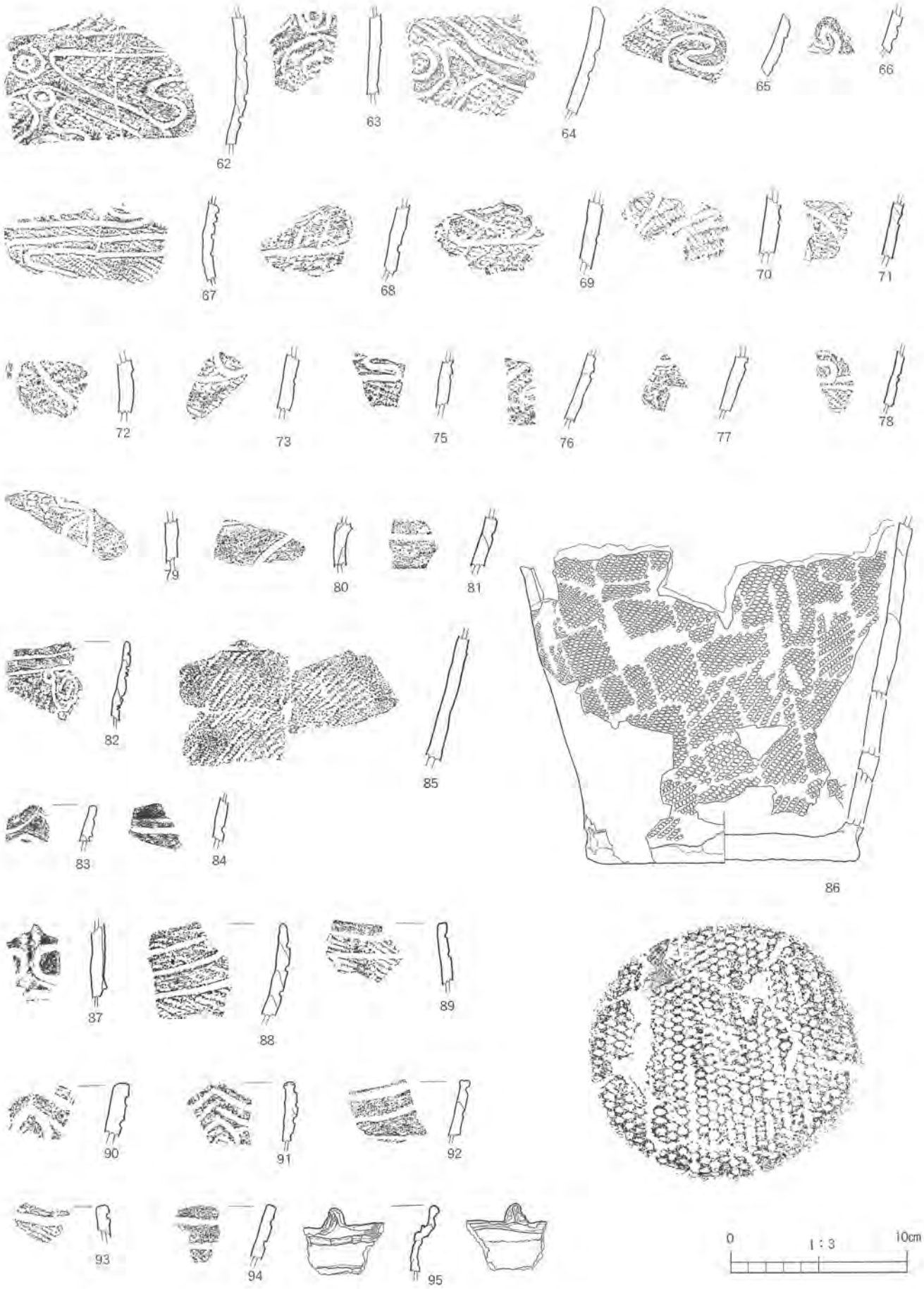
126は、底部に沿ってRL縄文を横位施文した後、胴部に節の幅の狭い0段多縄の可能性のあるRの撚糸文を縦回転施文している。底部に沿って施文されたRL縄文は縄の末端を上端にしている。このような



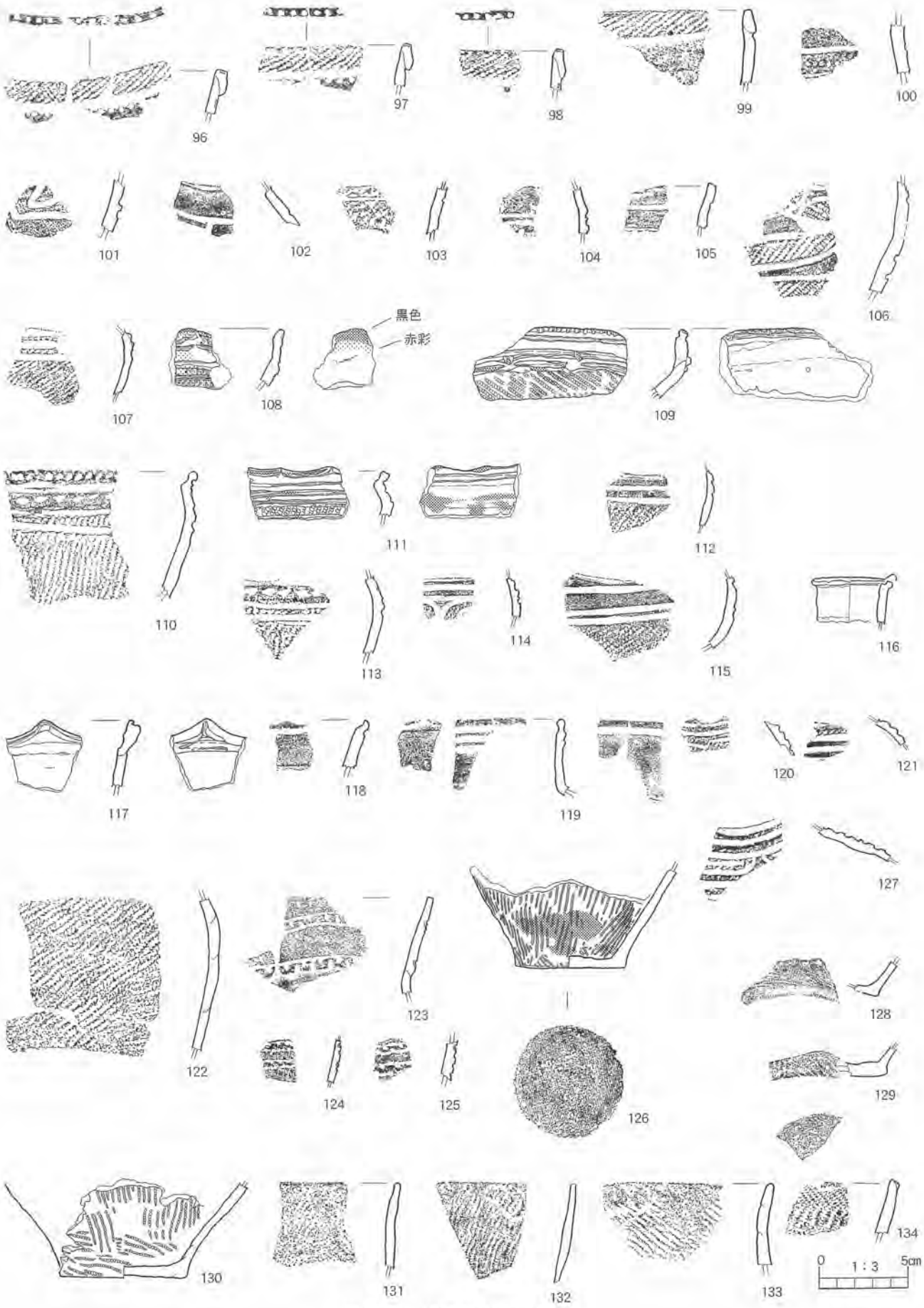
第37図　遺構外出土土器①



第38図　遺構外出土土器②



第39図　遺構外出土土器③



第40図　遺構外出土土器④

縄文は、赤穴式で口縁部や胴部に施文されることから、この底部も赤穴式に属するものと考えられる。底部中央寄りに僅かに縄文もしくは撚糸文が残っているが、縦横に丁寧に磨き消している。内面の胴部下端付近には工具を強く斜めに引き上げた痕跡が残っている。胴部はかなり大きく開いている。128はやや上げ底気味で、底部が大変薄い。130は間隔の広いやや不整なLの撚糸文が縦位施文されている。底部に沿っては横位施文しているが、こちらは胴部と同様撚糸文である。底部は磨かれている。胴部はかなり急な角度で開く。

その他の土器(第40図131～134、第41図135～161)

縄文土器、もしくは弥生土器と思われる粗製土器を集めた。

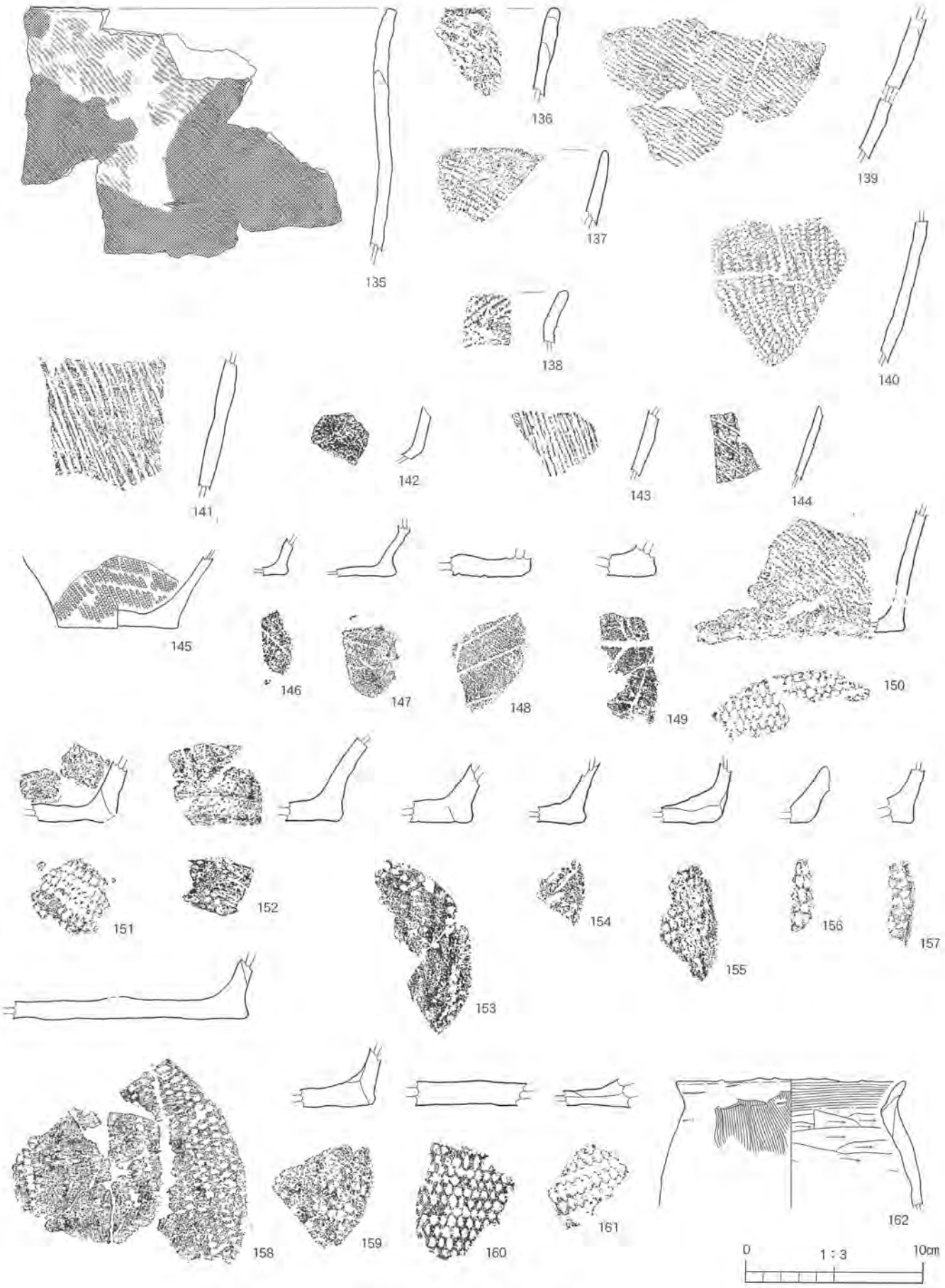
第40図131～134、第41図135～138は縄文を施文する口縁部破片である。131・132はともにごく薄い。131はやや外に開く器形である。132はとりわけ薄く、撚糸文を施文する。外面に炭化物が厚く付着する。弥生土器か。133はLの無節縄文を縦回転施文する。134は撚りの異なる単節の縄文原体を交互に横位施文した羽状縄文の土器片である。繊維は含まない。第41図135は大型の口縁部～胴部破片でLの無節縄文を縦位施文する。胎土にかなり大きな砂礫を含むが、内面は丁寧に磨かれている。136は無節縄文を縦回転施文した口縁部破片である。雲母や長石などのかなり大きい粒子を含む。137は単節RL縄文を横回転施文しており、これもかなり大きな砂礫を含む。139はかなり強く外反する口縁で、口縁部は単節LR縄文を横回転施文し、以下は縦回転施文する。

139～144は胴部破片である。139は単節LRを縦回転施文しているが、上端やや右寄りに一部0段多縄の縄文が施文されている。140はRL縄文の斜め回転施文。胎土は全体に砂が多い感じだが大粒の砂礫は少ない。141はLの撚糸文を縦回転施文している。内面は丁寧に磨かれ、光沢がある。142は下端で強く屈曲しているが、器形は不明である。外面は黒色で、磨かれている。143は櫛描文の土器片である。144は器壁が薄く、先のとがった工具で細い沈線を施文している。

145～161は底部である。145以外は何らかの圧痕を持つ。145は底面の磨きが精緻である。内面には底部と胴部の間をヘラ状工具で圧接した痕跡や、削りの痕跡が見られる。146～159・154は木葉痕を残す底部である。146は大変多く砂礫を含む胎土だが、底面の厚さは4㎜程度しかない。147は推定される底径が4cm強の小さな土器で、胴部は上端から内折するようである。胴部上端に横方向の細い沈線が残っている。底面は磨かれてやや中高になっており、主要な葉脈しか残っていない。148は内面がひどく剥落しているが、底面の木葉痕は比較的鮮明に残っている。149の木葉痕の葉脈はかなり太い。

150～153、155～161は網代圧痕を残す底部である。11点ある。

このうち、はっきり網代圧痕が残っているのは150・151・156・158・160・161で、これらは全て緯糸一本越え一本潜り一本送りである。底部を磨いているために網代圧痕が不明瞭になっているのが152・153・158・159である。155は摩滅のために圧痕が不明瞭となっている。152は胴部に指紋が残る。



第41図　遺構外出土土器⑤

図版番号	写真図版	位　置	出土層位	器　種	備　考
第37図1	19 - 2 - 1	B1区	Ⅴ層	縄文	貝殻腹縁文
第37図2	19 - 2 - 2	A3区	Ⅲ層	縄文	貝殻腹縁文・沈線文
第37図3	19 - 2 - 3	C1区	Ⅰ層	縄文	繊維混入　縄文－縄文
第37図4	19 - 2 - 4	B3区	Ⅲ層	縄文	繊維混入　縄文－縄文（RL）
第37図5	19 - 2 - 5	A2区東半	Ⅲ～Ⅴ層	縄文	繊維混入　縄文－縄文（RL）
第37図6	19 - 2 - 6	A1区	Ⅴ～Ⅵ層	縄文	繊維混入　縄文－縄文（R無節）
第37図7	19 - 2 - 7	A1区	Ⅴ層	縄文	繊維混入　縄文－縄文、6と同一個体
第37図8	19 - 2 - 8	B2区	Ⅲ～Ⅴ層	縄文	同一個体、繊維混入、羽状縄文（結束第一種）横位回転
第37図9	19 - 2 - 9	B2区	Ⅲ～Ⅴ層	縄文	
第37図10	19 - 2 - 10	B2区	Ⅲ～Ⅴ層	縄文	
第37図11	19 - 2 - 11	B2区	Ⅲ～Ⅴ層	縄文	
第37図12	19 - 2 - 12	B2区	Ⅲ～Ⅴ層	縄文	
第37図13	19 - 2 - 13	C1区	Ⅲ～Ⅴ層	縄文	繊維混入、羽状縄文（結束第一種横位、0段多縄）
第37図14	19 - 2 - 14	B2区	Ⅰ層	縄文	繊維混入、羽状縄文（結束第一種横位、0段多縄）
第37図15	19 - 2 - 15	B2区	Ⅲ～Ⅴ層	縄文	繊維混入、羽状縄文（結束第一種横位）口端に縄文
第37図16	20 - 1 - 16	A3区	Ⅲ層	縄文	繊維混入、羽状縄文（結束第一種横位）口端に刻み目
第37図17	20 - 1 - 17	C1区	Ⅲ～Ⅴ層	縄文	繊維混入、羽状縄文（結束第一種横位）
第37図18	20 - 1 - 18	B1区	Ⅲ-2、3層	縄文	繊維混入 撚りの異なる原体を用いた羽状縄文末端を別の条で止めた原体
第37図19	20 - 1 - 19	B1区	Ⅳ～Ⅶ層	縄文	繊維混入 撚りの異なる原体を用いた羽状縄文末端を別の条で止めた原体（0段多縄）
第37図20	20 - 1 - 20	C3区+B2区	Ⅵ～Ⅳ層間＋Ⅲ～Ⅴ層	縄文	繊維混入 撚りの異なる原体を用いた羽状縄文（0段多縄）
第37図21	20 - 1 - 21	B2区	Ⅲ～Ⅴ層	縄文	繊維混入　組縄縄文（単節）
第37図22	20 - 1 - 22	B2区	Ⅲ～Ⅴ層	縄文	繊維混入　組縄縄文（複節）
第37図23	20 - 1 - 23	A3区	Ⅲ～Ⅶ層	縄文	繊維混入、縄の束（交互に異なる撚り）の横回転施文
第37図24	20 - 1 - 24	A2区東半	Ⅲ～Ⅴ層	縄文	繊維混入　LR縄文横回転　口端に縄文
第37図25	20 - 1 - 25	B2区	Ⅲ～Ⅴ層	縄文	繊維混入　RLR縄文横回転
第37図26	20 - 1 - 26	C2区	Ⅰ～Ⅲ層	縄文	繊維混入　無節縄文?
第37図27	20 - 1 - 27	B1区	Ⅲ～Ⅴ層	縄文	繊維混入　口縁部結節回転文　胴部RL縄文横回転
第37図28	20 - 1 - 28	A2区＋B2区	Ⅰ～Ⅴ層上＋Ⅲ～Ⅴ層	縄文	繊維混入　組縄縄文（単節）
第37図29	20 - 1 - 29	B3区	Ⅴ層	縄文	繊維混入　R・L２本の条を用いた撚糸文
第38図30	20 - 2 - 30	A3区	Ⅲ～Ⅶ層	縄文	同一個体　繊維混入　木目状撚糸文
第38図31	20 - 2 - 31	A3区	Ⅲ～Ⅶ層	縄文	
第38図32	20 - 2 - 32	C2区	Ⅲ～Ⅴ層	縄文	縄文原体側面圧痕（撚りの異なる0段多縄の原体）
第38図33	20 - 2 - 33	A3区	Ⅲ層	縄文	繊維混入、原体側面圧痕（LR,RLの２種類）
第38図34	20 - 2 - 34	A3区	Ⅰ～Ⅴ層	縄文	繊維混入　縄の末端による刺突
第38図35	20 - 2 - 35	C1区	Ⅳ～Ⅴ層	縄文	底部編代圧痕　1本越え1本潜り1本送り 周縁ドーナツ状の磨き 胴部RL斜め回転
第38図36	20 - 2 - 36	A1区	Ⅴ層	縄文	緩い波状口縁　結節あるRL縄文横回転
第38図37	20 - 2 - 37	B3区西半	Ⅱ層	縄文	結節あるRL縄文横回転
第38図38	20 - 2 - 38	A1区	Ⅴ層	縄文	平縁、磨消縄文（LR縦回転、一部斜め）
第38図39	20 - 2 - 39	B1区	Ⅴ層	縄文	原体側面圧痕（LR,RLの２種類）
第38図40	20 - 2 - 40	A1区	Ⅴ層	縄文	同一個体、磨消縄文（LR縦回転、綾線文、沈線上への粘土紐の貼付
第38図41	20 - 2 - 41	A1区	Ⅴ層	縄文	
第38図42	20 - 2 - 42	B2区	Ⅰ～Ⅴ層	縄文	波状口縁　縄文原体側面圧痕（RL）
第38図43	20 - 2 - 43	A1区	Ⅰ～Ⅱ層	縄文	原体側面圧痕（LR,RLの２種類）
第38図44	20 - 2 - 44	A1区	Ⅴ層	縄文	磨消縄文（LR横回転）
第38図45	20 - 2 - 45	C1区	Ⅰ層	縄文	磨消縄文（RL縦回転）、磨消境界あいまい
第38図46	20 - 2 - 46	A3区	Ⅰ～Ⅲ層	縄文	磨消縄文（RL縦回転）、磨消境界あいまい
第38図47	20 - 2 - 47	C1区	Ⅳ層	縄文	同一個体　磨消縄文（RL縦回転）、磨消境界あいまい
第38図48	21 - 1 - 48	C1区	Ⅳ層	縄文	
第38図49	21 - 1 - 49	C1区	Ⅲ-3層＋Ⅶ層上面	縄文	磨消縄文（RL縦回転）　巾の狭い磨消部
第38図50	21 - 1 - 50	C1区	Ⅶ層	縄文	46、47と同一個体　磨消縄文（RL縦回転）、磨消境界あいまい
第38図51	21 - 1 - 51	C1区	Ⅲ～Ⅶ層上面	縄文	磨消縄文（RL縦回転）巾の狭い磨消部、磨消境界あいまい
第38図52	21 - 1 - 52	B1区	Ⅴ～Ⅶ層	縄文	磨消縄文（L縦回転）　巾の狭い磨消部
第38図53	21 - 1 - 53	A1区+B1区西半	Ⅲ～Ⅴ層	縄文	磨消縄文（LR縦回転）外面煤付着　巾の狭い磨消部
第38図54	21 - 1 - 54	B1区	Ⅲ～Ⅴ層上面	縄文	磨消縄文（L縦回転）　磨消境界あいまい
第38図55	21 - 1 - 55	B1区東半	Ⅲ～Ⅴ層	縄文	磨消縄文（L縦回転）、磨消境界あいまい
第38図56	21 - 1 - 56	B2区	Ⅰ～Ⅴ層	縄文	磨消縄文（RL縦回転）、磨消境界あいまい
第38図57	21 - 1 - 57	B2区	Ⅲ～Ⅴ層	縄文	磨消縄文（LR斜め回転）　外面一部炭化物付着
第38図58	21 - 1 - 58	C1区	Ⅲ～Ⅴ層	縄文	磨消縄文（RL縦回転）巾の狭い磨消部
第38図59	21 - 1 - 59	A3区	Ⅲ層	縄文	磨消縄文（RL縦～斜め回転）　渦巻状沈線文
第38図60	21 - 1 - 60	A1区	Ⅴ～Ⅵ層上面	縄文	境界のあいまいな磨消縄文（RL縦回転）縦に重畳する入組み沈線?
第38図61	21 - 1 - 61	B3区西半	Ⅲ層	縄文	磨消縄文（RL縦回転）　渦巻状沈線文
第39図62	21 - 2 - 62	C1区	Ⅰ～Ⅴ層	縄文	同一個体　巾狭の磨消縄文（RL縦回転）　二重円形沈線文　円形刺突文
第39図63	21 - 2 - 63	C2区	Ⅲ層	縄文	
第39図64	21 - 2 - 64	A1区	Ⅴ層	縄文	磨消縄文（LR縦回転）、磨消境界あいまい
第39図65	21 - 2 - 65	B1区東半	Ⅳ層～Ⅶ層	縄文	地文縄文（LR斜め回転）　入組状沈線文
第39図66	21 - 2 - 66	B2区	Ⅲ～Ⅴ層上面	縄文	入組状沈線文

第20表　遺構外出土土器　一覧表①

図版番号	写真図版	位　　置	出土層位	器　種	備　　考
第39図67	21 - 2 - 67	B3区東半、C3区	Ⅲ-3層	縄文	沈線文、磨消縄文（LR縦回転）
第39図68	21 - 2 - 68	B2区	Ⅰ～Ⅴ層	縄文	地文縄文（RL縦回転）　沈線文
第39図69	21 - 2 - 69	B3区	Ⅱ～Ⅲ層上面	縄文	地文縄文（RL縦回転）　沈線文
第39図70	21 - 2 - 70	B3区西半	Ⅲ層	縄文	地文縄文（RL縦回転）　沈線文
第39図71	21 - 2 - 71	B3区	Ⅲ層	縄文	地文縄文（RL縦回転）　沈線文
第39図72	21 - 2 - 72	B3区西半	Ⅲ層	縄文	地文縄文（RL縦回転）　沈線文
第39図73	21 - 2 - 73	B3区西半	Ⅲ層	縄文	地文縄文（RL縦回転）　沈線文
第39図75	21 - 2 - 75	B1区	Ⅴ層	縄文	沈線文、磨消縄文（LR縦回転）
第39図76	21 - 2 - 76	C1区	Ⅲ層	縄文	地文縄文（RL縦回転）　沈線文
第39図77	21 - 2 - 77	B3区西半	Ⅲ層	縄文	磨消縄文（RL縦回転）　沈線文
第39図78	21 - 2 - 78	B3区	Ⅱ～Ⅲ層上面	縄文	沈線文、磨消縄文（LR縦回転）
第39図79	21 - 2 - 79	A2区	Ⅰ～Ⅴ層	縄文	縄文（RL縦回転?）　沈線文
第39図80	21 - 2 - 80	B3区	Ⅲ層	縄文	沈線文
第39図81	21 - 2 - 81	B3区西半	Ⅲ層	縄文	平行沈線文
第39図82	21 - 2 - 82	サブトレ	サブトレンチ	縄文	波状口縁　波頂部に刻み目2個　沈線文　RL縄文（文様にあわせて異方向に施文）
第39図83	21 - 2 - 83	B3区西半	Ⅲ層	縄文	波状口縁　沈線文
第39図84		A1区	Ⅴ～Ⅵ層上面	縄文	沈線文
第39図85	21 - 2 - 85	B3区東半	Ⅲ・Ⅶ層	縄文	磨消縄文（RL縦回転）
第39図86	24 - 86	B3区東半	Ⅲ・Ⅶ層	縄文	縄文（RL縦回転）　底部網代圧痕
第39図87	22 - 1 - 87	B3区西半	Ⅲ層	縄文	口縁部文様帯、隆帯区画（断面三角形）　窓枠状沈線文
第39図88	22 - 1 - 88	B2区	Ⅲ・Ⅴ層	縄文	波状口縁　地文縄文（LR縦回転）　平行沈線文
第39図89	22 - 1 - 89	C1区	Ⅲ層	縄文	波状口縁　地文縄文（L縦回転）平行沈線文　口縁最上部無文
第39図90	22 - 1 - 90	B3区西半	Ⅲ層	縄文	波状口縁　沈線文
第39図91	22 - 1 - 91	不明	表採	縄文	波状口縁　波頂部に刻み目　沈線文
第39図92	22 - 1 - 92	B1区東半	Ⅲ・Ⅴ層	縄文	波状口縁　沈線文
第39図93	22 - 1 - 93	C1区	Ⅲ層	縄文	波状口縁　波長部に刻み目　口縁に平行な沈線　沈線以下縄文（LR縦回転）
第39図94	22 - 1 - 94	B3区東半	Ⅲ層	縄文	波状口縁　沈線文　口縁部磨消縄文（LR縦回転）
第39図95	22 - 1 - 95	B3区	Ⅲ層	縄文	口縁部突起（表・裏・左側に沈線）、沈線文・隆帯による文様帯区画、内面に沈線
第40図96	22 - 1 - 96	B1区東半	Ⅲ・Ⅴ層	縄文	同一個体　緩やかな波状口縁（折り返し状）、肥厚部に縄文（LR縦回転）口端と肥厚部下に円形刺突列
第40図97	22 - 1 - 97	B1区東半	Ⅴ・Ⅶ層上面	縄文	
第40図98	22 - 1 - 98	B1区東半	Ⅶ層	縄文	
第40図99	22 - 1 - 99	B1区東半	Ⅴ層	縄文	折り返し口縁　肥厚部に縄文（L横回転）、口縁下に沈線、以下無文
第40図100	22 - 1 - 100	B3区	Ⅲ～Ⅴ層	縄文	平行沈線文間に円形刺突列
第40図101	22 - 1 - 101	B3区	Ⅲ層	縄文	磨消縄文帯モチーフ（RL横回転）
第40図102	22 - 1 - 102	B3区西半	Ⅲ層	縄文	壺　沈線文
第40図103	22 - 1 - 103	C3区	サブトレンチ	縄文	平行沈線文、草花文?地文縄文（LR横回転）
第40図104	22 - 1 - 104	B3区西半	Ⅲ層	縄文	沈線文
第40図105	22 - 1 - 105	B3区西半	Ⅲ層	縄文	波状口縁　磨消縄文帯（LR斜め回転）
第40図106	22 - 1 - 106	B2区	Ⅲ・Ⅴ層	縄文	入組状文（地文羽状縄文、LR＋RL）
第40図107	22 - 1 - 107	B3区	Ⅰ層	縄文	隆帯＋沈線、縄文（LR縦回転）
第40図108	22 - 1 - 108	C3区	Ⅲ層	縄文	赤彩、黒色彩?口縁部に突起、刻み目?隆帯（縄文RL横回転施文）、沈線、磨消縄文帯（RL横回転）
第40図109	22 - 1 - 109	B3区	Ⅲ層	縄文	口端に刻み目 沈線文 縄文（RL横回転）隆帯上に沈線・突起 内面に沈線、刺突
第40図110	22 - 1 - 110	C1区	Ⅰ層	縄文	口端に刻み目 頸部にC字状刺突列、平行沈線、縄文（RL斜め回転）内面と口縁部の一部に炭化物、114と同一個体
第40図111	22 - 1 - 111	B2区	Ⅰ・Ⅴ層	縄文	口端に沈線　頸部・体部に沈線文　縄文（LR横回転）口縁部内面に沈線、内面に炭化物付着
第40図112	22 - 2 - 112	B3区東半	Ⅲ層	縄文	平行沈線、縄文（LR横回転）
第40図113	22 - 1 - 113	C1区	Ⅰ層	縄文	頸部にC字状刺突列、平行沈線、縄文（RL斜め回転）内面の一部に炭化物　110と同一個体
第40図114	22 - 2 - 114	C3区	Ⅰ層～Ⅲ層上面	縄文	平行沈線文、浮彫り的な磨消縄文（LR横回転）
第40図115	22 - 2 - 115	C3区	Ⅱ層～Ⅲ層	縄文	変形工字文　平行沈線文　縄文（LR横回転）
第40図116	22 - 2 - 116	B2区	Ⅰ・Ⅴ層	縄文	壷口頸部
第40図117	22 - 2 - 117	C1区	Ⅰ層	縄文	口縁部に突起、上面に沈線　内面に沈線、突起部分を三角形状に彫刻
第40図118	22 - 2 - 118	C2区	Ⅰ層～Ⅲ層上面	縄文	壷口頸部　沈線文　口端を押さえて突起状に作り出す　内面に沈線
第40図119	22 - 2 - 119	B3区	Ⅰ層～Ⅲ層上面	縄文	壺口頸部、上端に隆帯　内面に沈線
第40図120	22 - 2 - 120	C3区	Ⅰ層～Ⅲ層上面	縄文	地文縄文（LR横回転）　平行沈線、綾杉状沈線文
第40図121	22 - 2 - 121	不明	不明	縄文	平行沈線
第40図122	22 - 2 - 122	B3区	Ⅲ・Ⅴ層	縄文	縄文（LR横回転）　外面に煤付着
第40図123	22 - 2 - 123	C3区	Ⅲ層	弥生	交互刺突文（円形刺突）　口縁部に擦痕
第40図124	22 - 2 - 124	C3区	Ⅲ層	弥生	交互刺突文（円形刺突）　撚糸文（L、複数方向に回転）
第40図125	22 - 2 - 125	C3区	Ⅰ層	弥生	交互刺突文（円形刺突）
第40図126	24 - 126	C1区	Ⅲ層	弥生	胴部撚糸文R縦回転　底部付近撚糸文R横回転　底面撚糸文施文後研磨
第40図127	22 - 2 - 127	B2区	Ⅰ層～Ⅲ層上面	縄文	工字文　縄文（LR横回転）
第40図128	22 - 2 - 128	B3区東半	Ⅲ層	縄文	胴部底面付近撚糸文（R横回転）　底面磨きの痕跡
第40図129	22 - 2 - 129	C2区	Ⅰ層～Ⅲ層上面	弥生	胴部撚糸文R縦回転　底部付近RL縄文横回転　底面研磨
第40図130	24 - 130	C1区	Ⅴ～Ⅶ層	弥生	胴部撚糸文R縦回転　底部付近撚糸文R横回転　底面研磨
第40図131	22 - 2 - 131	C1区	Ⅲ層	縄文	縄文（RL縦回転）
第40図132	22 - 2 - 132	C1区	Ⅲ・Ⅴ層	弥生?	撚糸文（R　0段多縄　縦回転）　外面に炭化物付着

第21表　遺構外出土土器　一覧表②

図版番号	写真図版	位　置	出土層位	器　種	備　　考
第40図133	22 - 2 - 133	C3区	サブトレンチ	縄文	縄文（L縦回転）
第40図134	22 - 2 - 134	不明	表採	縄文	羽状縄文（RL+LR）結束なし、横回転
第41図135	23 - 1 - 135	B3区西半	Ⅲ層	縄文	縄文（L縦回転）、煤付着
第41図136	23 - 1 - 136	C3区	Ⅲ層	縄文	縄文（L縦回転）
第41図137	23 - 1 - 137	B3区	Ⅲ層	縄文	縄文（LR斜め回転）
第41図138	23 - 1 - 138	C1区	Ⅲ層	縄文	LR縄文　口縁上部縦回転　口縁下横回転　左下端に結節?
第41図139	23 - 1 - 139	B2区	Ⅰ～Ⅲ・Ⅴ層	縄文	縄文（LR縦回転、一部0段多縄）
第41図140	23 - 1 - 140	C3区	Ⅰ層～Ⅲ層上面	縄文	縄文（RL斜め回転）
第41図141	23 - 1 - 141	A2区	Ⅴ・Ⅵ層	縄文	撚糸文（L縦回転）
第41図142	23 - 1 - 142	B3区東半	Ⅳ層上	縄文	浅鉢?無文
第41図143	23 - 1 - 143	B2区	Ⅰ層	縄文	櫛描き状文
第41図144	23 - 1 - 144	B1区西半	Ⅴ層	弥生?	斜位の平行沈線
第41図145	24 - 145	B2区	Ⅰ層～Ⅲ層	縄文	底面丁寧に研磨
第41図146	23 - 1 - 146	B1区東半	Ⅲ層	縄文	底部木葉痕
第41図147	23 - 1 - 147	B3区	Ⅲ・Ⅴ層	縄文	底部木葉痕、底面研磨
第41図148	23 - 2 - 148	C2区	Ⅲ層	縄文	底部木葉痕
第41図149	23 - 2 - 149	A1区	Ⅲ層	縄文	底部木葉痕
第41図150	23 - 2 - 150	B3区東半+B2区	Ⅲ層＋Ⅶ層上面	縄文	底部網代圧痕
第41図151	23 - 2 - 151	B3区	Ⅶ層上面	縄文	繊維混入　底部網代圧痕
第41図152	23 - 2 - 152	B1区	Ⅲ・Ⅴ層	縄文	底部網代圧痕　底面研磨
第41図153	23 - 2 - 153	B2区	Ⅰ～Ⅲ・Ⅴ層	縄文	底部網代圧痕　底面研磨
第41図154	23 - 2 - 154	C3区	サブトレンチ	縄文	底部木葉痕
第41図155	23 - 2 - 155	B2区	Ⅰ～Ⅲ・Ⅴ層	縄文	底部網代圧痕
第41図156	23 - 2 - 156	C3区	Ⅲ層	縄文	底部網代圧痕
第41図157	23 - 2 - 157	B3区西半	Ⅲ層	縄文	底部網代圧痕
第41図158	23 - 2 - 158	B1区西半	Ⅴ層	縄文	底部網代圧痕　底面研磨
第41図159	24 - 159	B1区東半	Ⅶ層	縄文	底部網代圧痕　底面研磨
第41図160	24 - 160	A1区	Ⅰ～Ⅲ・Ⅴ層	縄文	底部網代圧痕
第41図161	24 - 161	B3区西半	Ⅲ・Ⅴ層	縄文	底部網代圧痕
第41図162	24 - 162	B1区	Ⅰ～Ⅲ・Ⅴ層	土師器	

第22表　遺構外出土土器　一覧表③

土師器(第41図162)

第41図162は口縁部やや直立気味の土師器甕である。摩滅が激しいが、胴部外面には上から下へナデの痕跡が見られる。内面の調整は横方向のヘラケズリである。胎土には径５㎜以上の砂礫を含む。肩部から上がかなり厚く作られるのに比べ、口縁部は薄くなっている。平安時代に属するものと考えられる。

石器（第42図166～第45図198）

第42図166～175は石鏃である。166～171、173～175は無茎鏃である。そのうち、166～171・174は平基、173は凹基、175は凸基である。172は破損品であるが有茎鏃と思われる。

166は完形品で、正面両側縁と裏面基部に微細剥離が見られる。167は先端部と基部の両端を欠損している。両側縁に微細な剥離と欠けがある。168は裏面に主要剥離面を残す石鏃で、左側縁と先端を欠損している。169はやや分厚く裏面の加工が粗い。先端部を欠損し、左側縁に微細剥離が見られる。170は分厚い石鏃だが緻密な石質で、押圧剥離の単位が大きい。先端部欠損、先端部側縁に微細剥離あり。171は小型の石鏃で、先端部と基部右側を欠損している。172は大変薄い剥片を加工しており、わずかな側縁のみしか加工していない。左側を欠損している。173は両側縁に微細剥離が見られる。基部両端を欠損する。174は左側縁先端部を欠損している。175は厚みがあり、先端・両側縁に微細剥離が見られる。全て両面を加工しているが、166・167～169・171は主要剥離面を残す。

第42図176・178・179は縦型石匙である。178・179は完形品で、176は刃部の先端部である。176の加工は両側縁に鋭角の側と鈍角の側があり、そのうち鋭角の側は裏面からも加工されているなど、他の縦型石匙と同様の傾向がある。178はつまみ部が左に寄っている。両側縁の刃部に微細剥離が見られる。179も両側縁に微細剥離が見られる。

177は加工の見られる剥片(RF)である。両側縁から剥離を施しており、裏面右側縁にわずかに微細剥離が見られる。

第43図180・181は削器である。180は横型石匙に近い形状だがつまみ部を作っていない。側縁の剥離面はすりガラス状であるのに対し、刃部の剥離面は油膜状の光沢を持っており、その差が際立っている。微細剥離は刃部左側で目立つ。181は削器の欠損品である。正面左端は刃部の加工後に欠損している。刃部には微細剥離があり、使用されたと考えられる。

182・183・184は横型石匙である。182は小型だが、上下の辺がともに刃部加工されており、微細剥離を有することから、石匙の欠損品を再加工した可能性がある。183は正面のみ刃部加工されている。刃部の微細剥離は正面右端がやや目立つ。184は未製品と思われる。

185～187、189・193・194は掻器である。185と187は正面左側縁と下端を正面からのみ刃部加工する点で類似する。微細剥離は左側縁・下端の両方に見られる。186は両側縁が加工されている。正面左側縁は両面から加工されているが、右側縁は裏面のみ加工である。両側縁に微細剥離が見られる。第44図189は正面下端と左側縁に刃部を持つ。刃部は主に正面から加工されており、微細剥離が見られる。193は主要な刃部加工は正面下端であるが、断面に見られる三つの稜のすべてに微細剥離が見られる。194は刃部加工後に正面左下端を欠損している。残存している刃部には微細剥離が見られる。

188は石錐である。先端部の稜が磨滅しており、回転による横方向の線状痕がある。裏面下部では他の剥離を切る形で稜が樋状に剥離されている。

190・191は使用痕のある剥片(UF)である。194の正面右側縁と下端には微細剥離が見られる。楔形石器として使用された可能性がある。191は下端に微細剥離が見られる。

192は楔形石器である。正面左側縁は自然面である。

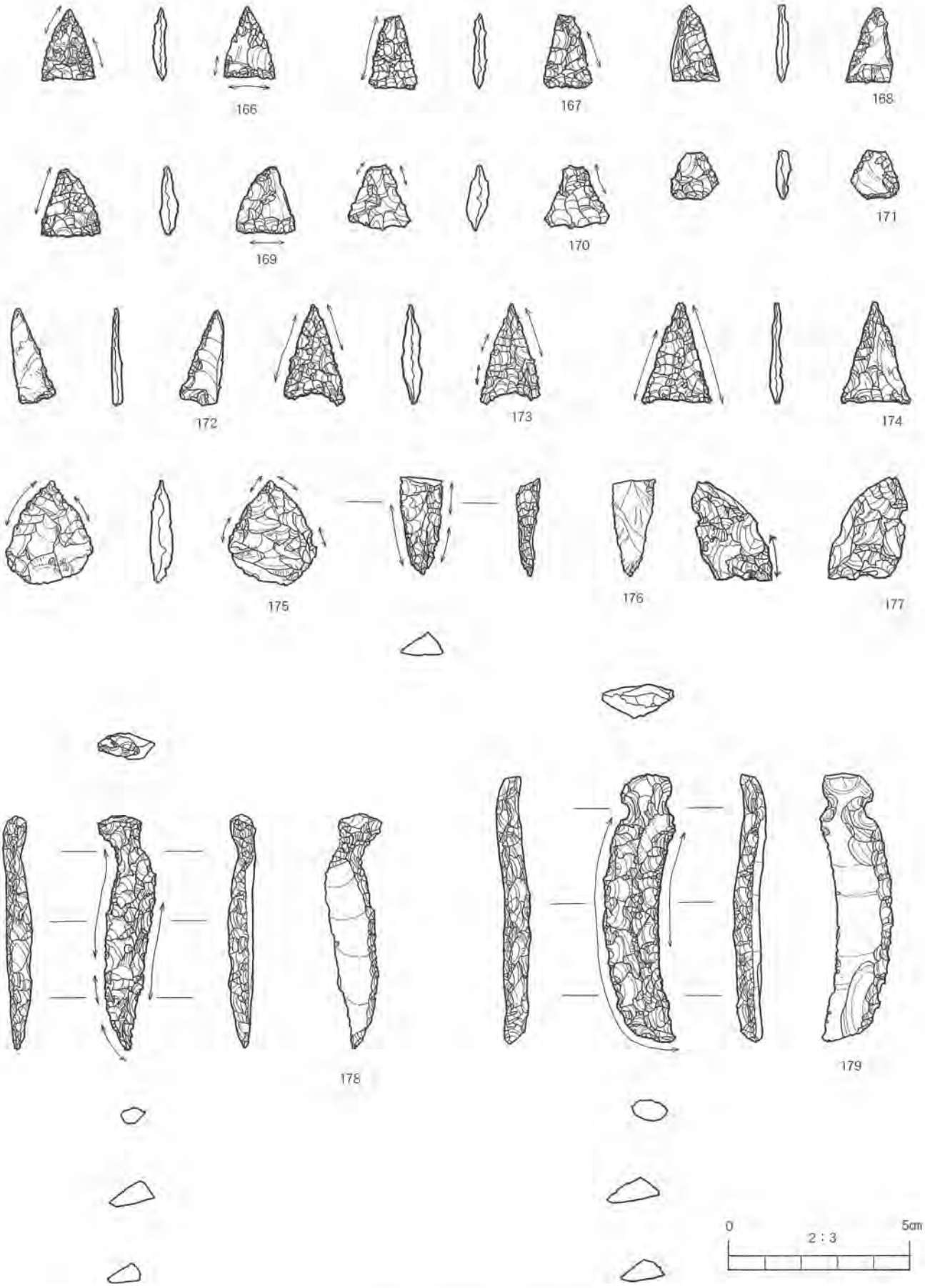
195は小型の打製石斧。両側縁の加工は両面から行われている。刃部は正面からのみ加工されている。剥片石器に使うようなきめの細かい石材である。

第45図196は磨製石斧だが、磨かれているのは正面刃部のみである。197は敲打磨石で、側面には調整磨面が形成されている。198は石皿片である。

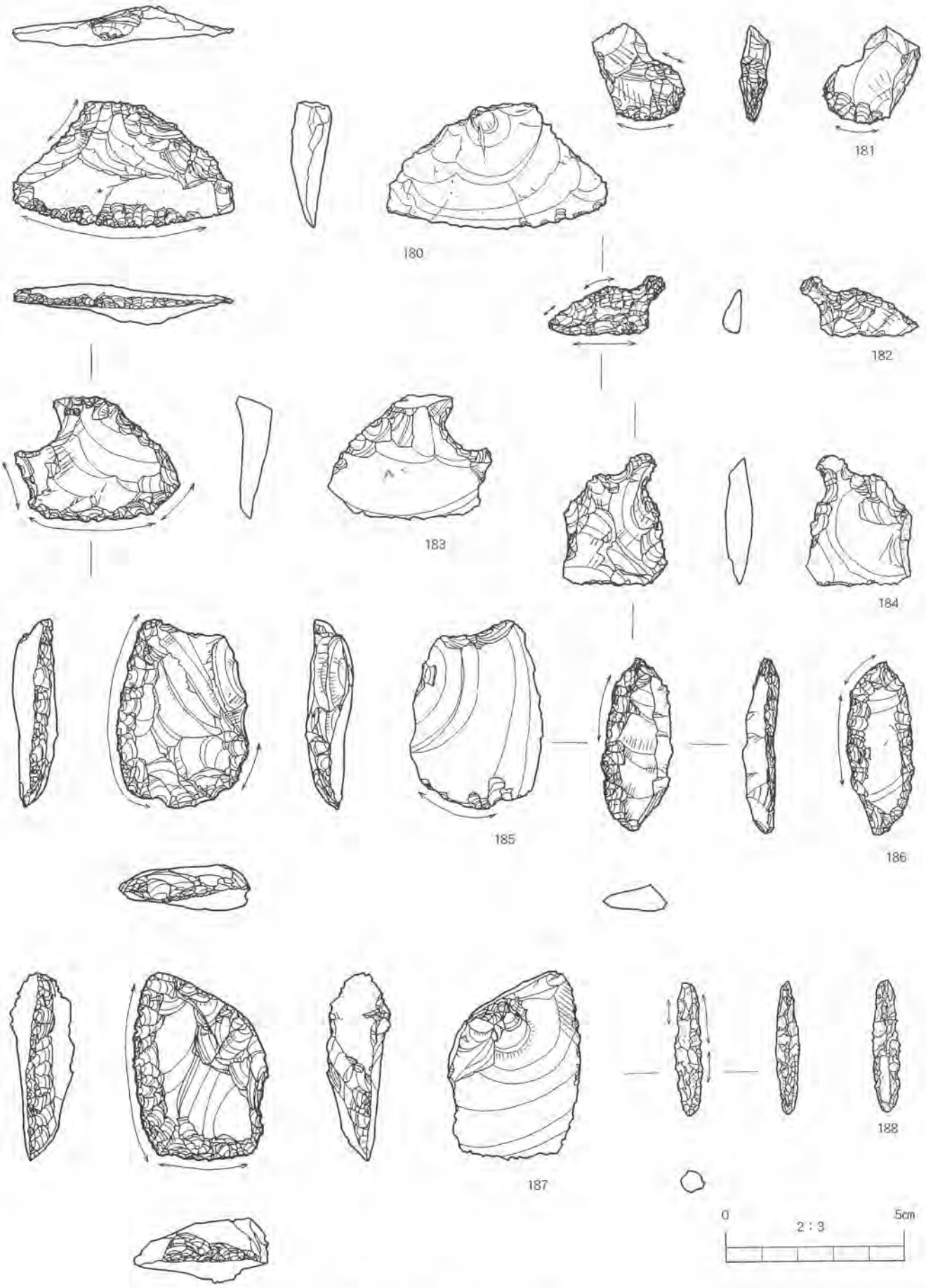
ミニチュア土器（第45図　199･200）

第45図199･200はミニチュア土器の底部である。199は胴部に縄文が施文されている。器面は丁寧になでられている。

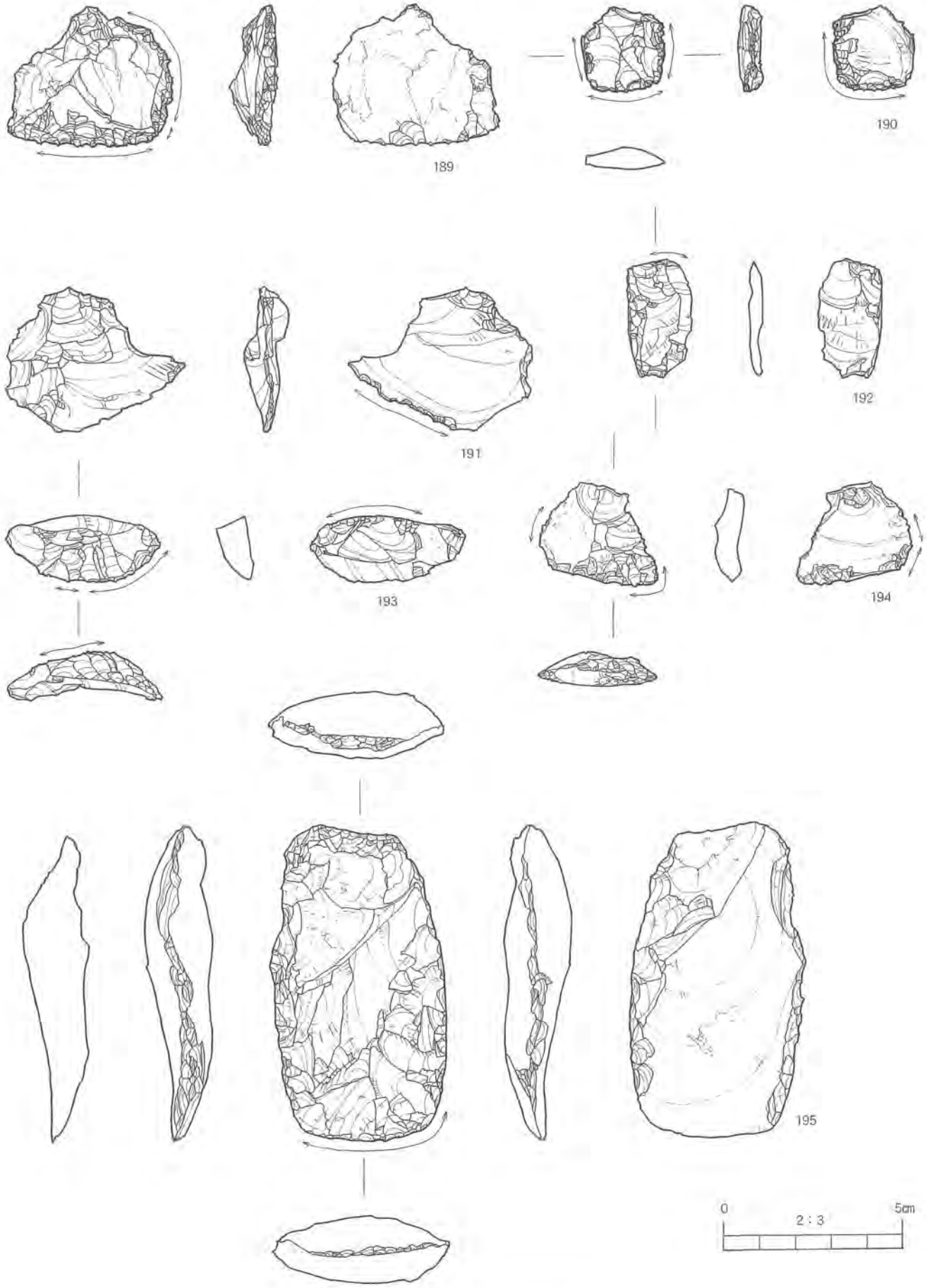
200は底部が厚く、内面はすり鉢状になっている。無文で、外面には縦方向になでた痕跡がある。底部にあたる部分が大変厚く、蓋の可能性も考えられる。



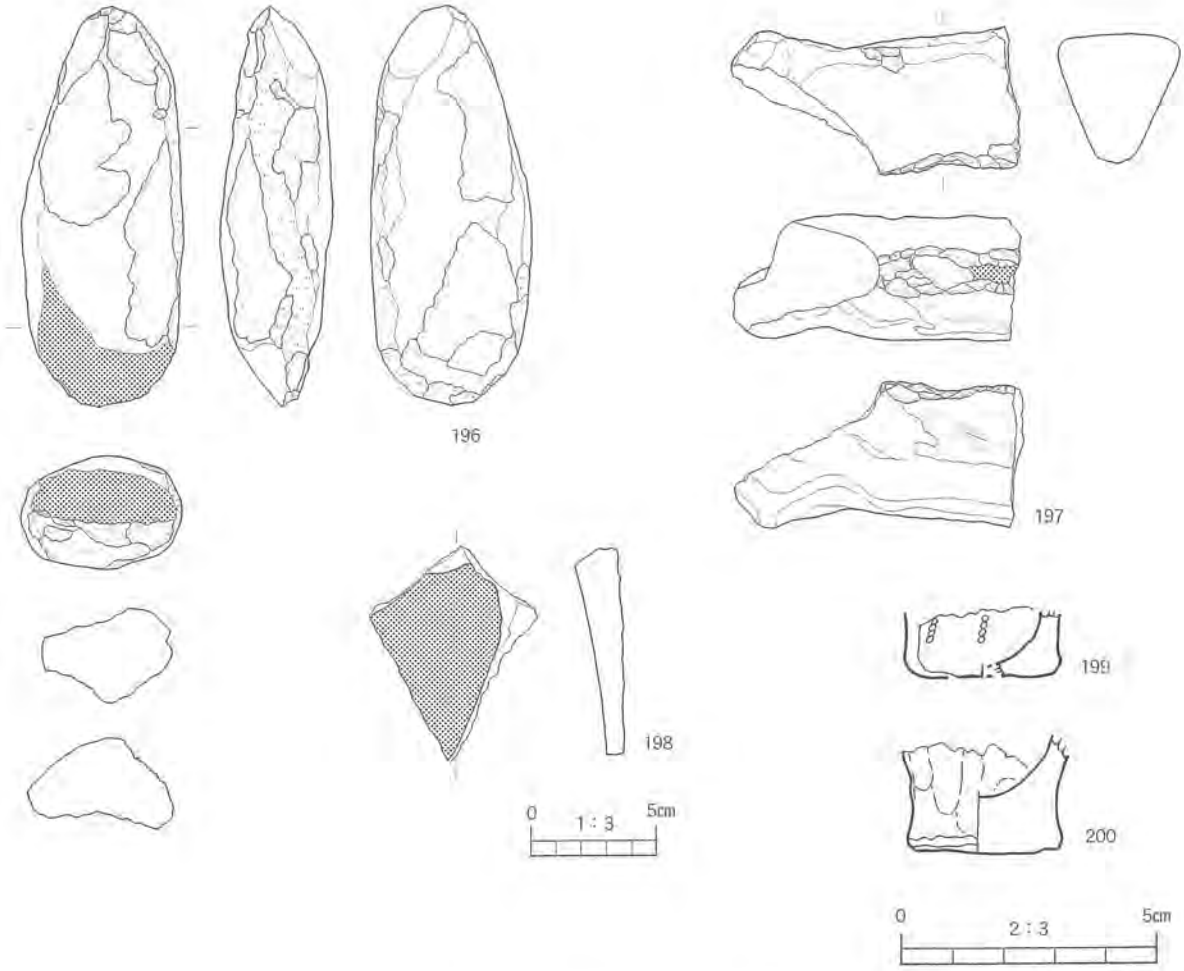
第42図　遺構外出土石器①



第43図　遺構外出土石器②



第44図　遺構外出土石器③



第45図　遺構外出土石器④・土製品

4　まとめ

今回の調査では、これまでの菅ノ沢遺跡の知見に加え、縄文時代後期初頭～前葉の配石遺構が検出された。また、縄文時代後期初頭～前葉の竪穴住居跡が1棟、晩期後葉の竪穴住居跡が1棟検出された。第５号土坑跡や第１号埋設土器遺構など、遺物の量は少ないながらも弥生時代後期の遺構も検出された。

竪穴住居跡について

本調査においては２棟の竪穴住居跡が検出された。

第１号竪穴住居跡は縄文時代後期初頭に属する。配石遺構に切られているため詳細は不明であるが、炉跡が発見されず、主柱穴と考えられる柱穴は２基のみである。周溝は検出されなかった。

第2号竪穴住居跡は縄文晩期後葉に位置付けられる。炉はほぼ円形の石囲炉である。柱穴らしい掘り込みは２基のみで浅く、壁際に掘られている。周溝は検出されなかった。

図版番号	写真図版	出土地区	出土層位	器　　種	石　　材
第42図166	25 - 1 - 166	A3区	Ⅲ～Ⅴ層	石鏃	青灰色不透明・光沢なし
第42図167	25 - 1 - 167	A2区	Ⅴ層下～Ⅵ層	石鏃	黒灰色不透明・やや光沢あり
第42図168	25 - 1 - 168	B2区東半	Ⅴ・Ⅶ層	石鏃	黒色不透明、光沢なし
第42図169	25 - 1 - 169	B3区西半	Ⅲ層	石鏃	黒灰色不透明、光沢なし、白色の縞が入る
第42図170	25 - 1 - 170	A3区	Ⅰ・Ⅴ層	石鏃	不透明、ガラス状の光沢あり　白色斑あり
第42図171	25 - 1 - 171	A3区	Ⅰ・Ⅴ層	石鏃	暗灰色　不透明　光沢なし　きめが粗い
第42図172	25 - 1 - 172	B1区東半	Ⅲ・Ⅴ層	石鏃未製品	暗灰色　不透明　光沢なし
第42図173	25 - 1 - 173	B3区	Ⅰ～Ⅲ層上面	石鏃	灰黄褐色不透明、微細な穴あり
第42図174	25 - 1 - 174	B2区	Ⅰ	石鏃	暗灰色不透明、光沢なし。白色粒子。
第42図175	25 - 1 - 175	A2区	表採	石鏃	青灰色不透明、光沢なし。緻密。
第42図176	25 - 1 - 176	B1a	Ⅲ-2層	縦型石匙先端部	暗灰色不透明　光沢ややあり
第42図177	25 - 1 - 177	B3区	Ⅰ～Ⅲ層上面	RF	黄白色～クリーム灰色半透明、光沢あり
第42図178	25 - 1 - 178	C1区	Ⅲ～Ⅴ層	縦型石匙	黒褐色不透明光沢なし
第42図179	25 - 1 - 179	A1区	Ⅴ層	縦型石匙	暗灰色不透明、光沢あり。
第43図180	25 - 2 - 180	B2区	Ⅶ層上面	削器	黄褐色半透明、原礫面橙色
第43図181	25 - 2 - 181	B3区東半	Ⅲ層	削器	灰色～灰白色不透明緻密で光沢あり
第43図182	25 - 2 - 182	B1区	Ⅲ・Ⅴ層	横型石匙	灰色不透明　光沢なし　所々に暗色の結晶状構造あり。
第43図183	25 - 2 - 183	B3区	Ⅲ層	横型石匙	灰色不透明　光沢なし　微小孔あり。
第43図184	25 - 2 - 184	C3区	サブトレンチ	横型石匙未製品	暗褐色不透明、光沢なし。きめ粗い。
第43図185	25 - 2 - 185	A3区	Ⅲ層	掻器	暗褐色不透明光沢ややあり、緻密
第43図186	25 - 2 - 186	A3区	Ⅰ～Ⅲ層	掻器	暗緑灰色 不透明 斑状構造あり、左側は酸化して赤褐色になっている
第43図187	25 - 2 - 187	B1区東半	Ⅲ・Ⅴ層上面	掻器	暗褐色（原礫面付近黄褐色）不透明緻密、光沢ややあり
第43図188	25 - 2 - 188	A2区?	Ⅴ層	石錐	暗灰色不透明、光沢なし
第44図189	26 - 1 - 189	B3区東半	Ⅲ層	掻器	灰赤色不透明、光沢なし、白色の斑・縞あり。
第44図190	26 - 1 - 190	B1区	Ⅴ層	UF	灰黄褐色～黄褐色　不透明　光沢なし
第44図191	26 - 1 - 191	A1区	Ⅰ～Ⅴ層	UF	灰色不透明　光沢なし
第44図192	26 - 1 - 192	B1区西半	Ⅲ・Ⅴ層	楔形石器	青灰色・暗青灰色斑状、不透明　光沢なし
第44図193	26 - 1 - 193	B3区東半	Ⅲ層	掻器	黄灰色不透明　光沢あり、緻密
第44図194	26 - 1 - 194	B1区西半	Ⅲ・Ⅴ層	掻器	灰色～暗褐色の縞状構造あり、不透明、光沢ややあり
第44図195	26 - 1 - 195	A2区東側	2～3層	打製石斧	赤褐色～青灰色、不透明　光沢なし。きめが細かい。
第45図196	26 - 2 - 196	B2区	Ⅲ・Ⅴ層	磨製石斧	青灰色堆積岩
第45図197	26 - 2 - 197	A2区	不明	敲打磨石	橙色堆積岩、粒子細かい。
第45図198	26 - 2 - 198	B2区	Ⅲ・Ⅴ層	石皿片	黄灰色砂岩

第23表　遺構外出土石器一覧表

図版番号	写真図版	位　　置	出土層位	器　　種	備　　考
第45図199		C3区	Ⅱ・Ⅲ層	ミニチュア土器	胴部に縄文施文
第45図200	24－200	B3区西半	Ⅲ・Ⅴ層	ミニチュア土器	底部が厚い。

第24表　遺構外出土ミニチュア土器一覧表

ここでは、縄文時代後期初頭の竪穴住居跡について類例を検討する。同じ近内川流域の大又沢Ⅱ遺跡では、調査された竪穴状遺構３基のうち、第３号竪穴状遺構が縄文時代後期前葉とされている。石囲炉を持つ竪穴状遺構であるが、柱穴は検出されていない。これについて報告者は、角礫が多い土層上に構築されているため柱穴を掘るのに不向きであり、柱穴が無い遺構か浅い壁柱穴が回る構造だったのではないかと報告している。

宮古市白石遺跡では第4次・5次調査に伴って後期初頭～前葉の竪穴住居跡が調査されている。このうち第22・24～27号竪穴住居跡が後期初頭に属すると報告されている。また第15号竪穴住居跡炉埋設土器が門前式、床面出土資料が後期前葉と位置付けられている。このうち調査面積や残存の度合いにより、竪穴住居跡の形態が明確なのは第15号・22号・24号竪穴住居跡である。

第15号竪穴住居跡は6.8m×5.4mで主軸に対しほぼ左右対称の9基の主柱穴を持つ。炉は2基あり、炉Aは斜位土器埋設複式炉である。炉Bは石組炉を地床炉に作り変えた可能性が示唆されている。第22号竪穴住居跡は全体の約1/2の調査で、長軸8.6mを測る。住居平面形は多角形と考えられており、調査範囲内に主柱穴は5基とされている。調査範囲内では炉は検出されていない。第24号竪穴住居跡

は4.2×2.9mの不整方形とされており、主柱穴は4基検出されている。炉は2基あり、いずれも石囲炉である。

本県沿岸北部に位置する田野畑村館石野Ⅰ遺跡の第9号竪穴住居跡は、一辺が4.0～4.2mの隅丸方形プランと推定されている。中央よりやや南東よりに石囲炉があったと推定されている。住居主軸と考えられる線上の床面に薄く焼土が堆積しているのが検出されている。柱穴は深さにばらつきがあり、30cm以上のものが南西寄りに3基あるが全体の配置は不明である。

以上沿岸北部3遺跡例を比較すると、白石遺跡例・館石野Ⅰ遺跡例は炉がしっかりしている。大又沢Ⅱ遺跡例も加えると、石囲炉が多い傾向が見て取れる。一方で柱穴配置に関しては検出されないか、規模が小さい・配置に偏りがある例（大又沢Ⅱ遺跡第3号竪穴状遺構、菅ノ沢遺跡第1号竪穴住居跡、館石野Ⅰ遺跡第9号住居跡）としっかりした主柱穴が検出される例（白石遺跡例）の差異がある。

このような差異が遺跡立地等環境に起因するのか、あるいはその遺跡の利用形態(居住域・キャンプ＝サイト等)によるのか、あるいは時期差が存在するためなのかは不明である。

配石遺構について

東北地方北半から北海道道南地域においては、縄文時代後期初頭～前葉に大規模環状列石が盛行する。本遺跡の配石遺構も、この時期にあたる。

本遺跡の配石遺構の特徴は、西部の環状配石に接する列状の配石が、ほぼ等高線に平行する形で、南西に向かって直線状に延びる点である。このような形はいわゆる「環状列石」とは異なる特徴的な形状である。

また、配石を構築するにあたり、傾斜をカットして段差を作り出し、石を据えたり積み重ねたりしており、墓壙と考えられるような下部遺構を伴わない。いわゆる「配石墓」のように、直接墓と関わる配石ではない。また、調査の範囲では当該期の遺構で墓壙と考えられるものは見つかっておらず、墓域との関連も不明である。

次に石の配置であるが、土層断面を見ると高さ50cm以上の立石が目立つ。しかし実際には立石は深く埋められ、まわりには同じような高さまで石が重ねて積み上げられていた。視覚的には立石としての効果は薄かった思われる。配石の掘りかたは東に行くほど浅くなるが、石の列はなお調査区外へと続いている。

西部の環状配石は列状の配石と一見別の配石のように見え、構築に時間差があるのではと思われる。しかし環状部分の北側の石は列状の配石に組み込まれており、掘りかた内に埋められている。配石の掘りかたは東部まで連続し、掘りかた埋土内に同じ土層が堆積しているので、これらの配石は一時期に形成されたと考えられる。

また、配石掘りかたの埋土の遺物に時期差がなく、環状配石の下になり、列石の掘りかたに壊されている第１号竪穴住居の遺物の時期がほぼ同じであることから、環状配石部分のみに大きな時期差があるとは考えにくい。以上の点から、環状をなす西部も、列石部分と一体のものとして作られ、構築時における先後関係こそあれ、大きな時期差はなかったと考える。

宮古市崎山貝塚では、中期中葉大木8b式期に集落と中央広場を区画する「環状溝」が形成されるが、この「環状溝」が埋没する後期前葉にはその西側に小規模な配石遺構が形成される。精査された3基は下部に小規模な土坑を伴っていることから、再葬墓の可能性が指摘された。

先述した田野畑村館石野Ⅰ遺跡には縄文時代後期前葉を中心とする大規模な配石遺構がある。この遺跡の配石遺構は列状にほぼ等高線に沿って伸び、現在３列の列石が確認されている。

早稲田大学による8次の調査結果では、配石遺構は斜面をカットして段差を作りだし、石を配置したものである。配石下には土坑を伴うものもあったが、必ずしも墓壙に伴うものではないとしている。列石遺構には大型の角礫を用いた配石を中心とする単位があり、遺構は一時期の所産ではなく継続的に構築された結果と考えられている。近年の田野畑村教育委員会の内容確認調査もこれを裏付けるものとなっている。

以上近隣の配石遺構の例を見たが、菅ノ沢遺跡の配石遺構は、単独の遺構の緩やかな集合である崎山貝塚のあり方とは異なっている。館石野Ⅰ遺跡例とかなり近い例と考えうるが、少なくとも本調査の範囲内では一時に作られたと考えられることや、巨大な立石を伴わない点、外見上明瞭な単位を持たないなど異なる点もある。

土器について

本遺跡で出土した土器は、1.貝殻文土器群、2.「縄文－縄文」土器群、3.縄文時代前期初頭から前葉の繊維を含む土器群、4.縄文時代中期の土器群、5.縄文時代後期初頭～前葉の土器群、6.縄文時代後期後葉の土器群7.縄文時代晩期後葉～弥生時代の土器群、8.弥生時代後期の土器群、8.平安時代に伴う土師器である。

このうち1～3は基本層序第Ⅲ層からⅤ層に多量に含まれるもので、とりわけ3が多い。羽状縄文の土器が多く、組縄縄文、斜縄文、縄の束を回転施文したもの、不整撚糸文、横回転の木目状撚糸文などが含まれる。羽状縄文には結束のあるものと無いものがあり、前者は宮古市千鶏遺跡Ⅱ群土器に相当し、後者はⅢ群土器に相当するもので、縄文時代前期初頭～前葉に属するものと考えられる。その他の土器群とともに出土しており，層位的に把握できる出土状況にないが、本調査区の周辺に当該期の遺構が存在する可能性をうかがわせる。

また、本遺跡には4が少なく第1号竪穴住居跡と配石遺構に伴う5が多い。5については大木10式以降十腰内Ⅰ式期以前に属する土器が大半である。破片資料が多く、文様の構成が不明なものが多い。近接する大又沢Ⅱ遺跡のⅢ群1類土器に類するものが多く見られるが、2類以下に概当するものはあまり無く、6類にあたるものがわずかに見られる程度である。加えて本遺跡では原体圧痕で口縁を加飾する土器群が少量ある。

6は遺構外から一点のみの出土、7には第2号竪穴住居跡に伴う大洞A式のほか、大洞C1・C2式、A′式の破片数点が含まれる。

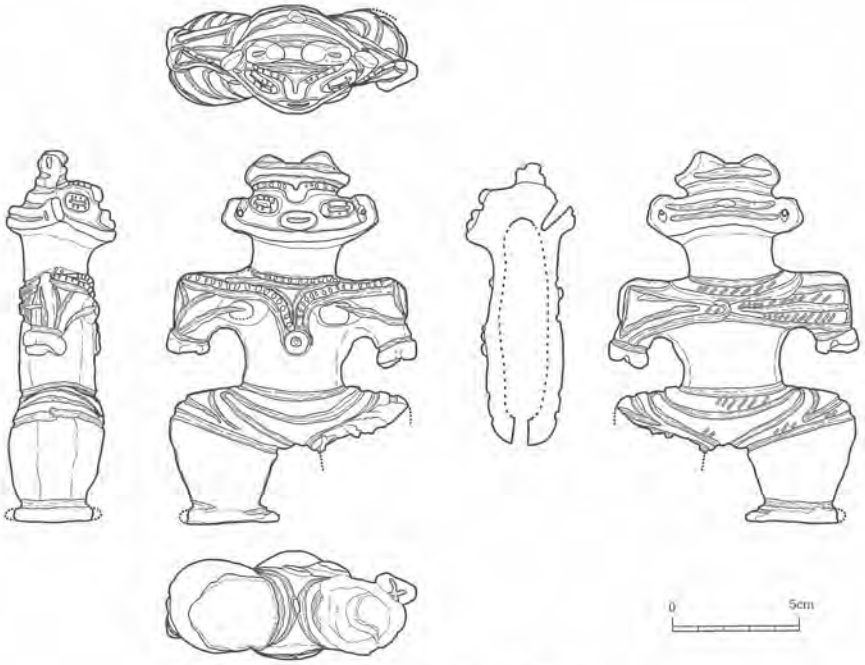
8は交互刺突文を施文する土器、及び撚糸文などの斜め～縦方向の地文中に横帯を意識させる横回転施文の縄文を施文する土器である。この横回転の縄文は原体の閉じた末端を上に施文し、上端がつながるように見える。赤穴式に伴うものである。当該期の土器は宮古市内では赤前Ⅳ八枚田遺跡・払川館跡などでも出土している。本遺跡では条間の空いた撚糸文は遺構外から一点出土しているが、滝沢村湯舟沢遺跡Ⅲ類土器に見られるような附加条文は出土せず、縄文と見まがう条の間隔の狭いものが主体である。第1号埋設土器遺構、第5号土坑がこの時期に属する。第1号埋設土器は当該期としては大型の壷形土器であり、ほぼ全容のわかるものとして興味深い。

〈参考資料〉

今回調査を実施した菅ノ沢遺跡からは、戦後の開田の際に土偶が発見されている。左脚を欠くほかは、ほぼ残存し、土偶内部は中空となっている。その胴内部には鳴子が３個入っており、振るとカラカラと音がすることから「鳴る土偶」として知られている。所属時期は、その形態などから縄文時代晩期、大洞Ｃ２式に伴うものとされている。（高橋　2005）

菅ノ沢遺跡出土土偶

土偶内部の写真



第46図　菅ノ沢遺跡出土土偶

参考文献

小田野哲憲　1987　「岩手の弥生式土器編年試論」『岩手県立博物館研究報告』第5号
熊谷常正　1986　「門前式土器の再検討」　『岩手県立博物館報告』第4号
興野義一　1996　「山内清男先生供与の大木式土器写真セットについて」
『画竜点睛－山内先生没後25年記念論集－』　山内先生没後25年記念論集刊行会
白鳥良一　1989　「前期大木式土器様式」　『縄文土器大観1　草創期・早期・前期』小学館
高橋亜貴子　1992　「東北地方縄文時代前期前葉組縄縄文について」
『加藤稔先生還暦記念東北文化論のための先史学歴史学論集』加藤稔先生還暦記念会編
本間　宏　1987　「縄文時代後期初頭土器群の研究（1）－東北地方北部を中心に－」
『よねしろ考古』第3号　よねしろ考古学研究会
本間　宏　1988　「縄文時代後期初頭土器群の研究（2）－東北地方北部を中心に－」
『よねしろ考古』第４号　よねしろ考古学研究会
本間　宏　1990　「東北地方南部における縄文後期前葉土器群の変遷過程」
『第4回縄文セミナー　縄文後期の諸問題』　縄文セミナーの会
成田滋彦　1989　「入江十腰内土器様式」　『縄文土器大観４　後期・晩期・続縄文』小学館
山内清男　1979　『日本先史土器の縄紋』　先史考古学会
岩手考古学会　2005　『岩手県における弥生時代前期から中期の諸問題－土器形式と地域間交流－資料集』
2005年　岩手考古学会第34回研究大会
戸沢充則編　1994　『縄文時代研究事典』　東京堂出版
滝沢村教育委員会　1991　『湯舟沢遺跡』　岩手県滝沢村文化財調査報告書第16集
宮古市教育委員会　1984　『宮古市遺跡分布調査報告書　2』　宮古市埋蔵文化財調査報告書４
宮古市教育委員会　1986　『宮古市遺跡分布地図－昭和60年度版－』宮古市埋蔵文化財調査報告書９
宮古市教育委員会　1989　『千鶏遺跡』　宮古市埋蔵文化財調査報告書16
宮古市教育委員会　1991　『崎山遺跡群Ⅴ』　宮古市埋蔵文化財調査報告書26
宮古市教育委員会　1999　『赤前Ⅲ遺跡　赤前Ⅳ八枚田遺跡　赤前Ⅴ柳沢遺跡　赤前Ⅵ釜屋ヶ沢遺跡
小堀内Ⅲ遺跡』　宮古市埋蔵文化財調査報告書53
宮古市教育委員会　2001　『近内中村遺跡－第1次～第7次発掘調査の概報－』
宮古市教育委員会　2003　『大又沢Ⅱ遺跡』宮古市埋蔵文化財調査報告書59
宮古市教育委員会　2005　『払川館跡』　宮古市埋蔵文化財調査報告書64
盛岡市教育委員会　1997　『永福寺山遺跡－昭和40･41年発掘調査報告書』
陸前高田市教育委員会　1974　『岩手県陸前高田市門前貝塚』
早稲田大学考古学研究室　1997　『館石野Ⅰ遺跡発掘調査報告書』

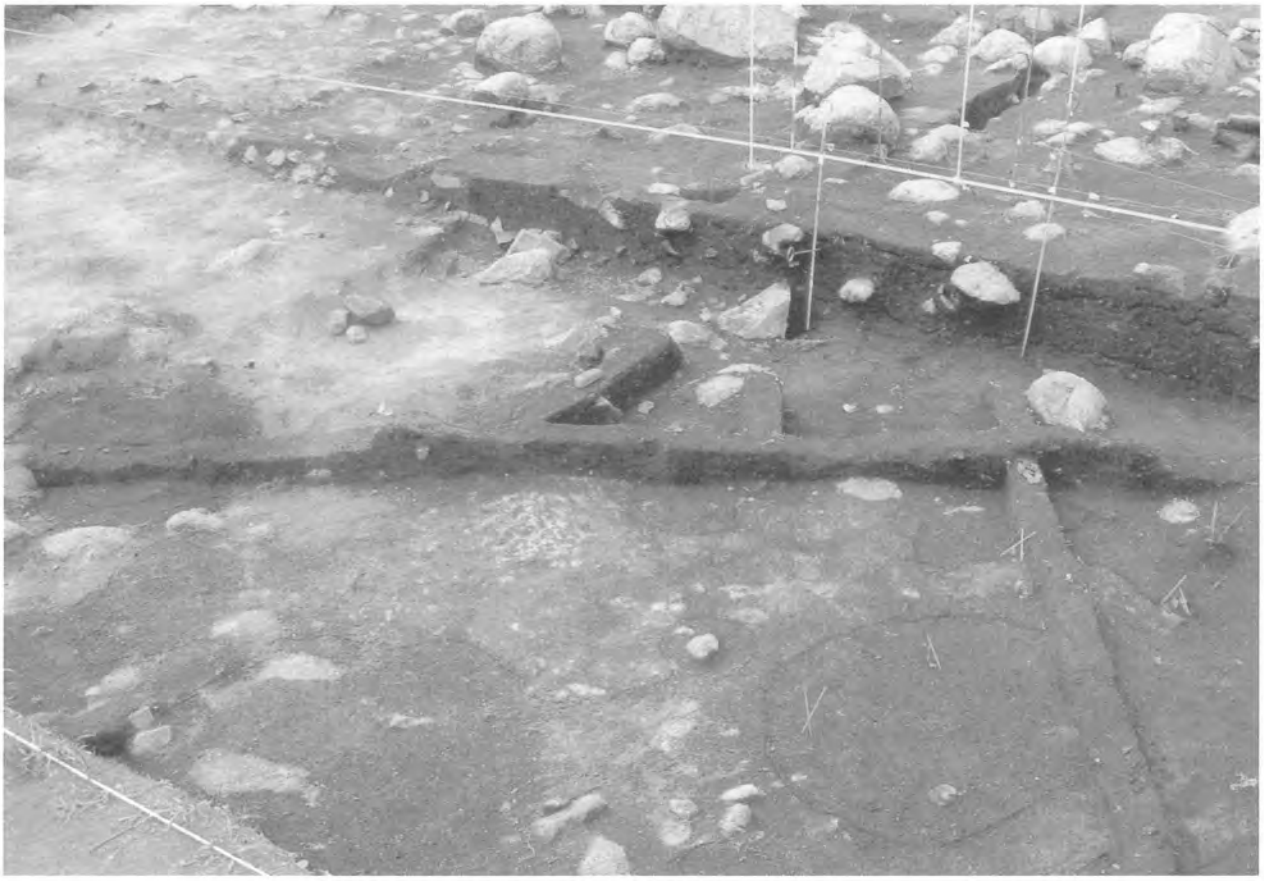
写　真　図　版

調査区遠景

調査区近景

写真図版 2

調査区土層堆積状況（調査区南東隅）

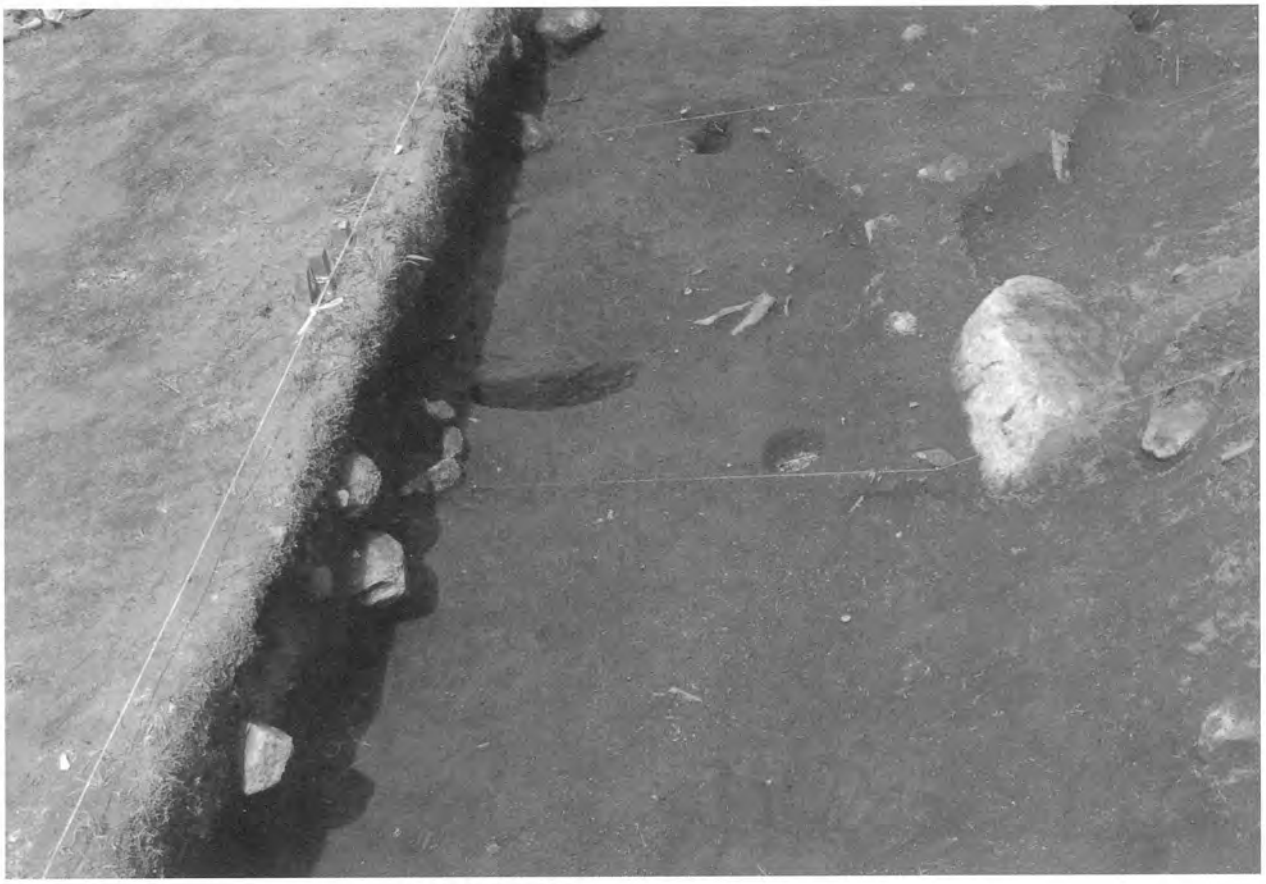


第1号竪穴住居跡土層堆積状況（南東から）

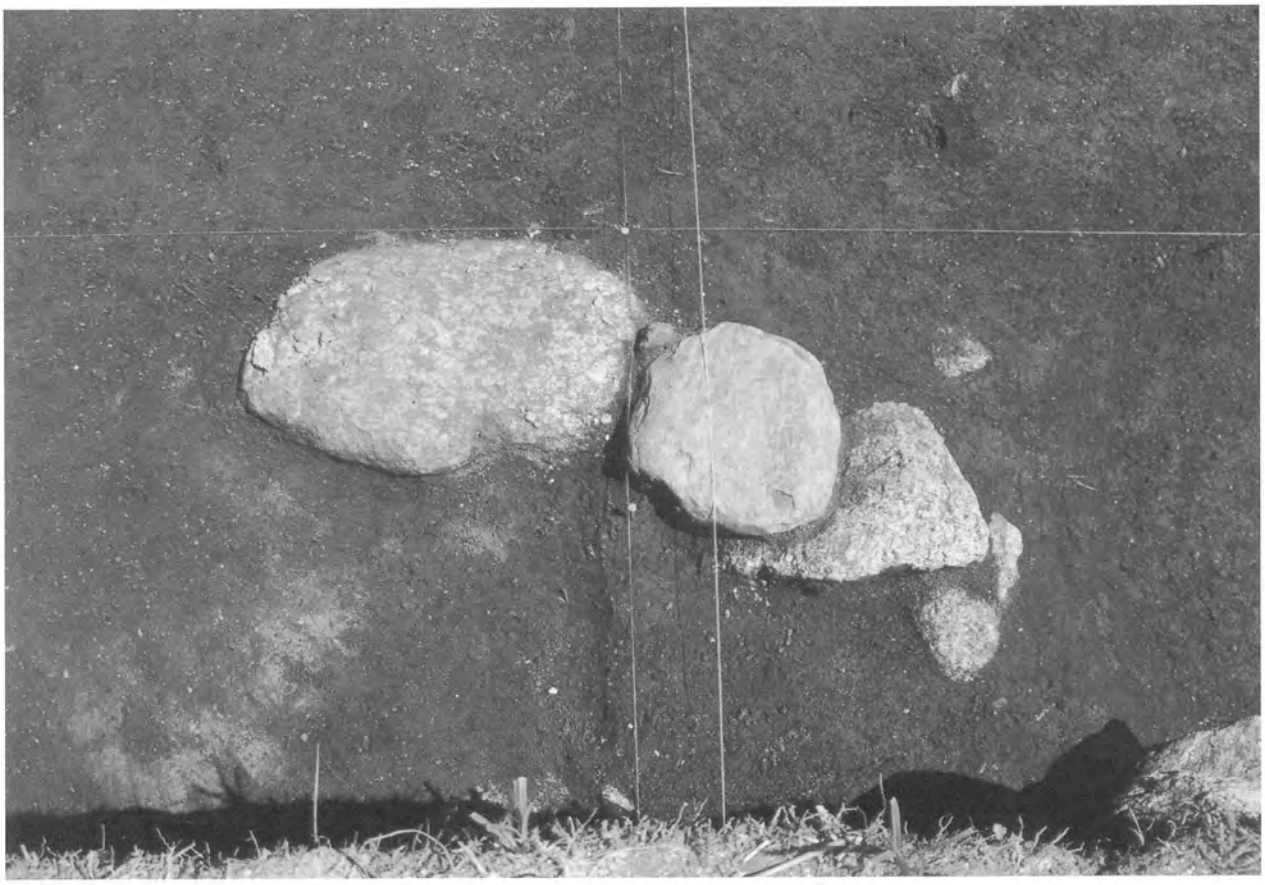
第 1 号竪穴住居跡 床面検出状況（南から）

第 1 号竪穴住居跡 完掘状況（南から）

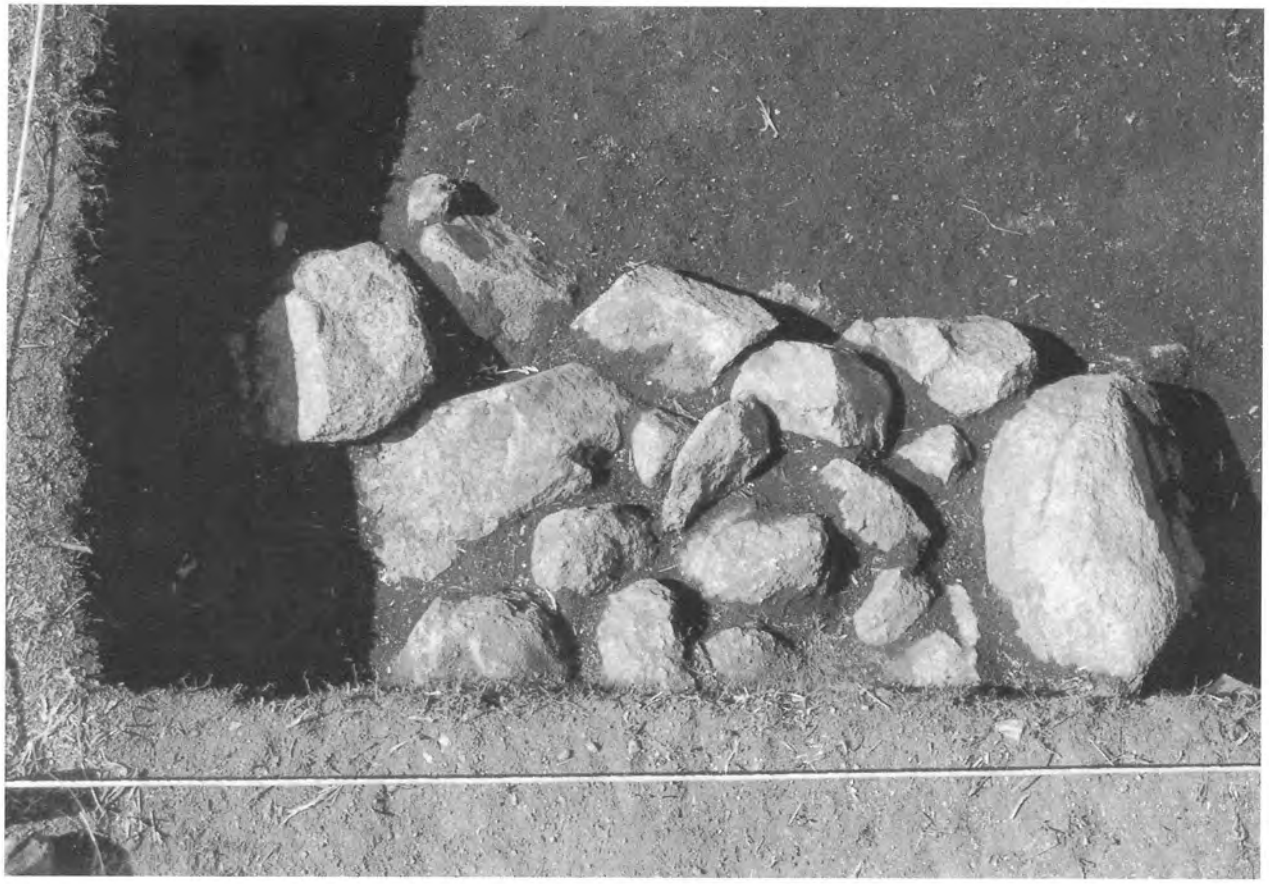
写真図版 4



第 2 号竪穴住居跡 完掘状況（東から）



第 2 号竪穴住居跡 炉検出状況（南から）



第 5 号土坑跡 上面配石検出状況（南から）

第 5 号土坑跡 完掘状況（北東から）

写真図版 6

第 6 号土坑跡 土層堆積状況（南から）

第 6 号土坑跡 完掘状況（南から）

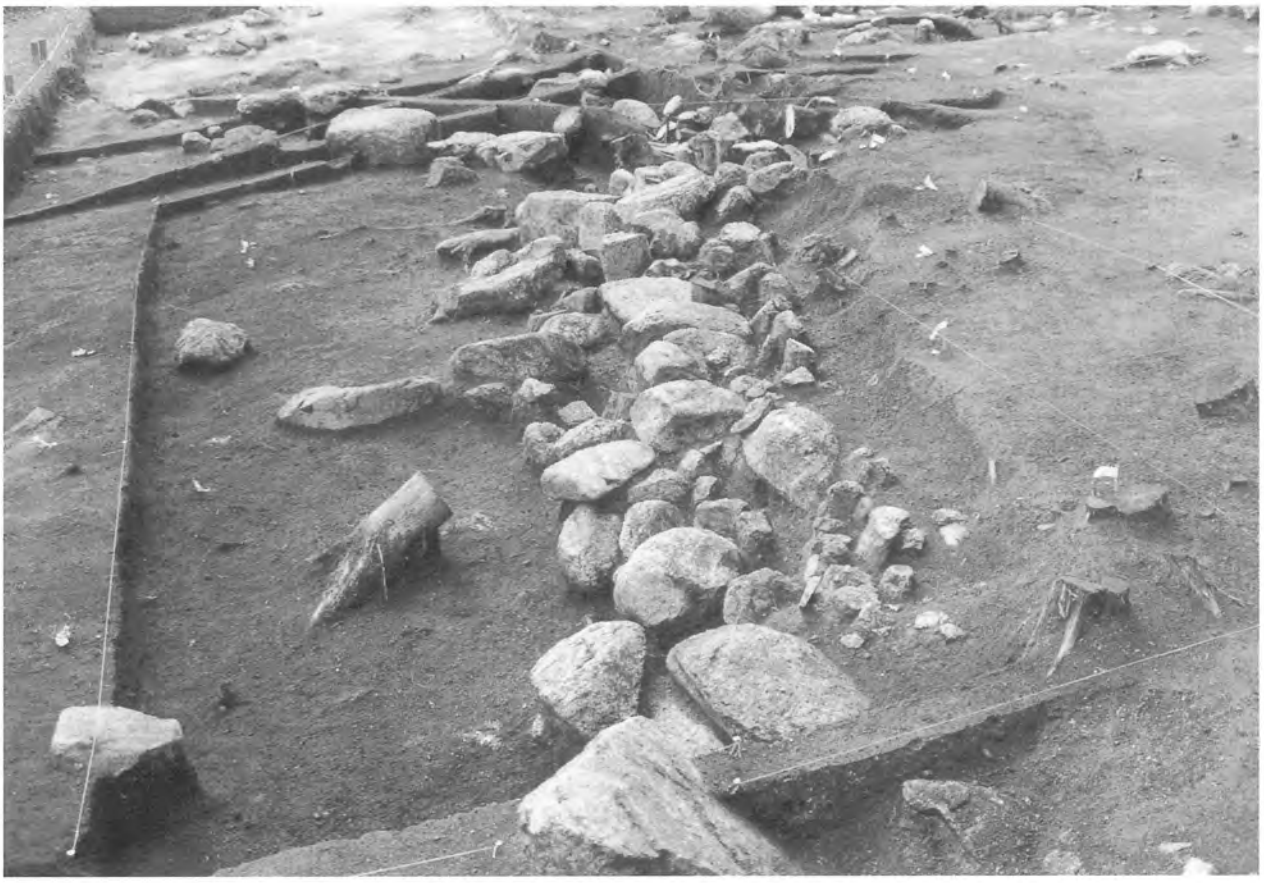
Ｃ１区硬化面遺物出土状況（南から）

第１号埋設土器出土状況（西から）

写真図版８

配石遺構内集中出土剝片出土状況（JJ′ベルト立石付近）

配石遺構検出状況（南西から、手前西部）



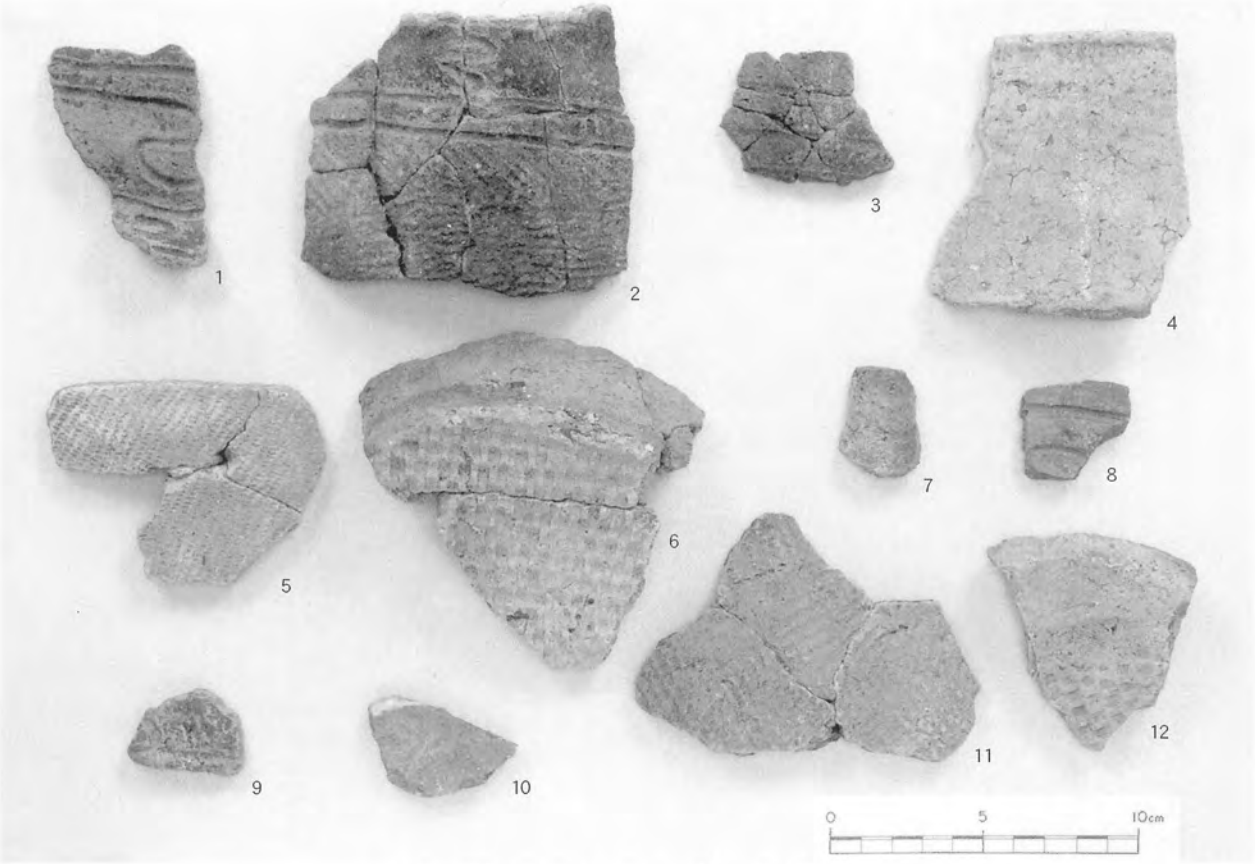
配石遺構掘削状況（中央部、東から）

同上（西から）

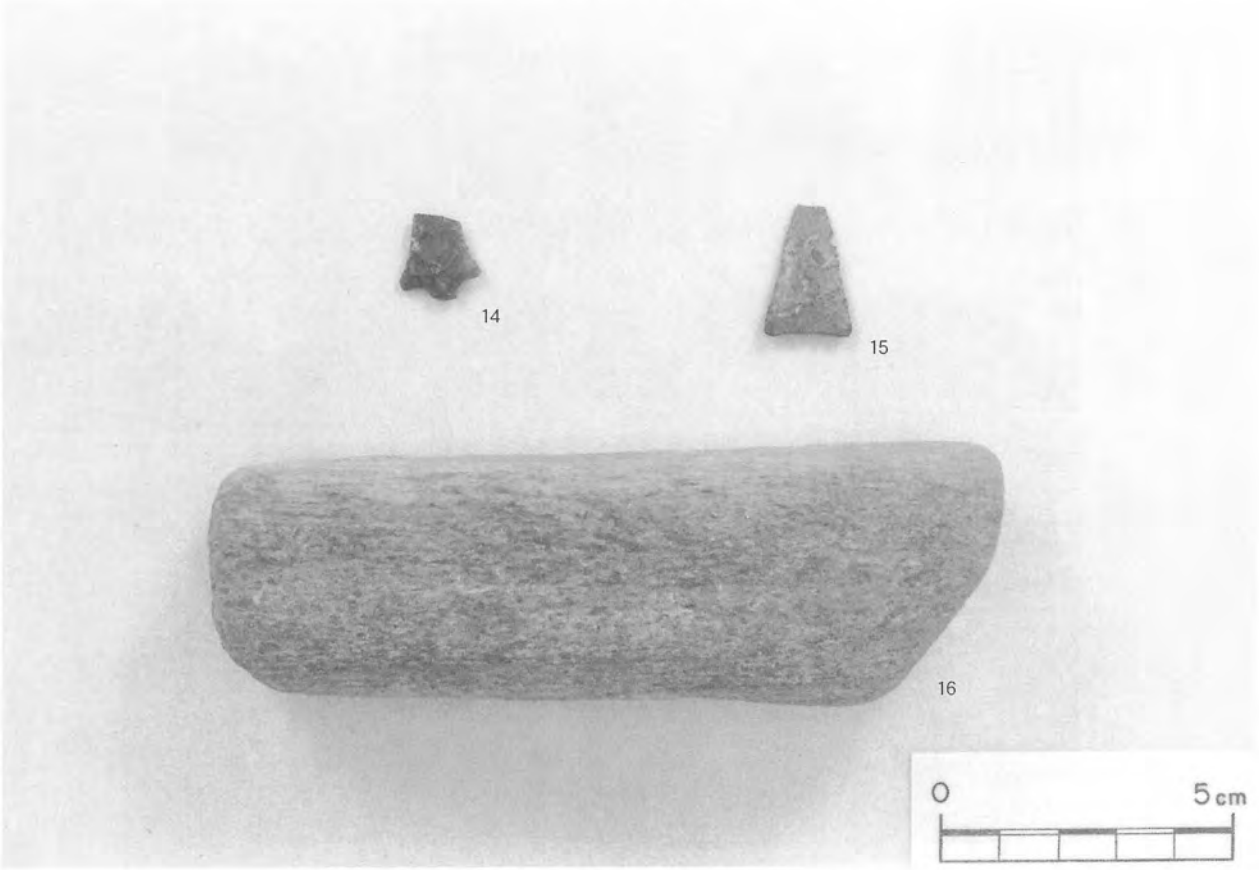
写真図版10

配石遺構及び堀りかた（中央部・東部、西から）

配石遺構掘りかた完掘状況（南西から）



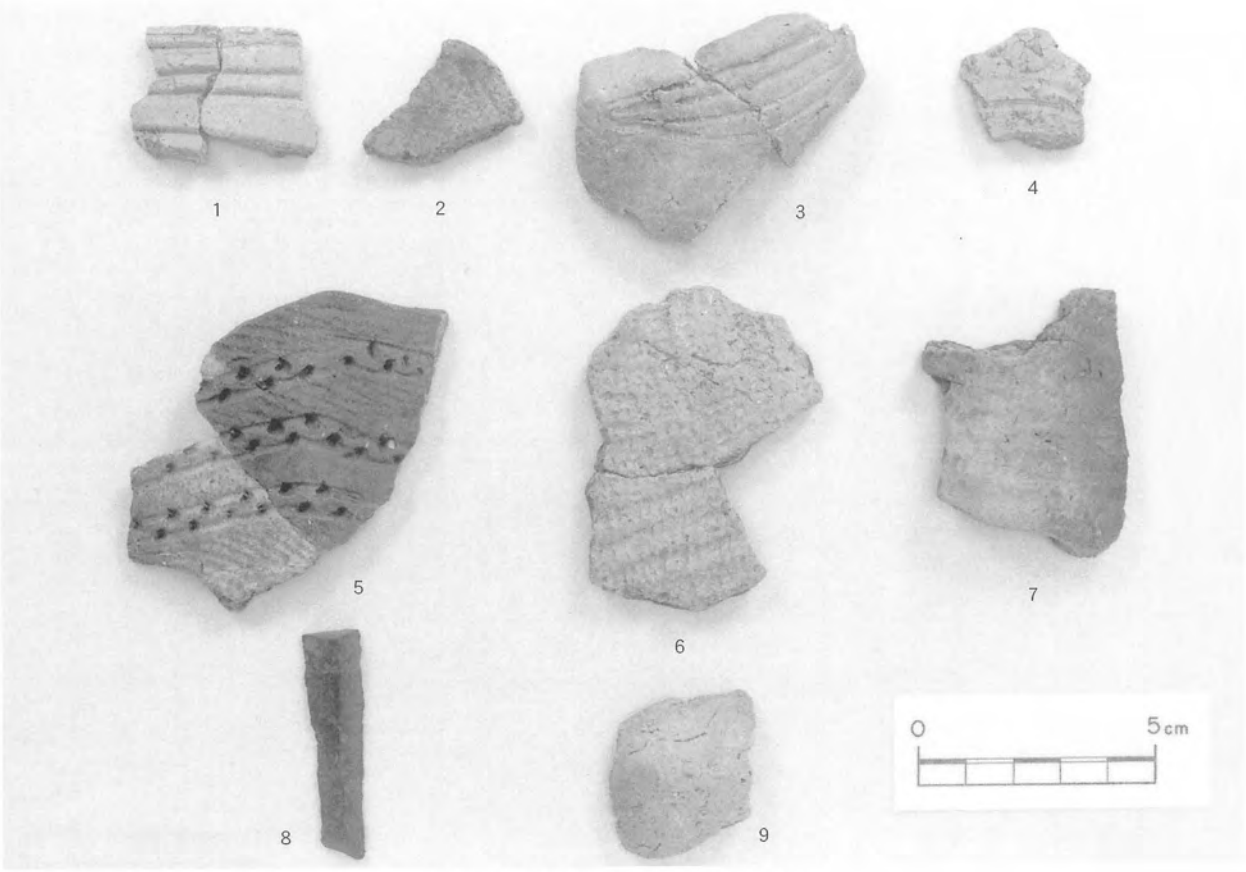
第１号竪穴住居跡 出土土器（第10図）



第１号竪穴住居跡 出土石器（第10図）

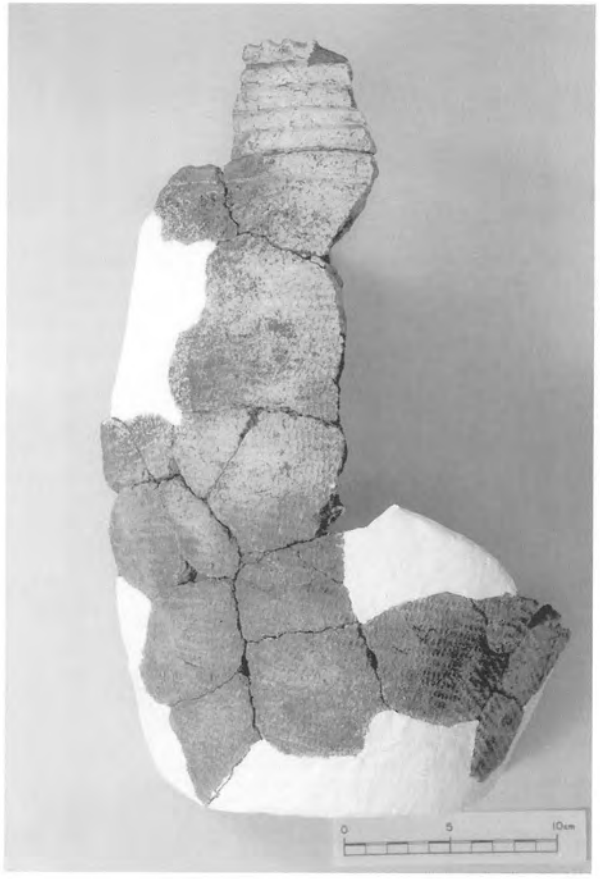
写真図版12

第２号竪穴住居跡 出土遺物（第12図）



第５号土坑跡 出土遺物（第16図）

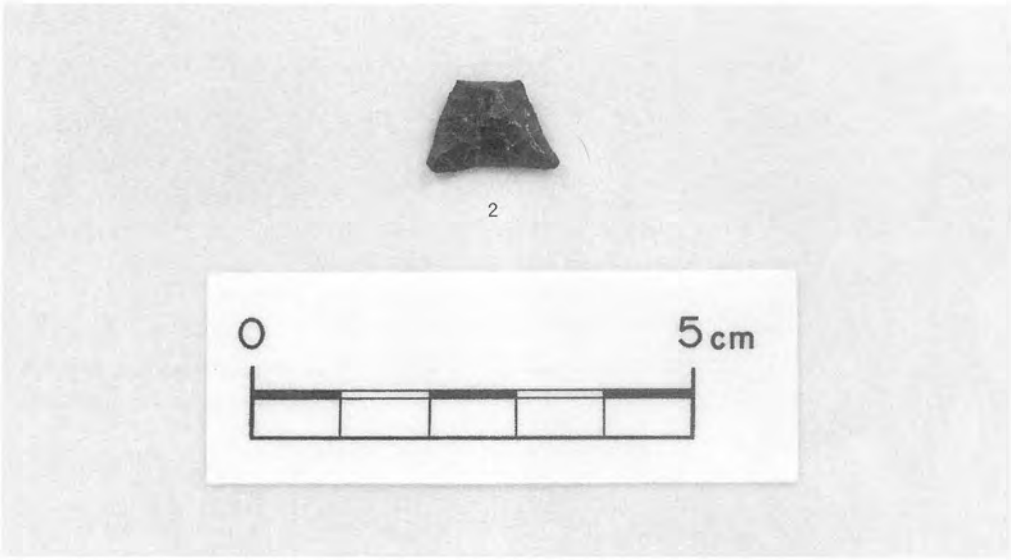
第６号土坑跡 出土遺物（第18図）



Ｃ１区 硬化面出土遺物（第25図）

写真図版14

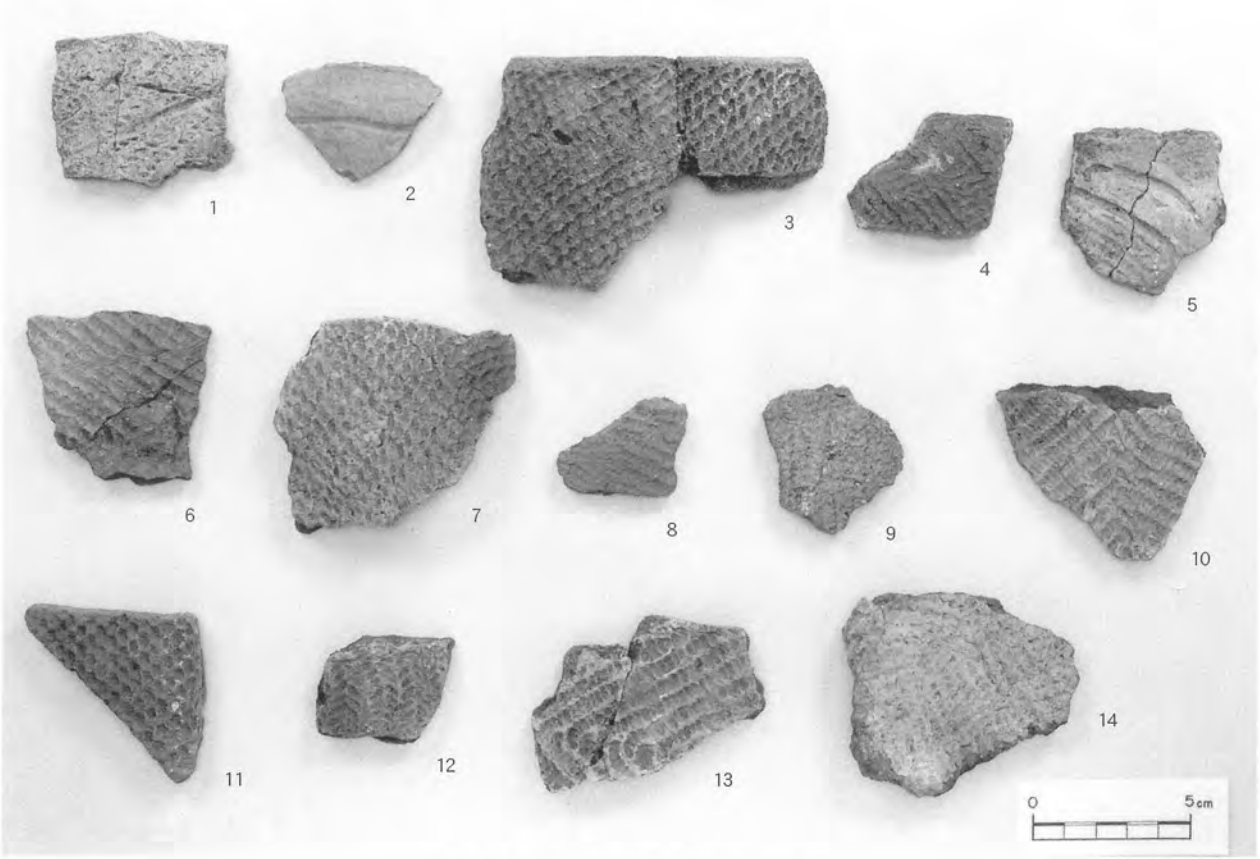
1



2

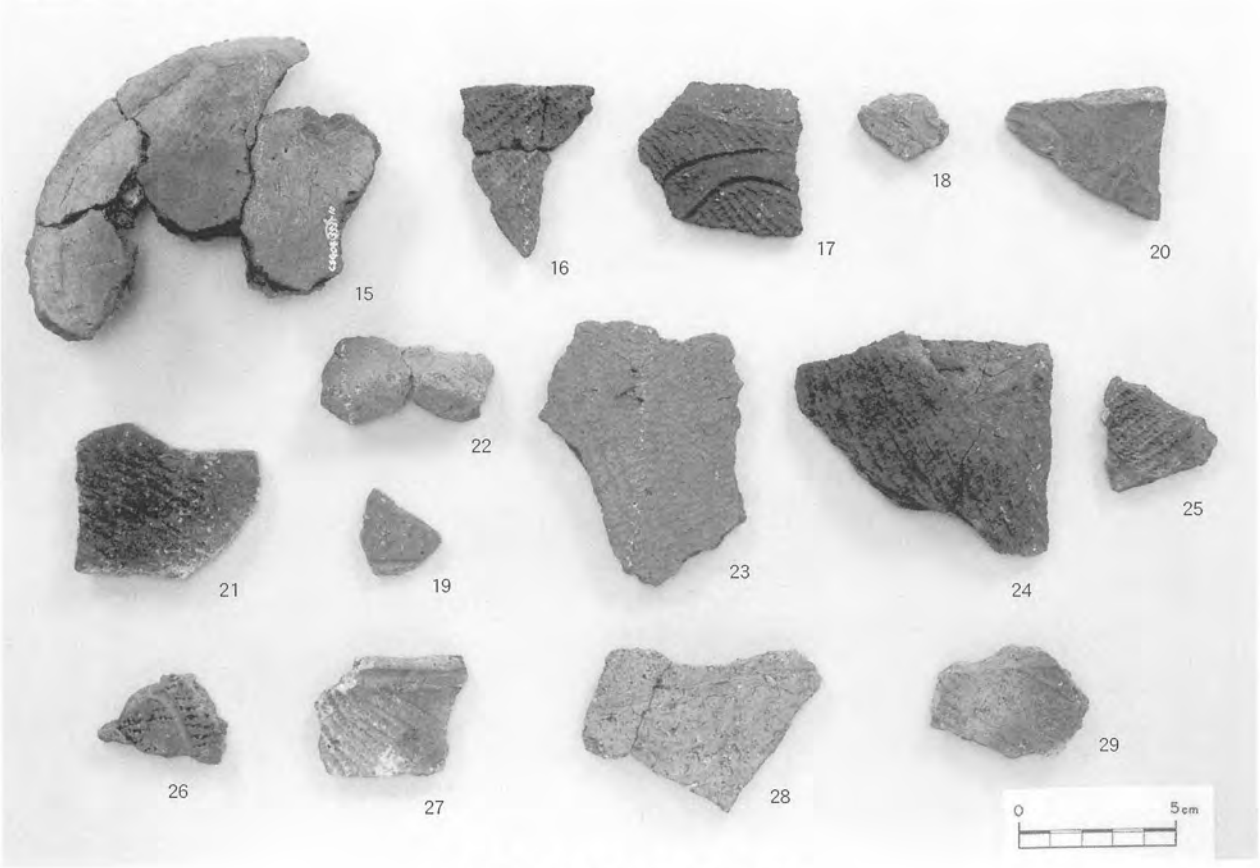
第１号埋設土器出土遺物（第21図）

B 1区硬化面出土遺物（第23図）

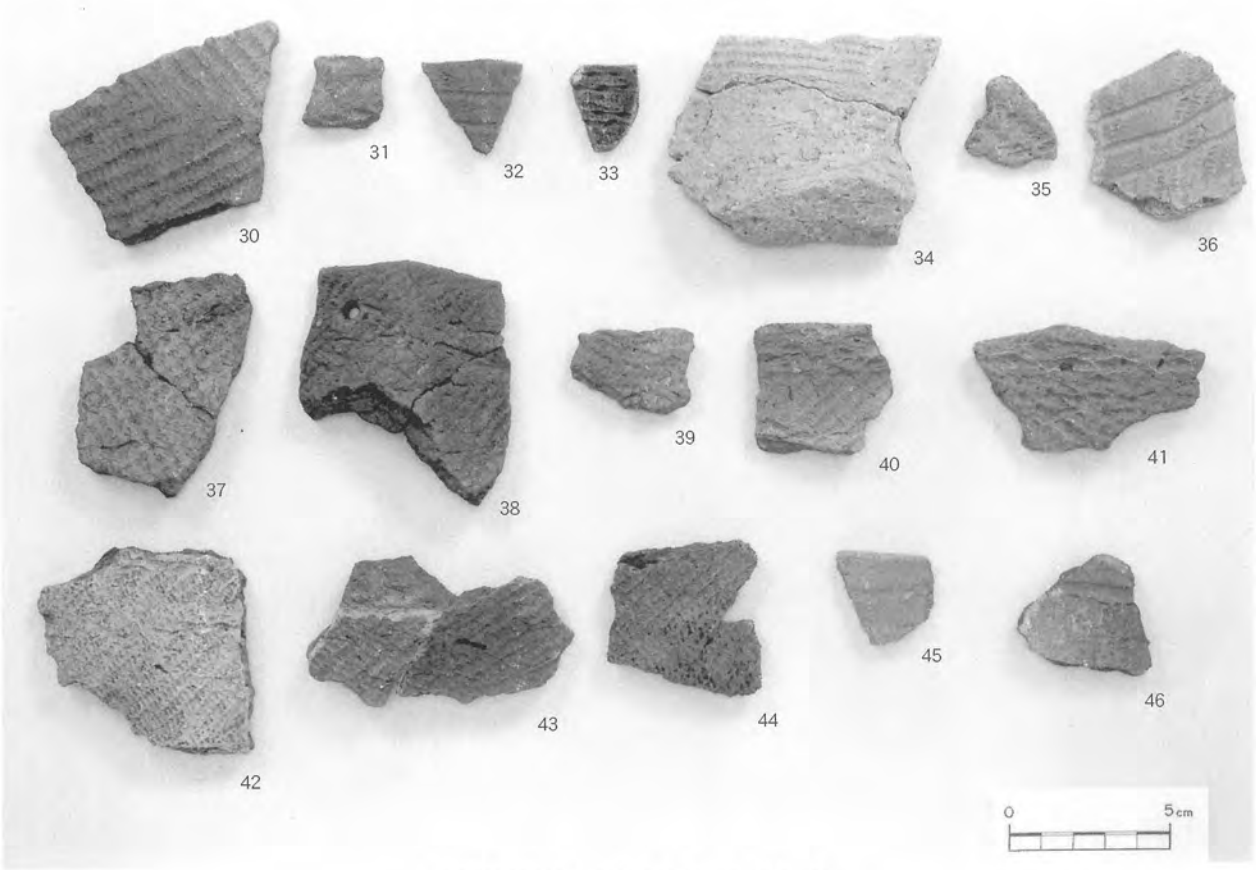


配石遺構出土土器（第30図）

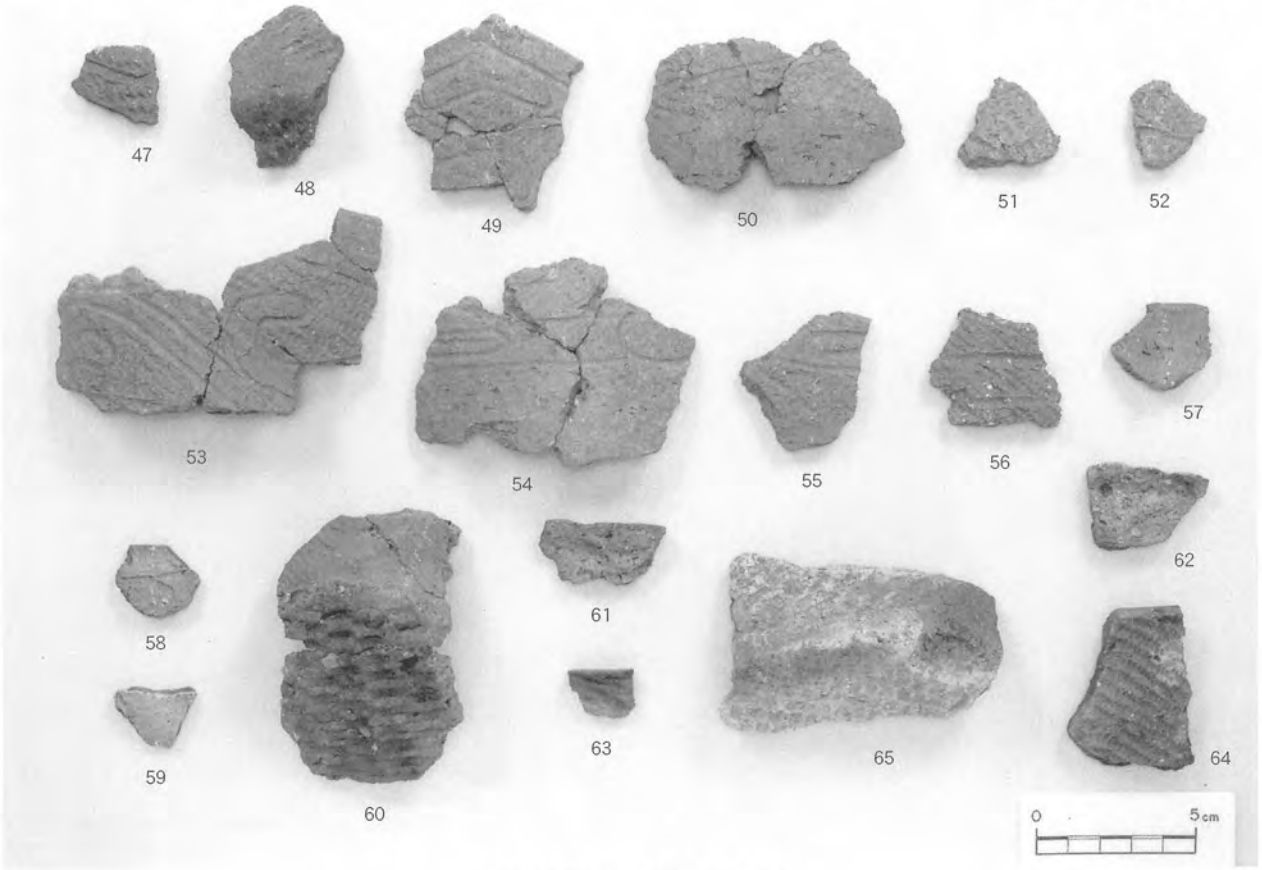
写真図版16



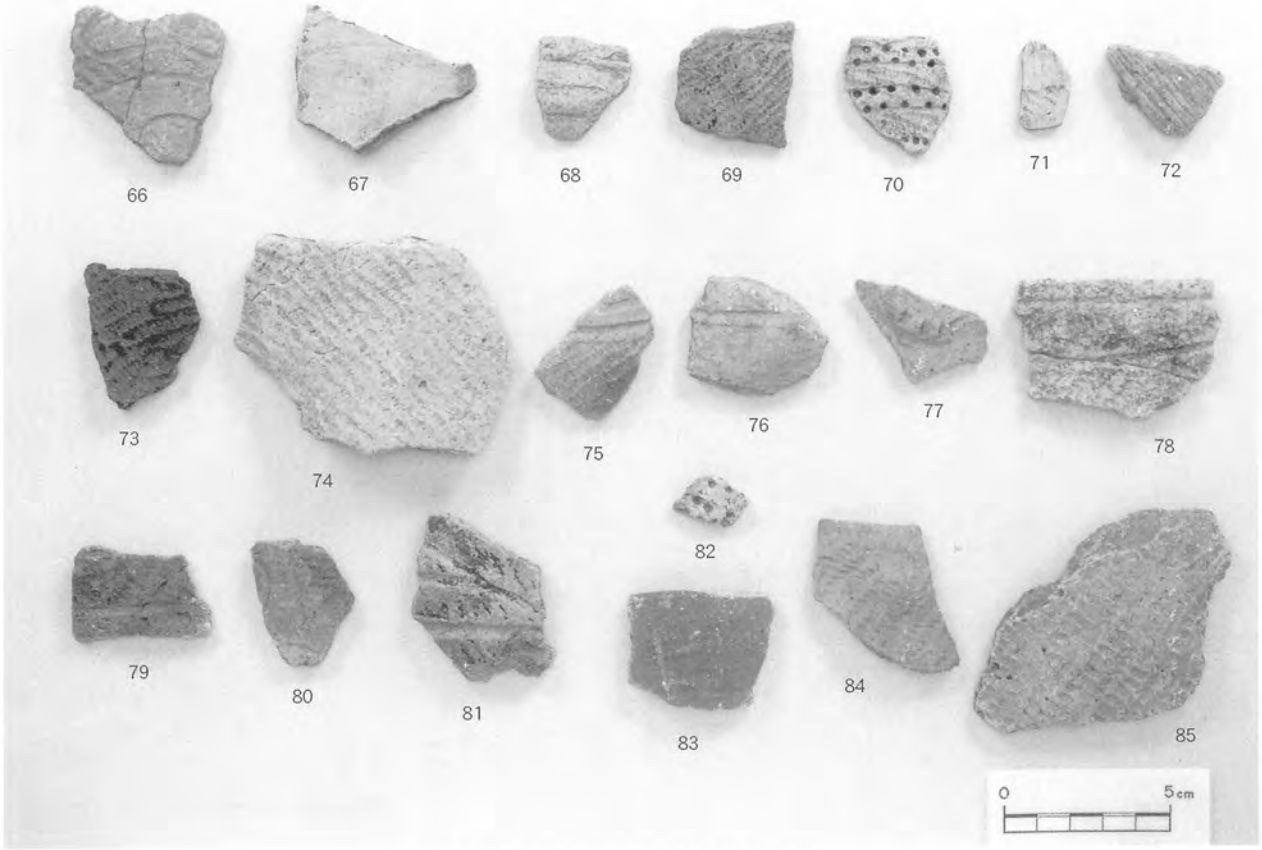
配石遺構出土土器（第30図）



配石遺構出土土器（第30・31図）

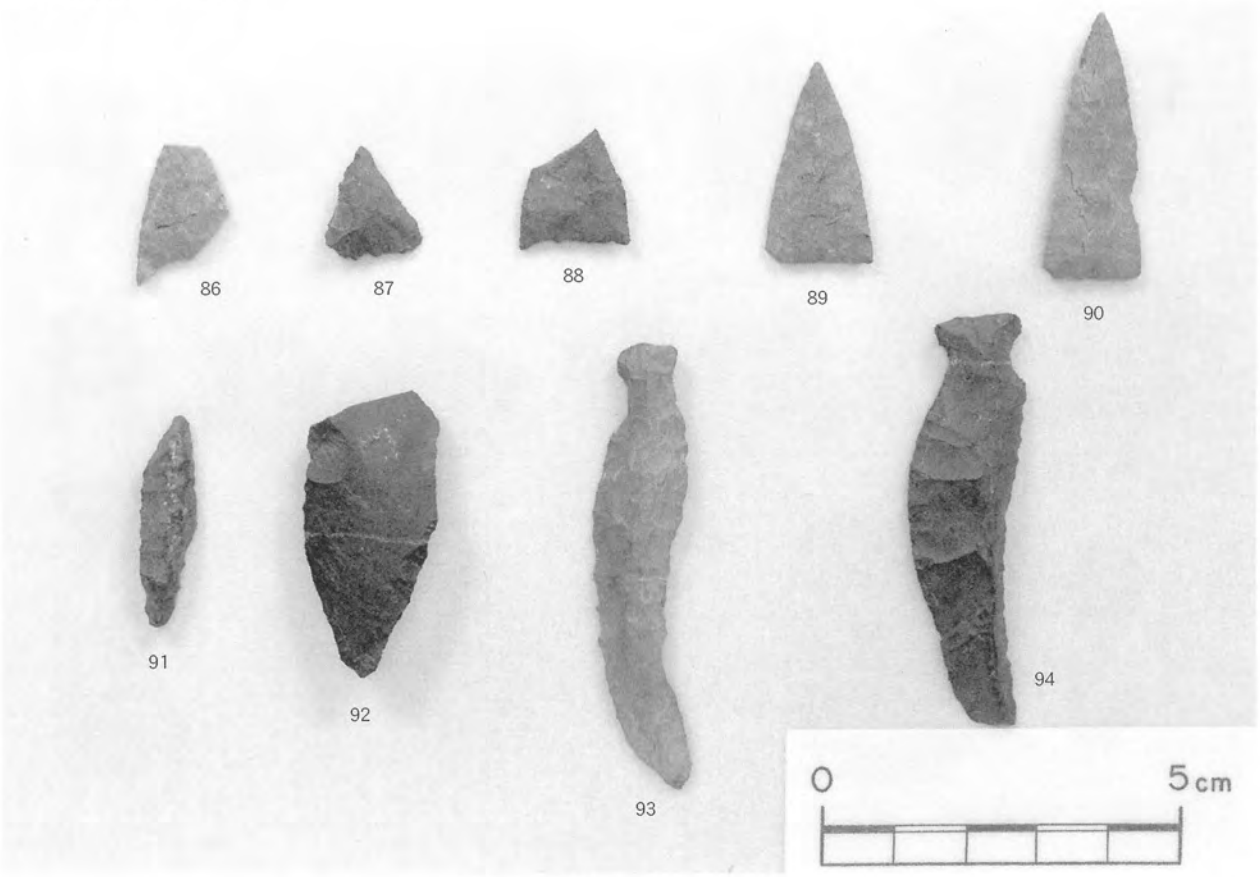


配石遺構出土土器（第31図）

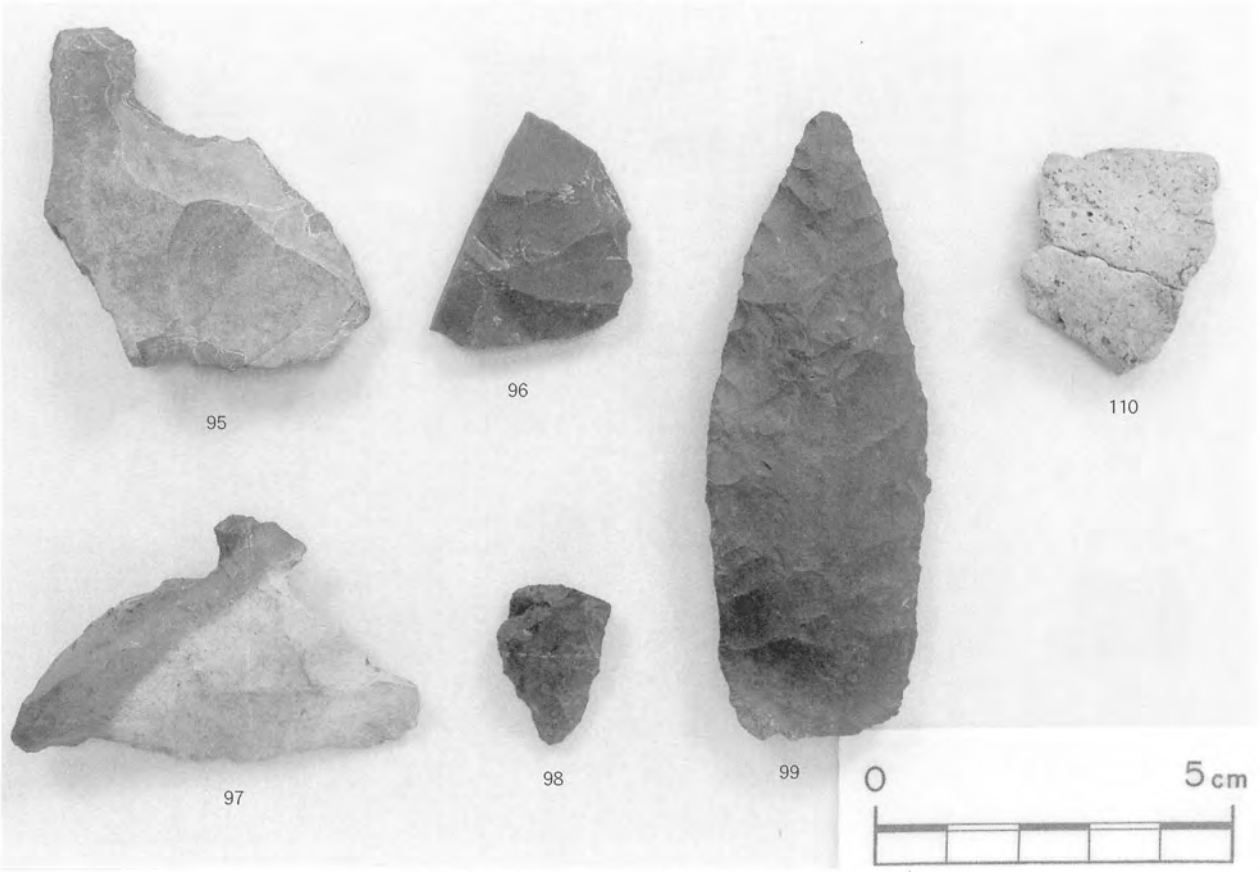


配石遺構出土土器（第31・32図）

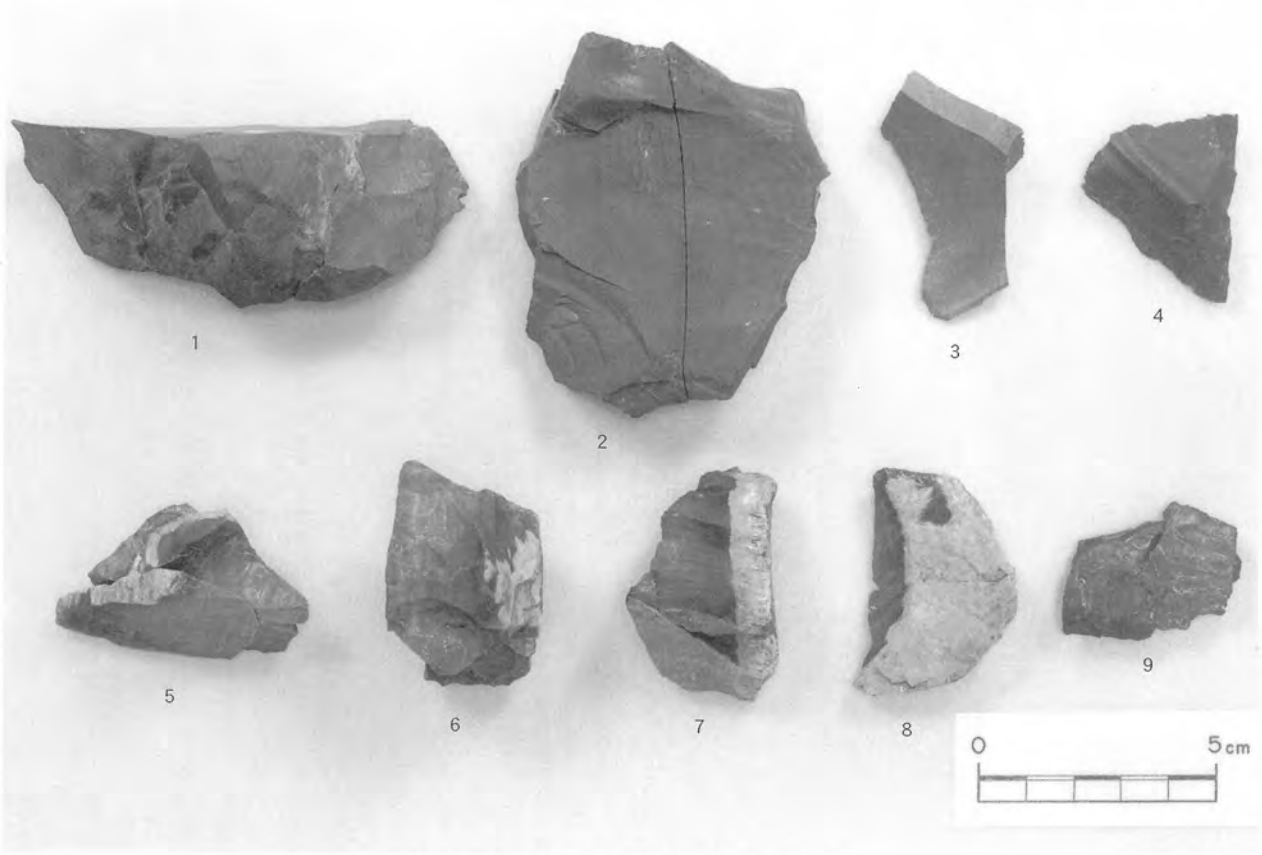
写真図版18



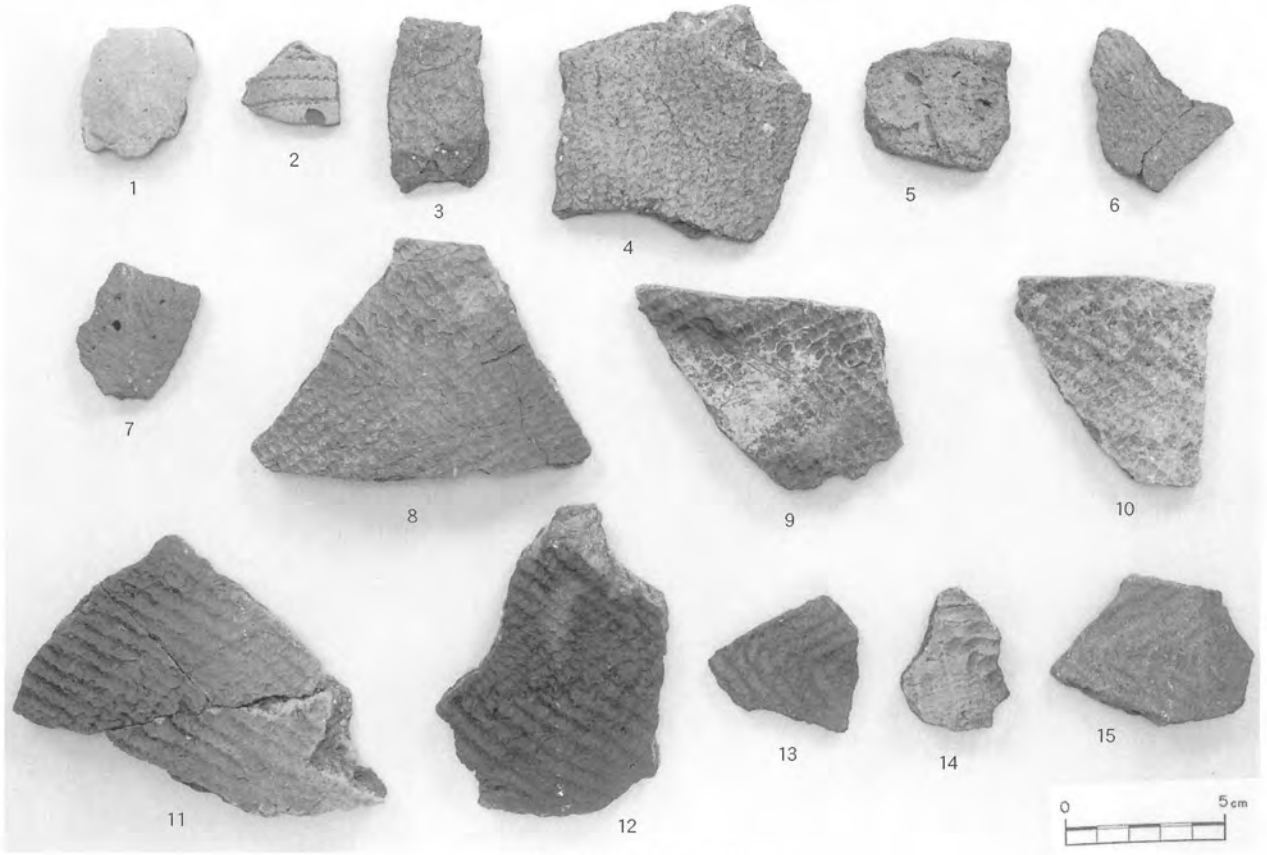
配石遺構出土石器（第33図）



配石遺構出土土石器・土製品（第30・31図）

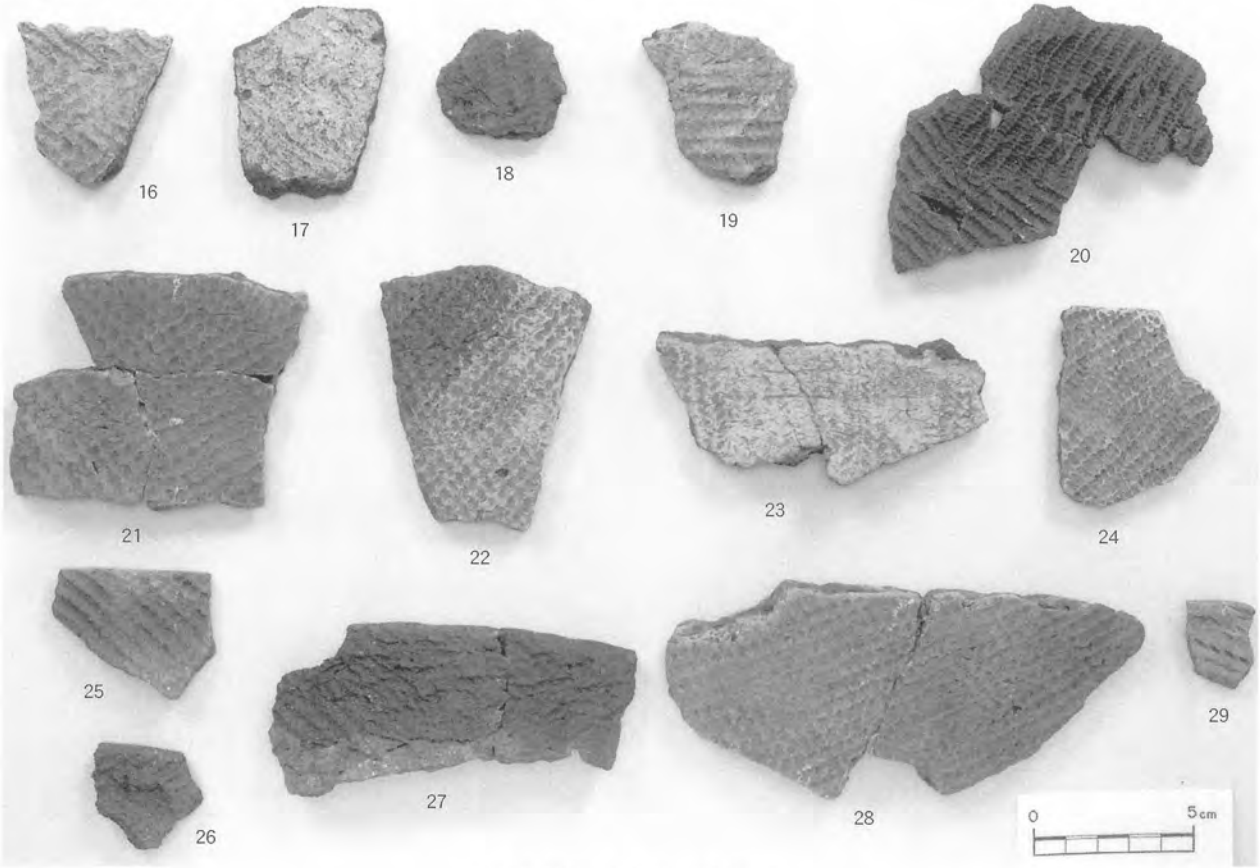


剝片集中区出土石器（第35・36図）

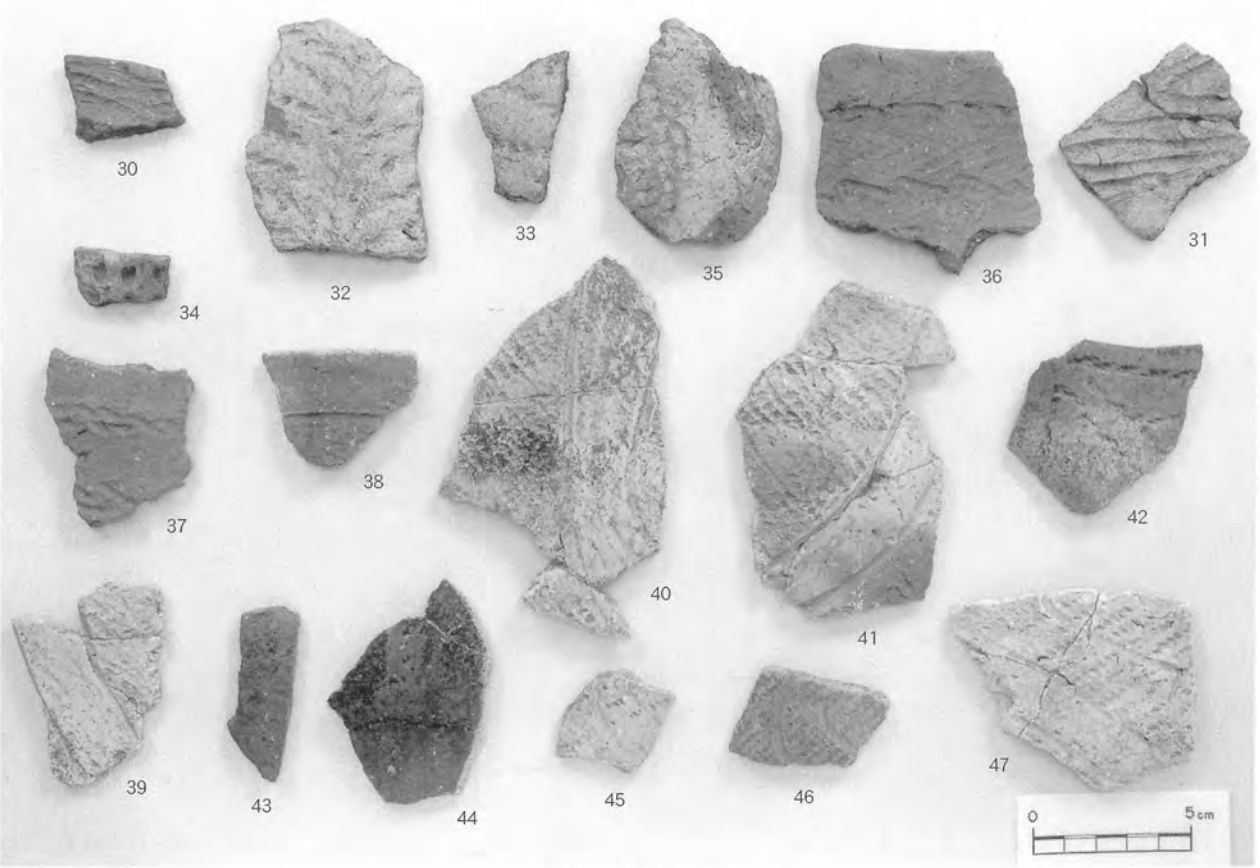


遺構外出土土器（第37図）

写真図版20

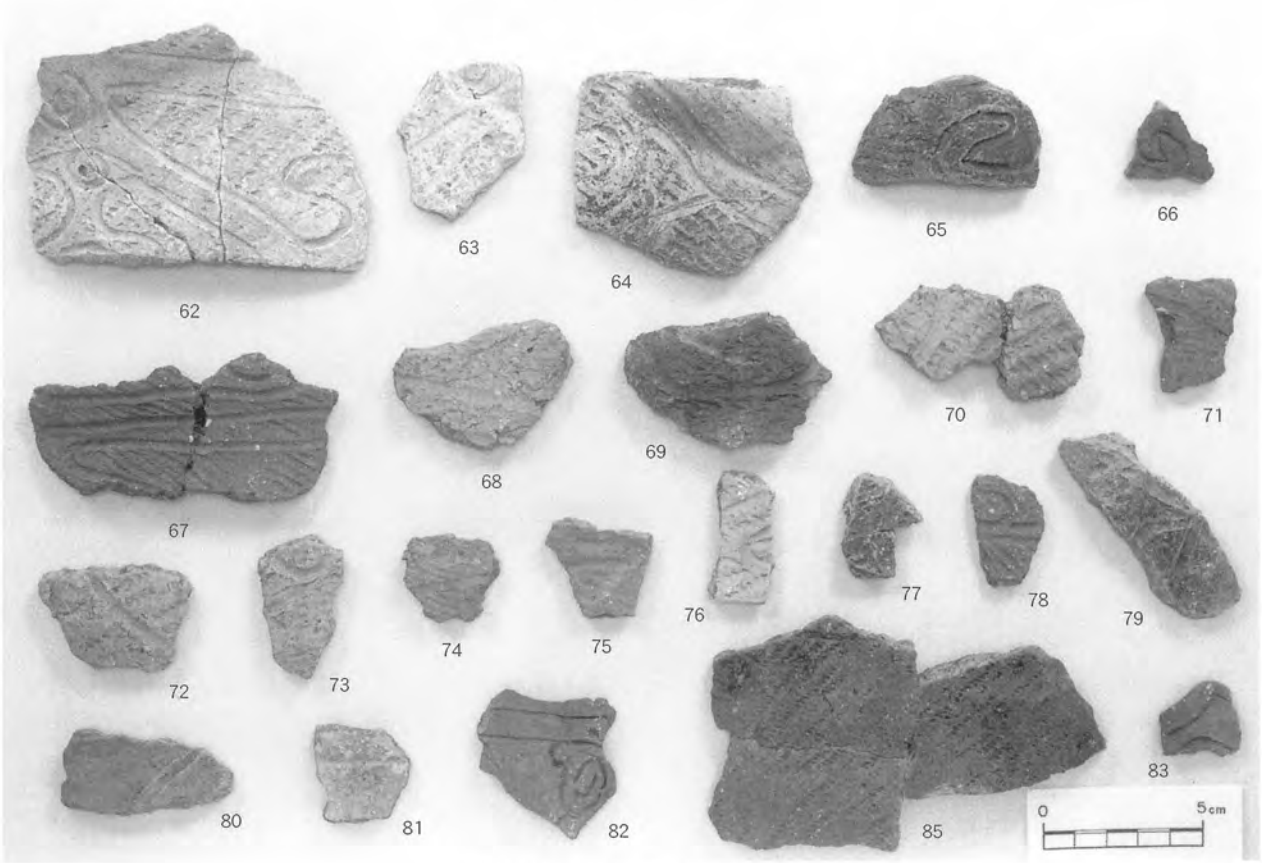


遺構外出土土器（第37図）



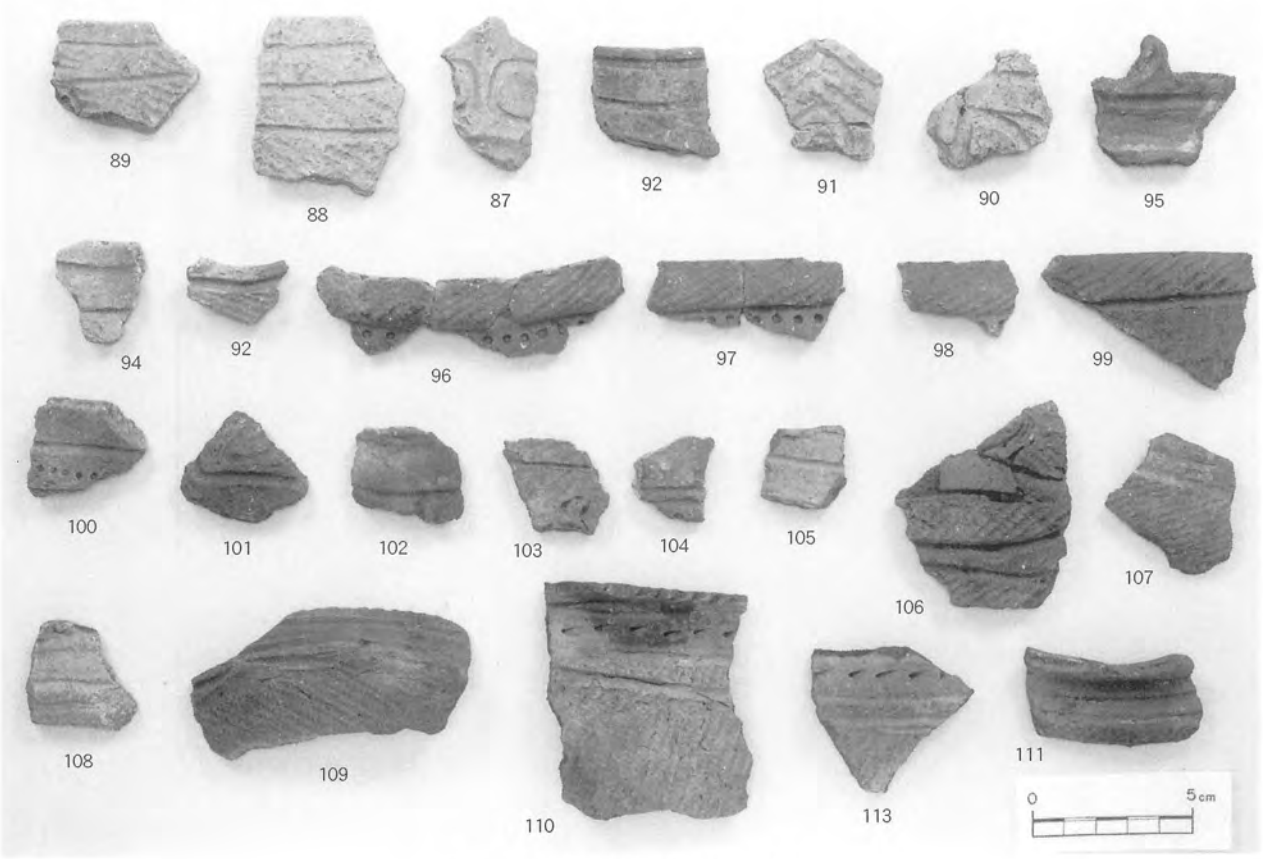
遺構外出土土器（第38図）

遺構外出土土器（第38図）

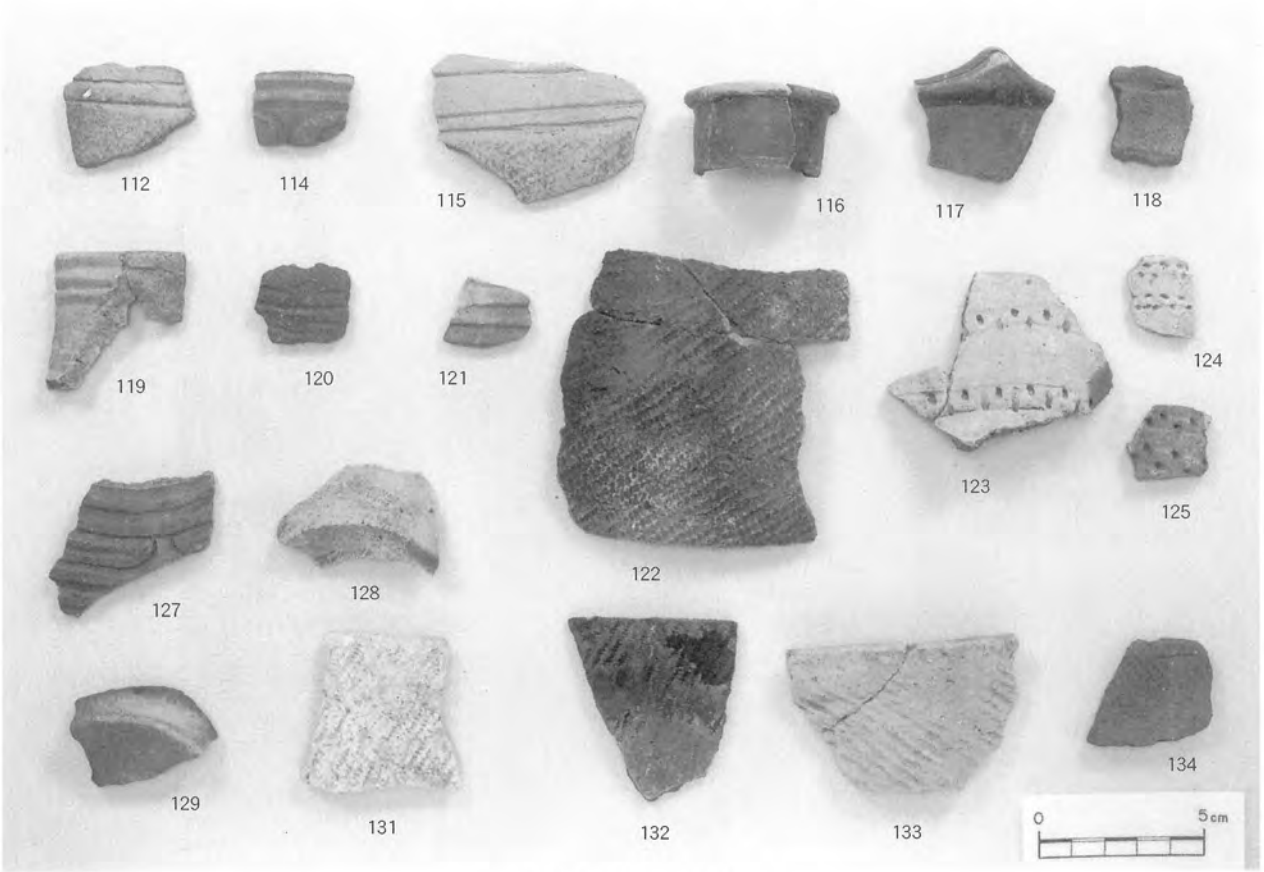


遺構外出土土器（第39図）

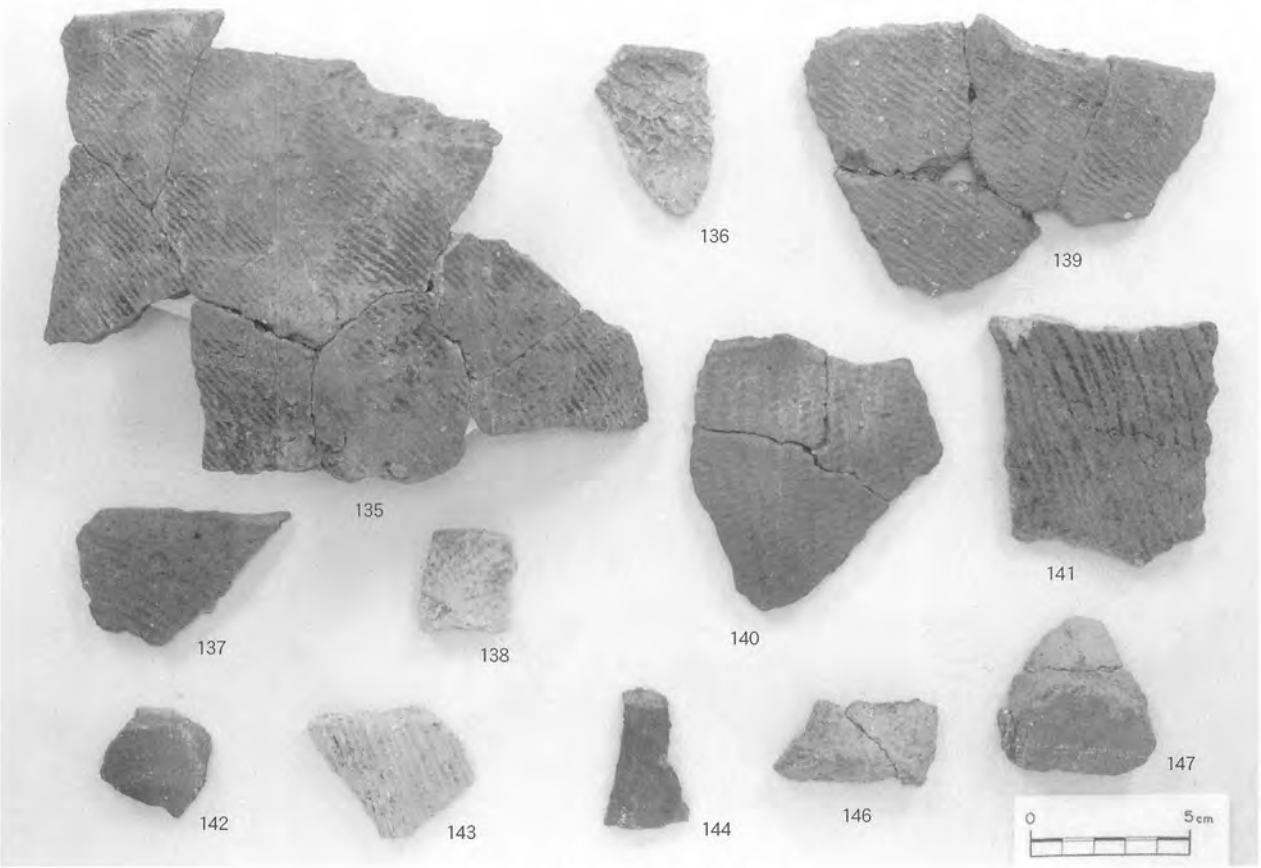
写真図版22



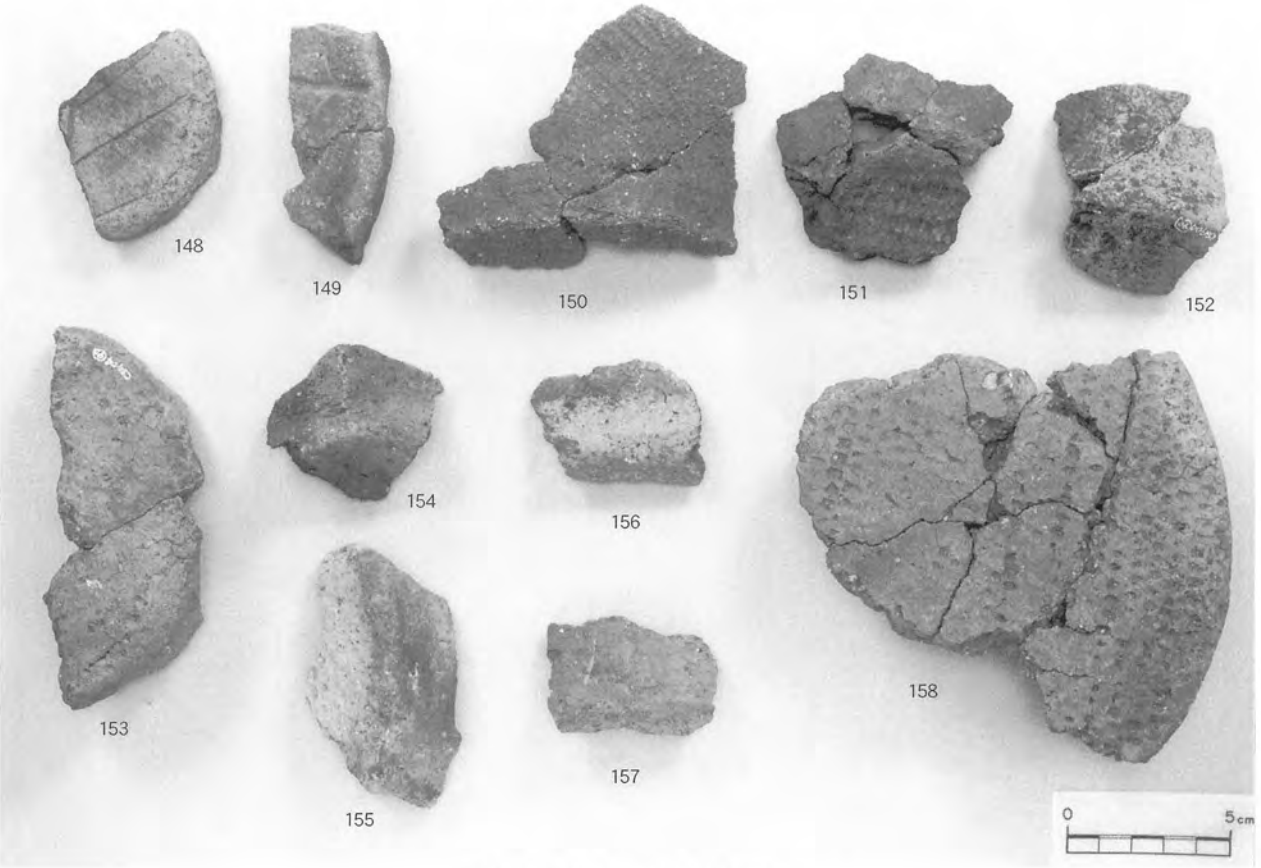
遺構外出土土器（第39・40図）



遺構外出土土器（第40図）

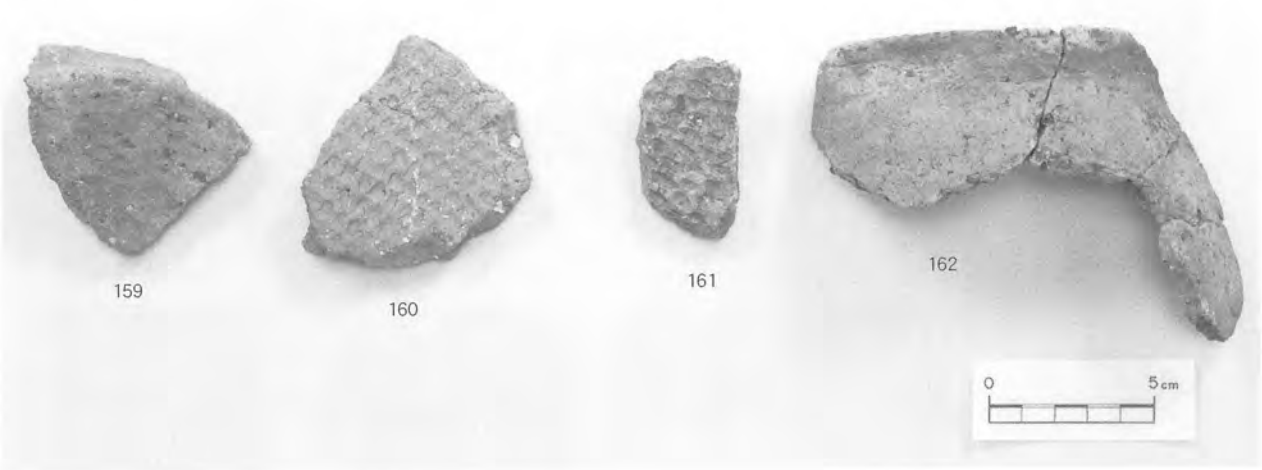


遺構外出土土器（第41図）



遺構外出土土器（第41図）

写真図版24



130

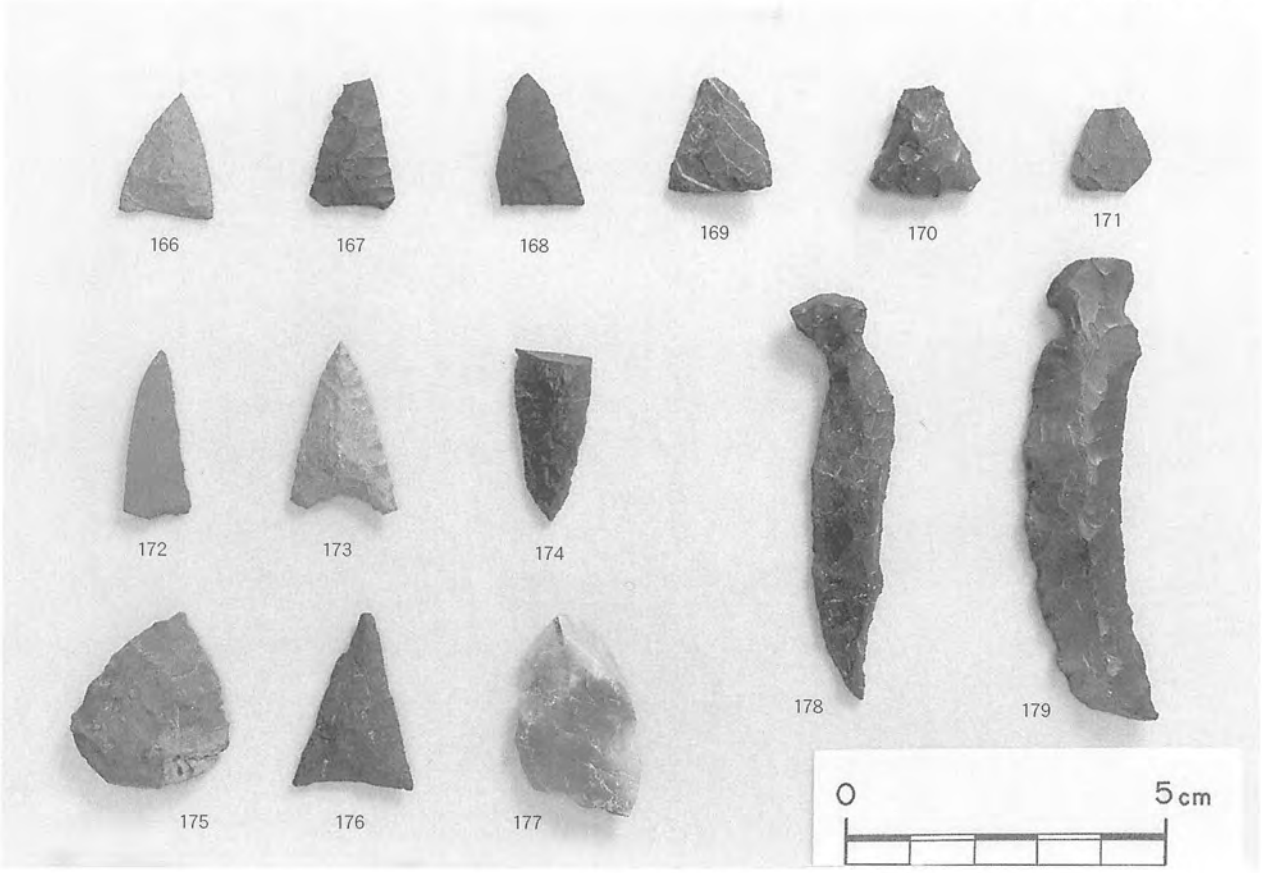
126

145

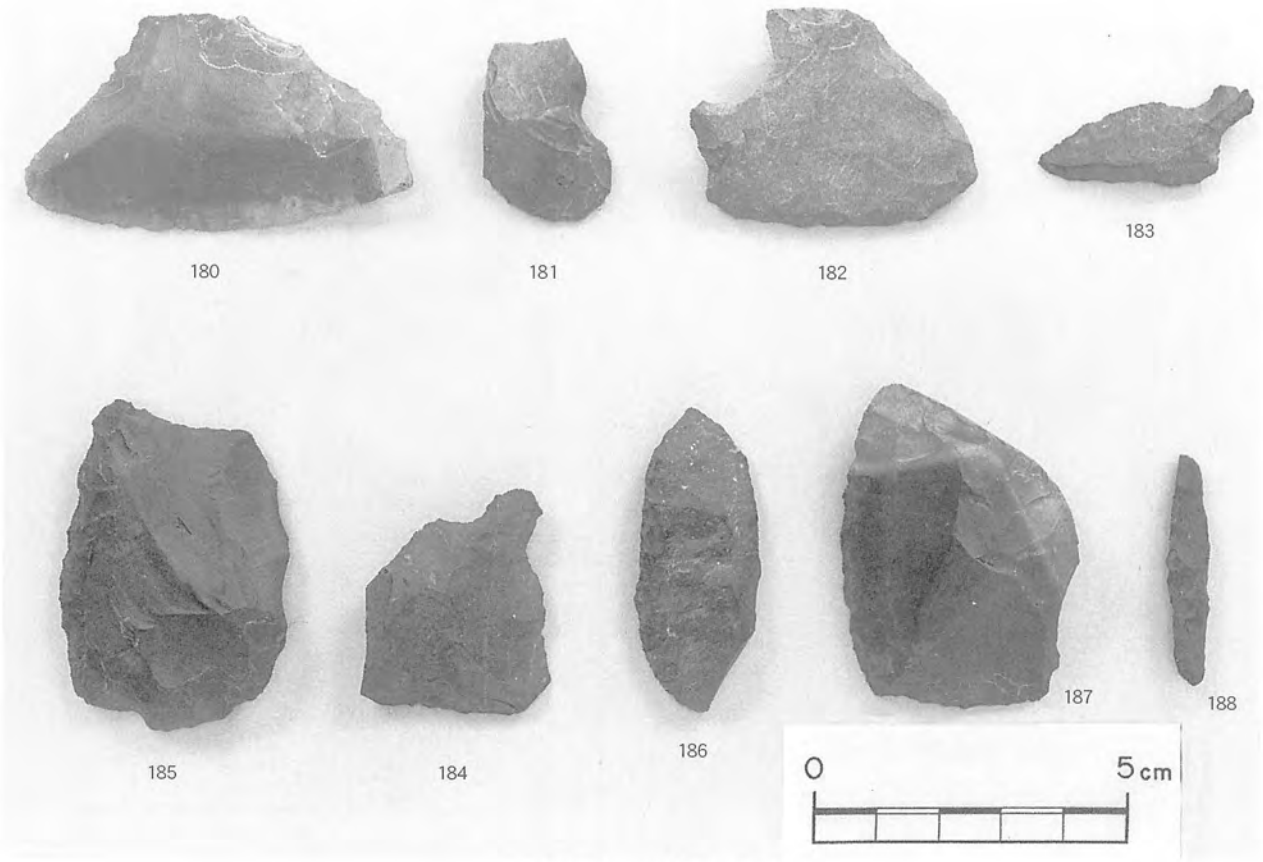
86

200

遺構外出土土器（第39・40・41・45図）

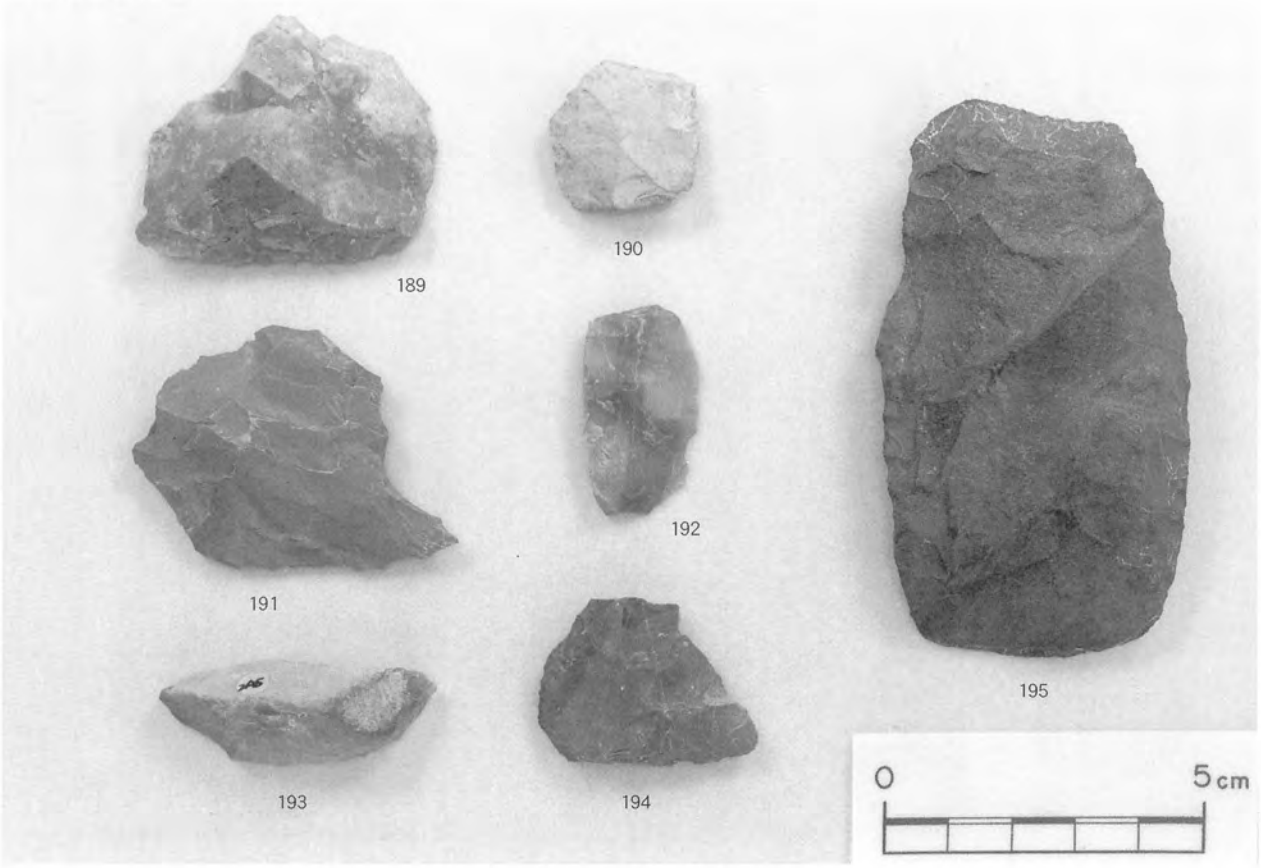


遺構外出土石器（第42図）

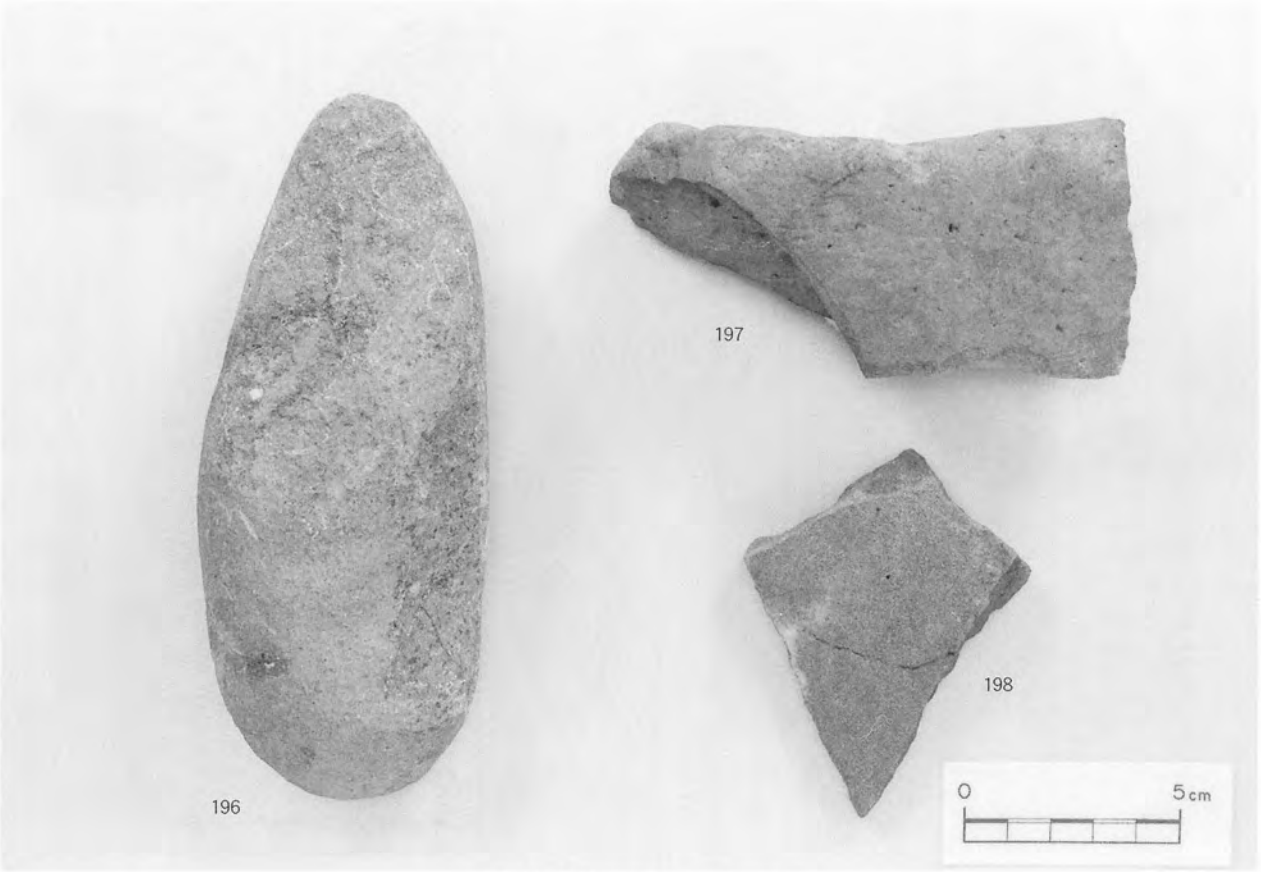


遺構外出土石器（第43図）

写真図版26



遺構外出土石器（第44図）



遺構外出土石器（第45図）

報告書抄録

ふりがな	すげのさわいせき
書名	菅ノ沢遺跡
副書名	市内遺跡発掘調査報告書
巻次	6
シリーズ名	宮古市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	69
編著者名	加納由美
編集機関	岩手県宮古市教育委員会
所在地	〒027-8501　岩手県宮古市新川町２番１号　ＴＥＬ.0193-62-2111　ＦＡＸ.0193-63-9119
発行年月日	2006年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
すげのさわいせき 菅ノ沢遺跡	いわてけんみやこし 岩手県宮古市 おおあざちかないだいなちわり 大字近内第７地割 あざすげのさわ 字菅ノ沢39番１の うち	03202	LG23-2024	39°39′12″	141°54′25″	20040409 ～20040615	198 ㎡	個人住宅建築工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
菅ノ沢遺跡	散布地・集落	縄文時代 弥生時代	縄文時代 配石遺構1基 竪穴住居跡2棟 土坑5基 弥生時代 埋設土器遺構1基 土坑1基 時期不明 焼土4基 土坑2基	縄文土器、弥生土器、石器 土師器	配石遺構

宮古市埋蔵文化財調査報告書一覧

1 1979『宮古市大付遺跡発掘調査報告書』
2 1980『宮古市千徳遺跡発掘調査概報』
3 1983『宮古市遺跡分布調査報告書１』
4 1984『宮古市遺跡分布調査報告書２』
5 1984『赤前遺跡群第１次・第２次発掘調査報告書』
6 1985『宮古市遺跡分布調査報告書３』
7 1985『金浜館跡発掘調査報告書』
8 1986『宮古市遺跡分布調査報告書４』
9 1986『宮古市遺跡分布図－昭和60年度版－』
10 1986『中谷地・島田遺跡調査報告書』
11 1987『崎山貝塚・トロノ木Ⅳ遺跡調査報告書』
12 1987『寒風・早稲栃Ⅳ遺跡調査報告書』
13 1987『崎山遺跡群Ⅰ－昭和60年度発掘調査概報－』
14 1988『青猿Ⅰ・下在家Ⅱ・千徳城遺跡群（堀合館）－昭和62年度発掘調査報告書－』
15 1988『崎山遺跡群Ⅱ－昭和62年度発掘調査概報－』
16 1989『千鶏遺跡－昭和62年度発掘調査報告書－』
17 1989『トロノ木Ⅰ遺跡－第１～７次発掘調査報告書－』
18 1989『崎山遺跡群Ⅲ－昭和63年度発掘調査概報－』
19 1989『高根遺跡－昭和63年度発掘調査報告書－』
20 1989『狐崎Ⅵ遺跡－昭和63年度発掘調査報告書－』
21 1989『崎山トロノ木Ⅳ遺跡－昭和63年度調査報告書－』
22 1990『狐崎遺跡－平成元年度発掘調査報告書－』
23 1990『崎山遺跡群Ⅳ－平成元年度発掘調査概報－』
24 1990『磯鶏館山遺跡－昭和63年度発掘調査報告書－』
25 1990『鰍ヶ崎館山貝塚－平成元年度発掘調査報告書－』
26 1991『崎山遺跡群Ⅴ－平成２年度発掘調査概報－』
27 1991『青猿Ⅰ・千徳城遺跡群－平成元年・２年度発掘調査報告書－』
28 1990『熊野町遺跡－昭和63年度発掘調査報告書－』
29 1991『払川Ⅰ遺跡－平成２年度発掘調査報告書－』
30 1992『金浜Ⅰ遺跡（昭和58年度）・大付遺跡（平成２年度）発掘調査報告書』
31 1992『重茂館遺跡群－第１次調査報告書－』
32 1992『黒森町Ⅰ遺跡－平成２年度発掘調査報告書－』
33 1992『高根遺跡－平成３年度発掘調査報告書－』
34 1992『經沢遺跡群－平成２年度発掘調査報告書－』
35 1992『大付遺跡－平成３年度発掘調査報告書－』
36 1992『細越Ⅰ遺跡・芋野Ⅵ遺跡－農林課関係田代地区埋蔵文化財発掘調査報告書－』
37 1992『崎山遺跡群Ⅵ－平成３年度発掘調査概報－』
38 1993『萩沢Ⅱ遺跡－平成４年度発掘調査報告書－』
39 1993『早稲栃Ⅵ遺跡－第１次・第２次発掘調査報告書－』
40 1993『崎山遺跡群Ⅶ－平成４年度発掘調査概報－』
41 1994『崎山遺跡群Ⅷ－平成５年度発掘調査概報－』
42 1995『赤前Ⅰ牛子沢遺跡－平成４年度発掘調査報告書－』
43 1995『磯鶏館山遺跡発掘調査報告書』
44 1995『崎山貝塚－範囲確認調査報告書－』
45 1995『笹沢Ⅰ・加村・仲組Ⅲ・堺ノ神遺跡－市道浦の沢線改良工事関係埋蔵文化財発掘調査報告書－』
46 1995『花原市遺跡－平成４年度発掘調査報告書－』
47 1995『宮古市内遺跡発掘調査概報Ⅰ　早稲栃Ⅵ遺跡・崎山貝塚』
48 1996『大付遺跡－平成５年・６年度発掘調査報告書－』
49 1997『花原市遺跡－平成８年度発掘調査報告書－』
50 1997『白石遺跡－第６次発掘調査報告書－』
51 1998『赤畑・天神山・山口館－北部環状線道路改良工事関係埋蔵文化財調査報告書－』
52 1998『藤畑遺跡－平成９年度発掘調査報告書－』
53 1999『赤前Ⅲ・赤前Ⅳ八枚田・赤前Ⅴ柳沢・赤前Ⅵ釜屋ヶ沢・小堀内Ⅲ遺跡』－水産課津軽石環境整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書－』
54 1999『千鶏Ⅳ遺跡－水産課千鶏地区漁港漁村総合整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書－』
55 1999『崎山貝塚－第12次・13次内容確認調査概報－』
56 2000『木戸井内Ⅱ・木戸井内Ⅲ・上村Ⅲ遺跡－特別高圧送電線ラサ工業宮古支線新設工事関係埋蔵文化財発掘調査報告書－』
57 2002『山口館跡－北部環状線道路改良工事関係埋蔵文化財発掘調査報告書－』
58 2002『小沢Ⅵ大上遺跡－市内遺跡発掘調査報告書２－』
59 2003『大又沢Ⅱ遺跡－東北電力宮古ヘリポート移設工事関係発掘調査報告書－』
60 2003『上根井沢Ⅰ遺跡、沼里遺跡－市内遺跡発掘調査報告書３－』
61 2003『早稲栃Ⅱ遺跡第６次調査－市内遺跡発掘調査報告書４－』
62 2003『下在家Ⅰ遺跡－平成14年度発掘調査報告書－』
63 2004『大程Ⅱ遺跡・平浜遺跡－市道閉伊崎線改良工事関係発掘調査報告書－』
64 2005『払川館跡－瑞雲寺裏庭整備関係発掘調査報告書－』

宮古市埋蔵文化財調査報告書69

菅ノ沢（すげのさわ）遺跡発掘調査

－市内遺跡発掘調査報告書 6－

2006. 3

平成18年３月29日発行

発　行　　岩手県宮古市教育委員会
〒027-8501 宮古市新川町２番１号
TEL.0193－62－2111

印　刷　　株式会社　文化印刷
〒027-0037 宮古市松山５－13－６
TEL.0193－62－4578